

博士学位論文

現代日本語の類義関係にある副詞に関する計量的研究

首都大学東京大学院

趙 恩英

## 目 次

第 1 章 序論.....	1
1.1 本論文の目的と研究対象.....	3
1.2 研究目的.....	4
1.3 研究対象.....	6
1.4 本論文の意義.....	6
1.5 本論文での用語の定義.....	7
1.6 本論文の構成と各章の概要.....	9
第 2 章 先行研究.....	10
2.1 山田文法・橋本文法・時枝文法における副詞の定義と分類.....	10
2.1.1 山田孝雄（1936）.....	10
2.1.2 橋本進吉（1948,1959）.....	11
2.1.3 時枝誠記（1950）.....	13
2.2 山田文法・橋本文法・時枝文法以降の副詞の諸相.....	14
2.2.1 中右実（1980）.....	14
2.2.2 工藤浩（1985a,1985b）.....	15
2.2.3 益岡隆志・田窪行則（1992）.....	16
2.2.4 仁田義雄（2002）.....	17
2.3 本論文の研究対象語に関する先行研究.....	18
2.3.1 辞典での記述.....	18
2.3.2 「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」についての先行研究.....	21
2.3.3 「やっと」「ようやく」についての先行研究.....	23
2.3.4 「ついに」「とうとう」についての先行研究.....	25
2.3.5 「急に」「突然」についての先行研究.....	26
第 3 章 本論文で扱う調査データの概要.....	29
3.1 データの種類.....	29
3.2 検討対象語が入った用例の抽出とその認定.....	31
3.3 研究方法.....	35
3.3.1 「独自の語」の抽出方法.....	35
3.3.2 「独自の語」の分類方法.....	44
第 4 章 BCCWJに見られる「やっと」「ようやく」の相違.....	47
4.1 はじめに.....	47

4.2	本章の目的.....	47
4.3	調査データ.....	47
4.4	「やっと」「ようやく」の文体と共起する述語.....	49
4.4.1	ジャンルごとに現れる「やっと」「ようやく」の出現傾向.....	49
4.4.2	『文学』における「地の文」と「会話文」の出現傾向.....	50
4.4.3	『文学』における「やっと」「ようやく」と共起する述語の出現傾向.....	52
4.4.3.1	除外した項目.....	52
4.4.3.2	「やっと」「ようやく」と共起する高頻度語.....	53
4.5	「独自の語」からの「やっと」「ようやく」の相違.....	56
4.6	本章のまとめ.....	62
第5章	新聞データに見られる「やっと」「ようやく」の相違と、 BCCWJに見られる相違との比較.....	65
5.1	はじめに.....	65
5.2	本章の目的.....	65
5.3	調査データ.....	65
5.4	「やっと」「ようやく」の文体と共起する述語の出現傾向.....	66
5.4.1	「地の文」と「会話文」における「やっと」「ようやく」の出現傾向.....	67
5.4.2	「やっと」「ようやく」と共起する述語の出現傾向.....	68
5.4.2.1	除外した項目.....	68
5.4.2.2	「やっと」「ようやく」と共起する述語.....	68
5.5	「独自の語」からの「やっと」「ようやく」の相違.....	71
5.6	『毎日』における「やっと」「ようやく」の相違.....	77
5.7	『毎日』における結果と、BCCWJ内の『文学』における結果の比.....	78
5.7.1	ジャンルによる「やっと」「ようやく」の文体の相違.....	78
5.7.2	ジャンルによる「やっと」「ようやく」と共起する高頻度語の相違.....	81
5.7.3	ジャンルによる「やっと」「ようやく」の「独自の語」の相違.....	82
5.7.3.1	ジャンルによる「独自の語」の出現傾向.....	82
5.7.3.2	ジャンルによる「独自の語」の意味分布.....	85
5.8	本章のまとめ.....	86
第6章	BCCWJに見られる「ついに」「とうとう」の相違.....	88
6.1	はじめに.....	88
6.2	本章の目的.....	88

6.3	調査データ .....	88
6.4	「ついに」「とうとう」の文体と共起する述語.....	90
6.4.1	ジャンルごとに現れる「ついに」「とうとう」の出現傾向.....	90
6.4.2	『文学』における「地の文」と「会話文」の出現傾向.....	91
6.4.3	『文学』における「ついに」「とうとう」と共起する述語の出現傾向 .....	93
6.4.3.1	除外した項目.....	93
6.4.3.2	「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語.....	94
6.5	「独自の語」からの「ついに」「とうとう」の相違.....	97
6.6	本章のまとめ.....	104
第7章	新聞データに見られる「ついに」「とうとう」の相違と、 BCCWJに見られる両副詞の相違との比較.....	106
7.1	はじめに.....	106
7.2	本章の目的.....	106
7.3	調査データ .....	107
7.4	「ついに」「とうとう」の文体と共起する述語.....	108
7.4.1	「地の文」「会話文」における「ついに」「とうとう」の出現傾向...108	
7.4.2	「ついに」「とうとう」と共起する述語の出現傾向.....	109
7.5	「独自の語」からの「ついに」「とうとう」の相違.....	112
7.6	『毎日』における「ついに」「とうとう」の相違.....	117
7.7	『毎日』における結果と BCCWJ 内の『文学』における結果の比較.....	118
7.7.1	ジャンルによる「ついに」「とうとう」の文体の相違.....	118
7.7.2	ジャンルによる「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語の相違...120	
7.7.3	ジャンルによる「ついに」「とうとう」の「独自の語」の相違.....	121
7.7.3.1	ジャンルによる「独自の語」の出現傾向.....	121
7.7.3.2	ジャンルによる「独自の語」の意味分布.....	124
7.8	本章のまとめ.....	125
第8章	BCCWJに見られる「急に」「突然」の相違.....	127
8.1	はじめに.....	127
8.2	本章の目的.....	127
8.3	調査データ .....	127
8.4	「急に」「突然」の文体と共起する述語.....	128
8.4.1	ジャンルごとに現れる「急に」「突然」の出現傾向.....	128
8.4.2	『文学』における「地の文」「会話文」での出現傾向.....	130

8.4.3	『文学』における「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向.....	131
8.4.3.1	除外した項目.....	131
8.4.3.2	「急に」「突然」と共起する高頻度語.....	132
8.5	「独自の語」からの「急に」「突然」の相違.....	134
8.6	本章のまとめ.....	144
第9章 新聞データに見られる「急に」「突然」の相違と、		
	BCCWJに見られる両副詞の相違との比較.....	146
9.1	はじめに.....	146
9.2	本章の目的.....	146
9.3	調査データ.....	146
9.4	「急に」「突然」の文体と共起する述語.....	147
9.4.1	「地の文」と「会話文」における出現傾向.....	148
9.4.2	「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向.....	148
9.5	「独自の語」からの「急に」「突然」の相違.....	151
9.6	『毎日』における「急に」「突然」の相違.....	156
9.7	『毎日』における結果と、BCCWJ内の『文学』における結果の比較....	157
9.7.1	ジャンルによる「急に」「突然」の文体の相違.....	157
9.7.2	ジャンルによる「急に」「突然」と共起する高頻度語の相違.....	159
9.7.3	ジャンルによる「急に」「突然」の「独自の語」の相違.....	161
9.7.3.1	ジャンルによる「独自の語」の出現傾向.....	161
9.7.3.2	ジャンルによる「独自の語」の意味分布.....	163
9.8	本章のまとめ.....	164
第10章 結章.....		
10.1	本論文のまとめ.....	167
10.1.1	「やっ」と「ようやく」について.....	167
10.1.2	「ついに」「とうとう」について.....	169
10.1.3	「急に」「突然」について.....	171
10.2	「独自の語」の出現傾向について.....	174
10.3	「(使用) 範囲・度数分布表」における各頻度層の出現比率について....	176
10.4	類義語の研究への応用.....	177
10.5	今後の課題.....	178
参考文献.....		183
謝辞.....		188

## 第1章 序論

現代日本語において類義表現は、動詞・形容詞・副詞・接続詞・接続助詞など、語レベルで、また、連語など語レベルを超えた句レベルにおいて存在し、日本語を教える日本語教育現場の教師や日本語の不明な点を解明する日本語研究者にも難解な項目ではないかと思う<sup>1</sup>。

前田（2001）は、類義語の異同は日本語教育の現場で頭を悩ます事項であるとし、次のように述べている。

日本語教育に携わる者であれば、ほとんど誰しも類義語の差異に関する質問をうけ、頭を悩ました経験をもつであろう。助詞「は」と「が」の違いに関する質問を嚆矢として、教室では様々な類義語の異同を問う質問の矢が飛んでくるのである。「とても」「たいへん」「ずいぶん」の違いは、「いきなり」「急に」「突然」「不意に」は、「いちおう」と「とりあえず」は、「せっかく」と「わざわざ」は、「自然」と「天然」は、「議論」と「論議」の違いは、「ついに」「結局」「やっと」「ようやく」「とうとう」は、「たいてい」と「たいがい」の違いはといった具合にこの種の質問はいつ、どこから飛んでくるか分からない。（前田 2001:p.64）

一方、宮島（1995）は、ある語の意味・用法の記述において「日本語の文法が、全体としても、また部分部分をとっても、体系をなしている以上、ある形式の意味は、これと対立しているほかの形式とのほりあいを考えなければ、あきらかにならないのである。したがって、厳密に言えば、類義表現の記述をすることは、文法体系全体の記述をすることになる（p.i）」と、検討対象である語とその類義表現の研究の必要性を指摘している。

前田（2001）と宮島（1995）の記述から類義語の相違を明らかにすることは日本語教育の現場でも日本語研究の分野においても欠かせない項目であると考えられる。

特に前田（2001）が取り上げている類義語の中で「急に」「突然」、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」など副詞はこれまで限られた用例を基に研究者の直観・内省による質的（定性的）研究に留まることが多く、大量の用例を用いた計量的（定量的）研究は管見の限りあまり見られない。

しかし、副詞の類義語の研究は多くないものの、野田（2009：pp.188-189）が言及しているように副詞に関する計量的研究が行われてきたのも事実である。副詞の計量的研究は史的変遷やゆれのある副詞に関する研究が中心であり、その他、特定の種類の用いられ方を調査・分析した研究、外国語の副詞と日本語の違いを論じたものがあると指摘している。例えば、史的変遷に関する研究として、桶井（1988）は、「とても」という程度副詞につい

---

<sup>1</sup> 類義表現とは、類義語という語レベルを超えた句レベルを含む類義的な表現のことである。

て明治 30 年代から昭和初期までの小説などの資料を用いて調査・分析を行い、柄沢 (1977) は、「ぜんぜん」という陳述副詞について明治 20 年代から 30 年代の二葉亭四迷の作品を資料で考察したものなどがある。

現代語における副詞の研究には、野田 (2000) の研究があり、「ぜんぜん」と肯定形の共起の実態を 455 例の実態調査と、294 名を対象にアンケート調査で考察している。また、工藤 (1999) は、文学作品を資料に否定と呼応する 32 の副詞の呼応の実態を調査・分析している。

また、工藤 (1982) は、陳述副詞のうち叙法にかかわるものを叙法副詞とよび、文学作品を資料に述語との呼応を分類・考察している。

このように、程度副詞と陳述副詞の研究はなされてきたものの、情態 (状態) 副詞に関する研究、特に本論文で研究対象にしようとする (時間) 副詞についての計量的な研究はあまりなされてこなかったのである。

そこで、本論文では、類義関係にある「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」、「急に」「突然」という「事態が成立するまでの所要時間が異なる」副詞 (的表現) を中心に大量のデータを用いて計量的な方法を使い、類義関係にある副詞の相違を明らかにすることを目的とする。

大量のデータを見るのは、後藤 (2003) が言及している「単にある形式の有無を調べるのではなく、その頻度を定量的に知ることができ、それをテキスト全体あるいは類似の他の形式と比較して、相対的な頻度を知ることができる、(中略) 頻度ばかりではなく、分布のしかたにも偏りが見られることもある (pp.11-12)」ためである。

また、砂川 (2010) は、「コロケーションや類義語の記述はこれまでも数多く試みられているが、コーパスを用いることによって、直感に頼った内省や偶然見つけた少数の実例だけでは気づかなかった多くの現象が扱えるようになる。コーパスは、コロケーションや類義語といった語法研究を大きく進展させる力強い武器なのである (p.106)」と述べているためである<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> 砂川 (2010) の記述は、コーパスを用いた利点と関連している。また、杉本 (2010) は、コーパスを用いた分析の利点として、「(1) 分析者による偏向が加わる可能性を除去できる。(2) 内省では気づかないような文、現象が見つかることがある (p.183)」と述べている。さらに、後藤 (2003 : pp.11-12) は、コーパスの利点について、網羅性を挙げ、「頻度の低い形式を捜す場合に特に役に立つ。大量のデータの中からなら見つかる可能性が高まるのが期待できるからである。単なるある形式の有無を調べるのではなく、その頻度を定量的に知ることができ、それをテキスト全体あるいは類似の他の形式と比較して、相対的な頻度を知ることができることもコンピュータ利用の長所である」と述べており、また、「対応する複数の形式の間で、頻度ばかりではなく、分布のしかたにも偏りがみられることもある。類義の動詞の間で主語や目的語になれる名詞の範囲が違っていたり、類義の形容詞の間で修飾する名詞の範囲が違っていたりするような現象である。このような隣接して現れやすい語句の組み合わせをコロケーションと呼ぶが、それはより細かい語彙分析の助けになる。また、ある種の動詞が特定の種類の副詞句や特定の時制や法などの文法カテゴリーと共起しやすいとすれば、動詞を文法的に下位分類する根拠になろう。ある語の公文書での頻度と文学作品での頻度に大きな違いがあれば、その語の位相による振る舞いの違いに帰らせられよう。この種のことはある程度まで内省によって知ることができるが、言語的文脈間での分布の偏りを客観的に明確に示すことができるのはコーパスを用いる長所である」と述べている。

## 1.1 本論文の目的と研究対象

類義関係にある「急に」「突然」は、以下の(1)のように、どちらも言える場合があり、置き換えられる特徴を持っていると言われるが、(2)のように、文脈によってどちらかが不適切な場合もある。

(1) 友人が{急に／突然}死んだ。(作例)

(2) 美恵子は、加藤がこの下宿に来たときから、青白い顔をしていた。学校も休みがちだった。その美恵子もこの一、二年の間に急に(×突然)背が伸びて、おとなびたことをいったり、神経質なほどの潔癖性を発揮したり、金川しまの生んだ赤ん坊を異常なまでに可愛がったりした。

(新田次郎『孤高の人』p.729、李 2006:p.65 (36))

上記の(2)について、李(2006)は「背が伸びる」という事柄の発生・成立点の様子(進行過程)に注目し、「その進行過程が何らかの基準に比べ大きい」ことを表し、「美恵子の背の伸びる様子に注目し、その進行過程がとても速い」というように捉えられ、「突然」が用いられないのは「背が伸びる」という事柄の発生・成立そのものに注目し、それが前触れなく瞬間的に発生・成立するというように捉えられないからであると述べている。

事態の成立までの、進行過程に注目するのか、事態の成立する瞬間に注目するのか、成立した事態をどう捉えるのかという観点から「急に」「突然」の相違を明らかにすることも重要である。しかし、以下の(3)のように、置き換えが可能な場合、「急に」は「倒れた」様子に、「突然」は「倒れた」その瞬間が注目される、つまり、焦点がどこにあるのかにより両副詞の差があるという解釈には疑問がある。

(3) 人が{急に／突然}倒れた。(作例)

置き換えが可能か否かで類義語の特徴を明らかにすることより、成立する事態によく現れる類義語を明らかにすることも必要ではないのだろうか。そうすることにより類義語がそれぞれ現れる事態の傾向を検討することで両者の特徴が明確にされやすいと思われる。

では、成立する事態の傾向とはどう明るみに出すことができるのだろうか。成立する事態は副詞と共起する述語の出現傾向より、さらに、その述語の意味領域の幅、意味範疇から事態の傾向が捉えられ、類義語の相違が明らかになるのではないかと思う。

また、類義語である「やっと」「ようやく」の先行研究において「やっと」は口語的で「会話文」に多く現れ、「ようやく」は文章的であると言われているが、両副詞がジャンルごとにどのような出現傾向にあるのかも明らかにされておらず、また、その出現傾向を数値的に示しているものもあまり見当たらない。

「やっと」が口語に使われてきたことは歴史的な観点での検討を行った濱田(1984)の



指摘から読み取れる。濱田（1984）は「やうやう」から「やっと」への変化について、以下のように述べている。

「ややく」乃至「やくやく」から出、「やうやく」を経て、平安朝中期前後に「やうやう」の形をとり、漢字ならば「漸」「徐」などで表される様な意味を本来有していたこの語が、一つにはその用いられる文脈から、また一つには「やはら（やをら）」などの同義語との争いに敗れて、更には同音異義語たる「様々」の音読との混淆という、少なくとも三つの理由によって、平安朝末から中世初期頃にかけて、口語においては現代語のヨーヤク（ヨーヨー）、ヤットと略々同じ意味でも用いられはじめ、遅くとも中世末期頃には、この意味変化が略々完成したものと考えられる。ついで江戸時代に入り、主として江戸で用いられたヨーヤクという形が格助詞「と」を伴って第四音節が促音化し、更にそれが幾つかの理由によって後半部のみが独立してヤットという同義語を発生せしめるに至り、むしろ関東方言ではその方がヨーヤクよりも勢力を得て現代語に至る。

（濱田 1984: p.212）

上記の記述から「やっと」の成立は「ようやく」からであり、「やっと」は口語であることが読み取れる。

しかし、口語的、文語的であると言えるものの、「やっと」「ようやく」はジャンルにどの程度の割合で現れるのか不明である<sup>3</sup>。さらに、一つのジャンル、特に小説は、会話文と地の文で成り立っているが、両副詞が会話文にどう現れるのかについて詳しく検討したのも管見ではない。伊藤（2002）は、「語彙調査の目的によるが、小説の地の文と会話文の違いのような『文体差』を考慮にいれずに調査を行うと、調査結果の判断を誤ることがある（p.40）」と述べている。そのため、「やっと」「ようやく」の文体の差を精密に見るためには、「会話文」と「地の文」での副詞の出現傾向を確認する必要があると思われる。

以上のように、類義語である副詞と共に起る述語や、「地の文」「会話文」における出現傾向から、また、ジャンルごとの出現傾向から文体の差を検討することは類義語の研究において必要であろう。

## 1.2 研究目的

語源が同じであると考えられる「やっと」「ようやく」は現れる形式や共起する述語など似ている可能性が高いと予想されるが、両者の違いはどんな点に現れるのか検討の余地がある。一方、語源は異なるが、類義語として位置づけられる副詞はどのような事態に現れ

---

<sup>3</sup> 浅川（2012:p.131）は、「明治20年(1887年)以来、会話文・地の文ともに話しことばのように書く言文一致体の文体は、口語文という日本語の書きことばとして普及し、（中略）現代の日本語においては、その口語文自体が書きことばの一種として受けとられるようになってきており、話しことば（音声言語）と書きことば（文字言語としての文章語）とは再び乖離していく傾向にあると考えられる。口語体で書かれていても、話しことばが文字言語としての書きことばと全く一致するわけではない」と述べている。

るのか明らかにする必要がある。

本論文では、類義関係にある副詞「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」、「急に」「突然」について、まず、ジャンルによる出現傾向から文体の差を検討する。

文体の差は、2011年8月に国立国語研究所によって公開された検索アプリケーション『中納言』<sup>4</sup>を利用し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ : Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』(以下、BCCWJ と称する)を用いる<sup>5</sup>。

BCCWJ を用いる理由は BCCWJ にはさまざまなジャンルが含まれているため、各ジャンルでの出現傾向から文体の差が明らかになると思われるからである。また、BCCWJ は日本語コーパスとして、「現在のコーパス研究において最も信頼性の高いデータベース (石井 2012 : p.17)」とされているためである。さらに、前川 (2009 : pp.8-9) と前川・山崎 (2009 : p.15) が指摘したように、コーパスの代表性 (representativeness) を保証するためのもっとも確実な方法はサンプルを母集団から無作為抽出することであるが、BCCWJ (名称からも分かるように、均衡コーパス (balanced corpus) である) は全体の約三分の二にあたるサンプルを出版データや図書館の蔵書データを母集団として無作為抽出の手法で選択しているコーパスなので信頼性が高いと判断した。

次に、さまざまなジャンルのうち「書籍」と「ベストセラー」の下位区分である『文学』における副詞の用例を用い、副詞と共起する述語の高頻度語を確認した上で、中頻度語を用い、意味分類をし、その意味分布から副詞の相違を明らかにする。また、『CD-毎日新聞データ集』<sup>6</sup> (以下、『毎日』と称する)を用い、「地の文」と「会話文」での副詞の出現傾向から文体の差を明らかにする。さらに、『文学』を用いた研究方法と同様の方法で副詞の特徴を明らかにし、『文学』で明らかになったことと比較する。

---

<sup>4</sup> 『中納言』とは、国立国語研究所で開発されたコーパスを検索することができる Web アプリケーションである。短単位・長単位・文字列の3つの方法によりコーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索ができる。(https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/「中納言オンラインマニュアル」から、2013年8月16日参照) また、田野村 (2012 : p.4) は、BCCWJ の3つの利用形態について、「少納言」は単純な文字列検索のみで、「中納言」は文法情報に基づく検索が可能で「BCCWJ-DVD版」はBCCWJの全情報を利用可能 (ソフトウェアを用意する必要がある) であると簡潔に説明している。

<sup>5</sup> 丸山 (2013) は BCCWJ について「文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築 : 21世紀の日本語研究の基盤整備』(2006~2010年度)、および国立国語研究所におけるコーパス整備計画『KOTONOHA計画』の資金によって開発され、2011年に一般に公開された。1億語超の書き言葉を収録したこのコーパスは、日本語では初となる均衡コーパスであり、綿密な調査に基づいた設計 (コーパスデザイン) を持ち、母集団に対する統計的な代表性を有するサンプリングが実施されているという点に、最大の特徴がある (p.123)」と述べている。

<sup>6</sup> 『CD-毎日新聞データ集』は、首都大学東京大学院人文科学研究科日本語教育学教室の長谷川守寿研究室所有の『CD-毎日新聞2004年・2005年・2006年・2007年・2008年・2009データ集 (毎日新聞社)』である。本研究において、第5章と第9章では2008年データを用い、第7章では2004年から2009年データを用いる。詳細は該当章を参考していただきたい。また、松本 (2003) は、毎日新聞データについて、「毎日新聞東京・大阪本社発行の一年分の記事約10万件の全文を収録。社会面、解説面、経済面、国際面をはじめ、文化、家庭、総合、芸能、スポーツも収録。九一年版から毎年分が販売されている。市販のCD-毎日新聞とは別に、テキストデータの形でCD-ROMに収録されているので、特別なデータ取り出しのためのソフトが不要。毎日新聞社とデータ使用許諾に関する覚書を交わすことで研究目的に利用できる (p.57)」と述べている。

筆者が副詞と共起する述語の出現傾向の考察において、その検討対象として『文学』と『毎日』を選んだのは、日本語の実態が見られる最適な調査対象はさまざまな表現が含まれる小説と幅広く読まれる新聞だと考えているためである。

伊藤(2003)は、「いくら高度な統計手法をつかっても、処理対象となる素材(コーパス)が不正確であれば、出てくるデータも不正確にならざるをえないからである(p.26)」と述べているが、先行研究では検討対象であるコーパスの詳細と用例の数が明確でないなど、その研究結果に信頼性と再現性の面で再検討の余地があると思われる。

そのため、本論文では計量的な手法で研究対象である副詞の出現傾向を明らかにし、そこから意味の検討を行う。

以上、本論文の目的をまとめると以下の通りである。

- ①類義関係にある副詞について、異なるジャンルを持つ BCCWJ を用い、各ジャンルでの出現傾向から文体の差を明らかにする。
- ②「書籍」「ベストセラー」の下位区分である『文学』を用い、研究対象語の「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにする。
- ③『文学』において、類義関係にある副詞と共起する述語(特に中頻度語のうち「独自の語」)の意味分布の特徴から、類義関係にある副詞の相違を明らかにする。
- ④上記②③の結果と『毎日』の結果を比較し、類義関係にある副詞の相違を明らかにする。

### 1.3 研究対象

本論文の研究対象は、事態が成立するまで長い時間がかかる副詞「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」と、事態の成立が瞬間的に行われる副詞「急に」「突然」である。

### 1.4 本論文の意義

本論文の研究方法は、類義関係にある副詞について、研究対象の副詞と共起する高頻度の述語の特徴から副詞の意味・用法を明らかにしたものが多かった先行研究の方法と異なり、副詞と共起する述語のうち中頻度の述語からもその違いを明らかにすることに大きな違いがある。特に共起する中頻度語の分析において、「独自の語」と命名した動詞を中心にその意味分布から副詞の違いを明らかにすることは、従来の副詞や類義語の研究からは見られない研究方法である(第3章 3.3.1 で議論する)。

また、本論文の用例は BCCWJ という均衡がとれた大量のデータで構成されているコーパスから抽出し、量的に分析することにこれまでの研究の用例の規模と差があると思う。従来の先行研究の多くは用例の抽出の方法と用例の数において、数値的に不明確な点が多かったため、分析結果に信頼性と再現性がなかったと思われる。

そこで、本論文では用例の抽出の過程と分析結果を数値的に明確に示し、信頼性が得ら

れるように記述する。

### 1.5 本論文での用語の定義

本節では、本論文における「類義語」「共起」「ジャンル」「文体」「独自の語」という用語を定義する。

まず、類義語について見てみる。類義語は多くの研究者によって定義されている。国広（2002：p.152）は、同義語・同意語と呼ばれることがあり、二語の意味が完全に同一の場合を同義語、わずかにずれている場合を類義語と呼んで区別する立場もありうるが両者をいっしょにして類義語と呼ぶとしている。

池田（2004：p.146）は、「よく似た意味を持つ複数のことば。『美しい・きれいだ』『児童・生徒・学生』などは、意味は似通っているが、語感、ニュアンス、使う場面、文脈は少しずつ異なって用いられる」と述べている。

遠藤（2005）は、「類義語」について以下のように述べている。

語と語のあいだで、意味のかなりの部分が共通するとき、それらは類義関係にあるといい、互いに類義語と呼ぶ。相違部分に決まった特徴のない（つまり上下・対義・並列関係に入らない）タイプである。同義ともいう。完全に意味の重なる語が長く存在しつづけることはないとされる。「写真機・カメラ」の例を考えてみても、「カメラ」がデジタルから映画撮影用まで広く指示することができるのに対し、「写真機」はかなり狭く、指示物に関しては包摂関係にある。さらに語感の違いも加わる。類義語を教えるときには、語連結や十分な文脈を数多く与えることが大切である。

（遠藤 2005：p.278）

本論文では、「類義語」について遠藤（2005）の定義に従い、意味のかなりの部分が共通する語を類義語とする。

次に、「共起」についてみる。「共起」は「呼応」と類義的な関係であるため、両者を同じく捉えているものがある。まず、両者の違いについて見ると、工藤（1982）は「共起」と「呼応」について以下のように述べている。

共起現象は、同じレベルに同属しているということだから、比較的単純に形式化しうる。「呼応」は、単に同属ではなく、むすびつきであるから、つきつめていけば“意味”的關係である。（中略）「共起」はいわば量的現象、「呼応」は質的關係だが、質的なものが量的現象を生じるとともに、量的現象が質的变化をもたらすとも、一般的に言える。文の中での意味機能が、使用のくりかえしの中で、しだいに単語の意味機能としてやきつけられていくのである。

（工藤 1982：p.71）

上記の指摘を受け、小矢野（1982）は、共起について、「共起は、言語直感に基づく指摘があり、これも大切であるが、『量的現象』の裏付けに乏しかった。『量的現象』の共起を言うには、多数の用例の分析が前提となる」と指摘している。「共起」関係を検討する際に多数の用例からの分析が必要であることが窺える。

光信（2005）は、「語の共起関係」について、「ある語が文中で用いられるときに、共に用いられる他の語や句などの要素との関係を共起関係という。語の用法と捉えるときにはその語の共起関係をみるのが有効である。つまり、共起関係が異なれば用法が異なることが多い（p.281）」と述べ、さまざまな格、語、表現形式、その他と共起するかにより、4つの共起関係があると述べている。

本論文では、研究対象である類義語が現れる文においてその類義語と類義語がかかっている述語との関係を共起関係と言い、共起関係である述語を「共起」する述語とする。

また、本論文での「ジャンル」とは、BCCWJにおける「サブコーパス」の「書籍」「ベストセラー」「新聞」「雑誌」「白書」「国会会議録」「教科書」「知恵袋」「応報誌」「韻文」「法律」「ブログ」のことを指す。

さらに、「文体」について、市川（1980）は以下のように述べている。

「文体」の種類は、類型的文体と個性的文体に大きく二つに分かれる。類型とは、類的に特殊なものであるが、不特定多数の表現に共通する類型的特殊性が認識把握される場合、これを類型的（あるいは範疇的）文体と呼ぶ。類型的文体には、(1) 記載形式から。漢文体・宣命体・東鑑体（変体漢文）・漢字仮名交じり文体、など。(2) 語彙・語法から。和文体・漢文訓読体（漢文直訳体）・和漢混淆体・候文体・擬古文体（雅文体）、など。また、文語体・口語体、あるいは、「だ」体・「である」体・「です・ます」体など。(3) 修辞上から。散文体・韻文体・四六駢儷体、など。また、簡約体（簡潔体）・蔓衍体・剛健体・優柔体、など。(4) 文章のジャンルの上から。日記文体・書簡文体など。また、論説の文体、随筆の文体、小説の文体などがある。以上のほか、時代的観点からの分類がある。一方、ある表現の特殊性が、他に類を見ない、それ自体独自のものとして認識される場合を、個性的（あるいは、個別的）文体と呼ぶ。多くは特定の作品・作家についてである。（市川 1980:p.766）

本論文では「類型的文体」の（4）の定義に従い、ジャンルの区別を「文体」とする。

また、上記の 1.1 で言及した伊藤（2002 : p.40）の指摘を踏まえ、研究対象語の『文学』や『毎日』における「地の文」と「会話文」での出現傾向の違いも「文体」とする。

つまり、本論文でさす「文体」とは、ジャンルの区別による「文体」と、『文学』と『毎日』における「地の文」と「会話文」での出現傾向の違いによる「文体」のことである。検討の際にも、これら二つの観点の「文体」を明らかにする。

最後に、「独自の語」とは、類義関係にある副詞と共起する述語のうち中頻度語であり、

かつ、一方の副詞のみに現れる語のことである。「独自の語」の抽出方法については、第 3 章 3.3.1 で詳しく述べる。

以上、本論文では、類義関係にある副詞と共起する述語のうち中頻度語の「独自の語」を中心に『分類語彙表』を用いて意味分類を行い、意味分布の違いから類義関係にある副詞の相違について検討・考察していく。

## 1.6 本論文の構成と各章の概要

本論文の構成は以下の通りである。

第 2 章では、本論文で考察する語が副詞であることから、現代日本語の副詞について検討する必要があると思い、前半部では、山田文法・橋本文法・時枝文法を含めた現代の副詞の定義と分類について記述し、後半部では、研究対象語である副詞に関する先行研究についてその問題点と本論文の立場について述べる。

第 3 章では、本論文で扱う調査データと調査方法について述べる。調査データの概要を述べ、調査方法を詳細に記述する。調査データの抽出から認定までの過程を記述し、用例の分析方法について述べる。

本論の部分である、第 4 章から第 9 章までは、研究対象を検討した結果を示し、考察を行う。第 4 章から第 7 章までは、事態の成立するまで長い時間がかかる「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」について検討する。

第 4 章と第 5 章では、述語に否定表現が来ない「やっと」「ようやく」の相違について、第 4 章では、BCCWJ（特に BCCWJ 内の『文学』を中心）を用い、第 5 章の前半では、新聞データである『毎日』を用いて両副詞の相違について検討する。第 4 章と第 5 章の前半で明らかになった「やっと」「ようやく」のジャンルによる相違については第 5 章の後半で述べる。

第 6 章と第 7 章では、述語に否定表現が来る「ついに」「とうとう」の相違について、上記の「やっと」「ようやく」と同様の記述方法で、第 6 章では、BCCWJ を用い、第 7 章の前半では、『毎日』を用いて検討する。さらに、第 7 章の後半では、第 6 章と第 7 章の前半で明らかになった両副詞の相違を比較し、ジャンルによる違いについて述べる。

第 8 章と第 9 章は、事態が瞬間的に成立する副詞「急に」「突然」の相違について、第 8 章では BCCWJ を用い、第 9 章前半では『毎日』を用い検討する。第 8 章と第 9 章前半で明らかになったことの比較は、第 9 章の後半で行う。

結論にあたる第 10 章では、第 4 章から第 9 章までの結果をまとめる。また、注目したい結果と類義語研究への応用について述べ、最後に、今後の課題について述べる。

## 第2章 先行研究

第2章では、先行研究について述べる。第1節では、山田文法・橋本文法・時枝文法での副詞の定義と分類について、第2節では、山田文法・橋本文法・時枝文法以降の副詞の定義と分類について、第3節では、本論文の研究対象に関する先行研究とその問題点について述べる。

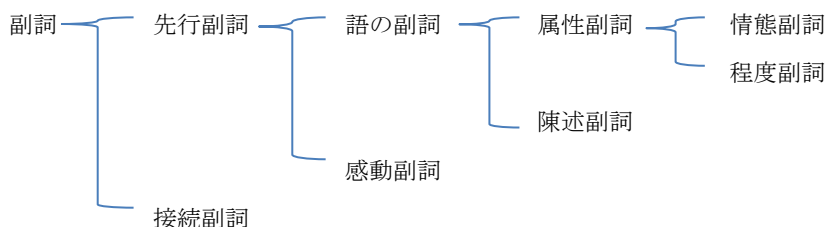
### 2.1 山田文法・橋本文法・時枝文法における副詞の定義と分類

#### 2.1.1 山田孝雄（1936）

副詞論研究の系譜は、山田（1936）からだと言われている（畠 1991：p.7）。

山田（1936：pp.84-89）は、「単語」をそれ以上分解すれば語としての本性又は作用をなくしてしまう地位にあるものとし、「単語」は「観念語」と「関係語」に分かれ、「観念語」は「自用語」と「副用語」と区別すべきだと述べている。また、「自用語」は陳述の力がある「陳述語」と、陳述の力がない「概念語」に分かれるとしている。さらに、「概念語」には「体言」、「陳述語」には「用言」、「副用語」には「副詞」、「関係語」には「助詞」がそれぞれ相当すると述べている。

山田（1936）は副詞を以下の図 2-1 のように分類している。畠（1991）は以下の三分類について、「これが現在の副詞論の基礎をなしているいわゆる副詞の三分類、すなわち副詞を情態副詞、程度副詞、陳述副詞に分けることの根拠となった（p.8）」と述べている。



（山田 1936：p.374）

図 2-1 副詞の分類

山田（1936）は「情態副詞」について、「意義上よりいへば、それ自身に具体的の観念ありて事物の属性をあらはすものにして、その観念のみをいはゞ形容詞に似たるものなり」と述べており、あたゝか・しづか・たひらか・たをやか等を挙げている（p.378）。

「程度副詞」については、「情態性の属性の程度を示すものにして情態の意を有する用言及び情態副詞の上において、その属性を限定する性を有す」と述べ、また、「自ら属性をあらはすことなくして属性の修飾をなすが故に、情態の副詞に比して第二次的のものとする。従つて情態の副詞の如く、説明存在詞に結合して用言の如き用をなすことなきなり」と述べており、いと・やや・甚だ・頗る・もつとも等を挙げている（pp.386-388）。

「陳述副詞」について、「述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方法に一定の

制約あるものなり。この陳述の副詞は用言の實質上の意義即ちその示す属性には関係なく、この陳述の方法のみを装定するものなれば、用言が述語としての用法に立たぬ時には装定することなきものなり」と述べており、若し・蓋し・豈に・必ず等を挙げている<sup>1</sup>(pp.388-389)。

### 2.1.2 橋本進吉 (1948、1959)

橋本 (1948 : p.5-11) は、文の外形上の特徴について、「文は音の連続で、文の前後には必ず音の切れ目があり、文の終には特殊の音調が加わる」とし、文節については、「文を実際の言語として出来るだけ多く句切った最短の一句切を私は仮に文節と名づけている」としている<sup>2</sup>。また、文節は文を分離して最初に得られる単位であり、直接に文を構成する成分 (組成要素) であるとしている。

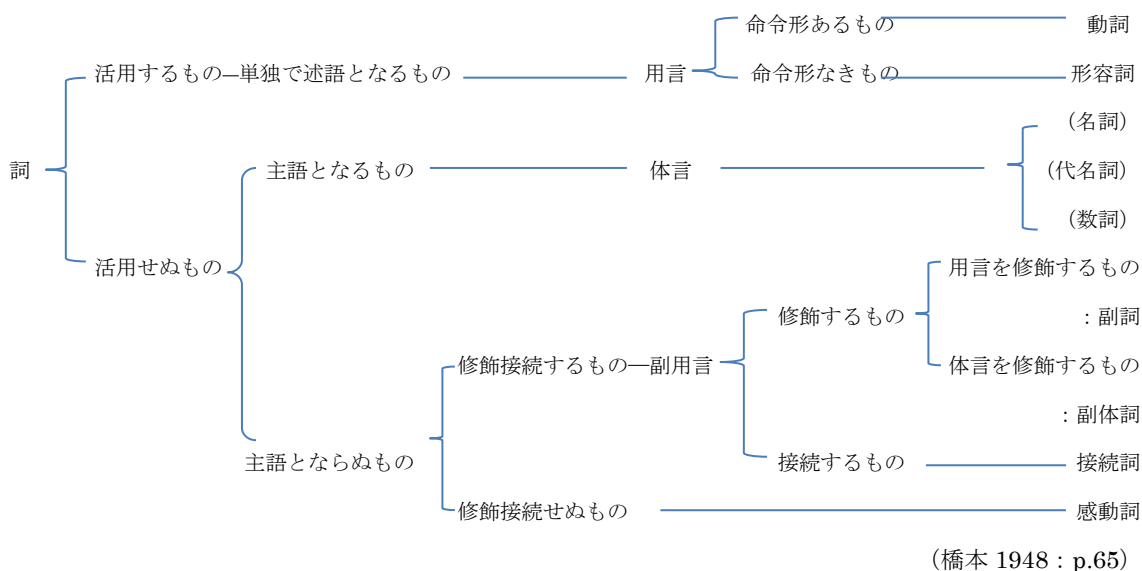


図 2-2 詞に属する語の品詞について

さらに、語には単独で文節を構成するものと、常に他の語に伴いこれと共に文節を作るものがある。語の前後に切れ目を置いて発音することが出来るか否かという形式上から「詞」と「辞」も明瞭に区別されると述べている。「詞」は一つの文節を構成することができるもので、「辞」は単独に文節を構成することができないものであるとしている。

「詞」を断続の関係から見ると、[1] 種々の断続の関係を自らの形によって示すもの (用言に属する諸語)、[2] 自らでは断続を示さないもの (体言に属する諸語)、[3] 続くもの (副詞接続詞に属する諸語)、[4] 切れるもの (感動詞に属する諸語) と 4 分類している<sup>3</sup>。さらに、[3] の副詞接続詞に属する類は「副用言」とし、「副用言」を図 2-2 「副用言」

<sup>1</sup> 山田の陳述という用語は曖昧なもの、抽象的なものとして批判され、その後、芳賀 (1954) は「述定」「伝達」としており、渡辺 (1957、1971) は「叙述」「陳述」としている。また、林 (1960) は「判断」「表出」「伝達」としている。

<sup>2</sup> ここで橋本は、文節を文構成単位として認定したのは、松下大三郎であると述べている (橋本 1948:p.10)。

<sup>3</sup> 橋本 (1948 : p.58) では、「[1] [2] [4] は、従来の名称によって、それぞれ用言・体言・感動詞と呼び、



以下のように下位分類している (pp.56-61)。

一方、『辞』は常に『詞』に伴って文節を構成するが、『辞』が如何なる『詞』に伴うかを見るに、『辞』には、ある種類の『詞』にのみ附いて他の『詞』には附かないものと、色々の種類の詞に附くものがある (p.68)」としている。

また、橋本 (1959 : pp.113-116) は副詞について、用言を修飾する (述語になるものもあり、修飾語を受けるものもある) とし、山田の情態、程度、陳述に分けた副詞の 3 分類を踏まえ、次のように用法から副詞を分類する基準を提示しているものの、山田の分類とは精密には一致しないと述べている。

(一) 呼応あるもの

体言、副詞を修飾せず、他よりも修飾せられず、また述語にもならぬ。

(二) 呼応なきもの

呼応なきものは、他より修飾せらるゝ事あり、又、述語になる事ある点は共通であるが、その中、

(a) 体言を修飾するもの (そのまま)

(b) 副詞を修飾するもの

(c) その他は、そのままでは体言副詞を修飾しない。

(橋本 1959 : p.117)

橋本 (1959) は、「(一) の類は陳述に関するものであり、(二) の (a) (b) は程度に関するものである点で山田氏の陳述、程度の二類と一致するようであるが、必ずしもそうでない。山田氏の陳述副詞のうち、確かめる意及び決意を表すものは、必ずしも、言い方を制限せず、山田氏の程度副詞のうちの『頗る』『甚だ』は、程度をあらわすが、体言や他の副詞を修飾せず、これ等はすべて (c) 類に入ることとなる (p.117)」と指摘している。

また、橋本 (1959) の講義を筆記したものに、「体言を修飾し、他の副詞を修飾する点は程度副詞の特徴で、情態、陳述の副詞にはない。他の語によって修飾されないのは陳述副詞で、他のものは修飾されるものもある。呼応を要求するのも陳述副詞のみで、他の二つにはない。用法の点では、陳述副詞と程度副詞とが殊に特徴をもっている (p.118)」と書かれている。

---

[3] だけは之にあたる普通の名がない故、之を副用言と呼ぼう (副用言の名は鶴田常吉氏の日本口語法、安田喜代門氏の国語法概論に見えている)」と述べており、また、「副用言に属する諸語は、何れも、属性または関係を表すものであるが、常に他の語を予想し、その意味に依存するものである。その中、副詞は用言を、副体詞は体言を予想し、その意味に依存する (p.66)」と述べている。

### 2.1.3 時枝誠記 (1950)

時枝 (1950) は、言語本質観について、自然科学的物質構成観から類推された言語観である「言語構成観」と異なる言語観である「言語過程観」を提唱し、「言語を人間が自己の思想を外部に表現する精神・生理的活動そのものと見る見方で、言語を要素の結合としてではなく、表現過程そのものにおいて言語を見ようとする (p.17)」ことであると述べており、「語は思想内容の一回過程によって成立する言語表現である (p.50)」と述べている。また、一切の語について、その思想の表現過程を検討すると、概念過程を含む形式と概念過程を含まない形式に分かれるとし、前者を「詞」、後者を「辞」としている (pp.60~62)。「詞」の性質について、「一、表現される事物、事柄の客体的概念的表現である、二、主体に対立する客体化の表現である、三、主観的な感情、情緒でも、これを客体的に、概念的に表現することによって詞になる、四、常に辞と結合して具体的な思想表現となる、五、辞によって統一される客体界の表現であるから、文における詞は、常に客体界の秩序である「格」を持つ (p.66)」と述べている。また「辞」の性質について、「一、表現される事柄に対する話し手の立場の表現である、二、話し手の立場の直接的表現であるから、つねに話し手に関することしか表現できない、三、辞の表現には、必ず詞の表現が予想され、詞と辞の結合によって、始めて具体的な思想の表現となる、四、辞は格を示すことはあっても、それ自身格を構成し、文の成分となることはない (p.162)」と述べている。

このように、「詞」と「辞」は対立的な性質を持っており、一語は「詞」か「辞」である。時枝は、副詞には「詞」に属するものと「辞」に属するものがあると指摘し、前者に「情態副詞」と「程度副詞」が入り、後者に「陳述副詞」が入るとし (p.145)、「副詞」について次のように述べている。

イ 昔おじいさんとおばあさんがありました。

ロ 会議はすでに終わっている。

イの「昔」は、連体詞の場合と同様に、品詞としては体言であって、この場合、連用修飾語として用いられたものである。ところが、ロの「すでに」は、「静かに」「ほがらかに」等のいわゆる形容動詞といわれている語が、「静か」と「に」、「ほがらか」と「に」に分解して二語の結合と考えられるのに対して、これだけで一語と考えざるを得ない語である。そしてイの場合と異なるところは、この語が体言として種々の格に立つことができる無格性のものでなく、連用修飾語として以外には用いられない語である。即ちこの語は、連用修飾語としての性質をその中に持っていると見ることができる。このようにして、一語にして概念と同時に修飾的陳述を含む語を特に副詞と名付けるのである。 (時枝 1950 : pp.138-139)

さらに、時枝は、次の (1) の「美しく」を形容詞と見るべきか、副詞と見るべきかについて、『美しく』と、零記号の陳述とを含めて初めて副詞ということができるのである。

もし副詞の名称も広義に解釈すれば、この語の、この場合の用法に即して副詞ということが許されるのは連体詞の場合と同様である (p.140)」と指摘している。

また、時枝は、次の (2) (3) (4) のような語について、『恐らく』『決して』『もし』は、それぞれ『だろう』『ない』そして『行け』の零記号の陳述に『ば』を伴った仮定的陳述を修飾しているところから、陳述副詞と一般にいわれている」とし、「詞」に所属して副詞と言えるのかどうか疑問が生じ、副詞として「詞」に所属するものではなく「辞」に所属するものであると述べている。

- (1) 花が美しく咲いている。 (時枝 1950 : p.139)
- (2) 明日はおそらく晴天だろう。 (同 : p.144)
- (3) 彼はあのことを決して忘れない。 (同 : p.144)
- (4) もし君が行けば、僕も行く。 (同 : p.144)

しかし、「美しく」を零記号の陳述だとみる考え方は、後、批判されることになる。

時枝の記述は、「情態副詞」と「程度副詞」についての詳細な言及がなされず、「陳述副詞」は言語的に表現された陳述表現との呼応現象を重視したものであるとしているが、必ずそうとは限らないのではないか。

以上、山田文法・橋本文法・時枝文法における副詞の定義と分類について概略に見てみた<sup>4</sup>。次の節からは、山田文法・橋本文法・時枝文法以降の文法学者のうち、副詞について言及しているものを取り挙げ、山田文法・橋本文法・時枝文法以降の副詞の下位分類について検討しながら、本論文の研究対象である類義関係にある副詞と関連づけて述べる。

## 2.2 山田文法・橋本文法・時枝文法以降の副詞の諸相

本節では、英語学の立場から英語と日本語の副詞について述べた中右 (1980)、副詞研究にさまざまな実績を残した工藤 (1985a、1985b) と益岡・田窪 (1992) の副詞についての記述、また、副詞を文の成分のうち副詞的修飾成分にし、分析・記述した仁田 (2002) の研究について述べる。

---

<sup>4</sup> 渡辺 (1957 : p.78) は、日本語の単語について、(A型) 客体的素材概念を表す語と (B型) 主体的叙述活動を表す語との対立があり、これは自立語・付属語の対立にあたり、自立語は単語で文節を構成し得る語、付属語はそれができない語であり、この形式的相違は表現性の差にあると考えられるとしている。また、渡辺 (1957 : pp.82-95) は、副用語について、素材を表す修飾法の語と素材性を含む誘導法の語に分けた。さらに、前者は (1) 述語修飾の副用語 (時数副詞)、(2) 動作修飾の副用語 (情態副詞)、(3) 情態修飾の副用語 (程度副詞)、(4) 概念修飾の副用語 (連体詞) に分かれ、後者は (1) 述語誘導の副用語 (陳述副詞)、(2) 叙述誘導の副用語 (接続詞)、(3) 陳述誘導の副用語 (感動詞)、(4) 概念誘導の副用語 (限定副詞) に分かれている。

### 2.2.1 中右実 (1980)

中右 (1980 : p.159) は、発話 (行為) としての文を大きく「命題」と「モダリティ」という二つの意味成分からなるとしている。

「命題」は、話者の切りとった現実世界の状況 (出来事、状態、行為、過程など) を叙述したもので、「モダリティ」は、発話時における話者の心的態度を叙述したものであるとしている。

また、副詞は、副詞を命題の内側にあるもの (命題内副詞) と、命題の外側にあるもの (命題外副詞) に分類している。前者は命題の一部を形成し、後者は命題に対するモダリティを表明すると述べている。

さらに、命題内副詞と命題外副詞にそれぞれ入る副詞は下記のようになる。

「命題内副詞」... 「時・アスペクトの副詞」「場所の副詞」「頻度の副詞」

「強意・程度の副詞」「様態の副詞」

「命題外副詞」<sup>5</sup>... 「価値判断の副詞」「真偽判断の副詞」「発話行為の副詞」

「領域指定の副詞」(「接続副詞」)

中右の記述で言うと、本論文の研究対象は、「命題内副詞」の「時・アスペクトの副詞」に属する。中右は (p.165) は「時・アスペクトの副詞」に「today, yesterday, tomorrow, the day after tomorrow, already, yet, lately, recently, just now, nowadays, soon, in the near future, before long, あす、きょう、きのう、一昨日、すでに、もう、まだ、このところ、近年、近いうちに、しばらく、やがて、まもなく」を挙げている。中右は「強意・程度の副詞」を分ける明確な論拠が求められるとし、「強意の副詞」は命題外副詞 (モダリティの副詞) とするのが妥当だとしている。また、「強意・程度の副詞」の下位区分は暫定的であるとし、「様態副詞」は日本語学において「情態副詞」と通称されているものと等価であると述べている。

さらに、上記の分類は英語にも日本語にもあてはまるとしているが、その理由は、これらの分類が意味機能論的な基盤によっているためだと述べている。

このように、中右の副詞の分類は日本語の副詞と英語の副詞を対照しながら検討した点に意味があると思われる。

### 2.2.2 工藤浩 (1985a、1985b)

工藤 (1985a : pp.50-55) は、日本語の文の時間表現について、動詞述語において時間表現に関係する形式 (スルとシタ、補助動詞、複合動詞、組み立て形式)、また、時間の語彙的表現のうち述語のテンスやアスペクトに関与的であるもの (時の名詞、時の形式名詞、

<sup>5</sup> 「命題外副詞」は、一般に「陳述副詞」と称されており、渡辺 (1971) においては、「誘導副詞」という名称で、また、「接続副詞」は、「承前副詞」と呼ばれることがある (芳賀 1978)。

時の副詞) があると述べている。

時の副詞は、発話時を基準とした時期・時点を表すもの、概括的時間量を表すもの、頻度を表すもの、恒常を表すものがあり、これらは時の名詞に対応するもので副詞に独自のものは、「もう、すでに、とっくに、まだ、いまだに」を挙げ、それぞれペアをなし、使用頻度もかなり高い基本語としている。

そして、基準時から動作や変化の起こるまでの時間量を表すもの「すぐ、じきに、ただちに／やがて、まもなく／同時に」「とつぜん、きゅうに、ふいに、いきなり」「やっと、ようやく、とうとう、ついに」を挙げている。

さらに、「とつぜん、きゅうに、ふいに、いきなり」は、「前触れなしに」「意外に」、「やっと、ようやく、とうとう、ついに」は、「苦労したあげく」という意味特徴を持ち、純粋の時の副詞とは言いにくい、変化や行為の成立実現までの時間量の極小と大を表わすとも見うると述べている。

また、工藤 (1985b) は、副詞という品詞の決め手は、「主として連用修飾語になる」という、文のなかでの機能・役割で、そこで、構文論が未発達な段階では、「副詞は品詞論のハキダメだ」と言われたものであるが、実は、「連用修飾語は構文論のハキダメだ」というのと表裏一体の関係にあり、「連用修飾語」には、主語と連体修飾語と独立語以外のすべての文中成分が投げ込まれているためであると述べ、本格的な構文論の時代をむかえてはじめて、副詞は、積極的な意味をもつものとして、まともな研究の対象となりえたと指摘している。また、「連用修飾語」という雑多な成分を解体・再編成する作業とともに、文、あるいはその中核である述語の階層的構造とどのように関係するか、ということ問うものとして出発し、文の陳述論の展開とともに、かつての陳述副詞もその内部がかなり精密に腑分けされるようになり、述語動詞のテンス・アスペクトの研究の進展とともに、かつて状態副詞の中にまぎれこまされていた「時の副詞」も取り出されたと述べている<sup>6</sup>。

以上、工藤の記述から、本論文の研究対象である類義関係にある副詞は、純粋な時の副詞とは言いにくいこと、また、構文論の発達により、状態副詞の中から「時の副詞」が取り出されたことが分かる。

### 2.2.3 益岡隆志・田窪行則 (1992)

工藤 (1985a) により、「時の副詞」と称された「時間副詞」について、益岡・田窪 (1992) は「テンス・アスペクトの副詞」と称している。

益岡・田窪 (1992 : p.41) は、副詞について、述語の修飾語として働くのを原則とする語とし、主な種類として「様態の副詞」「程度の副詞」「量の副詞」「テンス・アスペクトの副詞」等があると述べている。また、文全体に対して修飾語として働く語も副詞の一種とみなし、「文修飾副詞」と呼び、下位分類に「陳述の副詞」「評価の副詞」「発言の副詞」等

<sup>6</sup> 工藤 (1985b) は、URL:<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kudohiro/aderb2.html> 「日本語文法五つの焦点」から、2008年5月2日参照した。

があると指摘している。

本論文の対象である副詞は「テンス・アスペクトの副詞」に分類されるが、「テンス・アスペクトの副詞」について、事態が起こる時間や事態の発生・展開のありかたを表すとし、発話の時点を基準として当該の事態の時を位置づける副詞を「テンスの副詞」と指摘している。

「テンスの副詞」には、「かつて、いずれ、いまに、もうすぐ、これから、さきほど、のちほど」などがあるとしている。一方、事態の発生、展開（接近）、継続、完了、反復、順序、等）に関する事柄を表す副詞を「アスペクトの副詞」とし、「いまにも、すでに、もう、とっくに(中略)とうとう、ついに、ようやく、やっと、(中略)」等があるとしている(pp.44-45)。本論文の研究対象である副詞は、益岡・田窪（1992）の分類によると「アスペクトの副詞」に属する。

#### 2.2.4 仁田義雄（2002）

仁田（2002：p.33）は、文について、大きく＜命題（言表事態）＞と＜モダリティ（言表態度）＞の部分に分かれ、モダリティは命題を包み込む層的構造をしており、モダリティには、＜認識（判断）のモダリティ＞と＜発話・伝達のモダリティ＞に下位分類され、後者が前者の出現を規定し前者を包み込んで存在するとしている。命題のあり方は文末の文法カテゴリを中心に描き出すとすれば、以下のような層状の構造をし、テンスが命題とモダリティの分水嶺的存在であると述べている。

[[[[格—動詞]ヴォイス]アスペクト]肯否]テンス]

（仁田 2002：p.33）

図 2-3 文の層状の構造

上記の図 2-3 のような構造を持つ命題の中に作用する副詞的修飾成分は、結果の副詞・様態の副詞・程度量の副詞・時間関係の副詞・頻度の副詞に分かれると述べている。

さらに、時の状況成分は、「事態の外的な時間的位置づけ、言い換えれば、時間軸上における事態の出現・存在位置を指し示すもの」であると述べ、例として「今、今日、過日、あさって、当日」を挙げている。

また、時間関係の副詞は、述語や事態の文法的な個性・タイプに影響を与えるところのカテゴリカルな語彙的意味、具体的にはアスペクトを中心とする、時間の中での事態の出現・存在・展開のありようという、事態の内的な時間的特性と関係を取り結びながら、事態の内側から事態の実現のされ方を限定し特徴づけているとしている（p.35）。

時間関係の副詞は、事態存続の時間量を表す副詞、時間の中における事態の進展の副詞、起動への時間量を表す副詞に下位分類している（p.229）。これらのうち起動への時間量（事態への取り掛かりまでの時間量、事態が発生・実現するまでの所要時間量に関わるもの）

を表す副詞類は、〈僅少所要型〉、〈中期所要型〉、〈長期所要型〉があるとしている。〈僅少所要型〉、〈中期所要型〉、〈長期所要型〉については、以下の 2.3.2 と 2.3.5 で述べる。後述するが、仁田（2002）の研究は、副詞の分類と定義にとどまり、個々の副詞の相違までは述べていない。

## 2.3 本論文の研究対象語に関する先行研究

ここでは、研究対象である類義関係にある副詞（「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」と「急に」「突然」）に関する辞典での記述、また、先行研究とその問題点について述べる。先行研究では、まず「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」を一緒に扱って分析したもの、次に「やっと」「ようやく」、その後「ついに」「とうとう」、最後に「急に」「突然」を検討している先行研究について述べる。

### 2.3.1 辞典での記述

ここでは、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」、「急に」「突然」について、辞典における意味用法に関する記述を取り上げる。取り上げる辞典は『日本国語大辞典第二版』『大辞林』『角川国語大辞典』『類語大辞典』『基礎日本語辞典』である（以下、『日本国語大辞典第二版』は『日』と、『大辞林』は『林』と、『角川国語大辞典』は『角』と、『類語大辞典』は『類』と、『基礎日本語辞典』は『基』と称する）。

まず、「やっと」「ようやく」に関する辞典の記述をまとめると、以下の表 2-1 のようになる。

表 2-1 「やっと」「ようやく」についての辞典での記述

辞典	やっと	ようやく
『日本国語大辞典第二版』	【漸一】（「ようよう」と同語源か）[副]何らかの制約や困難があったために成立しなかった行為・状態が、どうにか成り立つさまを表す語→ようやく・ようよう。（イ）長い時間や多くの労力を費やした末に、実現、成立するさまを表す。（ロ）力や程度に余裕がなく、かろうじて実現、成立するさまを表す語	【漸】[副]（「ややく」に「う」の音の加わってできた語。他に「やくやく（漸漸）」の変化した語、「やをややく」の変化した語などとする説がある。漢文訓読では「に」を伴って用いることが多い）①次第に。だんだん。少しずつ。ようやく。ようよく。②そろそろ。ゆっくり。徐々に。③かろうじて。やっとのことで。どうにかして。ようやく。④もはや。すでに。
『大辞林』	(副)①長い時間を要して、またはさまざまな障害を克服して、それが実現するさま「一できる」「これで一安心して眠れる」②余裕がなく、かろうじて成り立っているさま。「バスに一間に合う」「一食べていけるくらいの収入」	【漸く】(副)[「ややく(稍)」または「やくやく(漸漸)」の転かという]①なかなか実現しなかったことが、待った末に実現するさま。ようよう。やっと。「一試験が終わった」「一のこと楽になる」②危ないところをかろうじて。やっとのことで。ようよう。「タクシーに乗って一出発に間に合う」③だんだん。しだいに。「放漫予算で一財布もかたむきはじめる」
『角川国語大辞典』	(副)どうにか、こうにか。ようやく。辛うじて。「一間に合った」「一三人入れる広さ」	(副)①ようよう。どうにか、こうにか。やっとのことで。辛うじて。「三か月目に、一完成した」②しだいに進むさま。だんだん。そろそろ。ようよう。「東の空が一白み始めた」
『類語大辞典』	手間がかかったりしたが、望んでいたことが実現する様子。「一夏休みの宿題が終わった」（「やっとの事で」「やっと」を強めた言い方。「7回裏のピンチを一脱出した」）	【漸く】時間がかかったりしたが、望んでいたことが実現する様子。「十数年という長い歳月を費やして一最新作が完成した」
『基礎日本語辞典』	その人の能力や、その場合に可能な、最大限の力を発揮して、困難な状況を克服し、どうにか実現する状態。困難な状況としては、時間的状況、作業行為の状況、場面的状況、レベルにおける状況などが考えられる。	「漸く」「ようやく」も「やっと」の意味に近いが、これらは時間的経過を経たうえで実現した場合に言う。なかなか実現の運びに至らない事柄が、ある時間経過の結果、しだいに実現へと傾き、ついに実現することである。

表 2-1 から、「やっと」について、事態の成立までに困難さや障害があることを記しているのは『日』『林』『基』であり、長い時間や手間がかかったことを記しているのは『日』『林』『類』である。主体の能力、最大限の力を発揮したことを記しているのは『基』であり、単に類義語を挙げ、事態の成立のみを意味用法として記しているのは『角』である。「やっと」には、長い時間や主体の手間と労力を費やして事態が実現するさまと余裕がなくかろうじて事態が成立するさまを表す意味用法があることが分かる。

「ようやく」には、『日』『林』『角』『基』の記述から、「次第に、だんだん、少しずつ」「もはや、すでに」の意味用法があること、『類』『基』の記述から事態の成立まで時間がかかることが記され、なかなか実現しなかったことが時間の経過後成立した意味用法があることが分かる。また、「やっと」と同様にかろうじて事態が成立するさまの意味用法があることが分かる。第 1 章 1.1 で述べたように、「ようやく」に関する先行研究では、事態の実現までの過程において、経過や漸次性が含まれていると指摘している。これは、濱田 (1984) が「漢字『漸』の本義の示す様に、『徐々に』『段々に』『次第に』などに略略当たるところの、動作或は状態の変化が緩慢に行われる意味を表している」と指摘したように、語源から考えると当然なことではないかと思われる。

次に、「ついに」「とうとう」に関する辞典での記述をまとめたのは以下の表 2-2 である。

表 2-2 「ついに」「とうとう」についての辞典での記述

辞典	ついに	とうとう
『日本国語大辞典 第二版』	【終一・遂一】【副】(名詞「つい(終)に助詞「に」がついてできたもの)①一つの行為や状態が、ずっと最後まで持続するさまを示す。どこまでも。いつまでも。最後まで。②行為や状態が、最終的に実現するさまを示す。最後に。とうとう。結局。いよいよ。	【到頭】【副】(「とうとう」とも)物事の最終的な結果が現われるさまを表わす語。ついに。結局。とうとう。
『大辞林』	【終に・遂に・竟に】(副詞)①長い時間の過ぎたのちに、その状態に達するさま。様々の過程を経て実現したさま。とうとう。「一約束の日が来た」「幼時からの夢が一に実現した」「株価は一大台を割った」②(下に打ち消しの語を伴って)その状態のまま終わるさま。ある時点まで、ずっと。一度も。いまだかつて。ついに。「一帰って来なかった」「一別以来一会うことはなかった」③最後に。終わりに。	【到頭】(副)最終的な結果として物事が実現した、あるいは実現しなかったという意を表す。ついに。結局。「一ここまで来てしまった」「ずいぶん待ったが一来なかった」「一承諾してしまった」
『角川国語大辞典』	【終に・遂に・竟に】副①物事の成立・不成立が最終にやっと確定した意を表す語。とうとう。結局。「建物が一完成した」「彼は一来なかった」②(古)「後に打消の語を伴って」いまだかつて。まだ一度も。	【到頭】副 [予期はしていたが思わしくない結果が出てしまったとき、多く「とうとう・・・た(だ)の形で用いる]ついに。結局。
『類語大辞典』	【遂に】手間や時間がかかったが、最後にはそのようになる様子。「一山頂に到達した」「猛練習したが一そのチームには勝てなかった」◇「終に」とも書く	【到頭】「ついに」の、より口語的な言い方。「一成功した」「一私の出番がやってきた」
『基礎日本語辞典』	成立しそうでなかなか成立しなかった行為や作用が、一定の時間的範囲の中で成立または不成立に終わったこと。客観的状況の叙述として多く用いられる。①「ついに」によってとらえられる行為・作用は、その成立が瞬間的なものとして把握されている。②「ついに」は結果が予想・予知されていない事態、結果が未定の事態にも使われる。	「とうとう」も「ついに」と近い意味を持ち、ほとんどすべての例が「とうとう」と言い換えられる。用法上の違いはないが、意味的には多少の違いが認められる。(省略)「まもなく→いよいよ→とうとう」と段階を追って事態の実現成立が時間的に迫り近づく表現となる。「とうとう」は、いろいろの過程を経て最後にその事態に至るといって過程意識を踏まえる。

表 2-2 から、「ついに」について、『日』では一つの行為や状態がずっと最後まで持続する

7『基』では他の辞典と異なり、「ようやく」の記述において、「次第、だんだん、少しずつ」という類義語が挙げられておらず、「しだいに実現に傾き、～」と記述されている。



さまと、行為や状態が最終的に実現するさまを記している。「ついに」は下に打消しの語を伴うことや成立しなかった事態について記述しているのは『林』<sup>8</sup>『角』『類』であり、事態まで手間や時間がかかったことを記しているのは『類』『基』である。特に『基』では「ついに」は客観的状況の叙述として用いられることを述べている。

「とうとう」について、『日』『林』『基』では最終的な結果として事態が成立することを指摘し、『角』では予期はしていたが思わしくない結果が出てしまったとき「とうとう～た(だ)」の形で用いると述べている。「とうとう」が「ついに」より口語的な言い方であると記述しているのは『類』のみであり、『基』では「とうとう」はほとんどすべての例が「ついに」と言い換えられ、用法上の違いはないが、意味的に多少の違いが認められると記述している<sup>9</sup>。

このように、「ついに」「とうとう」の意味用法の記述は辞典ごとにその記述に違いがあるものの、「ついに」「とうとう」は長い時間を過ぎ最終的に成立した事態であることは共通であることが分かる。

次に、「急に」「突然」に関する辞典の記述をまとめると、次の表 2-3 のようにまとめられる。

表 2-3 に見られるように、「急に」は、「急」を形容動詞と名詞として扱った『日』『林』『角』と「急に」を副詞として扱った『類』『基』がある。『日』『林』『角』において、形容動詞としての意味用法の中、動作・作用が前触れなく起こるさまが、本論文で研究対象語である「急に」の意味用法である。また、(予期しないことが)前触れなく事態が起こることを記しているのは『日』『林』『類』であり、短い時間、場面的な幅の中で激しく速やかに変化することを記述しているのは『基』である。

「突然」については、「急に」と類義関係にある語として扱っている『日』があり、「急に」と同様に(思いもかけず)前ぶれなしに事態が起こることを記述しているのは『林』『基』『類』である。『基』では、自然現象、無意識行為、意識的な行為が可能で瞬間的に成立する動作・作用・現象に使うと記述している。

このように、「急に」「突然」は前触れなく起こるさまが共通しており、「急に」は状態が速やかに変わっていき、時間的幅の中で進行するあわただしい変化を表し、「突然」はある瞬間に成立する動作・作用・現象に使われることが分かる。

---

<sup>8</sup> 『林』では事態の成立に長い時間がかかったことは言及されているが、手間については言及されていない。

<sup>9</sup> 石川 (2006 : p.23) は、置換テストを行い、「とうとう」が「ついに」と置換可能な割合 (94.3%) が最も大きく、「ようやく」が「やっと」と置換可能な割合は 91.2%、「やっと」が「ようやく」と置換可能な割合は 78.4%、「ついに」が「とうとう」と置換可能な割合は 62.5%、「とうとう」が「ようやく」と置換可能な割合は 20.2%、「とうとう」が「やっと」と置換可能な割合は 20.2%、「やっと」が「とうとう」と置換可能な割合は 18.7%、「ようやく」が「とうとう」と置換可能な割合は 16.0%であると述べている。『基』での森田 (1989) の指摘と符合する。

表 2-3 「急に」「突然」についての辞典での記述

辞典	急(に)	突然
『日本国語大辞典 第二版』	一【形動】①事態のさしせまったさま。にわかなさま。また、いそがしいさま。緊急。②動作・作用が前触れなく行われだすさま。にわか。突然。③気短なさま。性急④手をゆるめることのないさま。きびしいさま。はげしいさま。⑤速度、調子のはやいさま。「急な流れ」⑥傾斜が強いさま。「急な坂」	一【形動ナリ・タリ】にわかであるさま。物事が急におこるさま。突如。
	二【名】①(一①から)にわかな変事。切迫した事態、事柄。②急ぐこと。また、急いで行うべき事柄。③無楽で、一曲を構成する三つの楽章のうち、最後の急速な楽章。急声。④能の番立てや、一曲の内容や、無などを序、破、急の三つに分けた場合、その最後の部分	二【副詞】急に。不意に。突如。
『大辞林』	【急】一(形動)①流れなどが速いさま。「流れが一だ」②前ぶれなく物事が起こるさま。また、変化が突然さま。にわか。「一な話」「一に雨が降り出す」「病状が一に悪化する」③さし迫っているさま。急がなければならないさま。「一な用事」「一にはできかねる」④傾斜の度合の大きいさま。険しいさま。「一な坂」⑤(責める勢いなどが)厳しいさま。「催促が一だ」⑥気短なさま。性急。	【突然】一(副)物事が急に思いもかけず行われるさま。だしぬげに。突如。「一笑い出す」「一のこと判断できない」
	二(名)①急ぐこと。また、急がなければならないこと。「一を要する」②さし迫った事態。危険な事態。「一を知らせる」「国家の一」③日本の芸能の理論用語「序破急」の第三区分	二(形動タリ)一に同じ。
『角川国語大辞典』	【急】一①急ぐこと。「一を要する」②すぐに対処しなければならない事態。おもに危険が迫った場合という。危急。「国家の一を救う」③[演]能楽・舞楽などを構成する最終の部分で、テンポが非常に速いところ「序破一」	【突然】①突き出ること。突き破って外側に出ること。「一部分」②突然に飛び出すこと
	二(一説、形動)①突然起こるさま。「一に飛び出す」②動きや変化の激しいさま。ア流れなどが速いさま。イ坂などが険しいさま	
『類語大辞典』	短い時間のうちに、予期しないことが前触れもなく起こる様子。「前の車が止まったので、あわててブレーキを踏んだ」「一雨が降り出した」	急にある事態が起こる様子。「車の前に子供が一飛び出してきた」
『基礎日本語辞典』	ある短い時間的、場面的な幅の中で状態が激しく速やかに変化することを表す。「突然」がほとんど瞬間的な現象であるのと、この点が異なる。また、ある状態から他の状態へと速いテンポで変じていくことで、プラスからマイナスの状態へ、または、その逆方向へ激変することを表す。	行為・作用・現象などが前触れなしに急に起こるさまに用いる。「予知なしに行く」の意識はない。自然現象・無意識行為・意識的な行為、いずれも可能で、ある瞬間に成立する動作・作用・現象に使う。「急に」のような、時間的幅の中で進行するあわただしい変化を表わさない。

以上、辞典における「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」の記述について述べた。次からは、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」「急に」「突然」に関する先行研究について見ていく。

### 2.3.2 「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」についての先行研究

ここでは、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」を一緒に扱っている先行研究について述べる。

上記の 2.2.2 で言及したように、工藤(1985a)は四つの副詞について、時の副詞とし、「基準時から動作や変化の起こるまでの時間量が極大を表す」ことを共通点とする類義語であると指摘している。また、「苦労したあげく」という意味特徴を持っていると述べ、「した」の形の述語と共起することが非常に多いと述べている。

大里(1986)は、小説を対象に四つの副詞について検討し、「やっと」「ようやく」は否定形式とは結びにくいこと、終結した(過去の)出来事の叙述の際に使用され、ほとんどの場合完了の「～タ」形式と統合していることを指摘している。また、「やっと」「ようやく

く」は<話し手が望ましいと思っている事態（状態）が困難を乗り越えた末に実現する>ことを表すと述べている。一方、「ついに」「とうとう」について、その共通点として、否定形式が可能で「～てしまう」の形式とうまく統合し、ある特定時点での結論意識が強調されるとしている。「ついに」は、「～ない」などの否定形式を伴った文に現出するのが普通で、この「ついに」の代わりに「とうとう」を代用することはほとんど容認されないのは、「未だ内面的再生せざる人に自己発見しようと努力する「過程」を期待することはできないであろう」からであるとしている。また、「ついに」は、「～だろう」と結び付いた表現が許され、「とうとう」は、ある事態へ向けての主体の意図的な「過程」が感知されない場合は使用されないと指摘している<sup>10</sup>。

仁田（2002）は、上記の 2.2.4 で触れたように、四つの副詞について、「時間関係の副詞」の<長期所要型>とし、<長期所要型>について下記のように記述している<sup>11</sup>。

<長期所要型>とは、事態が長期の時間的経過を経て、起動し実現したと捉えられていることを表している。このタイプは、事態の起動・実現までの所要時間が長期にわたっている、ということを表すだけでなく、それ以上に、事態の起動・実現に至るまでの経過に多大の労力・エネルギーが費やされたという、事態実現までへの心理的な長さ・遙かさとでも言えばよいような、モーダル的な意味合いが表されている。したがって、同じ副詞が使われていても、必ずしも物理的な時間の長さが一致するわけではない。

（仁田 2002 : p.253）

ルチラ（2005b）は、四つの副詞について、話し手の出来事の実現に対する予見を期待、予想、懸念として描写しながら、実際の出来事の実現をこれらの予見的の中、非的中として実現し、共通意味特性として<実現の予見><時間経過性><限界達成性>を取り出すことができるとしている。また、示唆的意味特性は予見タイプの相違とその的中の仕方において把握でき、これらは予見的の中のを基準にした、意味的に連続した体系をなすと指摘している。さらに、四つの副詞を統一的な枠組みにおいて体系的に捉え、その意味体系を記述している。

石川（2006）は、『プロジェクト X—挑戦者たち（メディアミックス版）』をデータとして分析を行って四つの副詞の要因として、「時間の経過を意味として有すること」「事態の起動・実現に至るまでの経過に多大の労力・エネルギーが費やされたという意味を含む」ゆえに類義性を生じるとし、「ついに」「とうとう」が「する、した」と共起する時、基本的な被修飾動詞は瞬間動詞だと指摘している。また、否定表現は「ついに」「とうとう」と

<sup>10</sup> 大里（1986）の指摘は、「主体の意図的な過程」は如何なるものか、明示的に示されておらず、「主体の意図的な過程が感知される」という文から「とうとう」の特徴が判断できるか疑問である。

<sup>11</sup> 仁田（2002）の言及は両副詞の相違を明らかにすることより、両副詞の持つ共通の意味と概念について叙述するに留まっていると思われる。

共起し、間投法で用いられる「カ」(感慨)・「ノダ」(詠嘆)・「ゾ」(強意)との共起は、「とうとう・やっと」の方が「ついに・ようやく」よりも共起しやすく、話し手の気持ちなどの心的態度を表す傾向(主観性)が強いとしている。

以上、四つの副詞に関する研究は、共起する述語の形式的な特徴と意味の面での言及に止まっているのではないかと思われる。特に工藤(1985a)と仁田(2002)の記述は、「時の副詞」と「時間関係の副詞」の定義と分類で四つの副詞の共通点は述べられているものの、相違点について言及されていない。また、大里(1986)は分析の対象になっているデータの不明な点が大きな問題点であろう。大里(1986)は5冊の小説を対象に検討をし、「やっと」「ようやく」の意味を明らかにしたが、抽出された用例の数が明確でないため、分析結果に信頼性が得られにくくなっているのではないかと思われる<sup>12</sup>。先行研究の中には、量的に検討した石川(2006)の研究があるが、検討データである『プロジェクト X—挑戦者たち(メディアミックス版)』はどんなジャンルであるか、その位置づけが困難であり、バランスがとれたコーパスではないと思われる。

### 2.3.3 「やっと」「ようやく」についての先行研究

ここでは、「やっと」「ようやく」についての先行研究とその問題点などについて述べる。

まず、グループ・ジャマシイ(編)(1998)では「やっと」について、期待の実現とぎりぎりの状態に分類し、「ようやく」について、長い時間がかかったり、途中でいろいろなことがあった後、事態に変化が起きたり、話し手の予想や期待が実現した場合、また、時間や労力をかけて実現する様子を表す場合に使うとしている。しかし、これは文型辞典であるため、「やっと」「ようやく」の現れ方について分類はされているが、両副詞の相違は明確に示されていない。

また、日本語記述文法研究会(2007)は、二つの副詞について、アスペクトに関わる副詞的成分とし、主にスル形と共起し、動きや状態の実現するタイミングを表すもので基準となる時点からどのぐらい時間が経過している事態が実現するかを表すとしている。しかし、グループ・ジャマシイ(1998)と同様に類義関係にある副詞の相違点までは踏み入れていないと思われる。

次に、実際の用例を用いた研究には、ルチラ(2005a)、金(2006)、江(2009a)がある。

まず、ルチラ(2005a)は、「やっと」について、出来事が困難を乗り越えて(・かろうじて)実現したことに重点を置き、「ようやく」について、実現までの経過に重点を置きながら、それに時間がかかったことを表し、期待の実現を表す場合、「やっと」は「会話文」などに多く現れていると述べている。しかし、ルチラの研究は、考察対象をシタ形式の述語に限定し、データとして小説、随筆、シナリオなど30作品から網羅的に収集したとして

<sup>12</sup> 問題点として分析の対象の用例が小説5冊であるものの、用例数が不明な点が挙げられる。資料として用いられている小説は、遠藤周作『沈黙』(新潮文庫)、『悲しみの歌』(新潮文庫)、『口笛をふく時』(講談社文庫)、三木清『人生論ノート』(新潮文庫)、大岡昇平『俘虜記』(新潮文庫)である。

いるが、対象になった用例の数は明確に示されていない。また、「やっど」は「会話文」などに多く現れるとしているが、どの位多いのかその数値が示されていない。

一方、金（2006）は、両副詞の共通点として、待っていたり、望んでいたりすることが時間や手間をかけて実現することを表すので実現しなかったことや否定的な内容、あるいは、相手の行為には用いないと述べ、相違点としては下記のように指摘している。

1. 主体側に重点が置かれた場合、「やっど」は主体がある物事に最大の努力をし、困難を乗り越えて実現することを表すが、「ようやく」は主体の努力とともに時間がかかって困難を次々乗り越えるという時間の経過性が出てくる。
2. 対象側に重点が置かれた場合、「やっど」は待ち望んでいたことへの実現であって、「ようやく」は希望性が弱く、自然推移的な事態の成立を表す。
3. 「やっど」はもう少しでだめだというぎりぎりの所で実現するという限度性を持ち、それによって実現に焦点があるが、「ようやく」には限度性がなく、実現に向かって段々と、徐々に becoming していくことを表す漸次性があり、実現まで時間が経過し、変化する過程に焦点がある。  
(金 2006: p.37)

また、江（2009a）は、小説 15 冊から「やっど」が 496 例、「ようやく」が 576 例を用い、両副詞における文末の述語について、時間的限定性、レアリティー観点から検討し両副詞はリアルな事態を表す副詞で「運動性」「限定性」を共通に用い、「限定性」は動詞の語彙的意味、補語「した」形との共起などで決まるとしている。また、意味的に両副詞の相違点について、「やっど」は事態が実現する時点、「ようやく」は事態が実現する時点までの過程に注目し、「ようやく」には「しだいに」「だんだん」という意味合いがあるが、「やっど」にはないと述べている。

さらに、「ようやく」は改まった言い方で文章的であり、「やっど」は口語的であると述べている。しかし、金（2006）は、「聞蔵」（2003年1月1日～2005年10月30日）と「青空文庫」から2作品を調査対象にしたが、「聞蔵」には、新聞、雑誌、週刊誌が含まれており、ジャンルを区分して検討したのかどうかについて言及されておらず、用例の詳細な数値も欠如している。また、「やっど」が口語的、「ようやく」が文章的事実であることの根拠が示されていない。

このように、「やっど」は口語的で「会話文」に多く現れ、「ようやく」は文章的事実であると言われているが、両副詞がジャンルごとにどう現われているか、ジャンル別によってどのような出現傾向にあるか、また、その出現傾向を数値的に示しているものも見当たらない。前章 1.1 で述べたように、「やっど」が口語に使われてきたことは、歴史的な観点での検討を行った濱田（1984）の指摘からでも読み取れる。濱田（1984）の記述から「やっど」の成立は「ようやく」からであることと、「やっど」は口語であることが分かるものの、「やっど」「ようやく」がジャンルにどの程度の割合で現れるのかについては不明である。

### 2.3.4 「ついに」「とうとう」についての先行研究

ここでは、四つの副詞のうち共起する述語に否定表現が来ることができる「ついに」「とうとう」についての先行研究について検討する。

まず、長嶋（1982）は、「ついに」「とうとう」は、〈実現した事態〉についてそれがくふつうには実現しないと考えられていること〉という特徴を持ち、話し手は〈事態（状態）〉が「尋常なことではない」と捉えている。また、「ついに」は「とうとう」と比べ、〈事態（状態）の実現の瞬間に注目する〉とし、「とうとう」は〈事態が実現する過程に注目する〉としている。さらに、「とうとう」は、「紆余曲折を経て」というニュアンスが伴うとしている。

池田（2000）は、両副詞について、「～てしまう」と共起しやすいと指摘した大里（1986）の先行研究を挙げ、両副詞のいずれが「～てしまう」とより共起しやすいのかを、テキストデータを利用して検討し、「ついに」は8%、「とうとう」は25%という結果を出している<sup>13</sup>。また、「ついに」は「最後」の意味を強調はしているが、その気持ちよりも事実であり、モーダルな表現でありながら、命題と結びつきが強く、「とうとう」は、後悔の気持ちを強調し、話し手の気持ちと結びついた表現だと述べている。

李（2000）は、辞典での用例を基にアンケート紙を作り、38人にアンケート調査を行い、両副詞は「ある事態・状態が実現するのに長い時間がかかった」点と下に打ち消しの言い方を伴う点でほぼ同じであるとし、相違としては「ついに」は実現した瞬間に重点が置かれている（結果重視）のに対し、「とうとう」は実現するまでの過程に重点が置かれている（過程重視）としている。しかし、アンケート調査の項目となった例文は殆ど辞典での例文で実例が少なく、辞典での用例というのは制限が多いため、文脈上のことなどを念頭に置かず採用されるものが多いため、実例からも同じ結果が出るのか検討の必要があると思われる。また、李（2000）は、以下の（5）を挙げ、「ついに」といえば、「人類は宇宙にまで行くようになった」その瞬間のほうがより強く重視されての発話であり、「とうとう」といえば「人類は宇宙にまで行くようになる」までの紆余曲折の過程がより重視されての発話となるとしている。しかし、このような解釈がすべての「ついに」「とうとう」の用例に当てはまるか、また、この（5）だけで両副詞の違いが分かるか検討の余地があると思われる。

（5）人類は、...宇宙にまで行くようになった。（李 2000 : p.130）

劉・吉田（2006）は、『外国人のための日本語例文・問題シリーズ8助動詞』から用例を取り上げ、「とうとう」は「結局、最後に」の意味で、ある事柄が起きた後に最終的結果が起きる時に用いられ、「ついに」は「おわりに、しまいに」という意味で、当初の期待がか

<sup>13</sup> 利用されているテキストデータは、『芥川全集第一巻～十三巻、第十五巻』（文芸春秋社）、『アレア』（1993年5月25日号 毎日新聞社）、『シナリオ「寅さん」シリーズ』である。

なったり、心配や不安が実現したりする場合に用いられると指摘している。

山本 (2007) は、認知意味論の観点から『山本五十六 (上) (下)』を資料に分析を行い、「ついに」は到達点を表す表現と共起するものが多く、「とうとう」は一個の出来事の実現に至るまでの経緯との関係を表すものが多いとしている。

江 (2009b) は、小説 21 作品から「ついに」315 例、「とうとう」332 例を用い、時間的限定性、アスペクト、モダリティの観点から検討し、両副詞はレアルな事態を表し、「ついに」は最終局面を強調するが、「とうとう」は最終局面に至るまでのプロセスを強調する点が異なっているとしている。また、「とうとう」の方が、心的態度「紆余曲折」が強く、最終局面まで導かれる兆しが感じられるとしている。

以上のように、先行研究は形式からのアプローチでも、意味からのアプローチでも、分析の対象である用例の数が少ない点、また、小説と新聞を中心に分析がなされているものの、バランスがとれたコーパスでないため、用例に偏りがあることに大きな問題点があると思われる。さらに、先行研究の中、他の研究と比べ、計量的な研究が行われたと思われるのは、池田 (2000)、石川 (2006)、山本 (2007)、江 (2009a、2009b) があるが、それらでは、数値的に大量ではないか、分析した用例の数が正確に示されていない<sup>14</sup>。

また、「ついに」は事態が実現する「瞬間」に、「とうとう」は事態の実現までの「過程」に焦点があると言われてきたが、この指摘以外、両副詞の違いを表わす共起関係の提示はなされていない。

### 2.3.5 「急に」「突然」についての先行研究

最後に、ここでは「急に」「突然」についての先行研究を述べる。研究者の直観による研究として浅野 (1982) と国広 (1982) がある。また、アンケートを実施し、類似表現の使われる条件を提示した佐治 (1998)、認知言語学の観点で検討した李 (2006) の研究がある。

まず、浅野 (1982) は、「突然」について、ある事態の生じ方が瞬間的であり、その事態と前の状態との断絶が際立っていると述べ、国広 (1982) は、「急に」について、ある事態の生じ方が予想外であり、その事態と前の状態との格差が通常より大きいと述べている。浅野 (1982) は、「突然」「不意に」の検討の結果、「突然」について、(6) (7) の出来事、(8) の人間の意図的行為、(9) の自然現象の事態に現れ、事態を客観的に描写する際に使われるとしている。

---

<sup>14</sup> 池田 (2000) の使った用例数は、「ついに」123 例、「とうとう」229 例、石川 (2006) の使ったデータは『プロジェクト X』(第 1 巻～26 巻) で、総計、約 6,175,488 字、新潮文庫 10 作品で総計、約 2,171,776 字であって抽出された用例数は「ついに」530 例、「とうとう」62 例である。山本 (2007) の使ったデータ数は、総語数、261,427 語数で、抽出された用例数は「ついに」17 例、「とうとう」16 例である。江 (2009b: p.85) は、「とうとう」を形式的に見ると、「とうとう」に「は」がつくことができないことから、「ついに」も「とうとうは」と同一扱いし、対象外としたが、「ついに」の分析においては「は」がつく「ついに」も検討の対象にする必要があると思われる。

- (6) トツゼン都合が悪くなって上京を取りやめた。(浅野 1982 : p.159)
- (7) 父は自動車事故でトツゼン死にました。(同上)
- (8) 友人は私をトツゼン裏切ったのだ。(同上)
- (9) トツゼン地震が起こった。(同上)

しかし、浅野(1982)の記述に対し、疑問を持つ。それは、「突然」が「出来事」「人間の意図的行為」「自然現象」に現れるということはすべての事態に現れる解釈を可能にし、事態による特徴が見えにくくなることである。また、「人の行為」による事態は「出来事」と捉えられるなど、「突然」の現れる事態についてもっと詳細に記述すべきである。つまり、「突然」は、出来事、人間の(無)意図的行為、自然現象に現れると記述されているものの、どんな出来事、人の(無)意図的行為、自然現象で現れるのか具体的に記述すべきである。また、国広(1982)の記述からは、「急に」の成立する事態は、どんな事態であるのか明らかではない。「急に」の現れる事態は、「突然」と同じ事態であるのか、それとも、違う傾向の事態であるのか疑問である。

次に、佐治(1998)は、「急に」「突然」「いきなり」「不意に」「にわかに」「だしぬけに」「ふと」を類似表現とし、辞書での用例と作例49項目を基に20人にアンケートを実施し、これらの表現が使われる条件を明らかにしている。それによれば、使い分けの条件は「急に」「突然」には共通する部分が多いが、「急に」は「現存事態の動き・変化と無関係」という条件に合うか否かはっきりしないと述べている。また、「突然」は「行為者の意志的行為」の条件には合わないとしている。しかし、下記の(10)のように、行為者の意志的行為として使われる例があり、また、使用条件の項目の定義がなされていないまま使用条件だけが挙げられ、それぞれの類似表現の相異点は明らかになっていない。

- (10) 男は女子生徒に道を尋ね、突然、襲った。(97年8月2日)

さらに、アンケート項目には辞書での用例と作例が使われ、実際に使われている類似表現の姿が十分に反映されているか疑問点が残されている。

李(2006)は、認知意味論の観点から「いきなり」「突然」「急に」を検討し、三つの語の共通点として「話し手がある事柄を前触れなく瞬間的に発生・成立するととらえる」ことを挙げており、相違点として「突然」は「話し手がある事柄の発生・成立点そのものに注目し、まったく予想外・前触れのない瞬間的なものである」ととらえること、「急に」は「話し手がある事柄の発生・成立点の様子(進行過程)に注目し、その進行過程が何らかの基準に比べ大きくとらえる」ことを挙げている。

しかし、前章1.1で述べた通り、(11)のように、置き換えが可能な場合、「急に」は「倒れた」様子に、「突然」は「倒れた」瞬間に焦点があると解釈できるのか疑問である。



(11) 人が {急に／突然} 倒れた。(作例、第1章 1.1 (2) の再掲)

置き換えが可能か否かで類義語の特徴を明らかにすることよりも、成立する事態(上記の(11)では、「倒れる」という述語)によく現れる類義語を明らかにすることが必要であり、また、「急に」「突然」にそれぞれよく現れる事態の傾向を検討することが両者の特徴をより明確にすると思われる。

最後に、上記の2.2.4で触れたように、仁田(2002)は副詞「急に」「突然」は、「ある事態が瞬間的に成立する」ことを共通点とする類義語で両者を時間関係の副詞の中、起動への時間量を表す副詞とし、事態の起動・取り掛かるまでの所要時間がきわめて少ないという<僅少所要型>に分類し、以下のように述べている。

<僅少所要型>とは、事態の取り掛かり・起動までに要する時間量がきわめてわずかなであることを表すものである。これには、「急に、至急、不意に、いきなり、やにわに、突然、突如、咄嗟に、唐突に、だしぬけに、にわかには、すぐ(に)、じき(に)、直ちに、たちまち、たちどころに、さっそく、即刻、即座に、すかさず、とたん(に)、…」などがある。  
(仁田 2002 : p.247)

また、「急に、至急、不意に」が表すのは、事態の起動までの時間量であり、「急に」は変化・運動の双方に使えるとしている。一方、「いきなり、やにわに、突然、…、にわかには」は突然性や唐突性に関わり、事態の起動・取り掛かりまでの所要時間がきわめて少ないと述べている。

このように、仁田(2002)の記述は起動への時間量がきわめてわずかな副詞の提示と分類にはなるものの、個々の相違まで述べられていない。

以上、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」と「急に」「突然」の先行研究について概観したが、以下のように、幾つかの問題点がある。

まず、「やっと」「ついに」は、事態が成立する瞬間に焦点があり、「ようやく」「とうとう」は、事態が成立する過程に焦点があると述べているものの、適切な用例が提示されていない。また、検討対象である分析データが均衡コーパスではなく、抽出されている用例の出現頻度などが数値で詳細かつ明確になっていないものが多い。

最後に、研究対象の副詞が口語的、文語的であると述べながらも、それを裏付ける証拠や数値が提示されていないものもある。

これらの問題点を踏まえ、本論文では、類義関係にある副詞について、これまで調査データとして扱われていないバランスがとれた、均衡コーパスであるBCCWJ(ジャンルによる相違を検討するため、新聞データである『毎日』も用いる)を用い、新たな研究方法で分析・考察し、類義関係にある副詞の相違を明らかにする。また、類義関係にある副詞の文体の差も明らかにする。

### 第3章 本論文で扱う調査データの概要

本章では、本論文における調査データの詳細と調査方法について述べる。

#### 3.1 データの種類

類義関係にある副詞の文体の差と、副詞と共起する述語の相違を明らかにするため、コーパスから副詞の含まれている用例を抽出する。分析のデータは以下の図 3-1 のように、電子資料である BCCWJ と『毎日』を用いる。

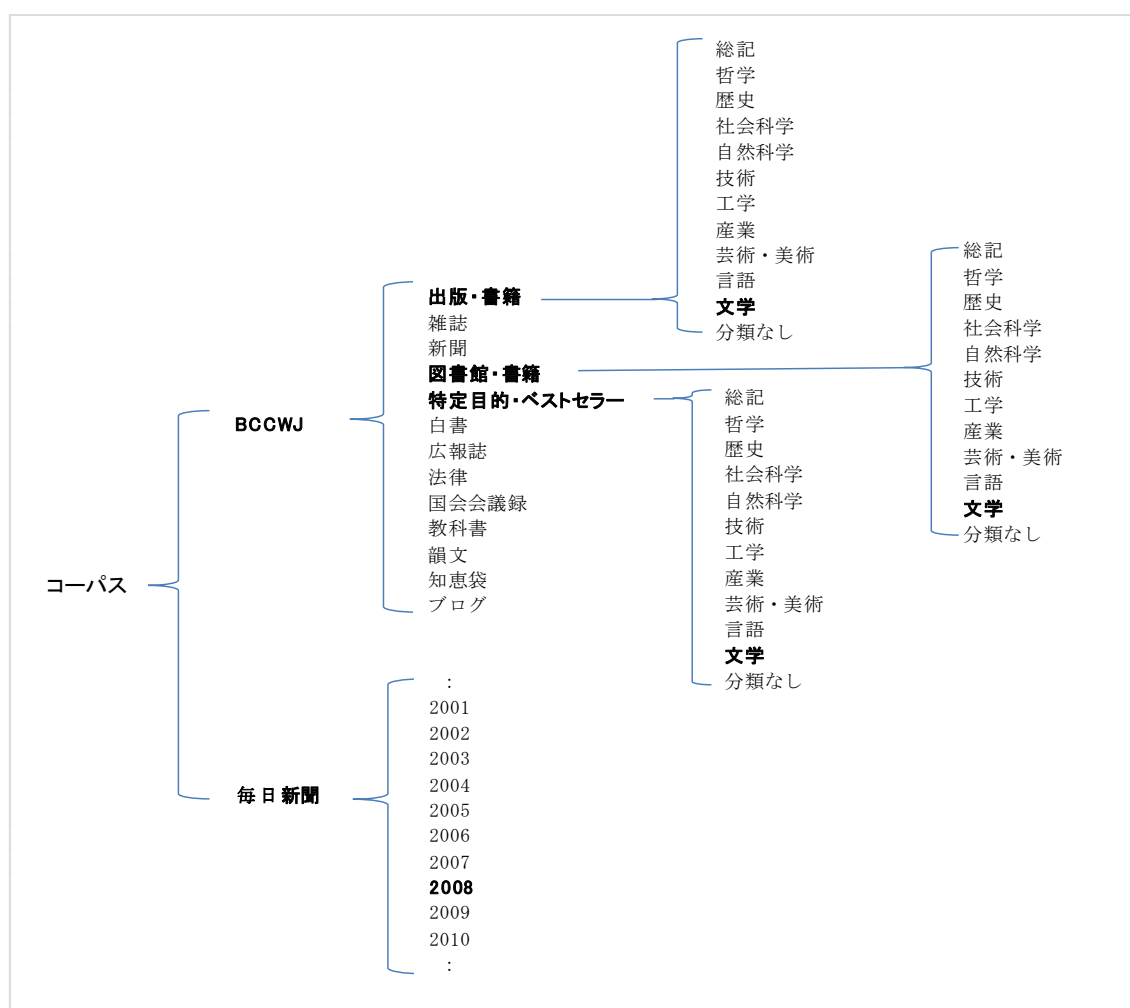


図 3-1 検討対象のコーパスについて<sup>1</sup>

まず、研究対象語が現れる文の文体を明らかにするため、BCCWJ のさまざまなジャンルを用い、副詞の出現傾向を検討する。BCCWJ には「書籍」「雑誌」「新聞」「ベストセラー」

<sup>1</sup> 第 5 章と第 9 章では、2008 年度の『毎日』を用いるが、第 7 章では、『毎日』2004 年から 2009 年までの 6 年分を用いて検討する。詳細は第 7 章で述べる。

「白書」「広報誌」「法律」「国会会議録」「教科書」「韻文」「知恵袋」「ブログ」というサブコーパスが存在するがそれぞれ異なるジャンルと考える。各ジャンルにおける検討対象の出現傾向を見ることにより、話し言葉的なジャンルに現れるのか書き言葉的なジャンルに現われるのか推測できるようになる。

次に、検討対象語と共起する述語の特徴を明らかにするため、文学作品を用いる。BCCWJの「書籍」「ベストセラー」というサブコーパスには下位分類に『文学』が入っている。『文学』からの用例を用い、類義関係にある副詞と共起する述語の出現傾向からそれぞれの副詞の特徴を明らかにする。また、異なるジャンルでの検討対象語の出現傾向を見るために『文学』と異なるジャンルである『毎日』を用いる。『毎日』からの用例を『文学』からの用例と同じ方法で分析し、新聞での副詞の特徴と文学作品での副詞の特徴を比較する。

『文学』データの語数について、「出版・書籍」の『文学』は6,802,589語、「図書館・書籍」の『文学』は11,147,693語、「特定目的・ベストセラー」の『文学』は2,288,986語であり、合計20,139,268語である<sup>2</sup>。

一方、BCCWJのサブコーパスである「新聞」は1,370,233語であり、『文学』の語数と数値的に差が大きい。『毎日』の場合、1994年は26,818,232語、1995年は27,790,242語、1996年は31,505,648語、1997年は34,042,126語、1998年は35,436,029語、1999年は33,238,138語、2000年は32,683,634語、2001年は31,095,295語、2002年は30,296,127語、2003年は30,554,273語、2004年は27,997,306語、2005年は26,661,015語、2006年は25,248,074語、2007年は24,744,069語、2008年は23,439,785語、2009年は23,590,795語である<sup>3</sup>。

文学作品と新聞を比較することを念頭に置くと、文学作品のデータの語数と新聞データの語数は対等なものが望ましい。そこで、『文学』の語数20,139,268語と一番近い語数、23,439,785語である2008年度の『毎日』を用いる（ただし中頻度語が現れない場合、2009年、2007年、2006年、2005年、2004年、2003年などの順で他の年度を用いる。この点については第7章7.3で述べる）。

BCCWJの『文学』と『毎日』を別々に用いる理由は、田野村（1995）が「語句の用法や頻度は資料の種類によって異なる可能性があるが、そのような各種の資料における統計をどのように合算すれば日本語の“平均像”が得られると言えるのかはきわめて難しい問題である。特に根拠のないままにブレンドした資料を使うよりも、むしろ各種ごとの異同を見るという方法の方が正確な知見をもたらす可能性もある（p.55）」と述べているように、類義語の出現を検討するには文学作品とデータの性質が異なる新聞データを用いる必要があると判断したためである。

<sup>2</sup> (URL <https://chunagon.ninjal.ac.jp/search/about/suw> 2012年5月19日参照)

<sup>3</sup> 語数は、形態素解析mecab(0.994)と、解析用辞書Unidicを用いて調べた。語数は、“=”、“◆”、“?”、“-”やアルファベットなどの記号と分析されるものや空白を除いた数である（著作権交渉中のものは、そのまま計数）。

また、新聞データを選択した理由は、陳（2012）が「新聞はわれわれの身近にあり、毎日多くの人が新聞の各紙面に目を通すことにより、世の中の事象を知ろうとしている。したがって、新聞の文体は非常に値するジャンルの一つであると考えられる（p.29 陳の記述のそのまま引用）」と述べているように、身近で多くの人が読み、多様な表現が現れるジャンルであり、現代の日本語について検討する際に欠かせない資料であると考えられるためでもある。

さらに、田野村（2000）によれば、「遺漏のない精密な意味記述を目指すのであれば、個人差を伴いがちな微妙な問題に研究者個人の語感で独善的な判断を下す危険を避けるためにも、広範囲の用例の観察・分析が不可欠となる。（中略）意味研究の分野においても、電子資料を利用したさまざまな事例研究を通じて、従来よりも精度の高い分析・記述が達成される」と電子資料の有益性について述べていることから、本論文では、電子資料を用い、従来の研究より精度の高い分析を目指す。

最後に、これまでの類義関係にある副詞の研究において、大量の新聞データを用い、計量的に検討したものはあまり見当たらないことも BCCWJ と『毎日』を選んだ理由の一つである。

### 3.2 検討対象語が入った用例の抽出とその認定

ここでは、検討対象語の入った用例の抽出について述べる。

BCCWJ からの用例はオンライン上の『中納言』から抽出し、用例の検索は、短単位<sup>4</sup>で行った。「検索対象」は、まず「出版・書籍コア」「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・ベストセラー」に限定した。抽出結果にはデータの重複の可能性があるため、『文学』の用例は、抽出された用例全てに目を通し、重複がないことを確認した<sup>5</sup>。

また、異なるジャンルでの出現傾向を通し、文体の差を調べるため、「出版・新聞（コア）」「出版・雑誌（コア）」「特定目的・白書（コア）」「特定目的・知恵袋（コア）」「特定目的・ブログ（コア）」「特定目的・法律」「特定目的・国会会議録」「特定目的・広報誌」「特定目的・教科書」「特定目的・韻文」からも用例を抽出した。

一方、『毎日』からの用例はプログラミング言語 Perl を利用し、検討対象語の入ったすべての用例を抽出した。例えば、以下の（1）（2）は実際に抽出された用例であるが、（1）のような本文を含め、（2）のように、小見出しなども検討対象として入れた。

---

<sup>4</sup> コーパス検索アプリケーションである『中納言』で検索を行う際、検索方法には、「短単位検索」「長単位検索」「文字列検索」がある。「短単位検索」「長単位検索」では単位ごとに区切ったデータを使い、文字列だけではなく品詞や語彙素など、様々な条件を指定して検索することができる（第1章脚注4をご参照いただきたい）。

（URL <https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/index.php?FrontPage> 2013年10月16日参照）

<sup>5</sup> 田野村（2012：p.4）は、データの重複について Yahoo! ブログサブコーパスと法律サブコーパスにデータの重複が多いと述べている。

- (1) そんな紋次郎が、背を向けたはずの人ごとに引き寄せられ、封じた情をのぞかせ、しがらみを切れず、ついに長脇差（どす）を抜く。その殺陣はまるでラグビーの乱戦のごとくで、従来の剣舞のようなものとは違った。（『毎日』2008年1月10日）
- (2) ◇挑戦4回、ついに頂点（『毎日』2008年1月8日）<sup>6</sup>

BCCWJと『毎日』を用いて抽出された用例から両副詞と共起する述語を目で確認し、述語を認定した。しかし、共起する述語の認定に疑問があるものがいくつかあった。例えば、

(3) (4) のように、連体節を含む文の場合、「やっと」と共起する述語が(3)では「開く」と「聞く」、(4)の「急に」と共起する述語が「(鶴岡に) 向かう」と「(決心を) する」と認定できる可能性がある。このような文については、3人の日本語母語話者に共起する述語を確認してもらい、(3)の「やっと」と共起する述語は「開く」と認定し、(4)の「急に」と共起する述語は「(決心を) する」と認定した<sup>7</sup>。

- (3) 二階にもどったケリーは、四十五分ほどたつたころやっと玄関のドアが開く音を聞いた。（PB59\_00363『クリスマス・ボックス』2005）<sup>8</sup>
- (4) 急に鶴岡にむかう決心をしたとき、それをボストンバックに入れたのは無意識のふるまいだった。（PB19\_00587『発熱』2001）

次に、共起する述語が複合動詞の場合、形態素解析をしたあと述語を目で確認して認定した<sup>9</sup>。例えば、「書き出す」を形態素解析すると、「書く」と「出す」に分かれる。「書く」の場合、形態素の基本形は「書く」、品詞情報は「動詞-自立」、活用情報は「連用形」に解析され、「出す」の場合、形態素の基本形は「出す」、品詞情報は「動詞-非自立」、活用情報は「基本形」に解析される。この場合、「書く」を述語として認定した。また、「起き直る」の場合、形態素の基本形は「起き直る」、品詞情報は「動詞-自立」、活用情報は「基本形」に解析されるため、このまま述語として認定しカウントした。さらに、「話せる」のような可能形の場合、形態素の基本形は「話せる」、品詞情報は「動詞-自立」、活用情報は「基本

<sup>6</sup> 出典の表示について、用例(1)は、『毎日』2008年1月10日)となっているが、以降、(2008年1月10日)と『毎日』を省略し、記述する。

<sup>7</sup> 3人の日本語母語話者は、1名は20代後半の男性、2名は30代前半の女性で3名とも日本語教育に携わっている。述語の認定において、3名の意見が分かれた時、2名が判断した意見を尊重し、述語と認定した。2名が一致したものには、例えば、「そんなに奥さんを愛してるなら、どうして耀子さんとうなったりしたんです」彼女は、背もたれにぱさりと頭をもたせかけて、そのまま動かなくなった。急に電池が切れてしまった人形のように見えて、僕は、尋ねたことを思いきり後悔した（LBk9\_00150『きみのためにできること』1996）、「ここをやめたとしても、お前のような半端者を雇うところなどないぞ」「そんなことはない！」急に開きなおった感じで、明石は立ちあがった（LBp9\_00108『B・D・T』2001）などの例がある。太線を述語として認定した（波線は1名の意見である）。

<sup>8</sup> 用例の出典は、「サンプルID、書名、出版年」の順に書く。

<sup>9</sup> 形態素解析には、「ChaSen（茶筌）」を用いた。ChaSenは、奈良先端科学技術大学院大学松本研究室で開発されたコスト最小法による日本語形態素解析システムである（山下（1998）。「ChaSen」では、「IPADIC」という電子化辞書を用いて形態論情報を付与する。

形」に解析されるため、「話せる」を述語として認定した。また、「話す」も形態素の基本形は「話す」、品詞情報は「動詞-自立」、活用情報は「基本形」に解析されるため、「話す」を述語として認定した<sup>10</sup>。

さらに、(5)のように、「～ようとする」文型の場合、「～」である動詞を述語として認定したため、「(手に) 入れる」を述語とカウントした。(6)のように、「～することができる」の場合、「できる」でカウントした。(7) (8)のように、「～ようになる」「～ことになる」の場合、「なる」を述語とした。(9)のように、「～ことがある」は、「～」部分である動詞「変わる」を述語として認定した。

- (5) 「金で優勝を買う」といわれるヤンキースが、ついに最高の選手を手に入れようとしている。(2004年2月16日)
- (6) 一撃を加えた後、やっとバランスをとることができたときには、B二十九ははるか彼方に飛び去って、二度と攻撃することはできなかったのだ。(PB29\_00398『ドッグファイター「神竜」』2002)
- (7) この考え方に基づいて、ようやく日本でも患者の知る権利が認められるようになり、カルテの開示なども求められるようになっていきます。(LBm9\_00049『告発-人工透析死』1998)
- (8) そこでお三輪は蘇我家の官女たちにいじめられ、ついには命まで落とすことになる。(2004年5月12日)
- (9) 患者側は不安だ。特に子供の場合は大丈夫だと思っても、容体が急に変わることがある。(2008年1月6日)

なお、抽出された用例の中では対象語と異なる語が見られた。「やっと」には(10)(11)(12)のようなものと、「とうとう」には(13)のように、「滔々」として使われる例が多く、「突然」には(14)(15)以外に「突然死」などの名詞で使われる用例が抽出された。このように、研究対象語と異なる語は目で全て確認して調査対象から除外した。

- (10) もちろん、美術史の勉強はするよ。でも大変なんだもん。アジア美術に進む前に、西洋美術を全部やっとかないといけないのよね。好きでもない芸術家の名前も全部覚えなきゃいけないし。(LBt9\_00116『匂いたつ官能の都』2005)
- (11) 「負ける気がしなかった」。ひやっとしたのは準々決勝のみ。(2008年3月28日)
- (12) 日本とインドネシアのEPAが批准に向けて動き出した。柱となる看護師や介護

---

<sup>10</sup> 可能形の「寝られる」は「寝る」と「られる」に分かれ、「寝る」の場合、形態素の基本形は「寝る」、品詞情報は「動詞-自立」、活用情報は「未然形」に、「られる」の場合、形態素の基本形は「られる」、品詞情報は「動詞-非自立」、活用情報は「基本形」に解析される。この場合は、「寝る」を述語として認定した。このように、同じ可能形でも解析の結果が異なるため、語ごとに確認した。

- 福祉士の派遣実務を行うインドネシア海外労働者派遣・保護庁のジウムフル・ヒダヤット長官に、派遣の意義などを聞いた。(2008年4月20日)【ジャカルタ井田純】
- (13) 業界団体をバックに導入反対を唱える族議員たちに対しては、まずはじろりにとらみ、税の論理を滔々(とうとう)と説いた。その迫力と理屈にかなう政治家はいなかった。(2004年2月21日)
- (14) 貌の無いテロリストというのは公安警察にとってはこれまで存在しなかった。人間の突然変異種が出て来たとしても解釈するしかない。(LBp9\_00105『鷲』2001)
- (15) 現実には日常性の哲学が考えるよりも遥かに深い。「何によってドストイェフスキーは惹き付けられるのを感じるか。『多分』によって、突然性、闇、我儘によって—まさに常識や科学が存在しないものもしくは否定的に存在するものとするものによってである。」と、シュストフは書いている。(PB49\_00275『日本近代文学評論選』2004)

また、「突然」には(16)のように、慣用的に使われる例と、「急に」には(17)のように、事態が時間的に成立することを表している副詞ではなく傾斜や川の流れなど空間的に取られる例も調査対象から除外した。

- (16) エリカの声は喧嘩腰で、相手を頭ごなしに押さえ付けてしまう。座木は最初に動いて、詠子に椅子を勧めた。「夜分に突然、失礼致しました」「私をどうするつもりですか？」(PB19\_00629『本当は知らない薬屋探偵妖綺談』2001)
- (17) 山の入り口で平八さんは自転車を降りました。そこからは、両側に濃淡のある緑をまとった植物がびっしりと自生する道が、だんだん勾配が急になって奥のほうへ続いているので、歩いてでないと先へは進めません。(LB19\_00007『ニュースキャスターはこのように語った』1997)

次に、執筆者の生年代<sup>11</sup>が1890年代までの用例は除外した。(18)は、執筆者である「菊池寛」の生年代は1880年代であるため除外した。このように、執筆者の生年代の古いものを現代日本語書き言葉のデータとして選んだのは、丸山(2011)が指摘しているように、「サンプリングの際、作品の出版年度を基準にした」ためである。(19)は、執筆者が「ヘンリック・シェンキューヴィチ(著)／木村彰一(訳)」2人であり、生年代がそれぞれ「1840／

<sup>11</sup> 『中納言』における検索結果の表示について、形態論情報は「前文脈、キー、後文脈、語彙素読み、語彙素、語彙素細分類、語形、品詞、活用型、活用形、書字形、発音形出現形、語種、原文文字列」の順で表示され、コーパス情報は「サンプルID、連番、レジスター、コア、固定長、可変長」の順で表示され、出典情報は「執筆者、生年代、性別、ジャンル、書名/出典、副題/分類、巻号、編著者等、出版者、出版年」の順で表示される。

(<https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/index.php?%E6%A4%9C%E7%B4%A2%E7%B5%90%E6%9E%9C%E3%81%AE%E8%A1%A8%E7%A4%BA> 2013年10月17日 参照)

1910」であるが、訳者の生年代が 1910 年代であるため、これを検討対象とした。また、データの中で執筆者の生年代が記入されていないものがあったがこれらも検討対象とした。

(20) は、執筆者が「夏目漱石 (著) / 稲垣達郎 (著)」2 名であり、生年代が「1860 / 1900」である。このように、執筆者の生年代が対象内と対象外になる場合、編著者等が明治の文豪であるため、対象語から除いた。

(18) が、彼が六、七段も、馳け上ったときだった。また立ち止まって、じっと彼の後姿を見ていた相手の男が、急に声をかけた。(LBq9\_00179『真珠夫人』2002)

(19) やっと六日めになって、火はおびたしい数の家屋を故意に取りこわしたエスキリヌス丘の空き地に達し、勢いがおとろえはじめた。(LBj9\_00006『クオ・ワディス』1995)

(20) やっとの思いでこのいびつを取るとまた直径にくるいができます。(LBt9\_00197『吾輩は猫である』2005)

以上、データから除外したものについて述べた。また、BCCWJ 内の『文学』と、『毎日』において、除外した用例の詳細な数などについては、以降の第 4 章から該当項目で詳しく述べることにする。

### 3.3 研究方法

#### 3.3.1 「独自の語」の抽出方法

本論文では、類義関係にある副詞の違いについて、副詞と共起する述語（主に中頻度語）を検討し、その相違から両副詞の特徴を明確にすることが目的である。

そこで、中頻度語の抽出方法について述べる。

中頻度語とは、副詞と共起する述語を頻度順に並べ、その順位から異なり語数の累積の比率により、高頻度・中頻度・低頻度に分けることができるが、そのうちの中頻度に属する語のことである。

まず、高頻度語を外す理由は類義語と共起する高頻度の述語というのは、類義語とよく共起するものである一方、他の（検討対象語が出現しない）文においてもよく使われる（元々使用頻度の高い）述語である可能性があるためである。田中（1978）は高頻度群の特徴について以下のように述べている。

高頻度群というのは、一方において、基本的な語を含むと同時に、他方において、その調査対象独特の語を含むという、二つの性格を持っている。頻度（使用率）に基づいて基本的な語群を選定していく場合には、高頻度語群から、なるべく後者、すなわち、その調査対象に独特な語が集まるといった性格を捨象していくわけだが、逆に、調査対象の語彙的特徴を捉える場合には、高頻度語群から、基本的な語をふるい落と



す操作をすればいい。(中略) 各種文献の語彙調査から得られた高頻度語群の中から、どんな語彙調査においても常に高頻度で現れる、いわば無性格な基本語群をふるい落として、それぞれの文献に特有な語を抽出する。(田中 1978 : pp.62-63)

このように、高頻度語群を検討する際には基本的な語と独特な語を分けて考える必要があるが、類義語と共起する述語を検討し、類義語の特徴を取り出す際には困難点がある。その困難点とは、類義語と共起する述語の高頻度語群は基本的な語が多いため、「独自の語」が取り出しにくい点であり、また、本論文の対象である類義関係にある副詞は互いに共起する高頻度の述語が非常に似ている点である。

田中(1978)は、「調査範囲の広い大量語彙調査の高頻度語群は、ほぼ、基本的な語の集合と見なすことができる(p.64)」と述べているように、BCCWJにおける副詞同士と共起する高頻度語群は基本的な語の集合である傾向が見られる。

例えば、「やっと」「ようやく」と共起する動詞をまとめたものが表3-1である。

表3-1 「やっと」「ようやく」と共起する高頻度の動詞<sup>12</sup>

やっと				ようやく			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	する	155	9.8%	1	する	272	11.7%
2	なる	102	6.5%	2	なる	147	6.3%
3	分かる	82	5.2%	3	できる	92	4.0%
4	できる	69	4.4%	4	開く	66	2.8%
5	出る	50	3.2%	5	分かる	64	2.7%
6	見つける	38	2.4%	6	気づく	58	2.5%
7	言う	36	2.3%	7	付く	51	2.2%
7	付く	36	2.3%	8	出る	48	2.1%
9	気づく	35	2.2%	9	言う	41	1.8%
10	開く	32	2.0%	10	たどりつく	40	1.7%

(趙(2013 : p.21)の表3を引用)

高頻度の動詞について、国立国語研究所の『BCCWJの語彙表』<sup>13</sup>を参考にすると、「や

<sup>12</sup> 表3-1は、BCCWJの「書籍」「ベストセラー」の下位区分である『文学』を用い、「やっと」「ようやく」と共起する述語を頻度順にまとめた表であるが、第3節3.2の(18)(19)(20)のように、1890年までの執筆者の用例が除かれていないものである。そのため、本論の第4章4.4.3.2の表4-3の結果とやや異なる。

<sup>13</sup> 国立国語研究所が公開した『BCCWJの語彙表』のうち、「短単位語彙表データ」から「出版・書籍における順位」の動詞のみを参考にした順位である。

(URL [http://www.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/freq-list.html](http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/freq-list.html) 2013年8月16日 参照)

と」「ようやく」と共起する動詞の場合、表 3-1 に見られる「する」は 8 位（以下、動詞の後の順位は、国立国語研究所の『BCCWJ の語彙表』によるものである）、「なる」は 21 位、「できる」は 43 位、「分かる」は 105 位、「言う」は 17 位、「付く」は 84 位、「気づく」は 668 位、「開く」は 419 位である。「やっと」のみに現れる高頻度語「見つける」は 1109 位であり、「ようやく」のみに現れる高頻度語「たどりつく」は 3871 位である（『BCCWJ の語彙表』の「出版・書籍」の頻度）は 98748 位までであるため、3871 位を高頻度語と判断した）。

また、『国立国語研究所言語処理データ集 7 現代雑誌九十種の用語用字 全語彙・表記』（以下、『雑誌 90 種』と称する）<sup>14</sup>の頻度順と合わせてみると、『BCCWJ の語彙表』と同様に頻度が高い基本的な語が多いことが分かる。「やっと」「ようやく」と共起する共通の動詞は『雑誌 90 種』の順位から「する」は 1 位（以下、動詞の後の順位は『雑誌 90 種』によるものである）、「なる」は 6 位、「分かる」は 109 位、「できる」は 46 位、「出る」は 62 位、「言う」は 3 位、「付く」は 119 位、「気づく」は 2146 位、「開く」は 458 位である。「やっと」のみに現れる高頻度「見つける」は 1560 位、「ようやく」に現れる高頻度語「たどりつく」は 6854 位である（『雑誌 90 種』の順位は 39,998 位までであるため、1560 位の「見つける」、2146 位の「気づく」、6854 の「たどりつく」などは高頻度語と判断した）。

さらに、両副詞と共起する述語は、高頻度の場合、「やっと」の「見つける」、「ようやく」の「たどりつく」以外は共通しており、それらを除けば、高頻度の動詞は同様のものが出現する。なお、「見つける」と「たどりつく」は表 3-1 には入っていないが、「見つける」は「ようやく」にも 16 位に現われ、「たどりつく」は「やっと」にも 14 位に現われる。

このように、類義関係にある副詞と共起する高頻度の述語は類似しており、基本的な語が多いため、除外する必要がある。それで検討対象語は、中頻度語・低頻度語の両方であり、かつ、二つの類義語に共通して現れないものである。

中・低頻度語の検討を指摘したものには、石井（2002）があり、下記のように、語彙と文章との関係は高頻度語のみではなく、中・低頻度語の検討が必要であると述べている。

ある程度の規模をもつ文章では、それを構成する語彙の大部分は中・低頻度語であり、中でも、半数程度は頻度 1 の語である。これらを見逃したまま、語彙と文章との関係を十分に明らかにしたとはいえない。また、ある語がある文章で 1 回しか使われなかったとしても、その 1 回であることに、その語とその文章との関係は反映しているはずである。語彙と文章との関係は、高頻度語だけではなく、その文章に使われたすべての語に及んでいると考えねばならない。とすれば、これまで高頻度語に限って論じられていた語彙と文章との関係を、中・低頻度語の場合にまで拡張することが求められる。

（石井 2002：pp.191-192）

<sup>14</sup> 『国立国語研究所言語処理データ集 7 現代雑誌九十種の用語用字 全語彙・表記』は、首都大学東京大学院日本語教育学教室の所有である。

以上のように、高頻度語を外し<sup>15</sup>、中・低頻度語を視野に入れて検討すべきであるが、BCCWJ から抽出された用例において低頻度語を検討するには、二つの問題がある。以下の理由により、本研究では低頻度語を検討対象から除外する。

第一に、BCCWJ が全数調査ではない標本調査である点である。伊藤（2002）は、全数調査と標本調査の特徴として 6 点を挙げ、高頻度と低頻度について以下のように述べている。

標本調査が適しているのは、高頻度を分析する場合である。高頻度として認められる見出し語の種類には、標本調査と全数調査のどちらの方法をとっても、ほとんど違いが出てこない。そのため、多くの時間と費用と労力を必要とする全数調査よりは、標本調査を採用した方が経済的かつ効率的だということになる。

低頻度の分析ができるのは全数調査だけで、標本調査では不可能である。というのは、標本調査で使用回数が 1 回（頻度 1）となった見出し語が全数調査でも頻度 1 である保証がないからである。また、標本抽出の対象からもれた見出し語も当然あり、その見出し語が頻度 2 以上である場合も否定できないのである。（伊藤 2002:p.62）

また、全数調査での検討が必要である低頻度語について、石井（1996）も「大きな文章における語の使用頻度を調べるためには、語彙調査が不可欠である。しかも、文章における低頻度語の具体的な使用を見るためには、文章をまるごと扱う『全数調査』方式の語彙調査でなければならない（p.27）」と述べている。

このように、サンプリングでデータを集めた標本調査の結果である BCCWJ は低頻度語を分析するのに適していない。

第二に、臨時一語の問題である<sup>16</sup>。石井（1996）は「臨時一語」について、「文を構成するそのときにその場限りのものとしてつくられる語であるから、その本質において、1 回限りのもの、つまり、頻度 1 の語になる『必然性』ないし『可能性』を備えているといえる」とし、頻度 1 の低頻度語に現れる「臨時一語」について述べている。実際の用例には、(21) のような臨時一語、(22) のように臨時につくられる複合語が現れる。

(21) 「ここに遂に外務省革命始まる!」 (PB19\_00143『総領事館』2001)

(22) あまりにも恥ずかしい光景だったから、遂に誰も描き留めるに至らなかったようである。(PB59\_00465『浮世を生き抜く』2005)

以上のように、低頻度語には「臨時一語」が含まれている可能性がある。石井（1993）

<sup>15</sup> 本論では研究対象語と共起する高頻度語について出現傾向などを確認する程度にとどめる。

<sup>16</sup> 臨時一語の問題の他、低頻度語（頻度 1）にはサンプリング後、文章を入力する際に誤って入力されたものがあると考えられるが、この点については本論文ではこれ以上触れない。

は、新聞の社会面記事や社説における「臨時一語」は文中での割合が高く、石井（2001）では、小説の文章は「臨時一語」があまり見られないと述べているが、(21) (22) のように、文学<sup>17</sup>というジャンルにも「臨時一語」が現れる。新聞においても文学においても、低頻度語には「臨時一語」があると予想されるため、低頻度語は検討対象として適していないと考えられる。

これらの理由により、副詞と共起する述語のうち低頻度語も分析対象から除き、中頻度語のみを検討対象とする。

本論文では、類義語である副詞と共起する中頻度語でありながら、それぞれの副詞のみに現われる中頻度語を「独自の語」と命名する。

ここで、中頻度語はどう抽出すべきなのかについて検討する。副詞と共起する動詞の数というのは、ジャンルによって異なっているため、『BCCWJ の語彙表』と『雑誌 90 種』の頻度順を参考にした場合、何位まで高頻度語であり、何位から中頻度語・低頻度語であるのかその境界線を定めることは困難である。また、『雑誌 90 種』は一つのジャンルでの頻度順であるため、違うジャンルである小説や新聞での頻度順と同様であるとは言い切れない。

語彙について、さまざまなジャンルでも同じ比率で高頻度語、中頻度語、低頻度語を数学的に決める方法として、現時点では、伊藤（2008、2009）の「量的語彙構造分析法」（以下、「分析法」と称する）が有効であると考えられる<sup>18</sup>。特に時代範囲を列にとり、使用度数を行にとり「(使用) 範囲・度数分布表」が有効であろう。伊藤（2008）は「分析法」について、以下のように述べている。

林の選定法は語彙素の使用度数と使用範囲から基幹語彙を選定する方法である。つまり使用度数が高く、使用範囲が広い語彙素ほど基本度が高いと判定し、その基本度に基づいて語彙を区分していく。その調査対象は新聞 3 誌（1966、1 年分）で、使用範囲は新聞記事の話題分野による階層 12 区分（政治、外交、経済など）を採用している。

分析法においても、語彙区分の基準として語彙素の使用度数と使用範囲を採用しているが、選定法との違いは「使用範囲の内容」と「使用度数の算出法」にある。

使用範囲の内容は、選定法では新聞記事の話題分野という同時代のジャンルの違いであるが、分析法では上代、中古、中世という時代の違いとなっている。（省略）

---

<sup>17</sup> BCCWJ では「小説」という名称では使われておらず、『文学』という名称で使われているため、「小説」の代わりに『文学』と称する。

<sup>18</sup> 多くの先行研究に、高頻度・中頻度・低頻度に分け、検討しているものの、その分け方は透明に記されていないものが少なくない。例えば、スルダノウィッチ・イレーナ（2013）は、「形容詞（連体形）＋名詞」のコロケーションを対象にし、名詞を修飾する形容詞の組み合わせ以外に、そのコロケーションがどのような構成になるか、およびそれぞれの形容詞の用法にどのような傾向があるかを現代日本語のコーパスを利用し、検討しており、高・中・低頻度の形容詞を選び、それぞれの形容詞と名詞のコロケーションのコンコーダンスを取り出しているが、高・中・低に分ける方法が示されていない。

使用度数の算出法では、どちらもある一つの時代における使用度数だけを対象とするという点は共通している。そのため、選定法では、ある見出し語の総延べ語数は、その見出し語が使われた個々のジャンルにおける述べ語数の総和となる。それに対し、分析法では、もしも中古を分析対象の時代とする場合は、ある見出し語の総延べ語数は中古における述べ語数だけが採用されることになる。(伊藤 2008: p.114)

本論文では、伊藤の「分析法」の「使用度数の算出法」を採用するが、本論文の目的は語彙調査や史的な検討ではないため、先行研究と「使用範囲の内容」が異なる。

「使用範囲の内容」において、林(1971)の「選定法」では新聞記事の話題分野という同時代の異なるジャンルを用い、伊藤の「分析法」では以下の表3-2のように、上代、中古、中世という時代区分がジャンルを用いる。

表 3-2 上代語彙の範囲・度数分布表

延べ語数\範囲列			広範囲	中範囲	狭範囲	異なり語数		
頻度層	度数	累積比率 (%)	三時代 共通語彙	上代・中古 共通語彙	上代固有 語彙	合計	比率 (%)	累積比率 (%)
高頻度	970~28	0.0~59.8	276	26	16	318	4.9	4.9
中頻度	27~2	~93.5	1143	371	1427	2941	45.2	50.1
低頻度	1	~100.0	568	251	2427	3246	49.9	100.0
合計	50070		1987	648	3870	6505	100.0	

(伊藤 (2009 : p.189) の表 6.11 を引用<sup>19</sup>)

表 3-2 は、上代・中古・中世という三時代から共通の語と固有の語を分けている。上代語彙の範囲・度数分布表において、範囲列を三時代の共通語彙、上代・中古という二時代の共通語彙、上代のみの上代固有語彙に分けている。つまり、「使用範囲の内容」は、林の「選定法」では新聞記事から分類したいくつかの話題分野になり、伊藤の「分析法」では異なる時代になるのである。

本論文における「使用範囲の内容」は『文学』(比較のために、『毎日』における分析対象語の「使用範囲」も算出する)という一つのジャンルであるものの、類義関係にある副詞と共起する述語の度数分布のことである。伊藤の「分析法」との違いは、本論文では一つのジャンルにおける類義語である副詞と共起する述語を調査対象とする点にある。

また、「使用範囲の内容」である『文学』の範囲列(伊藤では、三時代である)は、本論文では研究対象である副詞と、その副詞と類義関係にある副詞との「共通動詞」、また、研究対象である副詞のみに現れる「固有動詞」のことである。

さらに、「使用度数の算出法」から得られる中頻度語の「独自の語」は、趙(2012b)で試みた「特徴語」と、趙(2013)で試みた「特徴的な語」から副詞の相違を分析した方法

<sup>19</sup> 表 2 の網掛け部分は、各範囲列の中心区画を表し、広範囲列では「基本語彙」、中範囲列では「一般語彙」、狭範囲列では「特徴語彙」のことである。

と類似している<sup>20</sup>。

次に、「使用度数の算出法」による対象語の「(使用) 範囲・度数分布表」における高頻度・中頻度・低頻度の抽出手順は、まず類義関係にある副詞と共起する述語（主に、動詞）をそれぞれ抽出する。その後、抽出された述語を出現頻度の高い順に並べ、その述語を延べ語数が占める割合を 6 : 3 : 1 の比で分けると、高頻度・中頻度・低頻度に分かれる。これらを、累積比率で示すと、高頻度は 0% から 60% であり、中頻度は 61% から 90% であり、低頻度は 91% から 100% である。

例えば、上記の表 3-1 の「やっ」と「ようやく」と共起する動詞を用い、高頻度・中頻度・低頻度に分ける方法を以下に示す。

次の表 3-3 は、このように、「やっ」と共起する動詞を高頻度・中頻度・低頻度に分けたものである。

まず、頻度の累積を 60% にめざしていくと順位 1 から 20 位くらいになる。同一の順位は同じように扱って累積していくと、60% に近くなる。表 3-3 では「ある」動詞までとなる。その後、1 位「する」から 20 位「ある」までの頻度を出すと 944 になり、これを総頻度数 (1579 語) で割り、百分率にすると、59.8% となる（つまり、 $155 + 102 + 83 + 69 + \dots + 8 + 8 + 8 = 944$ 、 $944 \div 1579 * 100 = 59.8\%$ ）。

---

<sup>20</sup> 趙 (2012b) は、副詞と共起する述語について、『雑誌 90 種』を用いて頻度順 1000 位までに入る副詞は「基本語」、その他は「特徴語」とし、分析を行っている。両副詞の共通の語は除かれている。趙 (2013) の「特徴的な語」は、本論文において、高頻度・中頻度・低頻度語を抽出する方法では同様であるものの、そのうち低頻度語を検討対象にしている点が本論文における「独自の語」と異なっている。

表 3-3 高頻度・中頻度・低頻度の分類

やっと		
順位	動詞	頻度
1	する	155
2	なる	102
3	分かる	82
4	できる	69
:	:	:
20	見つかる	8
20	届く	8
20	返る	8
20	ある	8
21	捕まえる	7
21	立ち上がる	7
21	覚める	7
21	答える	7
21	聞こえる	7
:	:	:
26	探す・捜す	2
26	聞く	2
26	起こる	2
27	割る	1
27	渡る	1
27	座る	1
27	退く	1
:	:	:
27	駆け寄る	1
27	駆け込む	1
27	隠す	1
27	書く	1
27	書き上げる	1

高頻度 (59.8%)

中頻度 (27.2%)

低頻度 (13.0%)

以上の方法で「やっと」と共起する動詞を 6 : 3 : 1 の比で分けると、高頻度は出現頻度が 155 から 8 までの 59.8% になり、中頻度は出現頻度が 7 から 2 までの 27.2% になり、低頻度は出現頻度が 1 のもので 13.0% になる。その後、「ようやく」も同様の手順で高頻度・中頻度・低頻度を区分する。

次は、「やっと」「ようやく」の「共通動詞」と「固有動詞」の抽出について示す。

次の表 3-4 は、「やっと」と「ようやく」に共通に現れる「共通動詞」と、両副詞それぞれのみで現れる「固有動詞」の選別を表したものである。

「共通動詞」は取り消し線がある語であり、取り消し線がない語が「固有動詞」である。表 3-4 から、「やっと」の「固有動詞」は「薄れる」「稼ぐ」「割る」「退く」「駆け寄る」「駆け込む」などであり、「ようやく」の「固有動詞」は「暖まる」「諦める」「聴き取る」「奮い起こす」「掬い上げる」「よじ登る」「行き詰る」「見抜く」「贖う」などである。これらのうち中頻度に入る「固有動詞」のみが「独自の語」となる。つまり、「やっと」では「薄れる」「稼ぐ」が、「ようやく」では「暖まる」「諦める」「聴き取る」が「独自の語」である。

表 3-4 「共通動詞」と「独自の語」の選別

やっと			高頻度	ようやく		
順位	動詞	頻度		順位	動詞	頻度
1	ずる	155	}	1	ずる	272
2	なる	102		2	なる	147
3	分かる	82		3	できる	92
4	できる	69		4	開く	66
:	:	:		:	:	:
20	見つかる	8		23	やってくる	9
20	届く	8		23	離れる	9
20	返る	8		23	近づく	9
20	ある	8		23	現れる	9
21	捕まえる	7		}	24	認める
21	立ち上がる	7	24		始まる	8
21	覚める	7	24		知る	8
21	答える	7	24		聞こえる	8
21	聞こえる	7	:		:	:
:	:	:	30		暖まる	2
26	薄れる	2	30		会う	2
26	稼ぐ	2	30		諦める	2
26	起こる	2	30		聴き取る	2
27	割る	1	}		31	奮い起こす
27	渡る	1		31	掬いあげる	1
27	座る	1		31	よじ登る	1
27	退く	1		:	:	:
:	:	:		31	行き詰まる	1
27	駆け寄る	1		31	持ち込む	1
27	駆け込む	1		31	見まわす	1
27	隠す	1		31	突る	1
27	書く	1		31	見抜く	1
27	書き上げる	1		31	贖う	1

「独自の語」は、「算出法」によりつくられた上記の表 3-2 では、狭範囲の中頻度「1427」に当たり、「やっと」の「独自の語」は、次の表 3-5 において、「文学」範囲（補正後）の「固有動詞」の中頻度である「16」語が分析対象となる。

表 3-5 「やっと」の「独自の語」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		「文学」範囲(補正前)		「文学」範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	155~16	0%~49.8%	17		32		32	8.6%
	15~8	~59.8%	15					
中頻度	7~5	~69.2%	25		116	16	132	35.7%
	4~3	~79.6%	42	7				
	2	~87%	49	9				
低頻度	1	~100%	91	115	91	115	206	55.7%
合計	1579		239	131	239	131	370	100.0%

(趙 (2013 : p.24) の表 5 を引用)



### 3.3.2 「独自の語」の分類方法

ここでは抽出された「独自の語」の意味分類について述べる。

3.3.1 で抽出された「16」語について、『分類語彙表 増補改訂版』（以下、『分類語彙表』と称する）（2004）により意味分類を行う。

『分類語彙表』での分類は、広い概念から「類」「部門」「中項目」「分類項目」と4分類され、「類」の下位区分は「体の類」「用の類」「相の類」「その他の類」である。「部門」の下位区分は「抽象的關係」「人間活動の主体（以下、「人間主体」と称する）」「人間活動—精神および行為（以下、「人間活動」と称する）」「生産物および用具」（以下、「生産物」と称する）「自然物および自然現象（以下、「自然現象」と称する）」である。

このように構成される『分類語彙表』を用い、「部門」と「中項目」の項目に「独自の語」を当てはめ、その意味分布から類義関係にある二つの副詞の意味領域を明らかにし、両副詞の相違を考察する。

ここで、『分類語彙表』を用い、「部門」と「中項目」の項目に「独自の語」をどの分類に当てはめるかについて述べる。「独自の語」がどの分類に当てはまるかは以下のように、用例を見て判断を行う。例えば「やっ」との「独自の語」である「薄れる」は、(23) (24) のように現れる。

(23) 「わお、感激。これだから家の連中って好きなんだ」梅の呆れ顔を思い浮かべつつ、天鳥はおにぎりをぱくついた。やっと空腹感が薄れてきた。(LBe9\_00049『羅刹王』1990)

(24) 芝野はただうなずいてみせた。それ以上聞くことをためらわせたのは、萌子の目がまたも見覚えのある潤みをおびたからだ。涙もろさの一因が昔の東京にあることはいまや疑いの余地がなかった。「もっと知りたい?」「萌子にまかせる」「このごろやっと注射の跡が薄れてくれたの」そういつて、萌子は腕の表を示してみせる。(PB19\_00124『新・雪国』2001)

『分類語彙表』において、「薄れる」という動詞は、2.1581-13 と 2.5020-02 の二か所に分類されている。

前者の「薄れる」は、「抽象的關係」部門の「作用／伸縮」に分類されるが、以下の図 3-2 のような構造になっている（以下、「独自の語」の意味分類において、“ / ”のことは、「中項目／分類項目」のことを示す）。後者の「薄れる」は、「自然現象」部門の「自然／色」に分類されている。

複数に分類されている語の判定方法として、この場合、用例を調べ、同一の分類に含まれる表現、用例 (23) (24) の「薄れる」は、『分類語彙表』のどちらの「薄れる」に入るのか判断する。(23) の「薄れる」は、おにぎりを食べることにより、抽象的な感覚である空腹感が薄れることである。

それで、(23) は、「抽象的關係」の「作用／伸縮」と判断してその項目に入れる。一方、(24) の「薄れる」は、注射の跡という身体の上に残っているものが薄れることだと判断し、「自然現象」の「自然／色」の項目に入れる。

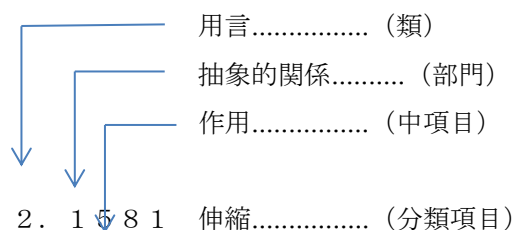


図 3-2 『分類語彙表』における分類番号の構造

このように、「独自の語」について用例ごとにその意味分類を『分類語彙表』を基準にしていくが、『分類語彙表』を基準にし、当てはめる時に二つの問題が生じる。

第一に、分類に合わないものである。具体的に、以下の (25) (26) 「固める」に対する分類を示す。

(25) イソップ童話のオオカミ少年のごとく、かけ声ばかりでいつも姿を現さなかった「納税者番号制度」。政府税制調査会は、今回はついに具体的に方針を固めたようだ。(『毎日』2004年6月16日)

(26) 「せめてキョウコが2年遅く生まれていたらなあ」。冷蔵庫から1日1缶(3・8円増税)に決めている第3のビールを取り出しながら、コイズミさんがつぶやいた。小学6年生まで拡充される児童手当を受け取れば、年間4万5000円も家計の足しになったはず。「むちゃなこと言わないでよ。私も来年はパートに出るから」。セツコさんは、ついに働き始める決心を固めたのだった。(『毎日』2005年12月25日)

『分類語彙表』において、「固める」という動詞は、2.3560-10と2.5160-12に分類されている。前者は「人間活動」の「交わり／攻防」に分類され、「守る、打ち守る、守り抜く、守備する、固守する 死守する」と同じ意味範疇に入る。後者は「自然現象」の「物質／物質の変化」に分類される。

しかし、(25) の「(方針を) 固める」と (26) の「(決心を) 固める」は、両方とも抽象的な意味であると思われる。では、このような「独自の語」の扱いはどうすればいいのか。

「固める」について、(25) (26) の「固める」の意味に近い語を探すと、「思い固める」が存在する。「思い固める」は、2.3067-01で「人間活動」の「心／決心・解決・決定・迷い」に分類され、同じ意味範疇に「思い定める、する [～ことに] 決心する、決意する、

決断する、覚悟する、意を決する、度胸を決める、ほぞを固める、[観念の～]腹を決める、腹をくくる／を固める、腹を据える、肝を据える、肝が据わる、吹っ切れる」がある。このように、「人間活動」の「心／決心・解決・決定・迷い」に入る動詞の意味範疇が (25) (26) 「(方針・決心を)固める」に近い意味だと判断し、2.3067の項目に入れる。

第二に、当てはまる動詞がないものである。例えば、以下の (27) 「<sup>はい</sup>入れる」という可能動詞の場合、『分類語彙表』で分類を探すと、「入る」しか載っていないため、意味分類の際には「入る」の意味に従う。

(27) みじかい会話だったが、これでよかった、やっと大手の予備校にははいれた、という安堵が声ににじみ出していた。(LBd9\_00150『東海道 36 殺人事件』1989)

以上、『分類語彙表』を用いて意味分類をするときに生じる問題について述べたが、本論文では、この問題のことを承知したうえで「独自の語」について『分類語彙表』を用いて意味分類をし、「独自の語」の意味分布から類義関係にある副詞の相違を検討していく。

以下の章、第 4 章から本研究の本論に入り、類義関係にある副詞の相違について、個別に分析・考察していく。

## 第4章 BCCWJに見られる「やっと」「ようやく」の相違

本章から第9章までは本研究の本論に当たり、本章と第5章では、類義関係にある「やっと」「ようやく」の相違について検討する。本章ではBCCWJからの用例を用い、第5章では『毎日』からの用例を用い、両副詞の文体の差と、共起する述語の「独自の語」の相違について分析・考察していく。

### 4.1 はじめに

本章は、「ある事態の実現に長い時間がかかる」<sup>1</sup>ことを共通点とする類義語「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」の中、文末に否定形式が来ず、〈話し手が望ましいと思っている事態（状態）が困難を乗り越えた末に実現する〉ことを表す「やっと」「ようやく」の相違について検討するものである。

本章では、両副詞についてBCCWJを用い、さまざまなジャンルにおける出現傾向から文体の差を検討する。また、BCCWJのジャンルにおける「書籍」と「ベストセラー」の低位区分の一つである『文学』に現れる両副詞の含まれる文を取り出し、「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を検討する。さらに、両副詞と共起する述語の出現傾向と、中頻度語の「独自の語」の意味分布から両副詞の違いを検討する。

本章の構成は、以下の通りである。第2節では、本章の目的、第3節では、本章における調査データの概要、第4節では、BCCWJのジャンルごとに出現する「やっと」「ようやく」の出現傾向と文体の差について述べる。第5節では、『文学』における両副詞と共起する述語の出現傾向と、「地の文」と「会話文」における出現傾向から両副詞の文体の差、また、両副詞それぞれのみに見える「独自の語」の意味分布から両副詞の相違を述べる。第6節では、本章のまとめをする。

### 4.2 本章の目的

本章では、類義関係にある副詞「やっと」「ようやく」について、BCCWJを用い、さまざまなジャンルによる出現傾向から両副詞の文体の差を明らかにする。また、『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにする。さらに、『文学』における両副詞と共起する述語、特に中頻度語のうち「独自の語」の意味分布から両副詞の違いを明らかにすることを目的とする。

### 4.3 調査データ

本節では、調査データについて述べる。さまざまなジャンルにおける「やっと」「ようやく」の出現頻度と、また、その内、両副詞と共起する述語の特徴を見るため、『文学』にお

---

<sup>1</sup> 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味3辞書に書いてないこと』（長嶋 1982 : p.171）

ける出現頻度を示す。

まず、BCCWJにおける異なるジャンルでの出現傾向を通し、文体の差を検討するため、両副詞の含まれている用例をジャンルごとに抽出した。用例の検索の際、「やっと」は〈やっと〉〈ヤット〉〈漸と〉をキーワードにし、「ようやく」は〈ようやく〉〈ヨウヤク〉〈漸く〉〈漸やく〉〈やうやく〉をキーワードにした<sup>2</sup>。

抽出された用例について、例えば、「書籍」は〈やっと〉が 3258 例、〈ヤット〉が 11 例、〈漸と〉が 3 例現れており、また、〈ようやく〉が 3860 例、〈漸く〉が 192 例、〈やうやく〉が 9 例、〈ヨウヤク〉と〈漸やく〉が 0 例現れた。「ベストセラー」は〈やっと〉が 292 例、〈ヤット〉と〈漸と〉が 0 例現れており、また、〈ようやく〉が 302 例、〈漸く〉が 7 例、〈やうやく〉が 3 例、〈ヨウヤク〉と〈漸やく〉が 0 例現れた。詳細な検索の結果は、次の 4.4.1 の表 4-1 のようにまとめられる<sup>3</sup>。

抽出された用例から、検討対象と異なる語と、執筆者の生年代が 1890 年以前の作品は除外した<sup>4</sup>。また、「やっと」は、(1) (2) (3) のように、重なって現れるものがいくつか含まれている。

- (1) 「やっと、やっときてくれた！ すぐなかに入っちゃおう。アタシは待ちくたびれて、おばあちゃんになっちゃったけど、まだだいじょうぶ。今晚にまだまにあうわ」(PB59\_00305 『ドールの庭』 2005)
- (2) ふわんと、あたりの空気を抱きしめるかのように動いて...そして、やっと。...やっと！やっと、キャットは、潤一郎に抱きつく。(LBs9\_00296 『チェックメイト』 2004)
- (3) 今日、康介の謹慎処分が解ける。やっと。やっと、康介に逢えるッ！そう思っただけで、嬉しくて。(LBj9\_00045 『この愛にできること』 1995)

上記 (1) のような重複の文は一つとカウントし、(2) と (3) はそのままカウントした。

その結果、「やっと」が 1845 例、「ようやく」が 2347 例で、これらは下記の 4.4.2 の『文学』における「やっと」「ようやく」の用例として用い、検討の用例とする。

---

<sup>2</sup> 検索の際、いくつかの表記をキーワードにしたのは、前川 (2009) の記述のような問題があるためである。前川 (2009) は、「音楽の『リズム』を検索すると、目的する語以外に、『アルゴリズム』『フォルマリズム』『リゴリズム』などがヒットする可能性が高く、『国語』を検索すれば『母国語』『外国語』『中国語』『韓国語』『両国語』『各国語』などがヒットする。これが日本語の書き言葉が分かち書きをおこなわないことの副作用であることは言うまでもないが、表記のゆれも日本語では深刻な問題をひきおこす。『分かち書き』という語には一体何通りの表記が存在するだろうか。『分かち書き』『分ち書き』『わかち書き』『分かちがき』『分ちがき』『わかちがき』の他に『別ち書き』もある。このような問題を解決して検索の精度を高めるためには、コーパスに検索用情報を付加する必要がある。(中略) 形態素解析が施されたコーパスであれば、たとえば『今日』が名詞と副詞のいずれとして用いられたかを検索することができる (pp.10-11)」と述べている。

<sup>3</sup> 検討対象と異なる語や重複したものを除外する前の「文学」における両副詞の出現頻度は、「やっと」が 1912 例、「ようやく」が 2391 例である。

<sup>4</sup> 執筆者の生年代に関する詳細は第 3 章 3.2 をご参照いただきたい。

#### 4.4 「やっ」と「ようやく」の文体と共起する述語

##### 4.4.1 ジャンルごとに現れる「やっ」と「ようやく」の出現傾向

ここでは、BCCWJにおける「やっ」と「ようやく」の出現傾向について検討し、両副詞の出現傾向から文体の差について述べる。

下記の表 4-1 は、BCCWJ のさまざまなジャンルでの「やっ」と「ようやく」の出現傾向をまとめたものである。

表 4-1 「やっ」と「ようやく」のジャンル別の出現傾向

サブコーパス	やっ		ようやく	
	頻度	比率	頻度	比率
書籍	3272	59.3%	4061	70.9%
ベストセラー	292	5.3%	312	5.4%
新聞	39	0.7%	43	0.8%
雑誌	132	2.4%	200	3.5%
白書	4	0.1%	47	0.8%
国会会議録	58	1.1%	89	1.6%
教科書	13	0.2%	22	0.4%
知恵袋	377	6.8%	107	1.9%
広報誌	11	0.2%	12	0.2%
韻文	10	0.2%	21	0.4%
法律	0	0.0%	0	0.0%
ブログ	1307	23.7%	813	14.2%
合計	5515	100.0%	5272	100.0%

表 4-1 から、ジャンル別に両副詞の出現比率を比べてみると、「やっ」は「知恵袋」と「ブログ」に多く出現し、「ようやく」はそれら以外のジャンルにやや多く出現する。特に「知恵袋」における「やっ」は「ようやく」より多く現れた。一方、「ようやく」は、出現頻度は低いものの、「白書」「教科書」において、「やっ」より多く現れた。また、「ベストセラー」「新聞」での出現頻度は「やっ」より「ようやく」の方がやや高いものの、比率に大きな違いは見られない<sup>5</sup>。

このように、「やっ」「ようやく」はジャンルによりその出現傾向に差が出る副詞であると言える。

<sup>5</sup>「書籍」「ベストセラー」には、「総記」「哲学」「歴史」「社会科学」「自然科学」「技術・工学」「産業」「芸術・美術」「言語』『文学』『分類なし』というジャンルが含まれている。また、『毎日』内にも違うタイプの記事がある。

宮内（2012：p.50）は、「白書」の文体的特徴について、「フォーマル」で「書き言葉的」であり、「知恵袋」は「フォーマルでない」「話し言葉的」「丁寧」「客観的」であると述べている。また、渡辺（2007：p.33）は、「ブログ」の文体について、記事本文の文体と文の機能について述べ、読み手に対する意識が強く、多くのブログで敬体の文が用いられ、読み手に対して働きかけを行うような文も用いられていると述べている<sup>6</sup>。

この記述から、「知恵袋」「ブログ」における「やっと」と、「白書」「国会会議録」「教科書」における「ようやく」の出現傾向を見ると、改まった文章で書き言葉的な文章には「ようやく」が、よりくだけているが、読み手を意識した話し言葉的な文章には「やっと」が多く現れることが分かる。

#### 4.4.2 『文学』における「地の文」と「会話文」の出現傾向

ここでは、『文学』における「やっと」「ようやく」の「会話文」と「地の文」での出現傾向について検討する。「やっと」「ようやく」の文体を見るためには、「会話文」と「地の文」を確認する必要があると思われる。

「会話文」の認定は、(4) (5) のように、“ ”や“『 ”に囲まれている文の中で、前後の文脈から会話だと認定できるものや「話す」「語る」「指摘する」などが後続している直接引用文、また、“ ”、“ ”はないが、前後の文脈から会話と判断できるものを「会話文」と認定した（第5章以降も同様に「会話文」を認定し、これら以外の用例が現れる場合は該当の章で述べる）。

(4) 「マンションの管理人にきいたら、そちらに行ったときいたので、これから見舞いに行っている？」「ちょっと疲れてるの、やっとこれからシャワーを浴びて眠ろうと思ったのだけど」「でも、折角来たから、顔だけ見ていくよ。実は、ロビーにいるのだけど」（LBg9\_00022『京都・金沢殺人事件』1992）

(5) 「許さん...」『こわっぱが...。土着の我らお前ごときが倒せるとでも思っているのか？我らは人間の深い業の中で何百年も機ををうかがっていたのだ。その時がようやくきたのだ。逃してなるものか...』怪魔の往生際の悪さに蕾は怒りが頂点に達したようだ。露冠！！蕾が聖剣を呼び出すと、一気にまつむしをからめとっている糸を切り払った。『おのれ～！！』怪魔からまつむしが放たれた。蕾は地を蹴って飛ぶと、まつむしを抱きとめた。（PB29\_00072『小説 bud boy』2002）

「地の文」と「会話文」における「やっと」「ようやく」の出現傾向をまとめたものが、次の表 4-2 である。

<sup>6</sup> 渡辺（2007：p.32）では、記事本文の文体の分布を「敬体のみ：29（ブログの数、以下同様）、常体のみ：26、混在：105」と示し、記事本文の文の伝達機能について、「情報提供：1561（文の数、以下同様）、感情表出：82、意志表明：104、要請・依頼：54、挨拶・儀礼：69」と指摘している。

表 4-2 「地の文」と「会話文」での出現傾向

	やっと		ようやく	
	頻度	比率	頻度	比率
地の文	1505	81.6%	2218	94.5%
会話文	340	18.4%	129	5.5%
合計	1845	100.0%	2347	100.0%

表 4-2 から、「会話文」における両副詞の出現傾向について、「やっと」は 340 例 (18.4%) 現れ、「ようやく」は 129 例 (5.5%) 現れた。ここで、「地の文」と「会話文」における両副詞の出現の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差は認められた ( $\chi^2=173.853$ ,  $p<0.05$ )。

ここで、石川 (2006) の結果と比較してみる。石川 (2006) は『プロジェクト X—挑戦者たち (メディアミックス版)』(以下、『プロジェクト X』と称する) と「新潮文庫 10 作品」(以下、「新潮文庫」と称する) を用いて分析を行っている。『プロジェクト X』の場合、「会話文」における両副詞の出現傾向は「やっと」が 119 例中 51 例 (42.8%)、「ようやく」が 336 例中 28 例 (8.3%) であり、「新潮文庫」の場合、両副詞の出現傾向は「やっと」が 76 例中 17 例 (22.3%)、「ようやく」が 82 例中 12 例 (14.6%) であり、これらを合わせると、「やっと」が 195 例中 78 例 (40.0%)、「ようやく」が 418 例中 40 例 (9.6%) であると述べている<sup>7</sup>。

「やっと」は、本章の『文学』における「会話文」での出現比率は 18.4% であり、石川 (2006) の結果である『プロジェクト X』では 42.8%、「新潮文庫」では 22.3% である。本章の『文学』と異なるジャンルである『プロジェクト X』の出現比率は『文学』と「新潮文庫」より多いものの、小説である『文学』と「新潮文庫」の出現比率に大きな差はなかった。

一方、「ようやく」は、『文学』における「会話文」での出現比率は 5.5%、石川 (2006) の結果である『プロジェクト X』では 8.3%、「新潮文庫」では 14.6% であり、本章の結果と比べると、石川 (2006) の結果の方がやや高かった。

『プロジェクト X』は、ナレーションが活字化されたことを考えると、ナレーションという特殊なジャンルでは、「ようやく」より「やっと」が多く使われることは理解できる。それで、『プロジェクト X』の出現比率が約 4 割で非常に高い比率が見られたのだと思われる。

本章の結果と石川 (2006) の「新潮文庫」の結果を考えると、小説というジャンルにおける「会話文」での「やっと」の出現傾向は約 2 割前後で現れると言えるだろう。

一方、「ようやく」の場合、ジャンルによる違いとデータの母数の違いにより、本章の結

<sup>7</sup> 石川 (2006) の用いたデータは、『プロジェクト X—挑戦者たち (メディアミックス版)』(第 1 巻・第 2 6 巻) で、総計、約 6,175,488 字、新潮文庫 10 作品で総計、約 2,171,776 字である。抽出された用例は、「やっと」が 195 例、「ようやく」が 418 例である。



果と石川（2006）の結果を直接比較することはできないが、「ようやく」はジャンルにより「会話文」での出現傾向は異なると言えるだろう。

以上、「やっ」と「ようやく」の「会話文」と「地の文」での出現傾向から、「やっ」と「ようやく」より「会話文」に多く現れることが分かった。

#### 4.4.3 『文学』における「やっ」と「ようやく」と共起する述語の出現傾向

##### 4.4.3.1 除外した項目

ここでは、「やっ」と「ようやく」と共起する述語を検討し、高頻度語の出現傾向について述べる。次の表 4-3 を作成する際、「やっ」と 1845 例、「ようやく」 2347 例から除外したものは、以下の通りである。

- (6) ついに万年浪人で終わったキリコはむろん、やっの思いで三流大学にはいり、いまは三流新聞社につとめている克郎だって、（どこかおかしい）首をかしげないわけにゆかない。（LBd9\_00150『東海道 36 殺人事件』1989）
- (7) 海千山千の彼らは相手の弱味を敏感に嗅ぎわかる鼻をもっているのだ。汗だくになってようやくの思いで記者会見場から逃れたリプトンは、報道官なんか辞めてグラインド・ラピッズへ帰ろうと決心した。（OB3X\_00078『ネゴシエイター』1989）
- (8) 信子の部屋が出来て、狭く外にはみ出した恰好になった書齋は、洋之介の大きめの座蒲団をおくのがようやくであった。（OB1X\_00294『蓐麻の家』1976）

「やっ」とは、上記の (6) のように、「やっとの+名詞で～」が 199 例、「やっ」というのが 13 例である。また、「やっ」と共起する述語が「名詞+助動詞」のものが 20 例、「やっ。」が 9 例、「やっ+助動詞」が 69 例、「体言止め」が 6 例、さらに、「やっ」と共起する述語が省略されたものが 8 例、計 324 例を除き、1521 例を対象にする。

一方、「ようやく」は、(7) のように、「ようやくの+名詞で～」が 22 例、「ようやくにして」が 10 例、(8) のように、「ようやく+助動詞」で終わるものが 2 例、「ようやく。」で終わるものが 4 例、「ようやくと」が 2 例である。また、「ようやく」と共起する述語が「名詞+助動詞」が 11 例、述語が省略されたものが 7 例、「体言止め」が 4 例、計 62 を除いた 2285 例を対象にする。

ところで、金（2006：p.33）は、構文的に「～するのがやっただ」のように、「やっ」とは述語になるが、「ようやく」はその用法がないと述べている。江（2009a）も、『やっ』の持っている『ぎりぎりなんとかできる』という意味合いは、『ようやく』にもあり、可能を表す表現と共起するだけでなく、文脈などから察することもできるが、『～ようやく』のように『ようやく』自体を文末に置くことはできない（p.94）」と指摘している。

しかし、『文学』には、上記の (8) のように、「～（するのが）ようやくだ。」という用例が抽出され、先行研究での指摘と異なる用例が現れた。「ようやく+助動詞」は検討対象

外であるため、これ以上触れないが、先行研究の結果で「～ようやく＋助動詞」が文末に現われなかったのは、バランスがとれていないコーパスを用いたためではないかと思われる。

#### 4.4.3.2 「やっ」と「ようやく」と共起する高頻度語

ここでは、「やっ」と「ようやく」と共起する述語について述べる。両副詞と共起する述語を出現順位 10 位までまとめたものが、下記の表 4-3 である。

表 4-3 「やっ」と「ようやく」と共起する高頻度の動詞

やっ				ようやく			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	する	155	10.2%	1	する	271	11.9%
2	なる	103	6.8%	2	なる	156	6.8%
3	分かる	80	5.3%	3	できる	95	4.2%
4	できる	66	4.3%	4	開く	69	3.0%
5	出る	51	3.4%	5	分かる	68	3.0%
6	見つける	41	2.7%	6	気づく	63	2.8%
7	気づく	39	2.6%	7	付く	50	2.2%
8	付く	35	2.3%	7	出る	50	2.2%
9	来る	30	2.0%	9	言う	39	1.7%
10	開く	29	1.9%	10	たどりつく	37	1.6%

表 4-3 から、出現頻度の高い動詞は「やっ」と「ようやく」共に「する」(1 位)、「なる」(2 位)であり、共通している語は「分かる」「できる」「出る」「付く」「開く」「気づく」の順である。「する」以外、状態の変化を表すものが多く、共起する高頻度の動詞は非常に似ていることが分かる。

両副詞と共起する共通の述語「する」「なる」「分かる」「できる」を合わせると、「やっ」とは 26.6%、「ようやく」が 25.9%であり、約 2 割強で両副詞に現れた。このことから両副詞と共起する共通の高頻度語に大きな差はないことが分かる。

また、出現頻度の高い順 10 位に入らないため、表 4-3 に示されていない動詞でも互いに共通しているものがある。例えば、「やっ」とにおいて 6 位の「見つける」は「ようやく」では 13 位であり、「やっ」とにおいて 9 位の「来る」は「ようやく」で 18 位である。同様に、「ようやく」において 9 位の「言う」は「やっ」とで 12 位であり、「ようやく」において 10 位の「たどりつく」は「やっ」とで 13 位である<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> 「ようやく」において、「見つける」の出現頻度は 25 例、「来る」は 22 例現れ、「やっ」とにおいて、「言

このように、「やっと」「ようやく」は共起する高頻度の動詞は共通するものが多い。しかしながら、両副詞と共起する共通の動詞はその現れ方も共通であるのか疑問である。

先行研究で両副詞と共起する述語について述べているものには、ルチラ (2005a) と江 (2009a) がある。ルチラ (2005a) は、「やっと」について、「期待されている出来事の実現を表す用法」は、意志動詞・非意志動詞の観点で共起する述語の使用率を検討しているが、「かろうじて実現する用法」は、検討外になっている<sup>9</sup>。前者において、意志動詞は約 4 割、非意志動詞は約 6 割の使用率で現れたとしているが、「ようやく」については、同様の観点で検討していないため、「やっと」との相違が分かりにくい。

江 (2009a) は、「やっと」「ようやく」の文末の述語について、(内的) 情態動詞と共起すると許容度が下がるが、時間的に限界づけられると、許容度が上がり、動詞自体が「限界性」を持つ必要があると指摘しているが、語の持つ意味に留まっているため、述語につながる補語により、意味が変わることにまでは検討されていない。

そこで、両副詞に共通に現れる高頻度語のうち「出る」を取り上げ、その意味合いを確認してみる。

(9) わははと、近藤らしい笑いがやっと出た。(PB49\_00081『紅の肖像』2004)

(10) 二千四年三月は、例年叫ばれていた金融システムの不安を誘発する「三月危機」への心配は、内外から起こらなかった。その大きな要因は、大企業を中心としてようやくリストラ効果が出始め、それが業績面で実際の数値として反映してきたことと株式市場の活況株高にあった。(LBt9\_00098『銀行人事部崩壊』1978)

両副詞と「出る」との共起において、両副詞と共に「(ある場所に人が) 出る、(声・言葉が) 出る、(人が) 出る、(電話に) 出る、(許可が) 出る」などが共通して現れ、「やっ

う」は 24 例現れ、「たどりつく」は 22 例現れた。

<sup>9</sup> ルチラ (2005a) は、一人称主体を持つ文の場合、「やっと」に対する述語動詞の種類に共起制限が見られるとし、期待されていた出来事の実現を表す用法を述語動詞の種類別にすると以下になると述べている。

表 1 「やっと」と共起する述語のタイプとその使用率

述語の種類		数 (割合)
非意志性自動詞		144 (50.88%)
可能動詞		33 (11.66%)
意志動詞	他動詞	67 (23.68%)
	自動詞	39 (13.78%)
	合計	106 (37.46%)

(ルチラ (2005a : p.14) 表 2 を引用)

また、ルチラは「やっと」について、期待されている出来事の実現を表す用法とかろうじて実現する用法に分けているが、「やっと」と共起する述語の検討においては、前者の用法のみを対象にしているため、「やっと」と共起する述語の全貌が分かりにくく、その述語の検討結果である表 1 の述語の種類分け方にもやや疑問があるが、この点については、本論文ではこれ以上触れない。

と」には (9) のように、「(笑いが) 出る」、「ようやく」には (10) のように、「(効果が) 出る」「(反応が) 出る」という表現がそれぞれ現れたのみであり、両副詞と共起する「出る」は意味上大きな違いは見られなかった。

このように、先行研究を含め、本章の BCCWJ の『文学』における「やっと」「ようやく」と共起する高頻度の述語（主に動詞である）の出現傾向から、両副詞の相違はあまり見られなかった。

以上、「やっと」「ようやく」と共起する高頻度の述語からはあまり顕著な違いが見られないため、より詳細な検討が必要であろう。

そこで、次節からは両副詞と共起する述語のうち中頻度語を中心に検討していく。

#### 4.5 「独自の語」からの「やっ」と「ようやく」の相違

本節では、伊藤（2008、2009）の「使用度数の算出法」を用い、中頻度語のうち「やっ」と「ようやく」それぞれに現れる「固有動詞」から「独自の語」を抽出し、『分類語彙表』を用いて意味分類をし、その意味分布から類義関係にある「やっ」と「ようやく」の違いを検討する。

「やっ」と「ようやく」それぞれの「(使用) 範囲・度数分布」をまとめたものが次の表 4-4 と表 4-5 である。

表 4-4 「やっ」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『文学』範囲(補正前)		『文学』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	154~16	0%~50.0%	16		29		29	8.1%
	15~8	~59.3%	13					
中頻度	7~5	~68.4%	21	2	123	10	133	37.3%
	4~3	~78.8%	45	2				
	2	~87.2%	57	6				
低頻度	1	~100.0%	82	113	82	113	195	54.6%
合計	1521		234	123	234	123	357	100.0%

表 4-5 「ようやく」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『文学』範囲(補正前)		『文学』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	270~18	0%~50.4%	20	1	37	3	40	8.0%
	17~9	~60.1%	17	2				
中頻度	8~6	~68.0%	26	1	118	60	178	35.8%
	5~3	~81.7%	61	20				
	2	~87.8%	31	39				
低頻度	1	~100.0%	79	200	79	200	279	56.1%
合計	2285		234	263	234	263	497	100.0%

表 4-4 と表 4-5 の読み方は、「共通動詞」は「やっ」と「ようやく」共に現れる共通の動詞であり、「固有動詞」はそれぞれの副詞のみ現れる動詞である。つまり、表 4-4 の「固有動詞」は「やっ」のみに現れる動詞のことであり、表 4-5 の「固有動詞」は「ようやく」のみに現れる動詞のことである（以降、全ての「(使用) 範囲・度数分布表」は、同様の方法でそれぞれの検討対象の副詞に当てはめて読む）。

伊藤（2008）は、「どのような語彙表も『高頻度の見出し語は少なく、低頻度の見出し語は多い』という規則性をもっている。（中略）頻度 1 の見出し語は語彙量の 50% 前後を占めるのが普通である（pp.120-121）」と述べている。表 4-4 と表 4-5 に見られるように、「やっ」は 54.6%、「ようやく」は 56.1% であり、伊藤（2008）の記述に符合する結果が見られた。

また、表 4-4 と表 4-5 に見られるように、両副詞の「高頻度」「中頻度」「低頻度」おける見出し語の出現比率に大きな差は見られない。

次に、「使用度数の算出法」により抽出された中頻度の「独自の語（斜めの数字）」は、「やっと」が 10 語、「ようやく」が 60 語である。抽出されたそれぞれ「独自の語」を『分類語彙表』を用いて意味分類した意味分布は、次の表 4-6 のようにまとめられる。

表 4-6 から、各部門の意味分布から「やっと」は、他の部門より「人間活動」にやや多く、「ようやく」は、「抽象的關係」「自然現象」にやや多く現れることが分かる。これらの差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ ( $\chi^2=8.739$ 、 $p=0.012$   $p<0.05$ )、有意差が認められた。

表 4-6 「やっと」「ようやく」の「独自の語」の意味分布

意味分布			やっと		ようやく	
部門	中項目		頻度	比率	頻度	比率
抽象的關係	2.12××	存在			9	5.7%
	2.13××	様相			4	2.5%
	2.15××	作用	11	39.3%	77	49.0%
	2.16××	時間			1	0.6%
	2.17××	空間			10	6.4%
小計			11	39.3%	101	64.3%
人間活動— 精神及び行為	2.30××	心	3	10.7%	16	10.2%
	2.31××	言語			6	3.8%
	2.33××	生活			8	5.1%
	2.34××	行為	2	7.1%	3	1.9%
	2.35××	交わり			6	3.8%
	2.36××	待遇	4	14.3%	2	1.3%
	2.37××	経済	7	25.0%	2	1.3%
	2.38××	事業			2	1.3%
小計			16	57.1%	45	28.7%
自然物及び 自然現象	2.50××	自然	1	3.6%	4	2.5%
	2.51××	物質			3	1.9%
	2.57××	生命			4	2.5%
小計			1	3.6%	11	7.0%
総計			28	100.0%	157	100.0%

では、各部門でどのような「独自の語」が現れるのか見ていく。

まず、「抽象的關係」部門において、「やっと」の「独自の語」は、中項目の「作用」のみに現われるが、「ようやく」は、「存在」「様相」「作用」「時間」「空間」に現れ、「ようやく」の方が広い意味で現れることが分かる。

中項目「作用」において、「やっと」の「独自の語」は、分類項目「入り・入れ」「伸縮」に現れ、「ようやく」の「独自の語」は、「作用・変化」「開始」「終了・中止・停止」「連続・反復」「動き」「動揺・回転」「固定・傾き・転倒など」「移動・発着」「走り・飛び・流れなど」「通過・普及など」「連れ・導き・追い・逃げ」「出・出し」「漏れ・吸入など」「合体・出会い・集合など」「統一・組み合わせ」「接近・接触・隔離」「突き・押し・引き・すれなど」「配列・配列」「増減・補充」に現れた。

- (11) みじかい会話だったが、これでよかった、やっと大手の予備校には入れた、という安堵が声ににじみ出ていた。(LBd9\_00150『東海道 36 殺人事件』1989)
- (12) その回天には、前の部分に爆弾を詰め込み、中程に人がやっと入れる位の丸い穴があって、そこに一人が入り腰掛けると身動きもむつかしく、足でも計器を操縦するようになっていたようです。(LBp9\_00243『新世紀に語り継ぐ戦争』2001)
- (13) 金山の鉱脈試掘は、金掘り人夫一人がやっと潜り込める穴を掘り進んだもので、もし背後で土砂が落ちたりすれば、そのまま、墓穴になりかねないような代物であったらしい。(LBb9\_00046『佐渡伝説殺人事件』1987)

「やっと」の「作用／入り・入れ」(「／」が示すのは、「中項目／分類項目」である)の「独自の語」は、「入れる」「潜り込める」である<sup>10</sup>。

ルチラ (2005a : p.16) は、可能動詞は「やっと」と共起し、出来事の実現を表す場合、実現を可能にするために動作主がした努力を表す表現や実現を妨げていた要因を表す表現と共起すると指摘している。

本章の結果も、上記のように、「やっと」と共起する (11) (12) の「入れる」と (13) の「潜り込める」で可能動詞が見られ、事態の時間的な成立が見られており、事態の成立までの努力や大変さ、実現の成立を妨げている要因が現れたと思われる。(11) は、大手の予備校に入ることの難しさと大変さが「安堵が声ににじみ出ていた」という表現から読み取れ、予備校に入るために努力をしてきたことが窺える。(12) (13) は、人が入れる穴のことを表現するが、(12) では、「一人が入り腰掛けると身動きも難しい」穴であるため、そこに入れることが大変であることを表し、(13) でも「一人が潜り込める」ことに難しさを感じられる文である。

- (14) イヴはがばっとベッドに起き上がったが、しばらくは頭がぐるぐる回ってしまっ

<sup>10</sup> 第3章 3.2 で述べたように、可能形である「入れる」「潜り込める」は『分類語彙表』を用いて意味分類をする際には、「入る」「潜り込む」の意味分類に従った。

た。それでも、自分のベッドにいることに気づくと、やっと全身に安堵が広がった。

(PB49\_00157『復讐は聖母の前で』2004)

- (15) 梅の呆れ顔を思い浮かべつつ、天鳥はおにぎりをばくついた。やっと空腹感が薄れてきた。少し頭が働き出す。(LBe9\_00049『羅刹王』1990)

また、「やっと」の「作用／伸縮」に現れる「独自の語」は、(14)「広がる」が現れ、人の感情の変化を表しており、(15)「薄れる」が現れ、人の感覚の変化を表している。

ルチラ(2005a : pp10-11)は、「やっと」は、実現後の話し手の感情は実現に対する話し手の期待の度合いや実現に至るまでの時間・困難・ストレスなどの諸要因に影響されるとし、期待の度合いが異なっていることを、苛立ちからの解放・安堵感・達成感で説明している。ルチラの指摘のように、「やっと」は、話し手の感情を表すものが現れた。

しかしながら、話し手の感情表現との共起は「やっと」の「独自の語」のみではなく、「作用」内の幅広い意味領域に現れる「ようやく」の「独自の語」にも以下のように現れる。

- (16) ロハス家の使者を迎えるのに電車を使うのが意外で、最初はオトリだろうかとも案じていたのだが、成田エクスプレスに乗り込んだところでようやく予感が確信に変わった。(LBj9\_00089『鳳凰家の掟』1995)

- (17) 男女の愛情の表現を知らぬ娘は、それが夫婦の愛の営みの仕方と考へ、不審もいれだかず受け入れるのではないだろうか。ようやく考へがまとまり、光太夫は紅屋におもむいて勘兵衛に話をまとめて欲しい、と依頼した。(LBt9\_00173『大黒屋光太夫』2005)

- (18) 見なれぬ個室のベッドに横になって、里子はようやく、自分が子供を産むのだということが、実感となって迫ってきた。(OB2X\_00241『化粧』1982)

- (19) 横からオンズロウ信号兵曹が口を入れた。「いますぐ、自分がウナギのゼリー寄せ、用意しますよ、副長」みんな声をたてて笑った。すると、オンズロウも、あの海で死んだ母子を発見したときに噴きだした悲しみと絶望感からようやく引きだされたのだろう。(LBi9\_00103『落日の香港』1997)

- (20) この場に来てない連中を含めて三十人程度の小集団だ。何百人もの貴族にかしずかれる身分になって、ようやく自分の自尊心が満たされる。(LBm9\_00224『聖刻群龍伝』1998)

- (21) 数分後、ラジオの交通情報が勝沼インターから先の通行止めが解除されていることを伝えた。「よし」ドライバーはようやく表情を緩めた。(LBr9\_00089『逃避行』2003)

「ようやく」は、分類項目「作用・変化」に(16)「変わる」、「統一・組み合わせ」に(17)「まとまり」、「接近・接触・隔離」に(18)「迫る」が現れ、人の思考の変化を表している。



また、「突き・押し・引き・すれなど」に(19)「引き出す」、「増減・補充」に(20)「満たす」が現れ、感情の変化を表している。さらに、「ようやく」の「独自の語」は、「様相／弛緩・粗密・繁簡」に(21)「緩める」が現れ、人の感情の変化を表している。

上述したように、ルチラ(2005a)は、「やっと」における成立する事態に人の感情についてのみ述べており、大里(1986: pp.118-119)も、小説を用いた分析において、「作家が登場人物に感情移入する際にはヤットが用いられるケースが多いと予想される」と指摘している。

しかし、「独自の語」の「抽象的關係」における結果では、「ようやく」における成立する事態にも人の感情などを表しているものが多く見られ、先行研究での指摘と異なる結果が見られた。

次に、「人間活動」部門において、「やっと」「ようやく」の「独自の語」が共通に現れる中項目は「心」「行為」「待遇」「経済」であり、「やっと」のみに現れる中項目はなく、「ようやく」のみに現れる中項目は「言語」「生活」「交わり」「事業」であり、分類項目は以下の通りである。

(22) 慈禧太后は寝宮へ戻り、黙々と思案してからやっと眠りについたが、二時間もたず**に**びっくりして目が覚めた。(LBj9\_00276『西太后』1995)

(23) カーライルはジェームズを厳しく牽制した。ローランはジェームズほど強くあたし**の**においを感じなかったようだけど、ようやく状況をのみこんだらしい。

(PB59\_00604『闇の吸血鬼一族』2005)

(24) 仕事中に前屈みにならないように、以前よりも上体を起こしていた理由が漸く呑み込めた思いだった。(LBc9\_00135『幸福な朝食』1988)

(25) 眠れない夜には広喜の魂と語り合う、そんな日々を何カ月もすごして、ようやく気持ちが**定まりました**。(LBm9\_00049『告発・人工透析死』1998)

(26) 「うーん、よくしらべたね」 大沢が唸って、ようやく興味をしめしはじめる。(LBn9\_00150『殺意の三面峡谷』1999)

まず、中項目「心」において、「やっと」の「独自の語」は、分類項目「飢渴・酔い・疲労・睡眠など」のみ現れ、(22)「つく」は人の状態の変化を表している。

一方、「ようやく」の「独自の語」は、分類項目「注意・認知・了解」「決心・解決・決定・迷い」「見る」「見せる」に現れた。まず、「心／注意・認知・了解」に(23)(24)「のみこむ」が現れ、「のみこむ」と結びつく名詞は「状況、理由」で状況を理解する、理由が納得できる意味で使われていることから人の思考を表している。また、「心／決心・解決・決定・迷い」に(25)「定まる」、「心／見せる」に(26)「示す」が現れた。(25)「定まる」と(26)「示す」と結びつく名詞は「気持ち、興味」であり、気持ちを定める、興味を示すというのは、主体が制御できることである。この点において、「やっと」における(22)「つ

く」の補語は「眠り」であり、制御ができないものである。

次に、中項目「待遇」における「やっと」「ようやく」の「独自の語」は、以下の通りである。

- (27) 今日も私は、携帯から何度も律子に電話をしていた。「あー、やっと捕まった。ねえねえ、寿司食いに行かない？」(PB49\_00576『ワルツ』2004)
- (28) 無事だと思った理学部も木造の数学教室が焼けて、本館も危なかったが、やっと助かったところであった。(LBq9\_00213『寺田寅彦は忘れた頃にやって来る』2002)
- (29) こんど攻撃を行なうときは、殷に責任を負わせたい。「竜に、FLASH緊急メッセージを送れ」趙は、ようやく当直将校に命じた。(LBk9\_00144『スカイ・マスターズ』1996)
- (30) イギリスの寄宿学校に行くいい面は、今年ジェニファーに会ったら、ジェニファーが女の子たちの学校に行っているように、ぼくも男の子の学校に行っていると話せることだった。ようやくジェニファーに、自分に関して本当のことを話せるのだ。(LB19\_00087『チャオ、ポルトフィーノ!』1997)
- (31) 逮捕されることを恐れて、泣き出したわけではなかった。「さあ、正直に答えてくれませんか」刑事のひとりが言った。「もう、いいんです」美紗がようやく、小さな声で応じた。(LBf9\_00074『悪魔岬』1991)
- (32) 食事中、将軍は昼間の一件については一切口にせず、食後になってようやくその話を持ち出した。(OB4X\_00229『真夜中は別の顔』1992)

「やっと」は、「待遇／捕縛・釈放」に(27)「捕まる」、「待遇／救護・救援」に(28)「助かる」が現れ、人の行動が相手の状態に影響を及ぼすことを表している。

一方、「ようやく」は、「待遇／命令・制約・服従」に(29)「命じる」が現れ、緊急メッセージを「送る」行動であるが、人の発言行為によることを表わしている。また、「言語／話・談話」に(30)「話せる」、「言語／問答」に(31)「応じる」、「言語／報告・申告」に(32)「持ち出す」が現れ、人の発言行為を表している。

最後に、「自然現象」部門における「独自の語」の意味分布は以下の通りである。

- (33) 「もっと知りたい?」「萌子にまかせる」「このごろやっと注射の跡が薄れてくれたの」そういって、萌子は腕の表を示してみせる。(PB19\_00124『新・雪国』2001)
- (34) 息をとめて、次の稲妻があたりを照らしてくれるのを待つ。ようやく空が光ったとき、男の姿は消えていた。(LBt9\_00221『月影のレクイエム』2005)
- (35) 空腹がおさまると、ようやくからだに熱い血が流れはじめたものの、あいかわらず狐につつまれたような気分だった。(PB39\_00164『四つの愛の物語』2003)
- (36) 明け方の凍りついた町を、二人は急ぎ足に行く。ようやく体が暖まるころには東

の空が白み始めていた。(PB49\_00538『首刈り朝右衛門』2004)

「やっと」の「独自の語」は、「自然／色」に(33)「薄れる」のみ現れたが、「ようやく」の「独自の語」は、「自然／光」に(34)「光る」、「物質／水・乾湿」に(35)「流れる」、「物質／熱」に(36)「暖まる」、「生命／病気・体調」に「治す」が現れており、「やっと」より「ようやく」の方が幅広く現れることが分かった。

「やっと」の(33)は、注射の跡が薄れるという変化を現す文であるが、目に見える人の身体上の変化である。一方、「ようやく」の(34)は、(33)と同様に目に見える視覚的な変化であるが、人の身体上の変化ではなく自然現象である。(35)は、熱い血が流れるという人の状態の変化を表している。(33)(34)のように、目に見えることではなく、目に見えない人の感覚の変化である。(36)も体が温まるという目に見えない感覚であり、人の状態の変化である。

ところで、「ようやく」には、以下の(37)(38)のように、(有標の)アスペクト形式「～し始める」との共起が見られた。

(37)「うーん、よくしらべたね」 大沢が唸って、ようやく興味をしめしはじめる。  
(LBn9\_00150『殺意の三面峡谷』1999 (26)再掲)

(38)空腹がおさまると、ようやくからだに熱い血が流れはじめたものの、あいかわらず狐につままれたような気分だった。(PB39\_00164『四つの愛の物語』2003 (35)再掲)

益岡・田窪(1992)は「やっと」「ようやく」を「アスペクトの副詞」と称したため、両副詞はアスペクト形式との共起が多いと予想されたが、「独自の語」の現れる文において、「ようやく」との共起のみが確認できた。このことから、「やっと」より「ようやく」の方が事態の成立において、「～し始める」のように、時間的局面のうち開始を表す傾向があると言える。

以上、「やっと」「ようやく」の「独自の語」の意味分布について述べた。次節では、これまでの結果をまとめる。

#### 4.6 本章のまとめ

「やっと」「ようやく」は、語源が同じ類義語であると考えられるため、両副詞の違いを見出すことが難しい副詞である。本章では、BCCWJにおけるさまざまなジャンルでの両副詞の出現傾向と、『文学』という特定のジャンルにおける「会話文」と「地の文」を通し、両副詞の文体の差を明らかにした。また、『文学』に現れる両副詞と共起する述語について、中頻度語のうち「独自の語」を検討し、「独自の語」の意味分布から両副詞の違いを明らかにした。今回、明らかになったことは、以下の通りである。

まず、ジャンルによる出現傾向の結果、「やっ」と「ようやく」の大きな相違は、文体の差である。「やっ」とは、より話し言葉的でくだけた文章に、「ようやく」は、改まった文章で書き言葉的な文章により多く現れた。

次に、『文学』における「地の文」と「会話文」の出現傾向を検討した結果、「やっ」との方が「ようやく」より「会話文」に多く現れた。

また、「やっ」と「ようやく」と共起する高頻度の述語の出現傾向から、共通する述語は「する」(1位)、「なる」(2位)であり、その以降、順位は異なっているものの、「分かる」「できる」「出る」「気づく」「付く」「開く」が共通していることが明らかになった。両副詞と共起する共通の5位以内の高頻度語「する」「なる」「分かる」「できる」であり、これらの出現比率を合計すると、「やっ」とが26.6%、「ようやく」が25.9%であった。このことから、両副詞と共起する高頻度の出現傾向は似ていることが分かった。

さらに、「やっ」と「ようやく」と共起する中頻度語のうち「独自の語」を検討した。その結果、「やっ」とは「人間活動」部門において「ようやく」より多く現れ、「ようやく」は「抽象的關係」「自然現象」部門において「やっ」とより多く現れることが明らかになった。

なお、各部門における「独自の語」の相違について検討した。「抽象的關係」部門において、「やっ」とに現れる「独自の語」は、入りにくい所に入れたことを表す時に現れるが、事態の成立に大変さと厳しさが感じられ、実際の空間への移動であるが、そこから意味が拡張され、抽象的な空間への移動を表すものが現れた。また、話し手の感情を表すものが現れるが、感情と感覚の成立も空間的に外側に広がったり、はっきり感じられた感覚から薄くなっていったりする空間的に遠くなっていくことを表わしている。

一方、「ようやく」の「独自の語」は、「やっ」との相反した結果が見られ、「独自の語」と係る補語(予感、考え、実感、悲しみと絶望感、自尊心など)によって感情や思考を表しており、外に散らばっていた考えが内側にまとまったりすること、また、自分に起きないことだと遠く思っていた考えが実感として近く迫ってきたりすることを表わしている。さらに、悲しみと絶望感から出たことで心を空間に比喻し、移動的に捉えている用例が見られた。同様に満たされなかった自尊心が満たされることで、空間に例えた心が満ちることを表わしている。

また、「人間活動」部門において、「やっ」との「独自の語」は、主体が意志を持ち制御できない人の状態の変化を表し、人のある行動が相手の状態に影響をさせることである。一方、「ようやく」の「独自の語」は、主体が意志を持ち制御できる人の感情、思考を表している。また、感情、思考の表現は「独自の語」と結びつく名詞の意味から分かった。また、人の発言行為により、相手に影響を及ぼすことを表している。

さらに、「自然現象」部門において、「やっ」との「独自の語」は、例えば、目に見える身体上の状態の変化を表しているが、はっきり見られた注射の跡が薄れていく、遠くなっていくことであり、上記の「抽象的關係」部門と類似の解釈ができると思われる。一方、「よ

うやく」は、熱い血が流れることで感覚的であり、外側に広がる方向性が見られる。

最後に、益岡・田窪（1992）は「やっと」「ようやく」を「アスペクトの副詞」と称したように、両副詞はアスペクト形式との共起が多いと予想されたが、「独自の語」の現れる文から、（有標の）アスペクト形式「～し始める」との共起は「ようやく」のみ確認できた。このことから、「やっと」より「ようやく」の方が事態の成立において時間的局面的うち開始を表す傾向があることが言えよう。

以上、BCCWJの『文学』における「やっと」「ようやく」の相違について検討し、その結果を述べた。次章では、『文学』と異なるジャンルである『毎日』を用い、本章と同様の方法で検討し、本章における結果と比較する。

## 第5章 新聞データに見られる「やっと」「ようやく」の相違と、 BCCWJに見られる相違との比較

本章では、「ある事態が成立するまで長い時間がかかる」ことを表す類義関係にある副詞「やっと」と「ようやく」の相違を明らかにするため、『毎日』を用い、両副詞の出現傾向から文体の差、両副詞と共起する述語の出現傾向、中頻度語の「独自の語」について検討していく。

### 5.1 はじめに

第4章では、「やっと」「ようやく」の相違について、BCCWJを用い、さまざまなジャンルでの出現傾向から文体の差と、(サブコーパスである「書籍」と「ベストセラー」の下位区分の一つである『文学』に現れる両副詞の含まれる文を取り出し)「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにした。また、『文学』での両副詞と共起する述語の出現傾向と、中頻度語の「独自の語」の意味分布から両副詞の相違を明らかにした。

本章では、『文学』と異なるジャンルである『毎日』を用い、「地の文」と「会話文」における「やっと」と「ようやく」の出現傾向から文体の差と、両副詞と共起する述語の出現傾向、中頻度語の「独自の語」を検討し、「独自の語」の意味分布から両副詞の相違を明らかにする。

本章の構成は、以下の通りである。第2節では、本章の目的、第3節では、調査データの概要、第4節では、『毎日』における「やっと」と「ようやく」の出現傾向と「地の文」「会話文」での出現傾向から文体の差について述べる。第5節では、両副詞と共起する中頻度語のうち「独自の語」の意味分布から両副詞の相違について述べる。第6節では、ここまでの結果をまとめる。第7節では、第5節の結果と第4章で明らかになったBCCWJ内の『文学』での結果を比較し、ジャンルによる違いについて述べる。第8節では、本章のまとめをする。

### 5.2 本章の目的

本章では、類義関係にある副詞「やっと」と「ようやく」について、『毎日』を用い、「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにする。また、両副詞と共起する述語の出現傾向と、中頻度語のうち「独自の語」を検討し、「独自の語」の意味分布から、両副詞の違いを明らかにする。さらに、『毎日』における検討結果と『文学』における結果を比較し、ジャンルによる相違を明らかにすることを目的とする。

### 5.3 調査データ

『毎日』からの用例の抽出はプログラミング言語 Perl を利用した。用例の抽出の際、「やっと」は〈やっと〉〈ヤット〉〈漸と〉をキーワードにした。その結果、〈やっと〉が 569 例、

〈ヤット〉が3例、〈漸と〉が0例抽出されたものの、〈ヤット〉の3例は、以下の(1)(2)(3)のように、検討対象と異なる語であった。また、〈やっと〉の場合も(4)「ひやっと」の以外に「ぼやっとしている」「やっこ」「おやっと感じた」「にやっとする」などのように、検討対象と異なる語が11例含まれていた。

- (1) ゴールシーンを「佑二さん（中沢）がDFを引き出してくれて、ヤットさん（遠藤）が空いたところにボールを入れてくれた」と控えめに振り返りながらも、「ホームなんで1点でも多く取ろうと思っていた」と胸を張った。（2008年2月7日）
- (2) 日本とインドネシアのEPAが批准に向けて動き出した。柱となる看護師や介護福祉士の派遣実務を行うインドネシア海外労働者派遣・保護庁のジウムフル・ヒダヤット長官に、派遣の意義などを聞いた。（2008年4月20日）
- (3) 「ヤットサー、ヤットサー」。威勢の良い掛け声とともに12日、真夏の徳島市を彩る阿波踊りが開幕した＝写真・大西岳彦撮影。（2008年8月13日）
- (4) 「負ける気がしなかった」。ひやっとしたのは準々決勝のみ。（2008年3月28日）

さらに、用例の中には、以下の(5)(6)のように、重複の用例が22例抽出されたため、11例のみを分析対象としてカウントした。

- (5) ◇やっと新しい試みーノンフィクション作家・吉永みち子さんの話（3月23日 M31）
- (6) ◇やっと新しい試みーノンフィクション作家・吉永みち子さんの話（3月23日 M30）

一方、「ようやく」は〈ようやく〉〈漸く〉〈ヨウヤク〉をキーワードとして用例を抽出した。その結果、〈ようやく〉が740例、〈漸く〉が0例、〈ヨウヤク〉が0例現れた。「ようやく」の用例には、「やっと」のように検討対象と異なるものが1例現れ、また、重複のものが18例現れたため、9例のみを分析対象としてカウントした。

以上のように、検討対象と異なる語が含まれた文と重複の文を除いた分析対象は「やっと」が547例、「ようやく」が730例である。

次の節では、「やっと」「ようやく」と共起する述語の出現傾向と「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を検討する。

#### 5.4 「やっと」「ようやく」の文体と共起する述語の出現傾向

本節では、まず「会話文」と「地の文」における「やっと」「ようやく」の出現傾向から文体の差を検討する。次に両副詞と共起する述語について検討し、共起する中頻度語のうち「独自の語」を意味分類し、「独自の語」の意味分布から両副詞の相違を明らかにする。

#### 5.4.1 「地の文」と「会話文」における「やっ」と「ようやく」の出現傾向

「やっ」と「ようやく」の文体の差について、「地の文」と「会話文」での出現頻度から考察する。「会話文」の認定において、(7) (8) のように、“「」”の後に「声をかけた」「評価する」が後続する直接引用文などを「会話文」として認定した<sup>1</sup>。

(7) 容疑者逮捕の知らせを受け、仏壇の遺骨に「やっと見つかったね」と声をかけたという。(2008年12月8日)

(8) 石川教授は「長野県を中心に石戈(せっか)という不思議なものが出ている。東日本には青銅製の武器型祭器がないのに、なぜ石戈があるのかわからなかったが、ようやくモデルとなった本体が出てきた」と評価し、「弥生時代は東と西で違い、東には青銅器もないなどと言われてきたが、考え直す必要がある」と強調した。(2008年4月16日)

『毎日』における「やっ」と「ようやく」の「地の文」と「会話文」での出現傾向をまとめたものが下記の表5-1である。

表5-1 「やっ」と「ようやく」の「地の文」「会話文」における出現傾向

	やっ		ようやく	
	頻度	比率	頻度	比率
地の文	421	77.0%	649	88.9%
会話文	126	23.0%	81	11.1%
合計	547	100.0%	730	100.0%

表5-1から、「やっ」は「会話文」に126例(23.0%)現れ、「ようやく」は「会話文」に81例(11.1%)現れた。ここで、「地の文」と「会話文」における両副詞の出現の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた( $\chi^2=32.8149$ ,  $p<0.05$ )。よって、「会話文」において「やっ」の方が「ようやく」より多く現れると言えよう。

第4章の結果である、「会話文」における「やっ」の出現比率は約2割であったが、本章の『毎日』での「やっ」の出現比率も23.0%、約2割で符合する。一方、「会話文」における「ようやく」の結果は本章では11.1%の出現比率であるが、第4章の『文学』における出現傾向である5.5%より多く、石川(2006)の『プロジェクトX』での結果である8.3%と、「新潮文庫」での結果である14.6%の間の数値である。

このことから、「ようやく」はジャンルにより「会話文」での出現比率が異なる副詞であることが分かる(『文学』との比較など、詳細は第5.7.1で述べる)。

<sup>1</sup>「会話文」の認定については、第4章4.4.2をご参照いただきたい。



以上、両副詞の『毎日』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から、「やっ」と「ようやく」より「会話文」に多く現れることが明らかになった。

#### 5.4.2 「やっ」と「ようやく」と共起する述語の出現傾向

##### 5.4.2.1 除外した項目

「やっ」と「ようやく」と共起する述語の出現傾向から両副詞の相違について検討するが、共起する述語の用例のうち除外したものは以下の通りである。

- (9) 問題意識のあまりの低さに、調査担当の総務局幹部も「驚いている」と声を絞り出すのがやっとだった。(2008年4月19日)
- (10) 楽天は完封を免れるのがやっと。(2008年5月12日)
- (11) 今野は3月のワールドカップ(W杯)アジア3次予選のバーレーン戦は3バックの一員を務めたが、ようやく本職での出番が濃厚に。(2008年5月23日)
- (12) チームは51試合目でようやく勝率5割に到達。(2008年5月29日)
- (13) 私たちもリョウトウナラなどを5000本ほど植えました。でも、植樹はまだやっと山一つ分だけです。(2008年10月6日)
- (14) 今季開幕戦の阪神戦では先発メンバーから外れるなどやっとの思いで定位置を確保し、タイトルを手にしたプロ8年目の26歳。(2008年10月13日)

上記の(9)「やっ+助動詞。」のような用例、(10)のように、「やっ。」「ようやく。」で終わる用例、(11)のように、両副詞と共起する述語が省略された用例、(12)のように、「体言止め」であるもの、(13)のように、「名詞+助動詞」で終わる用例は、除外した。また、(14)のように、慣用的な表現のように使われる「やっとの+名詞で」などの表現も除外した<sup>2</sup>。

以上の用例を除外した結果、(総出現頻度は「やっ」が547例、「ようやく」730例である)「やっ」が399例、「ようやく」が684例となった。

##### 5.4.2.2 「やっ」と「ようやく」と共起する述語

ここでは、両副詞と共起する高頻度の述語を確認する。用例は「やっ」が399例、「ようやく」が684例であり、両副詞と共起する述語を出現頻度順10位までまとめたものが下記の表5-2である。

<sup>2</sup> 「やっ」は、「やっ。」が33例、「やっ+助動詞」が32例、「やっで」が1例、「やっとな」が1例、「やっの～」が19例、述語が省略されたものが15例、「名詞+助動詞」が3例、「名詞止め」が44例現れており、「ようやく」は、述語が省略されたものが4例、「名詞+助動詞」が2例、「名詞止め」が39例、「ようやく。」が1例現れた。

表 5-2 「やっと」「ようやく」と共起する高頻度の動詞

やっと				ようやく			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	する	50	12.5%	1	する	149	21.8%
2	できる	41	10.3%	2	なる	53	7.7%
3	なる	35	8.8%	3	できる	27	3.9%
4	見つける	20	5.0%	4	出る	15	2.2%
5	来る	18	4.5%	4	始まる	15	2.2%
6	立てる	9	2.3%	6	たどりつく	12	1.8%
6	出る	9	2.3%	7	戻る	11	1.6%
6	分かる	9	2.3%	8	終わる	9	1.3%
7	認める	6	1.5%	9	上げる・こぎつける	8	1.2%
7	戻る	6	1.5%	9	見せる・認める	8	1.2%

表 5-2 から、「やっと」「ようやく」と共起する述語の 1 位は共に「する」であり、その次は、「やっと」が「できる」「なる」の順で、「ようやく」が「なる」「できる」の順であった。上位 5 位以内に共通する述語は「する」「なる」「できる」である。これらの他に共通に現れる述語として「出る」「認める」「戻る」がある。上位 3 位までの述語の出現比率を合わせると、「やっと」が 31.6%、「ようやく」が 33.4%である。

また、「やっと」のみに共起する高頻度の動詞は「見つける」(4 位)、「立てる」(6 位)である。しかし、「ようやく」も「見つける」(11 位)と共起している(表 5-2 には入っていない)。

一方、「ようやく」のみに共起する高頻度の動詞は「たどりつく」(6 位)、「上げる」「こぎつける」「見せる」(9 位)であるが、「やっと」においても、「たどりつく」(11 位)、「上げる」(10 位)と共起している。

以上のように、「やっと」「ようやく」と共起する高頻度の動詞はその出現傾向が似ていることが分かる。

しかし、両副詞と共起する共通の動詞は個々の用例においても似ている振る舞いをしていないのか疑問である。似ているのならば、どのような点が似ており、相違があるのならば、どのような相違があるのかについて記述する必要がある。

そこで、表 5-2 において、両副詞と共起する述語のうち出現比率に近い「出る」を用い、検討する。検討の際には、『分類語彙表』を用いて意味分類を行う。「出る」の出現比率は「やっと」が 9 例 (2.3%) 現れ、「ようやく」が 15 例 (2.2%) 現れている。実際の用例は以下の通りである。

- (15) まずは先に土俵に上がった白鵬から。朝青龍の取りこぼしで星が並び、「やっと余裕が出てきた」とは、指導する熊ヶ谷親方(元前頭・竹葉山)。(2008年3月23日)
- (16) 教員志望の学生の不信は尽きない。埼玉県の小学校教員を志望する私立大3年の男子学生(20)は、予備校で元教員の教師が「やっと(不正が)明るみに出た」と口にするのを聞き、「どこでも(口利きは)行われていたのか」と感じた。(2008年7月30日)
- (17) 弁護士を立てて娘を退去させたいと考える父親とは何なのかと思ったが、聞くと、父と娘の不仲がこじれにこじれ、家賃が払えないなら自宅に戻れと諭す父の言葉に娘は耳を貸さない。父親からの電話にも応答しない。そこで法的措置しかない、と判断したという。結局、裁判所の手続きに従い、女性はやっと部屋を出た。(2008年3月13日)
- (18) これで貯金1。日本ハムに、ようやく元気が出てきた。(2008年4月9日)
- (19) 一方のバーレーンは後半32分、イスマイルが懸命にボールを追い、左サイドから放り込んだクロスが決勝点につながった。日本は失点后、ようやく攻撃にスピードが出てきたが、時すでに遅かった。(2008年3月27日)
- (20) スライダーを振り抜いた打球は「手応えありました」との言葉通り、右翼席で大きくはねた。愛知・東邦から強打者の期待を受けて入部したものの、過去2年間は3安打のみ。ようやく出た初本塁打は2点差を追いつき、チームに勢いを与える貴重な一打となった。(2008年4月13日)

「やっと」の「出る」は、(15)は「抽象的關係」の「存在／発生・復活」に、(16)は「抽象的關係」の「作用／出・出し」に、(17)は「抽象的關係」の「作用／移動・発着」に現れる。一方、「ようやく」の「出る」は、「やっと」の(15)(16)(17)と似ている意味分布が見られ、その他(18)は「人間活動」の「心／心」に見られた。また、(19)(20)は「抽象的關係」の「作用／出・出し」に現れる。

「抽象的關係」の「作用／出・出し」は、両副詞に共に現れる表現であり、「やっと」には、(16)の「不正が明るみに出る」以外に、「血筋の良さが出る」「判決が出る」「結果が出る」などが見られる。一方、「ようやく」には、「人の味が出る」「改革の効果が出る」「意識が出る」「OKが出る」「自覚が出る」などが見られており、また、サッカーや野球などのスポーツに関する内容(記事)に使われる傾向が見られる<sup>3</sup>。

このように、『分類語彙表』を用いての意味分類により、「ようやく」がスポーツ記事に現れること以外、「やっと」「ようやく」に大きな相違は見られなかった。

<sup>3</sup> 『毎日』において、記事別に、ある傾向が見られた。それは、「ようやく」「ついに」は、「スポーツ」面に多く現れることである。「社説」面など記者の主観が入りやすい内容とは異なり、「スポーツ」面の記事は、行った事実をそのまま客観的に伝える内容が多い。そのため、改まった文により多く現れる「ようやく」「ついに」が使われているのではないかと考えられる。新聞記事面における副詞の出現傾向については今後の課題にしたい。

ところで、「やっと」と共起する「出る」の文には、下記のように、(21)の「騒ぎの末」、(22)の「結局」のように、事態の成立においてその最終段階を表す表現が見られた。

(21) お忍びで市中に雪見に出かけたお殿様、粗末な煮売り屋の並ぶ辺りでにおいにひかれ、一軒の店に入る。落語「ねぎまの殿様」は「目黒のさんま」の冬バージョンだ。こちらの殿様はしょうゆ樽(だる)に座ってマグロとネギの小鍋だてに熱爛(あつかん)で大満足である▲屋敷に帰った殿様がそのねぎま鍋を所望すると、料理番はマグロを蒸して脂抜きし……とお約束の展開だ。騒ぎの末やっと本物のねぎま鍋が出たところで、殿様「これ、しょうゆ樽をもて」。(2008年12月3日)

(22) 弁護士を立てて娘を退去させたいと考える父親とは何なのかと思っただが、聞くと、父と娘の不仲がこじれにこじれ、家賃が払えないなら自宅に戻れと諭す父の言葉に娘は耳を貸さない。父親からの電話にも応答しない。そこで法的措置しかない、と判断したという。結局、裁判所の手続きに従い、女性はやっと部屋を出た。(2008年3月13日)

(21)(22)に現れる最終段階を表す表現から、「やっと」には最終段階を表すことによって事態の成立が際立って見られる効果があるのではないと思われるが、「やっと」についての先行研究において、このような最終段階を表す表現との共起を言及しているものは見当たらない。

以上、「やっと」「ようやく」と共起する動詞の出現傾向と、両副詞と共起する述語のうち出現比率に近い「出る」の意味分布から、「やっと」に事態の成立を強調する、最終段階を表す表現が出やすいこと以外、両副詞の相違はあまり見られないことが分かった。

### 5.5 「独自の語」からの「やっと」「ようやく」の相違

本節では、「やっと」「ようやく」の相違を明らかにするために、両副詞と共起する中頻度語のうち「独自の語」を用い、意味分布を検討する。

次の表5-3と表5-4は、両副詞のそれぞれの「独自の語」を抽出した表である。

表 5-3 「やっと」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『毎日』範囲(補正前)		『毎日』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	50~9	0%~47.9%	7	1	16	2	18	13.5%
	8~4	~59.6%	9	1				
中頻度	3	~70.2%	9	4	20	13	33	24.8%
	2	~79.7%	11	9				
低頻度	1	~100.0%	44	38	44	38	82	61.7%
合計	399		80	53	80	53	133	100.0%

表 5-4 「ようやく」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『毎日』範囲(補正前)		『毎日』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	149~7	0%~50.3%	14	1	22	5	27	12.6%
	6~5	~59.4%	8	4				
中頻度	4~3	~70.2%	15	7	33	27	60	27.9%
	2	~81.3%	18	20				
低頻度	1	~100.0%	25	103	25	103	128	59.5%
合計	684		80	135	80	135	215	100.0%

表 5-3 と表 5-4 から、両副詞における見出し語の「低頻度」の比率は「やっと」が 61.7%、「ようやく」が 59.5%であり、両副詞と共に伊藤（2008）が提示している比率と比べると、「低頻度」がやや高い。

次に、「使用度数の算出法」によって抽出された中頻度の「独自の語（表 5-3 と表 5-4 の太字）」は、「やっと」が 13 語、「ようやく」が 27 語である。抽出された「独自の語」を『分類語彙表』を用いて意味分類し、意味分布を表すと、次の表 5-5 のようにまとめられる。

表 5-5 「やっと」「ようやく」の「独自の語」の意味分布

意味分布			やっと		ようやく	
部門	中項目		頻度	比率	頻度	比率
抽象的關係	2.12××	存在			2	3.2%
	2.13××	様相			4	6.3%
	2.15××	作用	14	46.7%	29	46.0%
	2.17××	空間			3	4.8%
小計			14	46.7%	38	60.3%
人間活動— 精神及び行為	2.30××	心	10	33.3%	10	15.9%
	2.31××	言語			5	7.9%
	2.33××	生活	1	3.3%	2	3.2%
	2.34××	行為			2	3.2%
	2.35××	交わり			2	3.2%
	2.37××	経済	5	16.7%	2	3.2%
小計			16	53.3%	23	36.5%
自然物及び 自然現象	2.57××	生命			2	3.2%
小計			0	0.0%	2	3.2%
総計			30	100.0%	63	100.0%

表 5-5 に見られるように、各部門の意味分布について、「やっと」は「人間活動」部門にやや多く、「ようやく」は「抽象的關係」「自然現象」部門にやや多く現れることが分かる。これらの差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ ( $\chi^2=3$ ,  $p=0.22$   $p>0.05$ )、有意差は認められなかった。

では、各部門においてどのような特徴があるのかについて以下に述べる。

まず、「抽象的關係」部門において、「やっと」の「独自の語」は、中項目「作用」のみに現れるが、「ようやく」の「独自の語」は、「存在」「様相」「作用」「空間」に現れた。

「抽象的關係」における中項目「作用」の分類項目を検討すると、両副詞が共通に現れたのは分類項目「移動・発着」のみであり、その他は異なっている。「やっと」のみに現れた分類項目は、「終了・中止・停止」「往復」「上がり・下がり」「乗り降り・浮き沈み」「浮かぶ」であった。一方、「ようやく」のみに現れた分類項目は「出・出し」「合体・出会い・集合など」「接近・接触・隔離」「切断」「増減・補充」であった。

分類項目から、「やっと」の「独自の語」は、事態が移動・往復・中止・上下することで成立するまでに進行過程が含まれている。一方、「ようやく」の「独自の語」は、散らばっていた事態が一つの場所に集まったり、遠く離れていたものが接近したりすること、事態に何かが付加わったり、増えたりすることに関係していることが分かる。

- (23) リーグ 3 連覇を狙っていたはずのチームが、3 位を守ることに汲々 (きゅうきゅう) としているからだ。チームに漂う焦燥感は強い。高橋は「オックス戦の連敗は、やっと止まった。でも、ここからが大事」と勝つかぶとの緒を締める。(2008 年 9 月 14 日)
- (24) 「望んだ兵役をやっと果たせる」(2008 年 2 月 29 日)
- (25) この特養は、死亡などで年間 10 人程度退去するが、毎月 20 人ほどの入居申し込みがある。老人保健施設や療養型病床などを転々とし、やっとたどり着く待機者も多い。(2008 年 6 月 28 日)
- (26) タイ国内には現時点で 3000 人近い日本人旅行者が足止めされているとみられる。バンコクでは 2 日午後、スワンナプーム空港が近く再開されるとのうわさが飛び交い、「やっと帰れる」との喜びが広がった。(2008 年 12 月 3 日)
- (27) 座禅を始めたころは、無の境地になれず雑念ばかりが頭をよぎった。年月を重ね、最近ようやく無念無想の心境に達してきた。(2008 年 4 月 7 日)
- (28) 「きのう、お父さんから電話があったよ!」。10 歳の女兒が声を弾ませた。離れ離れになっていた父親からようやく届いたうれしい知らせ。(2008 年 5 月 20 日)
- (29) 陳さんの母、陳桂貞さんは戦前、南部の古都、江西省九江市で金属回収業「森田商会」の社員、益野貞二さんと結婚した。戦後、貞二さんは帰国。桂貞さんは祖国にとどまり翌年 2 月、陳さんが生まれた。反日機運がまだ強い時代。桂貞さんは迫害を恐れ、死ぬまで父の名を告げなかった。ようやく困窮生活を抜け出した 00 年

に、親族から父の名を聞き、日々、思いが募っている。(2008年1月11日)

- (30) 所得税+住民税の10年間の税額は、年収450万円の世帯で170万円、同550万円の世帯で280万円(国交省試算)。同750万円の世帯が580万円で、ようやく今回の最大控除額の600万円に近づく。年収が多いほど減税拡大の効果が大きい構造だ。(2008年11月4日)

中項目「作用」での「独自の語」を見ると、「やっと」は、「作用/終了・中止・停止」に(23)「止まる」が現れ、連続していた事態(連敗)が成立(止まる)したことで進行過程での変化を表している。「作用/終了・中止・停止」に(24)「果たせる」が現れ、(23)のように、連続していた事態(兵役)が成立したことで進行過程での変化を表している。また、「作用/移動・発着」に(25)「たどりつく」が現れ、ある過程を経て具体的な所に移動したことを表している。さらに、「作用/往復」に(26)「帰れる」が現れ、ある場所に戻ることを表わしている。

一方、「ようやく」は、「作用/移動・発着」に(27)「達する」が現れ、人の感情において、ある抽象的なレベルに達することを表している。「作用/移動・発着」に(28)「届く」が現れ、知らせが届いたことで、抽象的な移動を表している。また、「作用/出・出し」に(29)「抜け出す」が現れ、困窮生活という抽象的な状況から出たことを表している。「作用/接近・接触・隔離」に(30)「近づく」が現れ、変化によってあるレベルに近づくことを表している。

次に、「人間活動」部門について、「やっと」の「独自の語」は、中項目「心」「生活」「経済」に現れ、「ようやく」の「独自の語」は、中項目「心」「言語」「生活」「行為」「交わり」「経済」に現れる。「やっと」のみに現れるものはなく、「ようやく」は「言語」「行為」「交わり」のみに現れる。詳細な中項目の内容については、以下の通りである。

- (31) 「これまではお客さんに喜んでもらおうとやってきた。今やっと自分のためのカントリースタイルを楽しんでいます」(2008年9月4日)

- (32) 高校時代の同級生の女性は「頭が良くてまじめなタイプという印象。名前を聞いてやっと思い出した」と話した。(2008年5月27日)

- (33) 相手が城北(熊本)に決まり「ようやく甲子園でプレーできる実感が込み上げてきた」と笑顔を見せた。(2008年3月14日)

- (34) 新生活が始まって、はや2カ月。ようやく環境に慣れてきた新入生に大学生活を聞いた。(2008年5月30日)

- (35) 番場の忠太郎は5歳で生き別れになった母親恋しさから、股旅(またたび)生活を続けている。ようやく捜し当てた母のおはまは、江戸でも高名な料理屋の女将(おかみ)になっていた。(2008年5月8日)

- (36) 米政府は88年、強制連行による人権侵害を日系米国人に謝罪し、1人当たり2

万ドル（現レートで約216万円）の補償法案を成立させた。だが、日系ペルー人は「違法外国人だった」として除外された。98年にようやく1人5000ドルの和解案が示され、多くは受け入れたが、3人は拒否した。（2008年7月31日）

「やっと」の「独自の語」は、「心／快・喜び」に(31)「楽しむ」が現れ、人の感情を表しており、「心／学習・習慣・記憶」に(32)「思い出す」が現れ、人の思考を表している。

一方、「ようやく」の「独自の語」は、「心／感動・興奮」に(33)「込み上げる」が現れ、実感が込み上げたことで人の感情を表している。また、「心／学習・習慣・記憶」に(34)「慣れる」が現れ、人の感覚・思考の変化を表している。さらに、「心／研究・試験・調査・検査など」に(35)「捜し当てる」が現れ、人の行為を表していると同時に状況の変化も表している。「心／見せる」に(36)「示す」が現れ、和解案が示されたことで状況の変化を表している。また、「ようやく」の(34)(35)(36)は長い時間がかかって成立した事態であることが、(34)「2か月」、(35)「5歳で生き離れた母親恋しさから、またたび生活を続けている」、(36)「88年(省略)98年に」という年数の表示によって表されている。

ルチラ(2005a:p.7)は、「やっと」は時間がかかったことを表す表現と共起することが多いと述べており<sup>4</sup>、また、ルチラ(2005b:p.32)は「やっと」「ようやく」について、実現が予見された時点から実際の出来事の実現までの経過が話し手にとって心理的に長く感じられるものであるという意味を表す点が共通の意味特性であるとし、言語表現を用いて時間がかかったことを明示的に表現できることで論証できるものの、言語上、明示されなくても、実現に時間がかかったことを意味すると指摘している。

ルチラの指摘のように、長い時間がかかったことを共通の意味として現れる「やっと」「ようやく」であるが、両副詞の「独自の語」の現れる文の場合、(34)(35)(36)のように、「やっと」より「ようやく」の方がその時間の経過を表す言語表現と共起していることが分かる。

(38) 政府は、ようやく雇用創出案を打ち出した。（2008年12月22日）

(39) 「基本的なアイデアは早くからあったが、もう少しつなかりをよくしようと迷っているうちに時間がたってしまった。そうすると、すごいことをたくらんでいると思われているのではというプレッシャーを感じた。書きたいものを書きたいように書こうと決めて、ようやく書き始められました」（2008年5月22日）

(40) 11月16日からタイを訪れていた名古屋市の主婦(59)は「毎朝、航空会社の事務所に通い、やっとチケットを取った。中部国際空港に帰りたかった」と疲れ

<sup>4</sup> ルチラ(2005a:p.7)は、「(19) およそ一週間かかってやっとすみました。私は骨を埋めて、その上にささやかな墓標をたてました、(20) 「しかしまあいづれにせよ、十八年かけて頭骨はやっと大学にたどりついたわけだ」と私は行った」を挙げ、実現にかかった時間が期間として表現されていると述べている。



た様子。(2008年12月4日)

(41) 出口さんは「人並みの幸せをこの時だけやっと持てたかもしれない。そう思いたい」。(2008年8月9日)

(42) 汚染米を早く売却したい農林水産省が、ようやく買い取ってくれた三笠フーズなどの業者を厳しくチェックできるはずがない。(2008年9月24日)

(43) 健康保険に労災の治療を請求している人は年間5万人以上に上るとされるが、多数の「労災隠し」が含まれるということは00年ごろから指摘されてきた。厚生労働省はようやく、不自然な請求の取り組むが、放置期間は長く、被災者の救済という面からも早急の対応が求められる。(2008年4月16日)

(44) バレンタイン監督も「チームがいい状態でプレーできているのは間違いない」。6月7日には借金12、首位と13・5ゲーム差まで開いたが、この日の勝利で借金は3、首位とのゲーム差も6まで縮まった。ようやくチームの歯車がかみ合ってきた。(2008年7月16日)

また、「ようやく」の「独自の語」は、「言語／宣告・宣言・発表」に(38)「打ち出す」、「言語／書き」に(39)「書く」が現れ、人の書く行為を表している。

さらに、「やっと」は、「経済／取得」に(40)「とる」が現れ、チケットを取ったことであるが、人の取った行為の成果を表す。また「経済／所有」に(41)「もつ」が現れ、幸せを持てたことであるが、人の行為の成果を表している。

一方、「ようやく」は、「経済／売買」に(42)「買い取る」が現れ、買い取ったという行為を表しながら、状況の変化を表している。また、「行為／行為・活動」に(43)「取り組む」、「交わり／交わり」に(44)「噛み合う」が現れ、状況の変化を表している。

最後に、「自然現象」部門において、「独自の語」の特徴は以下の通りである。

(43) それでも不慣れな土地での「テニス漬け」の厳しい生活に疲弊して、帰国する選手もいる。そんな中で、ようやく育った一人が錦織だ。(2008年4月5日)

(44) 日本は、技術力に基づいたベンチャーがようやく育ち始めたところ。(2008年12月21日)

「やっと」の「独自の語」は、「自然現象」部門には用例が現れず、「ようやく」の「独自の語」は、「生命／生」に(43)(44)「育つ」が現れた。(43)「育つ」は、人の育つ行為であるが、育った結果は、人の状態の変化を表している。しかし、(44)「育つ」は、ベンチャーが育つことで、育った結果は、物事の状態の変化を表している。

ところで、「ようやく」には、下記の(45)(46)のように、事態の成立が開始することを表す(有標の)アスペクト形式「～し始める」との共起が見られた。これは、益岡・田窪(1992)が称した「アスペクトの副詞」のように、両副詞は(有標の)アスペクト形式

との共起が多いと予想されたが、「独自の語」の含まれる用例においては、「ようやく」との共起のみが確認できた。

(45) 「基本的なアイデアは早くからあったが、もう少しつながりをよくしようと迷っているうちに時間がたってしまった。そうなる、すごいことをたくらんでいると思われているのではというプレッシャーを感じた。書きたいものを書きたいように書こうと決めて、ようやく書き始められました」(2008年5月22日(39)の再掲)

(46) 日本は、技術力に基づいたベンチャーがようやく育ち始めたところ。(2008年12月21日(44)の再掲)

「やっと」より「ようやく」に(有標の)アスペクト形式との共起が見られたことから、「ようやく」の方が事態の成立において時間的局面を表す傾向があると言えよう。

以上、『毎日』新聞データにおける「やっと」「ようやく」の「独自の語」の意味分布から、両者の相違について検討した。

## 5.6 『毎日』における「やっと」「ようやく」の相違

本節では、『毎日』を用い、「やっと」「ようやく」の相違を明らかにするために、両副詞の出現傾向を検討した。第5節までに明らかになったことは、以下の通りである。

まず、「やっと」「ようやく」の文体の差を明らかにするために、「地の文」と「会話文」での両副詞の出現傾向を検討した。その結果、「会話文」に現れる両副詞の出現比率は、「やっと」が23.0%、「ようやく」が11.1%で(出現に有意な差は認められなかった)、このことから、「やっと」は「ようやく」より「会話文」に多く現れることが明らかになった。

次に、「やっと」「ようやく」と共起する述語について検討した。その結果、両副詞と共起する述語は、「やっと」では「する」(1位)、「できる」(2位)、「なる」(3位)であり、「ようやく」では「する」(1位)、「なる」(2位)、「できる」(3位)であった。2位と3位の順位が逆転しているだけで語彙は共通している。上位5位まで共通する述語「する」「なる」「できる」の出現比率を合わせると、「やっと」が31.6%、「ようやく」が33.4%であり、両副詞共に3割弱であることから、両副詞と共起する共通の述語はその出現比率の合計も近い数値であることが分かった。

また、両副詞と共起する共通の述語「出る」を用いて検討したところ、「やっと」は「結局」「～の末」などのように、最終段階を表す表現との共起が現れた以外、大きな相違は見られなかった。

また、「やっと」「ようやく」の「独自の語」の出現傾向から、「やっと」の「独自の語」は「ようやく」の「独自の語」と比べ、「人間活動」部門にやや多く現れ、「ようやく」の「独自の語」は「やっと」の「独自の語」と比べ、「抽象的關係」「自然現象」部門にやや多く現れることが明らかになった。

さらに、各部門における「やっ」と「ようやく」の「独自の語」の意味分布を検討した結果、「抽象的關係」部門において、「やっ」との「独自の語」は、連続している事態が成立し、その進行過程の意味が含まれている。一方、「ようやく」の「独自の語」は、散らばっていた事態が一つの所に集まったり、遠く離れていたものが接近してきたりして成立するものであった。また、事態に何かが付加わったり、その量が増えたりするものが見られた。さらに、人の感情などがある抽象的なレベルに達したり、近づいたり、ある抽象的な状況から出ることを表している。面白い結果として、「やっ」とはある過程を経て具体的な所への移動を表しているが、「ようやく」は抽象的な移動を表している用例が見られた。

次に、「人間活動」部門において、「やっ」との「独自の語」と「ようやく」の「独自の語」は、人の感情や思考を表している点で共通しているが、「やっ」とは「独自の語」を持つ語の意味により人の感情や思考を表している。しかし、「ようやく」は「独自の語」と係る補語との結合によって人の感情や思考を表している。また、両副詞の「独自の語」は人の行為を表しているものの、「やっ」とは人の行為による成果まで表し、「ようやく」は人の行為による状況の変化を表している表現が現れた。また、「ようやく」の「独自の語」は時間の経過を表す表現との共起が見られた。

また、「自然現象」部門において、「やっ」との「独自の語」は現れず、「ようやく」は人や物事の状態の変化を表しており、また、「ようやく」は事態の成立が開始することを表す(有標の)アスペクト形式「～し始める」との共起が見られた。

以上、『毎日』における「やっ」と「ようやく」の相違についてまとめた。

次節から、第5節までの『毎日』における「やっ」と「ようやく」の相違と、第4章のBCCWJ内の『文学』における結果を比較し、ジャンルによる「やっ」と「ようやく」の相違について検討していく。

## 5.7 『毎日』における結果と、BCCWJ内の『文学』における結果の比較

本節では、『毎日』における「やっ」と「ようやく」の相違と、第4章におけるBCCWJ内の『文学』における「やっ」と「ようやく」の相違を比較し、ジャンルによる両副詞の違いについて述べる。

### 5.7.1 ジャンルによる「やっ」と「ようやく」の文体の相違

まず、ジャンルによる「やっ」と「ようやく」の出現傾向について比較する。

本章において、調査データを『毎日』にしたのは、次の表5-6のように、BCCWJ内の「新聞」では「やっ」と「ようやく」の出現頻度が39例と43例で非常に低かったためである。

表 5-6 「やっと」「ようやく」の出現頻度

ジャンル	やっと	ようやく
BCCWJ 内の「新聞」	39	43
『毎日』	547	730
『文学』	1845	2347

表 5-6 から、『毎日』と『文学』という異なるジャンルにおける両副詞の出現頻度は「やっと」より「ようやく」の方が多いことが分かる。ここで、『毎日』と『文学』における両副詞の出現頻度の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差は認められなかった ( $\chi^2=0.5516$ 、 $p=0.45$   $p>0.05$ )。

次に、「やっと」「ようやく」の「地の文」と「会話文」における出現傾向について、ジャンルごとにまとめたものが表 5-7 である。

表 5-7 ジャンルごとにおける「地の文」と「会話文」での出現傾向

	『毎日』		『文学』	
	やっと	ようやく	やっと	ようやく
地の文	421 (77.0%)	649 (88.9%)	1505 (81.6%)	2218 (94.5%)
会話文	126 (23.0%)	81 (11.1%)	340 (18.4%)	129 (5.5%)
合計	547 (100.0%)	730 (100.0%)	1845 (100.0%)	2347 (100.0%)

表 5-7 から、『毎日』と『文学』において、両副詞の「会話文」における出現比率は「ようやく」より「やっと」の方が高い。ジャンルごとに両副詞の「会話文」における出現比率はやや異なっているが、ジャンルごとに「やっと」の方が「ようやく」より多く現れる出現傾向には違いはないことが分かる。第 4 章 4.4.2 と本章 5.7.1 で述べたように、『毎日』『文学』では両副詞の出現頻度に有意な差が認められた ( $\chi^2=32.8149$ 、 $p<0.05$  と  $\chi^2=173.853$ 、 $p<0.05$ )。

次に、表 5-7 において、「ようやく」は『文学』より『毎日』の方に「会話文」に出現比率が多く現れたことについて述べる。

「ようやく」の「会話文」における出現比率が『文学』では 5.5%、『毎日』では 11.1%であった。『毎日』において「会話文」での出現比率が増えた理由として、『文学』と比べ、『毎日』に直接引用文が多いからではないかと思われる。実際、「会話文」の中で直接引用文を調べてみると、『毎日』では (47) のような直接引用文が 81 例中 55 例、『文学』では

129 例中 7 例であったためである。例えば、『文学』では (48) のように、「会話文」が連続しているものがほとんどであった。

(47) 我部政明・琉球大教授（国際政治学）は「米国にとり、沖縄基地の重要性で日本側の言質を取るのは返還議論の大前提だった。65年1月の会談で両国はようやく返還への話し合いの入り口に立った」と解説する。（2008年12月22日）

(48) 「どういうこと？」悠由は美鈴を見た。「だって、悠由って、ふだんはすごくしっかきして見えるのに、ほんとはこーんなにこわがりなんだもん。だから、なんだか安心。ようやくほんとの友だちになれたみたいな気がするわ。」「人はうわべだけじゃわかんないって、森先生がいつも言ってるじゃない。」「そうだけどさ、とりあえず、うわべしか見えないもん。」「たしかに。」悠由はこっくりとうなずいた。  
(PB59\_00298『月が眠る家』2005)

『毎日』において、「会話文」に直接引用文が多く見られたことは、新聞記事が持つ特質からではないかと思われる。新聞記事というものは、ある事件や事故、事実、情報などについて、目撃者や被害者、関係者、話題の人物、ある分野の専門家などをインタビューし、それを記すことが多いため、直接引用文が多いと考えられる。

以上のように、「ようやく」が『文学』での「会話文」より、『毎日』での「会話文」の方に出現傾向が多いことから、「やっと」も「ようやく」と同様に『文学』より『毎日』の方に「会話文」での出現比率が多いと予想できる。しかし、表 5-7 のように、『毎日』と『文学』の「会話文」に現れる出現傾向は「ようやく」と異なっている。なぜ、「やっと」の直接引用文の数は、「ようやく」の直接引用文と類似して増える傾向が見られないのだろう。

それは、新聞記事というジャンルの特性から「やっと」より改まった表現である「ようやく」が選択されているのではないかと思われる。つまり、「やっと」と「ようやく」両方使うことができる文がある場合、「ようやく」が選択されたのではないかと考えられる。例えば、(49) のように、「やっと」と置き換えることができる文において、「ようやく」が選択されていることである。

(49) 我部政明・琉球大教授（国際政治学）は「米国にとり、沖縄基地の重要性で日本側の言質を取るのは返還議論の大前提だった。65年1月の会談で両国はようやく返還への話し合いの入り口に立った」と解説する。（2008年12月22日（47）再掲）

以上、新聞記事である『毎日』はジャンルが持つ特質から、「ようやく」は、『文学』より「会話文」における出現傾向に差が出ることと、『毎日』と『文学』では「やっと」が「ようやく」より「会話文」に多く現れることが明らかになった。

また、宮内（2012）は、BCCWJ 内のさまざまなジャンルにおいて、文体的特徴を述べ

ており、「文学」は「フォーマルでない話し言葉的」であるとし、「新聞」は「書き言葉的」であるとしている。また、「白書」は「フォーマルで書き言葉的」、「知恵袋」は「フォーマルでない・話し言葉的・丁寧・客観的」と述べている。

鯨井（2012）は、BCCWJにおいて、「新聞」が「書籍」「雑誌」より改まり度が高く、「白書」が「新聞」「雑誌」「書籍」より「書き言葉的」と指摘している。

また、鄭・他（2009）は、「国会会議録」については、改まった場でのフォーマルな発話でとりあげられる話題も客観性が重視されているとし、「知恵袋」については、個人が質問を投げかけ、ある個人が回答を寄せるインターネット掲示板で、相手が不特定とはいえ、待遇的な要素を含む場であるため、ある程度のフォーマルさが求められるとしている。また、「白書」について、典型的なフォーマルさを持つとし、「書籍」について、フォーマルさや客観性において特定しにくいジャンルであると述べている。

第4章のBCCWJにおけるジャンル別の出現傾向から、「やっと」は「知恵袋」「ブログ」に多く現れ、「ようやく」は「白書」「国会会議録」「教科書」に多く現れることが分かったが、上記の先行研究の成果により、「やっと」は話し言葉的な文章に「ようやく」は改まった文章に現れていると言える。

このことにより、「やっと」「ようやく」に関する金（2006）と江（2009a）の内省による指摘が正しかったことが分かった。しかしながら、文の伝達機能により「ブログ」の文体に少々差があることや「知恵袋」は質問と返答の形式で話し手の意識を考え、書き込む形式であること、「国会会議録」は話し言葉的であるが、書き言葉に変え記述されたことを考える<sup>5</sup>と、これらの三つのジャンルについては、より詳細な検討が必要であろうが本研究ではこれ以上触れない。

以上、本研究によりジャンルごとの出現傾向と、「会話文」と「地の文」における出現傾向から文体の差が明らかになった。

### 5.7.2 ジャンルによる「やっと」「ようやく」と共起する高頻度語の相違

ここでは、『毎日』と『文学』における「やっと」「ようやく」と共起する高頻度の述語について比較する。

次の表5-8は、ジャンル別に現れる両副詞と共起する高頻度語のうち出現頻度の高い順5位までをまとめたものである。

---

<sup>5</sup> 松田（2004）は、「国会会議録」について、「口語的特徴も多分に残しているが、書き言葉と話し言葉の中間的性格を持つものと位置づけるのが正しいものと思われる（p.23）」と述べている

表 5-8 ジャンルごとにおける両副詞と共起する高頻度語

順位	『毎日』		『文学』	
	やっと	ようやく	やっと	ようやく
1	する 50 (12.5%)	する 149 (21.8%)	する 155 (10.2%)	する 271 (11.9%)
2	できる 41 (10.3%)	なる 53 (7.7%)	なる 103 (6.8%)	なる 156 (6.8%)
3	なる 35 (8.8%)	できる 27 (3.9%)	分かる 80 (5.3%)	できる 95 (4.2%)
4	見つける 30 (5.0%)	出る 15 (2.2%)	できる 66 (4.3%)	開く 69 (3.0%)
5	来る 18 (4.5%)	始まる 15 (2.2%)	出る 51 (3.4%)	分かる 68 (3.0%)

表 5-8 から、『毎日』『文学』では、両副詞と共起する共通の高頻度語は 1 位が「する」である。各ジャンルにおいて順位はやや異なっているものの、両副詞と共起する高頻度語は、『毎日』では「する」「なる」「できる」、『文学』では「する」「なる」「できる」「分かる」である。

ここで、両ジャンルで両副詞と共起する共通の述語「する」「なる」「できる」の出現比率を合わせると、『毎日』では「やっと」が 31.6%、「ようやく」が 33.4%であり、『文学』では「やっと」が 26.6%、「ようやく」が 22.9%である。このことから、少ない語彙がやや高い頻度で用いられているのは、『文学』より『毎日』であることが分かった。

さらに、「やっと」「ようやく」と共起する述語のうち「出る」を取り上げ、検討した結果、『毎日』では、「やっと」は事態の成立を強調する「結局」「～の末」という最終段階を表す表現と共起しやすく、「ようやく」は（有標の）アスペクト形式「～し始める」との共起があることが分かった。

### 5.7.3 ジャンルによる「やっと」「ようやく」の「独自の語」の相違

#### 5.7.3.1 ジャンルによる「独自の語」の出現傾向

ここでは、『毎日』と『文学』における「やっと」「ようやく」の「独自の語」について比較する。

まず、『毎日』における両副詞の「(使用) 範囲・度数分布表」と『文学』における両副詞の「(使用) 範囲・度数分布表」における各頻度層の見出し語の出現比率を見る。以下の表 5-9 は、ジャンルごとに「(使用) 範囲・度数分布表」での見出し語の出現比率をまとめたものである。

表 5-9 「(使用) 範囲・度数分布表」の見出し語の出現比率<sup>6</sup>

	副詞	高頻度	中頻度	低頻度	合計
『毎日』	やっと	13.5%	24.8%	61.7%	100.0%
	ようやく	12.6%	27.9%	59.5%	100.0%
『文学』	やっと	8.1%	37.3%	54.6%	100.0%
	ようやく	8.0%	35.8%	56.1%	100.0%

表 5-9 から、やや相違が見られたのは、『毎日』において「やっと」の「低頻度」の見出し語の出現比率が 61.7%、「ようやく」が 59.5%、『文学』において「やっと」の「低頻度」の見出しの出現比率が 54.6%、「ようやく」が 56.1%である。

伊藤 (2008 : p.121) が述べている「頻度 1 の見出し語は語彙量の 50%前後を占めるのが普通である」ことを考えると、両副詞は『毎日』における「低頻度」の見出し語の出現比率が『文学』よりやや高いことから、「低頻度」の見出し語は多様な述語と共起していることが言えよう。この「低頻度」の見出し語の出現比率については、以降の第 7 章と第 9 章の結果と合わせ、第 10 章で述べる。

次に、以下の表 5-10 と表 5-11 は、『毎日』での「やっと」「ようやく」の「(使用) 範囲・度数分布表」からの「独自の語」と、『文学』での「やっと」「ようやく」の「(使用) 範囲・度数分布表」からの「独自の語」をジャンルごとにまとめたものである。

表 5-10 「やっと」の「独自の語」の出現頻度

ジャンル	『分類語彙表』における部門			合計
	抽象的關係	人間活動	自然現象	
『毎日』	14	16	0	30
『文学』	11	16	1	28
合計	25	32	1	58

表 5-11 「ようやく」の「独自の語」の出現頻度

ジャンル	『分類語彙表』における部門			合計
	抽象的關係	人間活動	自然現象	
『毎日』	38	23	2	63
『文学』	95	51	11	157
合計	133	74	13	220

<sup>6</sup> 表 5-9 は、『毎日』については第 5 章 5.5 の表 5-3 と表 5-4 から、『文学』については第 4 章 4.5 の表 4-4 と表 4-5 からまとめ、作成した。



表 5-10 と表 5-11 から、『毎日』と『文学』という異なるジャンルにおいて（「やっ」との「独自の語」は参考程度の合計しか現れないが）、「ようやく」は幅広い意味に使われていることが分かる。これらの出現頻度に差があるかカイ二乗検定を用いて検定した結果、表 5-10 の「やっ」とは有意差が認められなかった ( $\chi^2=1.2925$ 、 $p=0.52$   $p>0.05$ )。また表 5-11 の「ようやく」も有意差が認められなかった ( $\chi^2=1.334$ 、 $p=0.5133$   $p>0.05$ )。「ようやく」の「独自の語」は、『毎日』より『文学』に多く現れると言える。

次に、ジャンルごとに、「やっ」と「ようやく」の「独自の語」は、どのような意味分布があるのか比較する。

下記の表 5-12 は、ジャンルごとに「やっ」と「ようやく」の「独自の語」の出現比率について、『分類語彙表』の部門別に示したものである。また、表 5-13 は、表 5-12 におけるジャンルごとに現れる「やっ」と「ようやく」の出現比率について、両副詞間に比較し、出現比率が高い部門に「○」を付けたものである。

表 5-12 ジャンル別の「独自の語」の出現比率

ジャンル	副詞	抽象的關係	人間活動	自然現象	合計
『毎日』	やっ	46.7%	53.3%	0.0%	100.0%
	ようやく	60.3%	36.5%	3.2%	100.0%
『文学』	やっ	39.3%	57.1%	3.6%	100.0%
	ようやく	64.3%	28.7%	7.0%	100.0%

表 5-13 ジャンル別の「独自の語」の意味分布

ジャンル	副詞	抽象的關係	人間活動	自然現象
『毎日』	やっ		○	
	ようやく	○		○
『文学』	やっ		○	
	ようやく	○		○

(「○」記号は、「やっ」と「ようやく」のうち、分布の多い方である。)

表 5-13 から、「○」が付いた部門は『毎日』『文学』というジャンルに違いはないことが分かる。また、「抽象的關係」「自然現象」部門では「ようやく」の方が「やっ」より多く現れ、「人間活動」部門では「やっ」の方が「ようやく」より多く現れることが分かる。意味分布の傾向から、両副詞の「独自の語」は、ジャンルによる違いはなく、現れる部門において一定の傾向があることが明らかになった。

### 5.7.3.2 ジャンルによる「独自の語」の意味分布

ここでは、ジャンルによる「やっと」「ようやく」の「独自の語」の特徴について、副詞別に述べる。

まず、「やっと」の「独自の語」は、「抽象的關係」部門において、『毎日』では連続している事態が成立し、その進行過程の意味が含まれている。『文学』では入りにくい所に入れたことを表す時に現れるが、事態の成立に大変さと厳しさが感じられ、実際の空間への移動であるが、そこから意味が拡張され、抽象的な空間への移動を表すものが現れた。また、話し手の感情を表すものが現れるが、感情や感覚の成立も空間的に外側に広がったり、はっきり感じられた感覚から薄くなっていったりするなど空間的に遠くなっていくことを表わしている。

次に、「人間活動」部門において、『毎日』では「独自の語」が持つ語の意味により人の感情や思考を表しており、また、人の行為による成果を表している。

『文学』では主体が意志を持ち制御できない人の状態の変化を表し、人のある行動が相手の状態に影響を与えることが現れた。

さらに、「自然現象」部門において、『文学』では目に見える身体上の状態の変化を表している。例えば、はっきり見られた注射の跡が薄れていく、遠くなっていくなどで上記の「抽象的關係」と同様の解釈ができると思われる。『毎日』では「独自の語」が現れなかった。

また、「ようやく」の「独自の語」についてジャンルごとに比較する。

まず、「抽象的關係」部門において、『毎日』では散らばっていた事態が一つの所に集まったり、遠く離れていたものが接近してきたりして成立するものが現れた。また、事態に何かが付加わったり、その量が増えたりするものが見られた。さらに、人の感情などがある抽象的なレベルに達したり、近づいたり、ある抽象的な状況から出たりすることを表している（面白い結果として、「やっと」はある過程を経て具体的な所への移動を表しているが、「ようやく」は抽象的な移動を表しているものが現れた）。

『文学』では「やっと」と相反した結果が見られ、「独自の語」と係る補語（予感、考え、実感、悲しみと絶望感、自尊心など）によって感情と思考を表しており、外に散らばっていた考えが内側にまとまることを表わしている。また、自分に起きないことだと遠く思っていた考えが実感として近く迫ってくるものが見られた。さらに、悲しみと絶望感から出たことで心を空間に例え、移動的に捉えられる。また、満たされなかった自尊心が満たされることを、空間に例えた心が満ちることを表わしている。

また、「人間活動」部門において、『毎日』では「独自の語」と係る補語との結合により人の感情・思考を表しており、また、人の行為による状況の変化を表している用例が見られた。さらに、時間の経過を表す表現との共起が見られた。『文学』では主体が意志を持ち、制御できる人の感情や思考を表している。両ジャンルにおいて「独自の語」と係る補語により人の感情や思考を表す点が共通している。また、人の発言行為により、相手に影響を

及ぼすことを表している。

さらに、「自然現象」部門において、『毎日』では人や物事の状態の変化を表している。また、「ようやく」は、事態の成立が開始することを表す（有標の）アスペクト形式である「～し始める」との共起が見られた。また、『文学』では（目に見えない）人の感覚の変化、自然現象に現れた。

## 5.8 本章のまとめ

ここでは、『毎日』と『文学』を用い、「やっと」「ようやく」について、文体の相違や「独自の語」の意味分類の検討から明らかになったことを以下に述べる。

まず、BCCWJにおけるさまざまなジャンルでの出現傾向から両副詞の文体について、「やっと」はより話し言葉的でくだけた文章に現れ、「ようやく」は改まった書き言葉的な文章に多く現れることが明らかになった。

また、「地の文」と「会話文」における出現傾向について、『毎日』では両副詞の出現頻度に有意差が認められたが、『文学』では両副詞の出現頻度に有意差が認められなかった。しかしながら、出現傾向は『毎日』『文学』という異なるジャンルにおいて、「やっと」の方が「ようやく」より「会話文」に多く現れることは明らかになった。また、「ようやく」について、『毎日』と『文学』において「会話文」での出現傾向を検討すると、『毎日』における「会話文」での比率が高いことは新聞の特質と「ようやく」が改まった文に多く現れる文体の差からの結果だと思われる。

さらに、『毎日』と『文学』における両副詞の出現頻度は「ようやく」の方が多く現れたものの、出現頻度に有意な差は認められなかった。

次に、両副詞と共起する高頻度語の出現傾向について述べる。

『毎日』『文学』の両ジャンルにおいて、高頻度語「する」「なる」「できる」が共通して現れた。これらの述語の出現比率を合わせると、『毎日』では「やっと」が 31.6%、「ようやく」が 33.4%であり、『文学』では「やっと」が 26.6%、「ようやく」が 22.9%であった。ジャンルにより出現比率の合計はやや異なっているものの、それぞれのジャンルで両副詞の出現傾向は似ていることが明らかになった。この結果から、限られた語彙が高い頻度で用いられているのは『文学』より『毎日』の方であることが分かった。また、両副詞と共起する高頻度語から、「やっと」は事態の成立を強調する「結局」「～の末」という最終段階を表す表現と共起しやすいことが明らかになった。

さらに、益岡・田窪（1992）は「やっと」「ようやく」を「アスペクトの副詞」と称したため、両副詞は（有標の）アスペクト形式との共起が多いと予想されたが、「独自の語」の現れる文から、「やっと」とアスペクト形式との共起は見られず、「ようやく」とのみ「～し始まる」が確認できた。従って、「やっと」より「ようやく」の方が事態の成立において、時間的局面的のうち、開始を表す表現と共起する傾向があると言える。

また、両副詞の「独自の語」のそれぞれについて、『分類語彙表』を用いて意味分布を調

べたところ、副詞ごとによく現れる部門があることが明らかになった。「やっと」は「人間活動」部門により多く現れ、「ようやく」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れた。この傾向はジャンルによる違いは見られず、『毎日』『文学』両ジャンルに同様な傾向が見られた。また、「独自の語」の意味分布について、以下、ジャンルごとに述べる。

「やっと」の「独自の語」は「抽象的關係」部門において、両ジャンルに共通している特徴は連続する事態が成立し、その進行過程の意味が含まれているということである。『文学』では事態の成立までの大変さと厳しさが感じられるものが現れた。また、人の移動や感情、感覚が外側に広がる様子が窺えるものが現れ、空間的に遠くなっていくことを表わしているものが多かった。

一方、「ようやく」の「独自の語」は、「抽象的關係」部門において、『毎日』『文学』共に、事態が遠い所から近い所や一つの所に集まってくる表現が見られた。

「やっと」「ようやく」は「抽象的關係」部門において、人の感情を空間的に捉えている点で共通しているがその方向性、捉え方に違いがあることが明らかになった。

次に、「やっと」の「独自の語」は、「人間活動」部門において、『毎日』では人の感情や思考、人の行為による成果を表しており、『文学』では主体が意志を持ち制御できない人の状態の変化、人の行為により相手の状態に影響を及ぼすものが現れた。『文学』の方が主体の感情や行為にとどまらず、相手にまでその行為の影響を与える点で『毎日』における人の行為とやや異なっている。

一方、「ようやく」の「独自の語」は、「人間活動」部門において、『毎日』では人の感情・思考・人の行為による状況の変化を表すものが現れ、『文学』では主体が意志を持ち制御できる人の感情・思考を表し、人の発言行為により相手に影響を及ぼすことを表わしている。

また、「やっと」の「独自の語」は、「自然現象」部門において、『文学』では可視的な人の状態の変化であるが、『毎日』ではそのような用例は現れなかった。また、「抽象的關係」部門と同様に事態が空間的に拡張していく用例が多かった。

一方、「ようやく」の「独自の語」は、「自然現象」部門において、『毎日』では人や物事の状態の変化を表し、『文学』では自然現象と人の感覚を表しているものが現れた。

## 第6章 BCCWJに見られる「ついに」「とうとう」の相違

本章と第7章では、類義関係にある「ついに」「とうとう」の相違を明らかにするために、本章では、BCCWJを用い、第7章では、『毎日』を用い、両副詞の出現傾向と、「地の文」「会話文」での出現傾向から文体の差、また、両副詞と共起する述語の出現傾向と「独自の語」について検討していく。

### 6.1 はじめに

第4章と第5章では、「ある事態の実現に長い時間がかかる」という共通の特徴を持つ類義語「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」の中で、「やっと」「ようやく」について検討した。本章では、四つの類義語のうち文末に否定形式が来られる「ついに」「とうとう」の違いについて検討する。

「ついに」「とうとう」に関する先行研究は、第2章2.3.1と2.3.4で述べたように、「やっと」「ようやく」についての先行研究と同様、バランスのとれたデータを用いておらず、検討の結果も数値で示していないなど、検討結果に客観性が欠けていると思われる。

そこで、本章では、「ついに」「とうとう」の違いを明らかにするため、均衡コーパスであるBCCWJを用い、両副詞のジャンルごとの出現傾向と、『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにする。また、「ついに」「とうとう」と共起する述語のうち中頻度語の「独自の語」を中心に、その意味分布から両副詞の相違を明らかにする。

この章の構成は、第2節では本章の目的について、第3節では、調査データについて、第4節では、両副詞の文体の差について、第5節では、両副詞と共起する述語の出現傾向と「独自の語」の意味分布について述べる。最後の第6節では、本章の結果をまとめる。

### 6.2 本章の目的

本章では、類義関係にある「ついに」「とうとう」について、BCCWJを用い、BCCWJにおけるさまざまなジャンルによる出現傾向から文体の差を、また、『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにする。さらに、両副詞と共起する述語（中頻度語のうち「独自の語」）の出現傾向を検討し、「独自の語」の意味分布から両副詞の違いを明らかにすることを目的とする。

### 6.3 調査データ

本節では、本章で用いる調査データについて述べる。

『中納言』から用例を検索する際、「ついに」は〈ついに〉〈遂に〉〈ツイニ〉をキーワードにし、「とうとう」は〈とうとう〉〈トウトウ〉〈到頭〉をキーワードにした。抽出された用例は「書籍」において「ついに」は〈ついに〉が3199例、〈遂に〉が461例、〈ツイニ〉

が0例であり、「とうとう」は〈とうとう〉が1325例、〈トウトウ〉が4例、〈到頭〉が17例であった。

「ベストセラー」において「ついに」は〈ついに〉が257例、〈遂に〉が54例、〈ツイニ〉が0例であり、「とうとう」は〈とうとう〉が109例、〈トウトウ〉が0例、〈到頭〉が1例であった。

このような「書籍」と「ベストセラー」以外のジャンルごとの出現傾向については次の6.4.1表6-1で示す。

- (1) 女達が、口々に囁きながら稲子と新聞を取り囲む。『凶悪ピストル強盗ピス完遂に捕縛さる』記事によれば、ピス完は哈爾濱の日本人経営の料理屋に泊まっていたところを、踏み込んできた刑事にあっさりと捕まった。(PB49\_00210『偽偽満州』2004)
- (2) 滝は一点のかげりもなく、燃え盛っている。その目に焼き付く新鮮なピンク色は、何事もなかったかのように途切れることなくとうとうと流れ落ちる。(LBf9\_00203『新月闇の結晶』1991)
- (3) 犯人の父親の姿は見え、その風貌を見ることはできなかったが、彼は、あれは自分の気に入ったことなら大人しゅうしとるが、気に入らんことがあれば切れるどうしようもない子、というようなことを、まるであかの他人の素性を評論するような口調でとうとうと述べている。(PB49\_00425『空から恥が降る』2004)

上記のように、「書籍」と「ベストセラー」から抽出された用例のうち『文学』に現れる両副詞の出現頻度を示すと、「ついに」は、「書籍」には1401例、「ベストセラー」には206例現れ、合計1607例である。一方、「とうとう」は、「書籍」には727例、「ベストセラー」には73例現れ、合計800例である。

そのうち「ついに」は、上記の(1)のように、検討対象と異なる語や重複の用例、執筆者の生年代が1890年代までの用例などを除くと、1544例となる。「とうとう」は(2)(3)のように、検討対象と異なる語と執筆者の生年代が1890年までのものなどを除くと749例となる。これらの用例を、『文学』における「ついに」「とうとう」と共起する述語を検討する際の用例とする。

次節では、「ついに」「とうとう」のジャンルによる出現傾向から文体の差について、また、両副詞と共起する述語の出現傾向について検討していく。

## 6.4 「ついに」「とうとう」の文体と共起する述語

### 6.4.1 ジャンルごとに現れる「ついに」「とうとう」の出現傾向

本節では、BCCWJにおける「ついに」「とうとう」の出現傾向から文体の差について検討する。下記の表 6-1 は両副詞のジャンルごとの出現傾向をまとめたものである。

表 6-1 ジャンル別の出現傾向

サブコーパス	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
書籍	3660	70.7%	1346	72.6%
ベストセラー	311	6.0%	110	5.9%
新聞	28	0.5%	4	0.2%
雑誌	292	5.6%	51	2.8%
白書	12	0.2%	0	0.0%
国会会議録	21	0.4%	17	0.9%
教科書	37	0.7%	8	0.4%
知恵袋	76	1.5%	52	2.8%
広報誌	15	0.3%	3	0.2%
韻文	25	0.5%	2	0.1%
法律	0	0.0%	0	0.0%
ブログ	699	13.5%	261	14.1%
合計	5176	100.0%	1854	100.0%

表 6-1 から、ジャンル別に現れる「ついに」「とうとう」の出現比率を比較してみると、「書籍」「雑誌」「知恵袋」では、両副詞の出現比率の差が1%を超えており、「書籍」「雑誌」「知恵袋」以外のジャンルでは1%以下の差があることから、両副詞の出現比率は数値的に大きな差は見られないと言えよう<sup>1</sup>。

しかし、出現傾向として、「ついに」は「ベストセラー」「新聞」「雑誌」「白書」「教科書」「広報誌」にやや多く、「とうとう」は「書籍」「国会会議録」「知恵袋」「ブログ」にやや多く現れることが分かる。

このようなジャンル別の出現傾向から言えることは、第4章 4.4.1 で述べたように、「とうとう」は、「知恵袋」「ブログ」など読み手を意識した話し言葉的な文体に現れることと、

<sup>1</sup> まず、両副詞の出現比率は「書籍」では「とうとう」の方が「ついに」より1.9%多く、「ベストセラー」では「ついに」の方が0.1%多く、「新聞」と「教科書」では「ついに」の方が0.3%多い。「雑誌」では「ついに」の方が2.8%多く、「白書」では「ついに」の方が0.2%多く、「国会会議録」では「とうとう」の方が0.5%、「知恵袋」では「とうとう」の方が1.3%多い。また、「広報誌」では「ついに」の方が0.1%、「韻文」では「ついに」の方が0.4%多く、「ブログ」では「とうとう」の方が0.7%多い。

「ついに」は、「白書」「新聞」のように専門性が高い文章である書き言葉的な文体に現れることである。また、鯨井（2012）は、「白書」「新聞」が「雑誌」より改まり度が高いと指摘しているが、「ついに」は改まった文章に現れやすく、「とうとう」はくだけた文章に現れやすいと言えるだろう。

ところで、表 6-1 から BCCWJ のジャンルごとに現れる両副詞の出現頻度を合わせると、「ついに」が 5176 例、「とうとう」が 1854 例であり、「とうとう」は「ついに」の半分にもならない出現の値である。

ここで、第 4 章 4.4.1 の表 4-1 「やっと」「ようやく」のジャンル別の出現傾向を参照すると、「やっと」の出現頻度の合計は 5515 例、「ようやく」の出現頻度の合計は 5272 例である。類義関係にある「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」のことを考えると、「とうとう」の出現頻度の合計の少なさが気になる。この点については検討すべきであるが、本章では、出現頻度の合計の相違だけを指摘しておく。

#### 6.4.2 『文学』における「地の文」と「会話文」の出現傾向

ここでは、「書籍」「ベストセラー」の下位区分である『文学』における「ついに」「とうとう」の「地の文」と「会話文」での出現傾向を検討する。

「会話文」の認定について、「ついに」には下記の (4) (5) (6) (7) のような形で会話を表していると思われる用例が見られたため、これらの用例を「会話文」と認定し、カウントした。

- (4) —ああ、嘉兵衛さんか。どうしたんや？安蔵が話しかけてくる。嘉兵衛は、なるほど、生きている人間には自分の姿は見えないが、死者には見えるのだと思う。自分も安蔵のように半透明なんやろうな。安蔵が少しずつ、ベッドから離れ、上昇していく。—おお、安蔵、おまえもついに死んでしもたんやな。—しんどかったわ。肝臓ガンやったから、もう痛うて痛うて。やっと楽になれたわ。嘉兵衛さんはいつのまに？なんで逝ったんや。—飢え死にや。恥かしいわ。—まあ、しゃあないよ。ひとり暮らしやったしな。—そやな。安蔵が病室の天井を突き抜けて上昇していくので、嘉兵衛もそれについていく。(PB39\_00020『さよなら』2003)
- (5) 作：それはそれでもいーんじゃないかとは思うんだが。L：サイン入り作者の財産、とかゆーのは結構喜ばれるかも...作：いやじゃああつ！L：ちつ、心の狭い奴。さてさて、それで今回のイベントですけど、ファン・レターの中にも要望があった、『ついに来た！パターン通りのキャラクター人気投票！』を開催しますっ！作：それって確か...喜喜丸さんの同人誌の方でもやってなかったっけ...？さてはクイズの出題ネタが尽きたな？(LBf9\_00206『聖王都動乱』1991)
- (6) 三田 何を言っているんですか。遠藤 あの頃が懐かしい。(急に思い出し) 秋だったなァ、落ち葉のなかを二人で散歩していたら、君が「好きよ」なんて言って。



三田（びっくりして）そんなこと言ってない。なんか錯覚してる。遠藤 じつと君がぼくを見て。スキよ...か、オレもついに三田佳子から好きだと言われる人間になったなァと思って。でも「よしたまえ、オレには妻子があるんだ」って。苦しかったなあ、あの時のぼくは。うーん、その頃とまったく変わってない。そんなに笑ってもシワひとつ出ないんだから。三田 前にね、「あなたはシワが出ないように笑う」と言われたことがあるんです。（LBf9\_00123『快女・快男・怪話』1991）

- (7) 今更特に刑事への陳述を翻す訳にも行かなかった。生活費の不足額から追窮されて遂に新築家屋抵当問題の陳述に 這入る。答 高利貸しから借りた金も御座います。一、問 何程、また何時誰より借りたのか？答大正十五年一月十日牛込区早稲田町の高利貸しで平川省三と云う人から五百円借り受けました。一、問 高利貸しの金を借りるのに誰か紹介者があったか？答 新聞広告を見て二人で参りました。（PB49\_00409『三角寛サンカ選集』2004）

『文学』における「地の文」と「会話文」での「ついに」「とうとう」の出現傾向をまとめると、表 6-2 となる。

表 6-2 「地の文」と「会話文」での出現傾向

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
地の文	1406	91.1%	609	81.3%
会話文	138	8.9%	140	18.7%
合計	1544	100.0%	749	100.0%

表 6-2 から、「会話文」において「ついに」は 138 例（8.9%）現れ、「とうとう」は 140 例（18.7%）現れた。ここで、「地の文」と「会話文」に現れる両副詞の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（ $\chi^2=45.035$ 、 $p<0.05$ ）。この結果から、『文学』において「とうとう」が「ついに」より多く「会話文」に現れることが分かる。

石川（2006）は、「会話文」における「ついに」「とうとう」の出現傾向について、『プロジェクト X』では「ついに」が 448 例中 15 例（3.3%）現れ、「とうとう」が 46 例中 10 例（21.7%）であると述べ、「新潮文庫」では「ついに」が 81 例中 4 例（4.9%）現れ、「とうとう」が 16 例中 4 例（25.0%）であると述べている。

山本（2007）は、『山本五十六（上）（下）』を資料として、「ついに」「とうとう」が「会話文内」に現れるものと、「会話文に關与」しているもので二つの項目に分けて検討し、「会話文内」においては「ついに」の出現は用例 17 例中 1 例（5.9%）現れ、「とうとう」の出

現は用例 16 例中 5 例 (31.3%) 現れており、「会話文に關与」においては「ついに」の出現は、用例 17 例中 1 例現れ、「とうとう」の出現は、16 例中 3 例現れていると述べている (山本の「会話文内」におけるパーセンテージは筆者が記入)<sup>2</sup>。しかし、山本 (2007) の結果は、『文学』と同様の小説を用いた結果であるが、用例の数が少ないため、「地の文」と「会話文」における「ついに」「とうとう」の出現比率を本章と比べることは適切ではないと判断する。また、石川 (2006) の用いた『プロジェクト X』は、メディアミックス版で小説や新聞と異なるジャンルであるため、本章と直接比較することは適切ではないだろう。

しかしながら、ここで言えることは、「会話文」における出現傾向は、小説である『文学』『新潮文庫』でも、『プロジェクト X』でも「ついに」より「とうとう」の出現頻度が高いことである。

両副詞の「会話文」における出現比率を『文学』『新潮文庫』『プロジェクト X』の順で見ると、「ついに」は 8.9%、4.9%、3.3%、「とうとう」は 18.7%、25.0%、21.7%である。両副詞の出現比率の差は『文学』では「とうとう」の方が 9.8%多く、「新潮文庫」では「とうとう」の方が 20.1%多く、『プロジェクト X』では「とうとう」の方が 18.4%多い。

これらのことから、「ついに」「とうとう」の「地の文」と「会話文」での出現傾向は、小説とメディアミックスというジャンルにおいて、「ついに」より「とうとう」の方が多いものの、両副詞の間の出現傾向は、ジャンル別にやや異なることが分かる。

以上、ジャンルごとの出現傾向から「ついに」「とうとう」の現れる文体の差と、『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を検討した。

検討の結果、ジャンルごとの出現傾向から、「とうとう」はよりくだけた文章に現れやすく、「ついに」は改まった文章に現れやすいことが分かった。また、『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向からでも、「とうとう」の方が「ついに」より話し言葉的であり、出現傾向はジャンルによって異なることが明らかになった。

### 6.4.3 『文学』における「ついに」「とうとう」と共起する述語の出現傾向

#### 6.4.3.1 除外した項目

ここでは、「ついに」「とうとう」と共起する述語の出現傾向を検討する前に、両副詞と共起する述語がないものなど、除外した用例について述べる。

- (8) —あの子は非行というか、犯罪を重ねて、保護観察を受け、ついには少年院にも。

(LB09\_00199 『監獄女医』 2000)

---

<sup>2</sup> 石川 (2006) の用いたデータは、『プロジェクト X—挑戦者たち (メディアミックス版)』(第 1 巻から第 26 巻まで) で、総計、約 6,175,488 字であり、新潮文庫 10 作品で総計、約 2,171,776 字である。抽出された用例は、「やっと」が 195 例、「ようやく」が 418 例である。また、山本 (2007) の用いたデータは、『山本五十六 (上) (下)』で、総語数 261,427 語数、抽出された用例は、「ついに」が 17 例、「とうとう」が 16 例である。

- (9) その警告は、それ自体としては実社会に対して、鏡が無力であると同じく、ついに無力であるだろう。(LBp9\_00064『生き急ぐ』2001)
- (10) 毎日徹底的にいじめ抜かれ、ついに登校拒否。(PB29\_00484『いじめへの逆襲』2002)
- (11) <とうとう生まれたか。男の子。十四年ぶりの長男だ。とうとう!!ありがとう、愛子!>(OB2X\_00047『愛、見つけた』1983)

「ついに」は、上記の(8)のように、「ついに」と共起する述語が省略されている用例13例、(9)のように、述語が「名詞+助動詞」である用例9例、(10)のように、「体言止め」の用例7例を除外した。

一方、「とうとう」は、「ついに」と同様に、述語が省略されている用例8例、述語が「名詞+助動詞」の用例2例、(11)のように、「とうとう」で文が終わる用例2例を除外した<sup>3</sup>。

以上の用例を除外し、「ついに」は1515例、「ようやく」は737例を、両副詞と共起する述語の検討の対象とする。

#### 6.4.3.2 「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語

「ついに」「とうとう」と共起する述語を出現頻度の高い順10位までまとめたものが、次の表6-3である。

次の表6-3から、出現頻度順は「ついに」が「する」(1位)、「とうとう」が「なる」(1位)であり、その後「ついに」が「なる」(2位)、「とうとう」が「する」(2位)である。10位以内に入る共通している動詞は、「する」「なる」の他に、「来る」「できる」「言う」「出る」「諦める」であり、5位まで1位と2位の順位が逆転しているだけで両副詞と共起する共通の高頻度語が多かった。

ここで、5位まで共通している動詞「する」「なる」「来る」「できる」「言う」の出現比率を合わせてみると、「ついに」が38.4%、「とうとう」が35.1%であり、両副詞とも約4割近く少ない語彙が高い頻度で現れていることが分かった。

<sup>3</sup> 本論文においては「ついに」「とうとう」と共起する述語について、構文的な観点での検討は行わない。参照データとして趙(2009)の研究を挙げる。趙(2009)は、両副詞の相違について、3年分の『毎日』を用いて使用頻度を分析した。その結果、共起する述語のテンスについて(先行研究では過去形が多いと指摘されているが)、「非過去形」は「ついに」が4割程度、「とうとう」が2割程度であるとし、両副詞と共起する述語について、「名詞+助動詞」は「ついに」が18例(1.1%)、「とうとう」が2例(0.7%)であるとしている。また、「ついに実現!」「ついにスタート!」のような「体言止め」について(ルチラ(2005b)は、(新聞)広告などで多く見られ、結末としての目標達成を強調しない「とうとう」には、「体言止め」の用法で用いられないと指摘している)、「ついに」が257例中132例(51.4%)現れ、「とうとう」が18例中8例(44.4%)現れたと述べている。本章では、「とうとう」と共起する述語に「体言止め」は現れなかったが、第7章『毎日』における検討では、「とうとう」に「体言止め」が13例現れた。両副詞と共起する述語のうち、「体言止め」についてはこれ以上触れないが、BCCWJ内の『文学』において、「とうとう」と共起する述語に「体言止め」が現れないことから、「体言止め」の形式はジャンルにより相違があると言えよう。

また、「ついに」のみ共起する高頻度語「現れる」「開く」「至る」は、「とうとう」でも「現れる」が17位、「開く」が11位、「至る」が16位に現れた。同様に「とうとう」のみ共起する高頻度語「やってくる」「行く」も、「ついに」に「やってくる」が14位、「行く」が17位で共起して現れた。しかし、「とうとう」と共起する「泣く」は、「ついに」とは共起せず、「とうとう」のみ共起しており、「泣く」以外、高頻度語は互いに共通していることが分かった。

表 6-3 「ついに」「とうとう」と共起する高頻度の動詞

ついに				とうとう			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	する	275	18.2%	1	なる	97	13.2%
2	なる	169	11.2%	2	する	69	9.4%
3	来る	51	3.4%	3	来る	27	3.7%
4	できる	31	2.0%	4	できる	22	3.0%
5	言う	23	1.5%	5	言う	21	2.8%
6	現れる	21	1.4%	6	やってくる	14	1.9%
7	出る	18	1.2%	7	出る	13	1.8%
8	開く	17	1.1%	8	行く	11	1.5%
9	至る	15	1.0%	9	泣く	10	1.4%
10	諦める	14	0.9%	10	諦める	9	1.2%

では、両副詞と共通に共起する高頻度語は文に現れる際、どのような特徴があるのか疑問である。そこで、表 6-3 より出現比率が「ついに」で3.4%、「とうとう」で3.7%現れ、やや近い比率である「来る」を用いて両副詞にどう現れるのか検討する。

- (12) わたしは取り乱さず別れのことばを言おうと決心した。結婚したわけではない。それほど長い時間、いっしょにいたわけでもない。永遠のように感じられた時間にもついに終わりが来た。(LBm9\_00096『躁うつ病を生きる』1998)
- (13) 今までになく乱暴な書体だった。次のページも同じだ。—とうとう Pから返事が来ない。読んでくれたのだろうか。いや、きっと読みやしないんだ。(LBi9\_00179『湖底のまつり』1994)

「来る」を検討した結果、人がある場所に来ること以外、(12)のように、ある時(終り・冬・日・朝など)が来ること、また、(13)のように、抽象的なもの(返事・がんが肝臓に・順序・命令など)が来ることを表している。(12)では、ある時間的な事態が来ることを表

し、(13) では、時間以外の事態が来ることを表しているが、両方の意味で現れた「来る」は、両副詞に共に現れ、両副詞に違いは見られなかった。

次に、「出る」を用い、両副詞にどう現れるのか検討する。

(14) 仕事や人間関係や借金、などという俗物的な出来事にうんざりし、ことについて、いつしか、地球はコッパミジンになるのではないかと考え、大変だ、大変だ、と地球連邦長官にでもなった心境で困惑していたりする。その間にも秋はますます深まり、ついに旅に出る。(OB1X\_00041『こんな女と暮らしてみたい』1980)

(15) いくら、今夜のオペラが見ものだとはいっても、彼ら全部がここへやって来るなんて、偶然にそんなことが起りうるだろうか？そう考え出すと、裏に何かありそうな気がして来る。晴美の悪いくせである。じっとしていられなくなって、とうとう晴美もボックス席を出た。(OB3X\_00178『三毛猫ホームズの歌劇場』1986)

「出る」を検討した結果、上記の(14)のように、移動・発着の意味で使われるものと、(15)のように、ある場所から出るという意味で使われるものがあるが、両副詞は共にこの二つの意味と共起しており、上記の「来る」と類似し、高頻度語と共起する両副詞において意味上大きな違いは見られなかった。

ところで、用例の中には、下記の(16)(17)(18)のように、「とうとう」が類義関係にある副詞と共に現れる用例が見られた。

(16) 新太郎は言って息を継ぐ。「さて、この人魂売りが塔の中に入って、とうとうついに出てこなかった。これは中で人魂売りが扮装を解いたからでしょうか。ところが、すると妙なことが起こるんです。つまり、三人のうち誰かが人魂売り、つまりは火炎魔人だと考えられるわけだけれども、左吉は体格からいって人魂売りではない。直さんが死んだあとも、人魂売りは現れているから、直さんもまた犯人ではない」(LBn9\_00151『東京異聞』1999)

(17) -あたし、どうしたらいいんだろう？ それでも、あたしは、楽しそうに話しこんでいる虹子ちゃんや三島くんや林太郎さんや綾ちゃんには、言葉をかけることができなかった。頭の上を見上げると、春の青い闇に、桜の花びらがひらひら舞っていた。6好きだから、言えない...-4月8日。始業式。あたしは、とうとう、というか、やっと、というか、高校3年生になった。(LBj9\_00117『婚約時代・18歳』1995)

(18) ローラが、三人の幼子と借金の山と、木っ端みじんになった職業上の向上心とともにジョーを見捨てて家を出て行ってから、彼は何年も眠ることができなかった。だがついに、ようやく悪魔を征服し、自らを人生におけるよき場所へと導き、そしてまた眠れるようになった。(PB29\_00292『パラダイスに囚われて』2002)

このように連続して現れることは何を意味するのかについて検討する。両副詞は用法に違いがあまりないこと、つまり、類義の度合いが高い類義語であるため、可能な現れ方ではないかと思われる。

森田（1989）は、「とうとう」について、『とうとう』も『ついに』と近い意味を持ち、ほとんどすべての例が『ついに』と置き換えられる。用法上の違いはないが、意味的には多少の違いが認められる<sup>4</sup>と述べているが、(16)のように、「とうとう」と「ついに」が連続して現れることは、非常に類義の度合いが高い類義語であるため可能な現れ方であり、強調の意味が増す効果があると考えられる。

(17)も「とうとう」と「やっと」が一つの文に共に現れており、(18)も「ついに」と「ようやく」が一つの文に共に現れている。しかし、(17)では“というか”であり、(18)では“、”で二つの副詞の間は離れている。このような現れ方から、「とうとう」と「やっと」、「ついに」と「ようやく」は、お互い置き換えられる類義関係にあることが確認できる。しかしながら、「とうとう」「ついに」以外に、ある副詞が先に現れ、その副詞と類義関係にある副詞が連続して現れる例は見られなかった。

以上、「ついに」「とうとう」と共起する高頻度の述語を検討したが、第4章4.4.2の「やっと」「ようやく」と類似し、「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語からは両副詞の違いを明らかにしにくい副詞であると言えよう。

次節では中頻度語のうち「独自の語」を用い、その意味分布から両副詞の相違について検討していく。

## 6.5 「独自の語」からの「ついに」「とうとう」の相違

本節では、「使用度数の算出法」により、「独自の語」を抽出し、『分類語彙表』を用いて意味分類をする。その意味分布から「ついに」「とうとう」の違いを明らかにする。

次の表6-4と表6-5は、「ついに」「とうとう」それぞれの「(使用)範囲と度数分布」をまとめた表である。

表 6-4 「ついに」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『文学』範囲(補正前)		『文学』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	275~9	0%~49.9%	19	2	39	9	48	10.2%
	8~5	~60.4%	20	7				
中頻度	4~3	~69.2%	22	19	62	<b>62</b>	124	26.4%
	2	~80.3%	40	43				
低頻度	1	~100.0%	62	236	62	236	298	63.4%
合計	1515		163	307	163	307	470	100.0%

<sup>4</sup> 第2章2.3.1の表2-2で述べた内容である。

表 6-5 「とうとう」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『文学』 範囲(補正前)		『文学』 範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	97~5	0%~49.4%	19	1	40	5	45	15.7%
	4~3	~61.9%	21	4				
中頻度	2	~72.2%	31	7	31	7	38	13.2%
低頻度	1	~100.0%	92	112	92	112	204	71.1%
合計	737		163	124	163	124	287	100.0%

表 6-4 と表 6-5 から、両副詞の見出し語の比率は、類義関係にある他の副詞（第 4 章 4.5 の表 4-3 と表 4-4、第 5 章 5.5 の表 5-2 と表 5-3）の見出し語の比率と比べると、やや異なる傾向が見られる。それは、表 6-4 と表 6-5 に見られるように、両副詞の「低頻度」の見出し語の比率は、「ついに」が 63.4%、「とうとう」が 71.1%である。

伊藤（2008）が述べている「低頻度」の比率（「低頻度」が約 50%前後に現れるのが普通であること）と比べると、両副詞の「低頻度」の見出し語の比率がやや高いことが分かる。この「低頻度」の見出し語の出現比率については、第 10 章で他の副詞の比率と比較するが、ここで言えることは「とうとう」の方が多様な頻度 1 の語と共起していることである。

次に、表 6-4 と表 6-5 から抽出された両副詞の「独自の語」は、「ついに」が 62 語、「とうとう」が 7 語である。（「とうとう」の「独自の語」は参照程度しか現れなかったが、）この「独自の語」について、『分類語彙表』を用いて意味分類をすると、次の表 6-6 のようにまとめられる。

表 6-6 から、「独自の語」が現れる意味分布の各部門の出現比率を見ると、「抽象的關係」「人間活動」「自然現象」部門において、「ついに」の「独自の語」の方が「とうとう」の「独自の語」より出現する意味範囲が広く、「ついに」の「独自の語」は「抽象的關係」部門と「自然現象」部門にやや多く、「とうとう」の「独自の語」は、「ついに」と比べ、「人間活動」部門にやや多く現れることが分かる。

では、これらの出現の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ( $\chi^2=11.0642$ ,  $p=0.0039$   $p<0.05$ )。

表 6-6 「ついに」「とうとう」の「独自の語」の意味分布

意味分布			ついに		とうとう	
部門	中項目		頻度	比率	頻度	比率
抽象的關係	2.11××	類	5	3.5%		
	2.12××	存在	6	4.2%	1	7.1%
	2.15××	作用	72	50.0%	1	7.1%
小計			83	57.6%	2	14.3%
人間活動	2.30××	心	28	19.4%	6	42.9%
	2.31××	言語	7	4.9%		
	2.33××	生活	7	4.9%		
	2.34××	行為	8	5.6%		
	2.35××	交わり	4	2.8%	6	42.9%
	2.36××	待遇	2	1.4%		
	2.37××	経済	1	0.7%		
小計			57	39.6%	12	85.7%
自然現象	2.51××	物質	2	1.4%		
	2.57××	生命	2	1.4%		
小計			4	2.8%	0	0.0%
総計			144	100.0%	14	100.0%

次に、各部門における中項目と、各中項目における分類項目について、用例を上げ、検討していく。

まず、「抽象的關係」部門において、「ついに」の「独自の語」は、中項目「類」「存在」「作用」に現れ、一方、「とうとう」の「独自の語」は、中項目「存在」「作用」に現れ、両副詞における共通の中項目は「存在」「作用」である。ここで注目したいのは、「ついに」における「独自の語」の5割が「作用」に現れており、「ついに」の「独自の語」の意味分布がやや偏っている点である。各中項目における分類項目は以下の通りである。

「ついに」の「独自の語」は、「類／本来」<sup>5</sup>、「存在／消滅」に現れ、中項目「作用」において、分類項目「作用・変化」「変換・交換」「終了・中止・停止」「固定・傾き・転倒など」「進行・過程・経由」「移動・発着」「走り・飛び・流れなど」「連れ・導き・追い・逃げ」「進退」「入り・入れ」「漏れ・吸入など」「上がり・下がり」「乗り降り・浮き沈み」「合体・出会い・集合など」「接近・接触・隔離」「突き・押し・引き・すれなど」「防止・妨害・回避」「増減・補充」「伸縮」に現れた。一方、「とうとう」の「独自の語」は、「存在／消滅」「存在／破壊」に現れた。

<sup>5</sup> 「 / 」は、「中項目／分類項目」のことをさす。



この分類項目から、「抽象的關係」部門において、「ついに」の「独自の語」は、幅広い意味で使われていることが分かる。

- (19) これと対照的なのが千九百三十年代の作品で、この時代の最良の作品は近づいて来る大破滅の重苦しい予感に満ちていて、予期されていたものがついに起こり、大砲の音が轟きはじめた時にはむしろほっとするような感じさえあったのですが、第一次大戦の場合は驚きと憤りでした。(LBi9\_00252『戦争とラジオ』1994)
- (20) 私はいわゆる「成功」のことを、物書きたちがそれに下す評価とか、市民の称讃とか、おてんば娘のファンレターのことを言っているのではない。—このような人びとの誤解は、滑稽であるし、まだしも我慢できるものである。—そうではなくて実際の成果、いまやついに芸術家の前に置かれて芸術家を見つめている「作品」そのもののことを言っているのである。(PB19\_00470『地獄は克服できる』2001)
- (21) 公然たる敵よりは、漠然たる味方に対応することの方が難しいものである。袁紹の策略に乗せられてバカを見たが、ここは潔く見切りをつけて引き揚げるべきではないか—そう考えて公孫瓚はついに軍を引き揚げた。(LBh9\_00099『中華帝国志』1993)
- (22) 水は鼻から入り、肺まで流れこんだ。しかし、なおも眼を閉じて彼女は泳ぎつづけた。頭はガンガン鳴り、胸は必死に空気を求めていた。ローラはついに水面に浮かびあがった。(LBi9\_00033『ボディ・バンク』1997)
- (23) そこでシャムセディンは嘆きの限り嘆いて、そして自分に言いました、「これはみなおれが悪かったのだ！これというのもただ、おれが思慮分別に乏しいばかりに起こったことだ！」けれども、すべての事には終りがあるからして、シャムセディンもついには気を取り直し、そしてしばらくたつと、あるカイロの紳商の娘と婚約し、その若い娘と結婚の契約をして、それと結婚しました。(LBm9\_00071『美食』1998)
- (24) 意地悪な笑顔を浮かべながら、パルミがふた口めをごくごくとのどを鳴らして飲む。「く、くう…」その様子を見ていたターヤは、耐え切れなくなったかついにがくりと肩を落とした。「仕方ありませんわ…。そこまでおっしゃるなら飲んで差し上げてもよろしくてよ」(PB59\_00385『真夏の迷宮』2005)
- (25) この言葉はそれほど彼の性格からはずれたものだったが、それが響きをあまりにまちがったものにしていたので、とうとう微笑が彼の顔をほころばせ、ついにはその微笑がゆっくり顔にひろがったほどだった。(LBp9\_00146『メグレたてつく』2001)
- (26) おからが好物と聞いているので、腹の大きい泰子がおからをたくさんこしらえ、酒肴ととのえて家族一同待っていると、紀元節前の寒い日深い霧の中を、「おおい、横尾君、しばらく」と米内がやって来た。玄関に入るなり、「君、陸軍の奴がとうとう国をつぶしてしまいやがったな」と言った。(OB1X\_00128『米内光政』1978)
- (27) 鬼は、このこけおどしの雄叫びを聞くと、コルヴェットめがけて飛びだしてきま

した。しかし、怒りで前後の見境がなくなっていたので、玄関に踏みこんだとたんに、他の親戚もろとも、足場を失って、例の穴の底に落ちてしまいました。コルヴェットがその上からどンドン石を投げこみましたから、とうとう全員鬼の形をとどめぬほどにつぶされてしまいました。それから、コルヴェットは玄関の扉を閉め、その鍵を王様に渡しました。(LBj9\_00008『ペンタメローネ』1995)

「抽象的關係」部門における「独自の語」は、「ついに」には、「類／本来」に(19)「起こる」が現れ、ある状況の変化を表し、「作用／固定・傾き・転倒など」に(20)「置く」が現れ、作品が移動され、ある場所に置かれていることであるが、物事の存在場所の変化を表している。「作用／進退」に(21)「引き揚げる」が現れ、軍を引き揚げることであるが、ある地から移動されること、つまり、存在場所の変化を表している。また、「作用／乗り降り・浮き沈み」に(22)「浮かび上がる」が現れ、存在場所の変化を表している。「作用／作用・変化」に(23)「取り戻す」が現れ、精神がなくなって元に戻ったことで状態の存在場所の変化を表している。

また、「作用／上がり・下がり」に(24)「落とす」、「作用／伸縮」に(25)「広がる」が現れ、身体の動きであると同時に感情の変化を表している。

一方、「とうとう」は、「存在／消滅」に(26)「つぶす」、「存在／破壊」に(27)「つぶす」が現れた。(26)「つぶす」は、主体である陸軍の何かの行動により、客体である国の状態が変わったことを表しており、(27)「つぶす」は、コルヴェットが石を投げこんだ結果、鬼は鬼の形をとどめぬほどにつぶされたことであるが、主体であるコルヴェットの石を投げ込んだ行動により、客体である鬼の形が変化されたことを表している。

次に、「人間活動」部門において、「ついに」の「独自の語」は、中項目「心」「言語」「生活」「行為」「交わり」「待遇」「経済」に現れ、「抽象的關係」部門と類似して幅広い意味で現れた。一方、「とうとう」の「独自の語」は、中項目「心」「交わり」に現れ、「とうとう」のみに現れる中項目は見られなかった。

各中項目における分類項目は以下の通りである。

「ついに」の「独自の語」は、中項目「心」には分類項目「感覚」「好悪・愛憎」「表情・態度」「信念・努力・忍耐」「欲望・期待・失望」「学習・習慣・記憶」「思考・意見・疑い」「注意・認知・了解」「研究・試験・調査・検査など」「判断・推測・評価」「見る」が現れた。また、中項目「言語」には分類項目「伝達・報知」「問答」「報告・申告」が現れ、中項目「生活」には分類項目「処世・出世進退」「生活・起臥」「行事・式典・宗教的行事」「身振り」「手足の動作」が現れた。さらに、中項目「行為」には分類項目「行為・活動」「成功・失敗」が現れ、中項目「交わり」には分類項目「応接・送迎」「勝負」「軍事」が現れた。また、中項目「待遇」には分類項目「請求・依頼」が現れ、中項目「経済」には分類項目「取得」が現れた。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、中項目「心」には分類項目「学習・習慣・記憶」

「研究・試験・調査・検査など」「聞く」が現れ、中項目「交わり」には分類項目「交わり」「応接・送迎」「争い」が現れた。

- (28) こうしてヌーレディンはしばらくの間、大臣のもとにおりました。大臣は毎日彼に会っては親切と好意の限りを尽しました。そしてついにはヌーレディンを並々ならず愛して、とうとうある日こう言い出したほどでした、「我が見よ、わしはずいぶん年をとったが、わしにはついで男の兄というものがあった。（省略）  
(LBm9\_00071『美食』1998)
- (29) 数年の後、貧窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。(PB59\_00382『見上げれば星は天に満ちて』1950)
- (30) 新美から追証の話が出るようになった。同期生なので二、三日は待ってくれたが、次の日もダウは上がるので、ついに三千株を踏んでしまった。(PB39\_00326『夜よ、もう来るな!』2003)
- (31) だって、ほんもの読むときに感激がなくなっちゃうよ、大人のものを書き換えるなんて。僕が作家になってからのことだが、高木（彬光）さんが、偕成社の仕事で幼年向きのものを何冊かやらないかといってきた。高木さんはゲーテの『ファウスト』をやったんですがね。柴田錬三郎も二、三冊書いた、高木さんも三、四冊書いた。僕はついに応じなかったがねえ。(LBk9\_00198『コレデオシマイ。』1996)
- (32) 金庫はケーブルに引っぱられて前へ、上へと進んでいき、またべつのところにつかかった。シャフトはそのあとを追いかけてながら艦長室を出て、通路をあがり、司令塔の梯子をあがり、ついに潜水艦から這い出て、吹きすさぶ風と待ちうけた水兵たちの高らかな歓声のなかにもどった。(LBq9\_00031『クリプトノミコン』2002)
- (33) 自分の表情をもう一度心に描いてその意味を推し測るのは、実にむずかしいと思いました。ただしです。「道徳」を一教科として教えている私の如き教師にとって、盗みが好ましからざる行為であるのは確かです。とうとう、私と最も似ているであろう顔をにわかに思い出しました。(LBd9\_00010『12のルビー』1989)
- (34) ハイパーマーケットは、一年のほかのときならディッグウィードが“地獄の大聖堂”と呼んでいる場所だが、買い物にいくと、ウィールドが呆然と見守るなか、爆音クラッカーに飾り物、プディングにパイ、ピクルド・ウォルナツツのびん詰め、何ヤード分ものカクテル・ソーセージ、それに展示されているめずらしい菓子やおつまみ各種のサンプルがカートに山積みになっていった。とうとう彼はエドウィンに礼儀正しく訊いた一ひよとして赤十字から、飢えた、だが味にやかましい避難民が人里離れたイーンドールにどっとなだれ込んでくるだろうという警告を受けたのか？ ディッグウィードは笑った。(PB49\_00504『死の笑話集』2004)
- (35) 全くこの岩元一族にかかっては、引っ張りまわされ通して、日が暮れてしまう。

ところが店の権利書、営業許可書はとうの昔に信子が売り渡している事がわかり、とうとう信子夫妻を呼び出して、清光さん、清治、清市、親戚のおじさん、私の五人が取り囲んで借金返せの騒動である。(LBb9\_00030『下下戦記』1987)

- (36) そんな時だけに、中宮さまはどこよりも大きな雪の山を作って、にぎやかなことの好きな中宮サロンの女房たちがはしゃぐのをみたかったのでしょうか。またそのためにこそ清少納言の賭につきあって、張り合っ下さったのでしょうか。とうとう天皇さままでおつきあい下さいました。(LBg9\_00171『枕草子女房たちの世界』1992)

「ついに」の「独自の語」は、まず、「心／好悪・愛憎」に(28)「愛する」が現れ、人の感情を表し、「心／欲望・期待・失望」に(29)「屈する」が現れ、人の思考・信念を表しており、「心／判断・推測・評価」に(30)「踏む」が現れ、人の思考・評価を表している。また、「言語／問答」に(31)「応じる」が現れ、人の言語行為を表している。さらに、「生活／手足の動作」に(32)「這う」が現れ、人の行動を表しながら、潜水艦から出て他の場所へ移動したことを表わしている。(32)「這う」は、「抽象的關係」における「ついに」の「独自の語」の特徴である人の存在場所の変化と似ている。

一方、「とうとう」は、「心／学習・習慣・記憶」に(33)「思い出す」が現れ、人の思考を表しており、「心／聞く・味わう」に(34)「訊く」、「交わり／応接・送迎」に(35)「呼び出す」が現れ、人の言語行為を表すが、「呼び出す」は、呼び出すことによって相手が現れるという意味合いが含まれ、人に影響を及ぼす結果を表している。また、「交わり／交わり」に(36)「つきあう」が現れ、人の状況を表している。

ところで、第2章2.3.4で述べたように、先行研究では「ついに」「とうとう」の人の感情を表すことについて、以下のように述べている。

池田(2000)は、「ついに」は、「最後」の意味を強調はしているが、その気持ちよりも事実であり、モーダルな表現でありながら命題と結びつきが強いと述べている。一方、「とうとう」は、後悔の気持ちを強調し、話し手の気持ちより結びついた表現だと述べている。

森田(1989)は、「とうとう」について、「ついに、きたるべきものがきたという意識から、それに伴う決意、覚悟、あきらめ、歓喜などの感情が強くにじみでる」と述べている。

ルチラ(2005b)は、「ついに」「とうとう」は、「懸念の実現」と「不本意な実現」を表す際に使われると述べている。

劉・吉田(2006)は、「ついに」は、「おわりに、しまいに」という意味で当初の期待がかなったり、心配や不安が実現したりする場合に用いられ、「とうとう」は、「結局、最後に」の意味である事柄が起きた後に最終的結果が起きる時に用いられると指摘している。

江(2009b)は、「とうとう」の方が、心的態度(紆余曲折)が強く、最終局面まで導かれる兆しが感じられるとしている。

このように、池田(2000)、ルチラ(2005b)、劉・吉田(2006)は、両副詞は感情のことを表すと述べ、森田(1989)、江(2009b)は、「とうとう」の方が人の感情を表すと述

べており、先行研究の記述はやや異なっている。

本章の「ついに」「とうとう」の「独自の語」に関する検討から、人の感情や思考を表す際に、「とうとう」のみではなく「ついに」も現れることが分かる。特に注目したいことは、「ついに」の場合、「独自の語」が持つ語彙レベルの意味から人の感情を表しているのではなく、(23)「気を取り戻す」、(24)「肩を落とす」、(25)「微笑が広がる」のように、「独自の語」と結びつく補語(名詞+格助詞)により人の感情を表していることである。

最後に、「自然現象」部門において「ついに」の「独自の語」のみ中項目「物質」「生命」に現れた。

(37) もう、池の周囲はすべて火の海だ。義明が立つ太鼓橋も、両端から燃え始めていた。池の水面をも舐める炎が、すぐそこまで迫っている。(この世界に、出口はないのか!?) そんなはずはないと思うのだが。炎は、じりじりと義明らを取り囲み…。ついに—義明と妍子もまた、燃え盛る陽光の炎に包まれた—。(PB49\_00105『積善白花』2004)

(38) ひよんなことから前歴がばれたんです。で、口論がはじまり、殴り合いに発展し、ついには命を落とした。(LBd9\_00100『動く家の殺人』1989)

「ついに」の「独自の語」は、「物質/火」に(37)「包む」が現れ、火事になった状況を表しており、「生命/死」に(38)「落とす」が現れ、人の状態の変化を表している。

以上、「ついに」「とうとう」の「独自の語」の意味分布について検討した。次節では、これまでの結果をまとめ、「ついに」「とうとう」の相違について述べる。

## 6.6 本章のまとめ

本章では、類義関係にある「ついに」「とうとう」について、BCCWJを用い、BCCWJにおけるさまざまなジャンルによる出現傾向から文体の差、BCCWJ内の『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差、「独自の語」の意味分布から両副詞の相違について検討した。本章で明らかになったことを以下に述べる。

まず、BCCWJのジャンルごとの出現傾向から「ついに」「とうとう」は文体に差がある副詞であることが分かった。

「ついに」は、「白書」「新聞」のように、専門性が高い書き言葉的な文体に現れやすく、また、改まった文章に現れやすいことが分かった。一方、「とうとう」は、「知恵袋」「ブログ」など、読み手を意識した話し言葉的な文体に現れており、また、くだけた文章に現れやすいことが分かった。

次に、「書籍」「ベストセラー」の下位区分である『文学』における「地の文」と「会話文」での「ついに」「とうとう」の出現傾向から文体の差を検討した。その結果、「とうとう」の方が「ついに」より「会話文」に多く現れることが明らかになった。

また、『文学』における「ついに」「とうとう」と共起する高頻度の述語の出現傾向について、1位から5位までの動詞、「する」「なる」「来る」「できる」「言う」が共通して現れた。これらの出現比率を合計すると、全体の約4割強であり、少ない語彙が高頻度で用いられていることが明らかになった。

さらに、「ついに」「とうとう」の「(使用) 範囲・度数分布表」における両副詞と共起する「高頻度」「中頻度」「低頻度」の見出し語の出現比率から、両副詞の「低頻度」の見出し語の比率は「ついに」が63.4%、「とうとう」が71.2%で、他の副詞の頻度層と比べ、高いことが分かり、両副詞はさまざまな頻度1の語と共起していることが明らかになった。

なお、「ついに」「とうとう」の「独自の語」について、『分類語彙表』を用いて意味分類した結果、「抽象的關係」部門での「独自の語」の出現比率は、「ついに」の方が高く、意味範囲も広いことが分かった。

「自然現象」部門での「独自の語」の出現比率は、「ついに」の方がやや多く現れた。

また、「ついに」「とうとう」の「独自の語」は、まず、「抽象的關係」部門において、「ついに」は、ある状況の変化、人の移動や抽象的・実質的な物事の存在場所の変化を表している。また、人の身体的な動きで感情の変化を表しているものが現れた。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、主体の抽象的・実質的な行動や働きかけにより、客体の状態がマイナス方向に変化することを表す際に現れた。

次に、「人間活動」部門において、「ついに」「とうとう」の「独自の語」は、人の感情を表すことで共通しているものの、「ついに」は「独自の語」と結びつく補語によって人の感情を表しているが、「とうとう」は「独自の語」が持つ語彙の意味で感情を表している点で異なっている。この点は人の思考についても似ている。

また、両副詞の「独自の語」は、人の言語行為を表すことで共通しているが、「ついに」は相手に質問などに応じる言語行為であるが、「とうとう」は主体的に言語行為を行って相手に影響を及ぼす点で異なっている。さらに、「ついに」は、「抽象的關係」部門での特徴と類似して、ある事態の存在場所の変化を表している。一方、「とうとう」は人の状況を表している表現が見られた。

最後に、「自然現象」部門において、「ついに」の「独自の語」のみ現れ、ある状況と人の状態の変化を表している。

また、各部門における「ついに」「とうとう」の「独自の語」の検討によって従来言われてきた人の感情表現との共起は「とうとう」に限らず、「ついに」も現れていることが明らかになった。

## 第7章 新聞データに見られる「ついに」「とうとう」の相違と、 BCCWJに見られる両副詞の相違との比較

本章では、「ある事態が成立するまで長い時間がかかる」ことを表し、述語に否定形が来ることができる類義関係にある「ついに」「とうとう」の違いについて、『毎日』を用いて「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を検討し、両副詞と共起する述語の出現傾向や中頻度語の「独自の語」の意味分布について検討していく。

### 7.1 はじめに

第6章では、類義関係にある「ついに」「とうとう」の違いについて、BCCWJを用い、さまざまなジャンルでの出現傾向から文体の差を検討した。また、サブコーパスの「書籍」と「ベストセラー」の下位区分の一つである『文学』から「ついに」「とうとう」の含まれる文を抽出し、「地の文」と「会話文」における出現傾向から文体の差を検討した。さらに、両副詞と共起する述語（特に、「独自の語」）の意味分布から両副詞の相違について検討し、その結果を述べた。

本章では、『文学』と異なるジャンルである『毎日』を用い、まず、「ついに」「とうとう」の含まれる文を抽出し、「地の文」と「会話文」における出現傾向から文体の差を明らかにする。また、両副詞と共起する述語の出現傾向を検討し、中頻度語のうち「独自の語」の意味分布から両副詞の相違を明らかにする。さらに、第6章での結果と比較し、ジャンルによる違いを明らかにする。

本章の構成については、以下の通りである。第2節では、本章の目的を述べ、第3節では、調査データである『毎日』の概要を、第4節では、『毎日』における「ついに」「とうとう」の出現傾向から文体の差について述べる。第5節では、両副詞と共起する中頻度語のうち「独自の語」の意味分布について述べる。第6節では、第5節までの結果をまとめる。第7節では、『毎日』での結果と第6章のBCCWJ内の『文学』での結果を比較し、両副詞のジャンルによる相違について述べる。最後の第8節では、本章のまとめをする。

### 7.2 本章の目的

本章では、類義関係にある「ついに」「とうとう」について、『毎日』を用い、「地の文」と「会話文」での両副詞の出現傾向から文体の差を明らかにする。また、両副詞と共起する述語、特に中頻度語のうち「独自の語」の出現傾向と、「独自の語」の意味分布から両副詞の違いを明らかにする。さらに、『毎日』での結果と第6章の『文学』での結果を比較し、ジャンルによる相違を明らかにすることを目的とする。

### 7.3 調査データ

本節では、本章の調査データである『毎日』について述べる。第5章と第9章で用いた『毎日』は、2008年度の1年分であるが、本章で用いる『毎日』は、2004年から2009年までの6年分である。6年分を用いる理由は、検討対象である「とうとう」の「独自の語」が1年分から5年分まで検討の対象にならない程度の数値で抽出されたためである。参照として、2008年度の「とうとう」の「(使用)範囲・度数分布表」について、以下の表7-1に示す。

表 7-1 「とうとう」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『毎日』範囲(補正前)		『毎日』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	13~9	0%~44.0%	2		4	1	5	20.0%
	3~2	~60.0%	2	1				
中頻度							0	0.0%
低頻度	1	~100.0%	8	12	8	12	20	80.0%
合計	56		12	13	12	13	25	100.0%

表7-1に見られるように、「とうとう」の「独自の語」は0語であることが分かる。データを5年分に増やすと「独自の語」が2語をなるが、本章では6年分を用いて3語について検討する。以降、7.5の表7-5と表7-6は6年分を用いた「(使用)範囲・度数分布表」である。

まず、『毎日』からの用例の抽出はプログラミング言語 Perl を利用し、「ついに」は〈ついに〉〈ツイニ〉〈遂に〉をキーワードにし、「とうとう」は〈とうとう〉〈トウトウ〉〈到頭〉をキーワードとした。

- (1) どこにでもいる元気いっばいの小学生、ワタルは、父親の家出と母親の自殺未遂によって平凡な日常生活を奪われてしまう。転校生のミツルに教えてもらった、運命を変える“扉”を開けると、そこには異世界が広がっていた。(2006年7月14日)
- (2) 愛宕署は4日、容疑を殺人と殺人未遂に切り替え、林容疑者の身柄を東京地検に送った。(2009年8月5日)
- (3) 古くは血なまぐさい政治闘争の中で仏教による国づくりを目指した聖徳太子も、そのとうとうたる精神の大河の中にある。(2009年3月26日)
- (4) 「科学者は合理主義者。論理的に考える。でも政治は非合理。鳩山さんは非合理的なところがないし、パッションもない。政治家になる人はだいたい前のめりでしょ。政治談議をとうとうとしたり、けしからん、と言ったり。自分にないものを求めて



政界に入ったのかなあ」と松原氏。(2009年9月2日)

抽出された用例の中には、上記の(1)(2)(3)(4)のように、検討対象と異なる語や重複の文が現れた。これらの用例を除外し、分析対象となったのは、「ついに」が1969例、「とうとう」が341例であった。このような出現傾向は、第6章6.4.1のBCCWJ内の『文学』における両副詞の出現傾向(「ついに」が1544例、「とうとう」が749例である)と異なっている。

以上の両副詞の出現傾向から、「ついに」「とうとう」はジャンルにより出現傾向に相違が出る副詞であると言えよう(詳しい点については第7節で述べる)。

#### 7.4 「ついに」「とうとう」の文体と共起する述語

本節では、「地の文」と「会話文」における「ついに」「とうとう」の出現傾向を検討し、両副詞の文体の差について述べる。また、両副詞と共起する高頻度の述語について検討する。

##### 7.4.1 「地の文」「会話文」における「ついに」「とうとう」の出現傾向

ここでは、「ついに」「とうとう」の文体について、「地の文」と「会話文」での出現傾向から考察する。新聞データである『毎日』における「会話文」は、小説である『文学』での「会話文」と異なり、下記の(5)(6)のように、直接引用文が多く現れた<sup>1</sup>。

(5) 同氏は選出直後にビシケク中心部の広場で市民約1000人を前に「ついに自由が我々のもとに降り立った」と演説した。(2005年3月26日)

(6) 河野俊嗣総務部長は「とうとう来たかという感じ」とため息をついた。(2006年12月9日)

また、「地の文」と「会話文」での「ついに」「とうとう」の出現傾向をまとめたものが表7-2である。

表 7-2 「地の文」と「会話文」での出現傾向

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
地の文	1840	93.4%	285	83.6%
会話文	129	6.6%	56	16.4%
合計	1969	100.0%	341	100.0%

<sup>1</sup> 『毎日』において、「会話文」に現れる直接引用文については、第5章5.7.1をご参照いただきたい。

表 7-2 から、「会話文」における「ついに」の出現頻度は 129 例 (6.6%) 現れ、「とうとう」の出現頻度は 56 例 (16.4%) 現れた。ここで、「地の文」と「会話文」における両副詞の出現の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ( $\chi^2=38.4397$ ,  $p<0.05$ )。この出現傾向から、新聞データにおいて、「ついに」より「とうとう」の方が「会話文」に多く現れると言えよう<sup>2</sup>。

#### 7.4.2 「ついに」「とうとう」と共起する述語の出現傾向

ここでは、「ついに」「とうとう」と共起する述語の出現傾向から両副詞の相違について検討する。

- (7) 娘にお尻を押してもらいながら鳥居をくぐり、ついに頂上に到着。舌がやけどするほどの熱いココアを飲みながら、2人で握手しました。(2009年8月16日)

「ついに」「とうとう」と共起する述語を検討する際、述語が上記の(7)のように、「体言止め」や共起する述語が省略されたもの、述語が「名詞+助動詞」のもの、「ついに。」と「とうとう。」で終わるものは除外した。

以上のような用例を除外すると、「ついに」が 1666 例、「とうとう」が 308 例である。これらを用いて検討していく。

次の表 7-3 は、「ついに」「とうとう」と共起する述語を出現頻度の高い順でまとめたものである。

表 7-3 から、両副詞と共起する出現頻度の高い動詞は、両副詞とも「する」(1位)、「なる」(2位)、「来る」(3位)、「できる」(4位)、「出る」(5位)(ただし、「とうとう」の場合、「追い込む」も「出る」と共に 5位)である。両副詞と共起する動詞のうち、共通する 1位から 5位までの出現比率を合わせると、「ついに」が 38%、「とうとう」が 46.7%である。「とうとう」と共起する上位 5位までの出現比率の合計は、「とうとう」において全体の 5割弱となる。

---

<sup>2</sup> 第 6 章 6.4.1 では、『文学』における「ついに」「とうとう」の「地の文」と「会話文」での出現傾向と先行研究における両副詞の「地の文」と「会話文」での出現傾向について考察した。第 7 節で本節での結果と合わせ考察する。

表 7-3 「ついに」「とうとう」と共起する高頻度の動詞

ついに				とうとう			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	する	355	21.3%	1	する	58	18.8%
2	なる	162	9.7%	2	なる	49	15.9%
3	来る	60	3.6%	3	来る	25	8.1%
4	できる	30	1.8%	4	できる	7	2.3%
5	出る	27	1.6%	5	追い込む	5	1.6%
6	入る	23	1.4%	5	出る	5	1.6%
7	迎える	19	1.1%	6	開ける	4	1.3%
8	超える	17	1.0%	6	やる	4	1.3%
9	切る	16	1.0%	7	現れる	3	1.0%
9	立つ	16	1.0%	7	行く	3	1.0%

以上のことから、両副詞と共起する高頻度語は共通の語彙が多く、少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かる。

次に、両副詞と共起する 5 位以降の動詞は、「ついに」は、「入る」(6 位)、「迎える」(7 位)、「超える」(8 位)、「切る」「立つ」(9 位) の順である。一方、「とうとう」は、「開ける」「やる」(6 位)、「現れる」「行く」(7 位) の順である。表 7-3 の 5 位以降に見られるように、両副詞と共起する共通の動詞は現れなかったものの、(ただし表 7-3 には入っていない) 中頻度、低頻度の動詞には共通する語が現れた<sup>3</sup>。

では、両副詞と共起する共通の高頻度の動詞は、その現れ方も同じであるのか確認するため、出現比率が 1.6% で同様である「出る」を用い、その現れ方について検討する。検討の際には、『分類語彙表』を用いた意味分類の結果を参考にする。

- (8) ロープが 2 位に浮上するも、首位とは 1 分 1 秒 5 の大差。ついにソルベルグからは「もうリスクを冒す必要はない」と勝利宣言が出た。(2004 年 10 月 8 日)
- (9) 自民党のなかから、ついに小泉首相の辞任を求める声が出てきた。(2004 年 11 月 13 日)
- (10) しかも残る主将戦は、明らかに豊島岡女子学園・太田安里さんが優勢だった。だが宮崎学園の西香織さんは、必死に粘る。ついに太田さんにミスが出て逆転した。

<sup>3</sup> 「ついに」と共起する 5 位以降の動詞は、「とうとう」にも現れている。「ついに」と共起する「入る」は「とうとう」に 1 例 (9 位)、「迎える」は「とうとう」に 2 例 (8 位)、「超える」は「とうとう」に 1 例 (8 位)、「切る」は「とうとう」に 2 例 (8 位)、「立つ」は「とうとう」に 1 例 (8 位) が現れた。同様に、「とうとう」の「追い込む」は「ついに」に 4 例 (21 位)、「聴ける」は「ついに」に 2 例 (23 位)、「やる」は「ついに」に 3 例 (22 位)、「現れる」は「ついに」に 6 例 (19 位)、「行く」は「ついに」に 5 例 (20 位) 現れた。

(2005年8月12日)

(11) そして訪れた選抜出場。「ついに闘球部が全国大会に出る!」と、OBや関係者の興奮は最高潮に。(2006年3月29日)

(12) 「バッテリー」ファン待望の続編がついに出た。(2007年2月23日)

(13) フランス全土に広がった旧植民地からの移民などによる暴動になかなか歯止めがかからない。すでに各地で車5000台以上が燃やされ、とうとう死者まで出た。(2005年11月9日)

(14) 約2年前、千葉県に住む女性(69)は下腹部に違和感を覚えるようになった。痛みはなかったが、やがて尿が思うように出なくなった。陰部に圧迫感があり、尿が脇へ流れ出ることも。夜、3~4回トイレに通っても残尿感がとれない。とうとう膣(ちつ)から何かが出てきた。丸いボールのような「それ」は、鏡の前で裸になると見えるほどになった。「これは普通じゃない」。別の病気で通っていた病院でパンフレットを探し、「骨盤臓器脱」という病名を見つけた。(2009年10月28日)

(15) とうとう出た本書は、意表をつく「走るファンタジー小説」だ。(2008年9月12日)

(16) 事件発生以来、「自衛隊の即時撤退要求」を慎重に抑えてきた民主党に、とうとう「造反」の動きが出た。(2004年4月11日)

「ついに」と共起する「出る」は、(8)(9)(10)のように、「抽象的關係」部門の「作用／出・出し」(以下、「中項目／分類項目」をさす)、(11)のように、「人間活動」部門の「交わり／出席」、(12)のように、「人間活動」部門の「事業／出版・放送」に現れた。一方、「とうとう」と共起する「出る」は、(13)(14)のように、「抽象的關係」部門の「作用／出・出し」、(15)のように、「人間活動」部門の「事業／出版・放送」、(16)のように、「抽象的關係」部門の「存在／発生・復活」に現れた。両副詞と共起する「出る」は「出・出し」「出版・放送」に共通に現れ、「ついに」では「出席」に、「とうとう」では「発生・復活」に現れた。

(17) 「ついに出た? そうですね」。2回目によくK点越えの125メートルを飛んだ世界選手権代表の湯本は、苦笑した。(2007年2月19日)

上記の(8)(10)(11)(17)のように、「ついに」と共起する「出る」のみがスポーツに関する記事に現れたことである以外に、両副詞と共起する「出る」において大きな相違は見られなかった<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> 『毎日』において、記事別に、ある傾向が見られた。それは、「ようやく」「ついに」は、「スポーツ」面に多く現れることである。「社説」面など記者の主観が入りやすい内容とは異なり、「スポーツ」面の記事は、行った事実をそのまま客観的に伝える内容が多い。そのため、改まった文により多く現れる「ようやく

## 7.5 「独自の語」からの「ついに」「とうとう」の相違

本節では、「ついに」「とうとう」と共起する中頻度語のうち「独自の語」について、『分類語彙表』を用いて意味分類し、意味分布から両副詞の相違を明らかにする。

次の表 7-4 と表 7-5 は、両副詞それぞれの「独自の語」を抽出した表「(使用) 範囲・度数分布表」である。

表 7-4 「ついに」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『毎日』範囲(補正前)		『毎日』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	355~12	0%~49.6%	16	2	25	11	36	8.7%
	11~8	~59.4%	9	9				
中頻度	7~4	~71.8%	16	26	41	106	147	35.5%
	3	~77.0%	9	20				
	2	~86.1%	16	60				
低頻度	1	~100.0%	16	215	16	215	231	55.8%
合計	1666		82	332	82	332	414	100.0%

表 7-5 「とうとう」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『毎日』範囲(補正前)		『毎日』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	58~4	0%~50.3%	8	0	11	0	11	8.4%
	3	~59.6%	3	0				
中頻度	2	~70.6%	19	3	19	3	22	16.8%
低頻度	1	~100.0%	52	46	52	46	98	74.8%
合計	308		82	49	82	49	131	100.0%

上記の表において、注目したい点は、表 7-5 に見られるように、「とうとう」の「低頻度」の見出し語の出現比率 (74.8%) の多さである。「とうとう」の「低頻度」の見出し語の比率と伊藤 (2008 : p.121) が提示している「頻度 1 の見出し語は語彙量の 50%前後を占めるのが普通である」ことと比べると、非常に多いことが分かる。これによって「とうとう」は、多様な頻度 1 語と共起していると言えよう。

次に、表 7-4 と表 7-5 から抽出された「独自の語」は「ついに」が 106 語、「とうとう」が 3 語である。「とうとう」の「独自の語」は参照程度の数しか現れなかったが、「ついに」「とうとう」の「独自の語」について、『分類語彙表』を用いて意味分類し、その意味分布を表にまとめると、次の表 7-6 となる。

表 7-6 から意味分布を見ると、「抽象的關係」「人間活動」「自然現象」部門において、「独

---

く「ついに」が使われているのではないかと考えられる。新聞記事面における副詞の出現傾向については今後の課題にしたい (第 5 章脚注 3 の再掲載)。

自の語」の出現比率から、「ついに」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く、「とうとう」は「人間活動」部門に多く現れることが分かる。

これらの差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ ( $\chi^2=1.7083$ 、 $p=0.4264$   $p>0.05$ )、有意差は認められなかった。

表 7-6 「ついに」「とうとう」の「独自の語」の意味分布

意味分布			ついに		とうとう	
部門	中項目		頻度	比率	頻度	比率
抽象的關係	2.11××	類	8	2.6%		
	2.12××	存在	20	6.6%		
	2.13××	様相	4	1.3%		
	2.15××	作用	128	42.4%	2	33.3%
	2.16××	時間	4	1.3%		
	2.17××	空間	4	1.3%		
小計			168	55.6%	2	33.3%
人間活動— 精神及び行為	2.30××	心	33	10.9%		
	2.31××	言語	12	4.0%	2	33.3%
	2.32××	芸術	3	1.0%		
	2.33××	生活	25	8.3%		
	2.34××	行為	10	3.3%		
	2.35××	交わり	17	5.6%	2	33.3%
	2.36××	待遇	8	2.6%		
	2.37××	経済	13	4.3%		
	2.38××	事業	2	0.7%		
小計			123	40.7%	4	66.7%
自然物及び 自然現象	2.50××	自然	2	0.7%		
	2.51××	物質	6	2.0%		
	2.57××	生命	3	1.0%		
小計			11	3.6%	0	0.0%
総計			302	100.0%	6	100.0%

では、各部門において、どのような特徴が見られるのか用例を用いて検討していく。まず、「抽象的關係」部門において、「ついに」の「独自の語」は、中項目「類」「存在」「様相」「作用」「時間」「空間」に現れ、「とうとう」と比べて幅広い中項目に現れた。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、中項目「作用」のみ現れた。

各中項目における分類項目は、以下の通りである。

「ついに」は「類／関係」「類／因果」、「存在／出没」「存在／成立」「存在／消滅」、「様相／調和・混乱」、「作用／作用・変化」「作用／変換・交換」「作用／開始」「作用／終了・中止・停止」「作用／動揺・回転」「作用／固定・傾き・転倒など」「作用／移動・発着」「作用／走り・飛び・流れる」「作用／通過・普及など」「作用／連れ・導き・追い・逃げ」「作用／出・出し」「作用／入り・入れ」「作用／上がり・下がり」「作用／乗り降り・浮き沈み」「作用／合体・出会い・集合など」「作用／統一・組み合わせ」「作用／分割・分裂・分散」「作用／開閉・封」「作用／接近・接触・隔離」「作用／当たり・打ちなど」「作用／防止・妨害・回避」「作用／切断」「作用／増減・補充」「作用／伸縮」「作用／限定・優劣」、「時間／順序」、「空間／方向・方角」に現れた。

一方、「とうとう」は、「作用／移動・発着」に現れた。

「抽象的關係」部門において、「ついに」は幅広い範囲に現れ、「とうとう」は「作用／移動・発着」のみに現れたことは、第 6 章の『文学』での「独自の語」の意味分布と類似している傾向であろう。

- (18) 12 試合で救援し、自責点 0 の好投を続けてきたロッテの守護神・荻野がついに崩れた。(2009 年 5 月 15 日)
- (19) そのうえ原油高はとどまるところを知らず、ついに100ドルの大台に達した。(2008 年 1 月 8 日)
- (20) 大関在位 50 場所。優勝 2 回。だが最高位の横綱についに届かず「悲劇の大関」と言われた。(2005 年 5 月 31 日)
- (21) 先輩のひたむきな気迫が後輩を触発し、二人そろって結果を出す。和田が 2 本塁打した前日の派手な勝利とは、ひと味違った勝ち方で、首位・巨人とのゲーム差は、ついに「1」にまで縮まった。(2009 年 8 月 6 日)
- (22) ~友達のニワトリによると、長年、安くて安定してきた卵の値段が、ついに上がるらしいね。どうして今、値上げ話が出てきたの？(2008 年 7 月 15 日)
- (23) セクハラなど女性問題に詳しい渥美雅子弁護士は「事件は個人の問題として処理されるだろうが、女性に対する人権侵害の問題意識がまだまだ社会に浸透していない背景があるのでは」と指摘した。日本婦人有権者同盟の紀平梯子代表は「国会議員もついにここまで落ちたかと思う。さっさと国会議員をやめるべきだ」と憤った。(2005 年 3 月 10 日)
- (24) 高橋が時代と家族に翻弄(ほんろう)され、ついには大陸にまで流れていく秋子の玉吉に寄せる思いと悲しみを表現した。(2006 年 7 月 19 日)
- (25) 祖父が出生を届けに行ったのだそうですが、道中いくら考えても名前が浮かんでこないで、とうとう役場に着いてしまったそうです。(2004 年 11 月 7 日)
- (26) 作文を初めて書いたのは、小学校 1 年生の 7 月。<遠くに虹が見えました。どん

どん虹に向かって歩いていきました。とうとう海に着きました。それでも虹はまだ遠かった>というような内容でした。(2008年7月3日)

「抽象的關係」部門に現れる「独自の語」の特徴を見ると、「ついに」は、「様相／調和・混乱」に(18)「崩れる」が現れ、人の状態のマイナス的な変化を表した。そして、「作用／移動・発着」に(19)「達する」が現れ、ある基準(100ドルの大台)になったことでマイナスの成立を表している。また、(20)「届く」が現れ、想定しているある基準(横綱になること)にならなかったことでマイナスの成立を表している。「作用／伸縮」に(21)「縮まる」が現れ、ある基準(チームとのゲーム差)になったことであるが、あるゲーム差から「3」「2」「1」に縮まった意味が含まれているため、進行過程が含まれている。「作用／増減・補充」に(22)「上がる」が現れ、ある基準(卵の値段)から上がったことを表している。

また、「作用／上がり・下がり」に(23)「落ちる」が現れ、話者が想定していたある基準(人権侵害の問題意識)から落ちたことで変化を表し、マイナスの意味である。「作用／走り・飛び・流れる」に(24)「流れる」が現れ、ある基準(場所)から大陸に流れていくことを表している。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、「作用／移動・発着」に(25)(26)「着く」が現れ、人の移動を表しているが、実際のある場所に着くことを表している。

次に、「人間活動」部門において、「ついに」の「独自の語」は、中項目「心」「言語」「芸術」「生活」「行為」「交わり」「待遇」「経済」「事業」に現れ、上記の「抽象的關係」部門と似ている傾向が見られ、「とうとう」と比べ、幅広い中項目に現れた。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、中項目「言語」「交わり」に現れた。各中項目における分類項目は、以下の通りである。

「ついに」は、「心／飢渴・酔い・疲労・睡眠など」「心／恐れ・怒り・悔しさ」「心／表情・態度」「心／信念・努力・忍耐」「心／思考・意見・疑い」「心／測定・計算」「心／決心・解決・決定・迷い」「心／見る」に現れており、「言語／言語活動」「言語／表現」「言語／伝達・報知」「言語／話・談話」「言語／報告・申告」に現れた。また、「芸術／芸術・美術」「生活／処世・出世進退」「生活／食生活」「生活／遊楽」「生活／立ち居」「生活／手足の動作」「生活／口・鼻・目の動作」「行為／身上」「行為／行為・活動」「行為／犯罪・罪」「行為／成功・失敗」に現れた。さらに、「交わり／争い」「交わり／攻防」「交わり／勝敗」「待遇／裁判」「待遇／捕縛・釈放」「待遇／命令・制約・服従」「経済／取得」「経済／授受」「事業／運輸」に現れた。

一方、「とうとう」は、「言語／言語活動」と「交わり／賛否」に現れた。

(27) 行政当局が書類の不備や法規違反を理由に突然、開店準備をストップさせる「不透明な官僚主義」が各地で相次ぎ、ついに堪忍袋の緒が切れたようだ。(2009年6



月 29 日)

(28) 3 歳くらいの女の子は、待ちくたびれたのだろう。ついに、泣きだしてしまった。

(2008 年 6 月 6 日)

(29) それに対して、丸紅ルートを守っていたのはサラリーマン重役ばかりであったから、検察の厳しい取り調べに対抗できず、ついに口を割ってしまった。(2006 年 2 月 5 日)

(30) 清掃員の野々山 (渡辺謙) が、現金 50 万円を落とし主の岩崎 (玉木宏) に届けてから、奇妙な交友関係が始まる。親子ほど年が離れた 2 人は、ともに人間不信だが、手探りしながら互いを認め合う。ついに野々山が深い心のキズを明かす。(2007 年 5 月 25 日)

(31) 谷川は 1 手損角換わり作戦から、厳しく攻めたてた。だが、森内は頑強な受けで後手の攻めをしのぐ。力をためて、5 五桂 (7 7 手目) から鋭く反撃し、ついに谷川を押し切った。(2006 年 6 月 17 日)

(32) 「私はとうとう奥村総務に一切をお話申した結果大いに相談になって下さって『一切そんな心配をせずプラーグ (プラハ) の第三回万国大会をめざして練習をやってくれ……』とのことで私も初めてホッとしてみますいかに現在の課長が悪くても奥村重役にこれだけ信じて貰 (もら) えれば大いに社のために働かうと気持ちを入れかへました」(昭和 5 年 2 月 28 日の父あての手紙)。(2007 年 1 月 25 日)

(33) 「総理がそこまでおっしゃるのであれば……」。これまで立候補に反対していた竹中氏の夫人、節子さんはとうとう首を縦に振った。(2004 年 6 月 17 日)

まず、「ついに」は、「心／恐れ・怒り・悔しさ」に (27) 「切れる」が現れ、人の感情の変化を表しており、「心／表情・態度」に (28) 「泣く」が現れ、人の泣く行為でありながら、人の感情の変化を表している。

また、「言語／言語活動」に (29) 「割る」、「言語／報告・申告」に (30) 「明かす」が現れ、人の言語行為を表している。

さらに、「行為／行為・活動」に (31) 「押し切る」が現れ、勝った状況を表す表現が見られた。

一方、「とうとう」は、「言語／言語活動」に (32) 「申す」が現れ、人の言語行為を表し、「交わり／賛否」に (33) 「振る」が現れ、人の行動を表しているが、ある意見に賛成することで人の思考も表している。

また、「自然現象」部門において、「自然／光」、「物質／水・乾湿」「物質／風」「物質／火」、「生命／死」のみに「ついに」の「独自の語」が現れた。

(34) 軍事利用に道を開く宇宙基本法。人間世界の争いの風、ついに天界にも吹き及ぶ。

(2008 年 5 月 13 日)

(35) 彼は「余命3カ月」と宣告された後も、子供たちに自らの体を題材に「命の授業」を続けてきた。2学期の終業式まで登校し、絵本「こいぬのうんち」を読み聞かせていた。だが翌日の12月25日に入院、ついに1月3日に息を引き取った。(2004年1月21日)

(36) 鶴千代から政岡を引き離そうとする悪人方の御殿女中の八汐(片岡仁左衛門)と、鶴千代を毒殺させまいとする政岡の対決が描かれる。政岡の子の千松は、鶴千代の身代わりに毒入りの菓子<sub>を</sub>口にし、ついには命を落とす。(2009年4月1日)

「ついに」の「独自の語」は、「物質／風」に(34)「吹く」が現れ、ある環境や状況の変化を表している。「生命／死」に(35)「引き取る」と(36)「落とす」が現れ、人の死という状態の変化を表している。

以上、「ついに」「とうとう」の「独自の語」について、『分類語彙表』を用いて意味分類をし、その意味分布から、両副詞の相違を述べた。次節ではここまで分かったことについてまとめる。

## 7.6 『毎日』における「ついに」「とうとう」の相違

本節では、前節まで明らかになったことを以下に述べる。

まず、「ついに」「とうとう」の「地の文」と「会話文」における出現傾向から文体の差について検討した。その結果、「とうとう」の方が「ついに」より「会話文」に多く現れることが明らかになった。

次に、「ついに」「とうとう」と共起する述語を出現頻度の高い順に並べ、検討した結果、両副詞と共起する述語は、5位まで同様であった。その5位までの出現比率の合計は、「ついに」が38.0%、「とうとう」が46.7%であり、これらの比率から、「ついに」「とうとう」は、少ない語彙が高頻度で用いられ、類義の度合いが高い副詞であることが分かった。

また、両副詞の「独自の語」の意味分布について検討した。その結果、「ついに」の「独自の語」は、「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れ、「とうとう」の「独自の語」は、「人間活動」部門に多く現れることが分かった。しかし、「独自の語」の出現に有意な差は認められなかった。

各部門に現れる「ついに」「とうとう」の「独自の語」の特徴は、まず、「抽象的關係」部門において、「ついに」の「独自の語」は、幅広い意味に現れることが分かった。人や物事の状態の変化を表しており、あるレベルに達したこと、達していないこと、また、ある基準に近くなったり、ある基準から上がったたり、落ちたりすることを表している用例が見られた。これらの基準は、想定していた基準からの変化であり、抽象的な事態の成立である。一方、「とうとう」の「独自の語」は、人の移動を表し、実際に、ある場所に着くことを表しており、具体的で空間的な変化を表す用例が見られた。

次に、「人間活動」部門について、「ついに」と「とうとう」の「独自の語」は、人の言

語行為に共通して現れたが、「ついに」には「口を割る」「心のキズを明かす」のように、補語（口を、心のキズを）の結合で言語行為を表しているが、「とうとう」には「申す」のように、言語行為を直接さす語で言語行為を表していることが分かった<sup>5</sup>。また、「ついに」は、人の感情の変化や人の行為で感情表現を表し、ある状況を表している用例が見られた。一方、「とうとう」は、人の動きで思考を表す用例が見られた。

さらに、「自然現象」部門において、「独自の語」は「ついに」のみ現れ、ある環境や状況の変化、人の状態の変化を表している。

以上、『毎日』における「ついに」「とうとう」の相違について述べた。

次節からは、第6章での結果と本節での結果を比較し、ジャンルによる「ついに」「とうとう」の相違について検討していく。

## 7.7 『毎日』における結果と BCCWJ 内の『文学』における結果の比較

本節では、本章で検討した『毎日』における「ついに」「とうとう」の結果と、第6章で明らかになった BCCWJ 内の『文学』での「ついに」「とうとう」の検討結果を比較し、「ついに」「とうとう」のジャンルによる相違について考察していく（参照データとして『毎日』95-97の結果を用いる）<sup>6</sup>。

### 7.7.1 ジャンルによる「ついに」「とうとう」の文体の相違

まず、ジャンルによる「ついに」「とうとう」の出現頻度について比較する。

表 7-7 「ついに」「とうとう」の出現頻度

ジャンル	ついに	とうとう
『毎日』95~97	1899	304
BCCWJ 内の「新聞」	28	4
『毎日』2008年 <sup>7</sup>	314	56
『文学』	1544	749

表 7-7 に見られるように、両副詞は『毎日』と『文学』という異なるジャンルにおいて、「ついに」の方が「とうとう」より多く出現する。ここで、『毎日』2008年と『文学』における両副詞の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた ( $\chi^2=46.4166$ ,  $p<0.05$ )。「ついに」は、『毎日』と『文学』という異なるジャンルにお

<sup>5</sup> 「独自の語」と係る補語については今後の課題にする。

<sup>6</sup> 『毎日』95-97は、趙（2009）で用いたデータをさす。趙（2009）は、『毎日』95年から97年まで3年分を用い、「ついに」「とうとう」と共起する述語について検討を行った。詳細は第6章6.4.3.1の脚注3をご参照いただきたい。

<sup>7</sup> 本章における『毎日』は6年分を用いて検討しているが、出現頻度の検討においては、『文学』と語数をもっとも近い2008年度のみを用いた。

いて、「とうとう」より多く出現すると言える(参照データである『毎日』95～97年と BCCWJ 内の「新聞」においても「ついに」が「とうとう」より多く現れる)。

次に、「地の文」と「会話文」での「ついに」と「とうとう」の出現傾向について、ジャンルごとにまとめたものが次の表 7-8 である。

表 7-8 ジャンルによる「地の文」と「会話文」での出現傾向

	『毎日』		『文学』		『毎日』95~97 <sup>8</sup>	
	ついに	とうとう	ついに	とうとう	ついに	とうとう
地の文	1840 (93.4%)	285 (83.6%)	1406 (91.1%)	609 (81.3%)	1810 (95.3%)	269 (88.5%)
会話文	129 (6.6%)	56 (16.4%)	138 (8.9%)	140 (18.7%)	89 (4.7%)	35 (11.5%)
合計	1969 (100.0%)	341 (100.0%)	1544 (100.0%)	749 (100.0%)	1899 (100.0%)	304 (100.0%)

表 7-8 から、『毎日』と『文学』では、両副詞の「会話文」における出現比率は、「ついに」より「とうとう」の方が高い。「会話文」における各副詞の出現比率は、ジャンルごとに差があるものの、両ジャンルにおいて「とうとう」の方が「ついに」より多く現れ、出現傾向には違いはないことが分かる。『毎日』と『文学』で、ジャンル別に現れる両副詞の出現の差が有意な差であるのかカイ二乗検定をしたところ、両副詞の出現頻度の差に有意差が認められた(『毎日』： $\chi^2=38.4397$ 、 $p<0.05$ 、『文学』： $\chi^2=45.035$ 、 $p<0.05$ )<sup>9</sup>。

よって、ジャンルごとに「とうとう」の方が「ついに」より「会話文」に多く現れると言える。

また、第 6 章 6.4.1 の表 6-1 に示した BCCWJ における出現傾向は「ついに」の方が「ベストセラー」「新聞」「雑誌」「白書」「教科書」「広報誌」にやや多く、「とうとう」の方が「書籍」「国会会議録」「知恵袋」「ブログ」にやや多く現れた。

宮内(2012)は、BCCWJ の「文学」について、「フォーマルでない話し言葉的」であるとし、「新聞」について「書き言葉的」であると述べており、鯨井(2012)は、BCCWJ において、「新聞」が「書籍」「雑誌」より改まり度が高く、「白書」が「新聞」「雑誌」「書籍」より「書き言葉的」であると指摘している。また、鄭・他(2009)は、「国会会議録」「知恵袋」「白書」「書籍」の特徴について述べている<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> 趙(2009)は、「地の文」と「会話文」における「ついに」「とうとう」の使用頻度を「述語の有無」「述語の種類」「述語のテンス」に分け、検討したがこれらの三区分による両副詞の「地の文」と「会話文」での相違は現れなかった。

<sup>9</sup> 第 6 章 6.4.2 の表 6-2 と本章 7.4.1 の表 7-2 で検定した結果を再掲したものである。

<sup>10</sup> 鄭・他(2009)の詳細は、第 5 章 5.7.1 をご参照いただきたい。

これらの先行研究から、『毎日』はフォーマル（改まり度高）・書き言葉的であり、『文学』はインフォーマル（改まり度低）・話し言葉的であると言える。また、『白書』はフォーマル・書き言葉的であると言える。

以上、BCCWJにおけるジャンルごとの出現傾向より、「ついに」は書き言葉的な文章に多く現れ、「とうとう」は話し言葉的な文章に多く現れることが明らかになった。

### 7.7.2 ジャンルによる「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語の相違

ここでは、『毎日』と『文学』での「ついに」「とうとう」と共起する高頻度の述語について比較する。

まず、ジャンル別に両副詞と共起する高頻度語のうち出現頻度の高い順 5 位までを次の表 7-9 に示す。

表 7-9 ジャンルにおける「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語

順位	『毎日』		『文学』		『毎日』95～97 <sup>11</sup>	
	ついに	とうとう	ついに	とうとう	ついに	とうとう
1	する 355 (12.5%)	する 58 (18.8%)	する 275 (18.2%)	なる 97 (13.2%)	なる 104 (6.4%)	なる 21 (7.4%)
2	なる 162 (10.3%)	なる 49 (15.9%)	なる 169 (11.2%)	する 69 (9.4%)	来る 33 (2.0%)	来る 12 (4.2%)
3	来る 60 (8.8%)	来る 25 (8.1%)	来る 51 (3.4%)	来る 27 (3.7%)	超える 24 (1.5%)	やる 9 (3.2%)
4	できる 30 (5.0%)	できる 7 (2.3%)	できる 31 (2.0%)	できる 22 (3.0%)	する 23 (1.4%)	出る 8 (2.8%)
5	出る 27 (4.5%)	追い込む・出る 5 (1.6%)	言う 23 (1.5%)	言う 21 (2.8%)	出る 21 (1.3%)	切る 5 (1.7%)

表 7-9 から、『毎日』における「ついに」「とうとう」と共起する述語は、「する」「なる」「来る」「できる」「出る」の順で共通している。一方、『文学』では、「ついに」と共起する述語は、「する」「なる」「来る」「できる」「言う」の順であり、「とうとう」と共起する述語は、「なる」「する」「来る」「できる」「言う」の順となり、1 位と 2 位が逆転しているのみであり、5 位まで両副詞と共起する述語は共通している。このことから、ジャンル別に「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語は非常に似ていることが分かる。

また、『毎日』と『文学』において、4 位まで両副詞と共起する述語は共通している。こ

<sup>11</sup> 『毎日』95～97 は、先述したように、趙（2009）の検討結果を参照として示す。趙（2009）では、「ついに」「とうとう」と共起する述語の認定において、サ変動詞を「する」と一緒に扱っておらず、一語ずつ数えているため、「する」の順位が「ついに」では 4 位、「とうとう」では 10 位以降となっている。

の4位までの述語の出現比率を合わせると、『毎日』では「ついに」が38.0%、「とうとう」が46.7%である。一方、『文学』では「ついに」が38.4%、「とうとう」が35.1%であり、『毎日』での「とうとう」は全体の5割弱となり、その他は4割強である。

このことから、両ジャンルにおいて、両副詞は限られた語彙が高い頻度で用いられていることが分かり、特に『毎日』での「とうとう」はもっとも限られた語彙が高い頻度で用いられ、類義の度合いが高い副詞であると言える。

また、趙(2009)は、「ついに」「とうとう」の相違について、意味の面において「変化」「移動」「実現」を表す動詞との共起が多く見られたことを明らかにしており、また、先行研究での指摘と異なり、「体言止め」の用法について、「ついに」のみではなく、「とうとう」においても現れることを明らかにしている。趙(2009)の研究は「する」の認定が本論文と異なることにより、抽出された動詞と本論文における結果を直接比較することはできない。しかし、趙(2009)において、両副詞と共起する動詞の出現傾向は類似しているという指摘と、本章における高頻度語は(出現順位4位まで)共通の語彙が多いという結果は似ている。

さらに、森田(1989)<sup>12</sup>は、「とうとう」について、「『とうとう』も『ついに』と近い意味を持ち、ほとんどすべての例が『ついに』と置き換えられる。用法上の違いはないが、意味的には多少の違いが認められる」と述べている。

以上、本章の検討から、ジャンル別に「ついに」「とうとう」と共起する高頻度語は共通している語彙が多く現れ、その出現比率の合計が高いことから、限られた語彙が高い頻度で用いられていることが分かった。また、森田(1989)の記述や趙(2009)の指摘していることから、「ついに」「とうとう」は類義の度合いが高い副詞であることが明らかになった。

### 7.7.3 ジャンルによる「ついに」「とうとう」の「独自の語」の相違

#### 7.7.3.1 ジャンルによる「独自の語」の出現傾向

ここでは、『毎日』と『文学』における「ついに」「とうとう」の「独自の語」の出現傾向について比較する。

まず、『毎日』と『文学』において、「ついに」「とうとう」の「(使用)範囲・度数分布表」での各頻度層の見出し語の出現比率を見してみる。

---

<sup>12</sup> 森田(1989)は、第2章2.3.1表2-2をご参照いただきたい。

表 7-10 「(使用) 範囲・度数分布表」の見出し語の出現比率<sup>13</sup>

	副詞	高頻度	中頻度	低頻度	合計
『毎日』	ついに	8.7%	35.5%	55.8%	100.0%
	とうとう	8.4%	16.8%	74.8%	100.0%
『文学』	ついに	10.2%	26.4%	63.4%	100.0%
	とうとう	15.6%	13.2%	71.2%	100.0%

表 7-10 から注目したい点は、「とうとう」は異なるジャンルである『毎日』と『文学』において、その「低頻度」の見出し語の出現比率が 74.8%と 71.2%で非常に高いことである。伊藤 (2008) は「低頻度」について「低頻 1 の見出し語は語彙量の 50%前後を占めるのが普通である」と述べていることと異なる数値である。また、他の類義関係にある副詞と比べても高い比率であることが分かる<sup>14</sup>。

以上のことから、「とうとう」は多様な頻度 1 語と共起しており、この点において、ジャンルによる相違はないことが分かる。

次に、ジャンルごとに現れる「独自の語」について、『分類語彙表』での「部門」別に分けて集計したものが表 7-11 と表 7-12 である。

表 7-11 「ついに」の「独自の語」の出現頻度

ジャンル	『分類語彙表』における部門			合計
	抽象的關係	人間活動	自然現象	
『毎日』	168	123	11	302
『文学』	83	57	4	144
合計	251	180	15	446

表 7-12 「とうとう」の「独自の語」の出現頻度

ジャンル	『分類語彙表』における部門			合計
	抽象的關係	人間活動	自然現象	
『毎日』	2	4	0	6
『文学』	2	12	0	14
合計	4	16	0	20

<sup>13</sup> 表 7-10 の作成について、『毎日』は第 7 章 7.5 の表 7-4 と表 7-5、『文学』は第 6 章 6.5 の表 6-4 と表 6-5 からである。

<sup>14</sup> 第 5 章 5.7.3.1 において、「やっと」と「ようやく」の低頻度の見出し語の出現比率は、『毎日』では 61.7%と 59.5%であり、『文学』では 54.6%と 56.1%である。低頻度の見出し語の出現比率については、第 10 章でまとめてみる。

表 7-11 の『毎日』と『文学』における「ついに」の「独自の語」の出現頻度について、カイ二乗検定を用いて検定したところ、( $\chi^2=0.3183$ 、 $p =0.8528$   $p>0.05$ )、有意差は認められなかった。同様に表 7-12 の「とうとう」の『毎日』と『文学』における「独自の語」の各部門に現れる分布について、カイ二乗検定を用いて検定したところ、有意差は認められなかった。

また、『毎日』と『文学』における「ついに」「とうとう」の「独自の語」の意味分布について、『分類語彙表』の「部門」の出現比率のみをまとめると、次の表 7-13 のようになる。

表 7-13 ジャンル別の「独自の語」の出現比率

ジャンル	副詞	抽象的關係	人間活動	自然現象	合計
『毎日』	ついに	55.6%	40.7%	3.6%	100.0%
	とうとう	33.3%	66.7%	0.0%	100.0%
『文学』	ついに	57.6%	39.6%	2.8%	100.0%
	とうとう	14.3%	85.7%	0.0%	100.0%

表 7-13 は、ジャンル別に両副詞の「独自の語」について『分類語彙表』を用いて意味分類し、「抽象的關係」「人間活動」「自然現象」部門に分け、出現比率のみを示したものである。さらに、以下の表 7-14 は、表 7-13 の「ついに」「とうとう」のジャンル別における出現比率を比較し、出現比率の高い部門に「○」を付けたものである。

表 7-14 ジャンル別の「独自の語」の出現傾向

ジャンル	副詞	抽象的關係	人間活動	自然現象
『毎日』	ついに	○		○
	とうとう		○	
『文学』	ついに	○		○
	とうとう		○	

(「○」記号は、「ついに」と「とうとう」のうち、分布が多い方である。)

出現比率の高い部門に「○」を付けた結果、両副詞は『毎日』『文学』というジャンルにおいて、その出現傾向は類似しており、「抽象的關係」「自然現象」部門には「ついに」が多く現れ、「人間活動」部門には「とうとう」が多く現れることが明らかになった。

表 7-14 と、第 5 章の「やっと」「ようやく」の「独自の語」の出現傾向である表 5-10 において、「○」がついた結果から、ある傾向が見られた<sup>15</sup>。それは、より話し言葉的な文に

<sup>15</sup> 第 5 章 5.7.3 における表 5-10 をさす。



現れる副詞は、「人間活動」部門により多く現れ、より書き言葉的な文に現れる副詞は、「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れることである。

### 7.7.3.2 ジャンルによる「独自の語」の意味分布

ここでは、上記の第6節でまとめた『毎日』での「ついに」「とうとう」の「独自の語」の相違と、第6章6.6でまとめた『文学』での「ついに」「とうとう」の「独自の語」の相違について述べる。

ジャンルによる大きな相違は見られず、「ついに」の「独自の語」は、幅広い範囲に現れ、一方、「とうとう」の「独自の語」は、狭い範囲に現れることが分かった。

ジャンルごとにおいて、「ついに」「とうとう」の「独自の語」について、まず、「ついに」の「独自の語」の特徴を見ると、「抽象的關係」部門において、『毎日』では人や物事の状態の変化を表している。あるレベルに達したこと、達していないこと、また、ある基準に近くなったり、ある基準から上がったり、落ちたりすることを表している。これらの基準は、想定していた基準からの変化であり、抽象的な事態の成立を表している。

一方、『文学』ではある状況の変化、人の移動や抽象的・実質的な物事の存在場所の変化を表している。また、人の身体的な動きで感情の変化を表しているものが現れた。

また、「人間活動」部門において、『毎日』では人の言語行為を表しているが、「口を割る」「心のキズを明かす」のように、補語の結合によって言語行為を表している。また、人の感情の変化や人の行為で感情表現、また、ある状況を表している。

一方、『文学』では人の感情を表すが、「独自の語」と係る補語によって人の感情を表している。また、相手の質問に応じる言語行為である。さらに、「ついに」は、「抽象的關係」部門における特徴と類似し、人の移動を表している。

また、「自然現象」部門において、『毎日』ではある環境や状況の変化、人の状態の変化を表している。一方、『文学』ではある状況と人の状態の変化を表している。

次に、ジャンルごとに現れる「とうとう」の「独自の語」の特徴を見ると、まず、「抽象的關係」部門において、『毎日』では人の移動を表し、実際にある場所に着くことで具体的な空間的な変化を表している。一方、『文学』では主体の抽象的・実質的な行動や働きかけにより、客体の状態がマイナス方向に変化することを表す際に現れた。

また、「人間活動」部門において、『毎日』では「独自の語」が持つ語彙の意味により、言語行為を表しており、人の動きで思考を表している。

一方、『文学』では「独自の語」が持つ語彙の意味で感情や思考を表している。また、主体的な言語行為を行い、相手に影響を及ぼすことを表わしている。さらに、人の状況を表している。

最後に、「とうとう」の「独自の語」は、「自然現象」部門において、両ジャンルに用例が現れなかった。

## 7.8 本章のまとめ

本節では、『毎日』『文学』における「ついに」「とうとう」について、明らかになった文体の差や「独自の語」の意味分布について以下に述べる。

まず、BCCWJにおけるさまざまなジャンルでの出現傾向から、「ついに」が書き言葉的な文章に多く現れ、「とうとう」が話し言葉的な文章に多く現れることが明らかになった。

また、「地の文」と「会話文」における出現傾向について、『毎日』と『文学』に現れる両副詞の出現頻度に有意差が認められ、「ついに」より「とうとう」の方が両ジャンルにおいて「会話文」に多く現れることが明らかになった。

さらに、『毎日』『文学』における両副詞の出現頻度は「ついに」が多く現れた（また、両副詞の出現頻度に有意な差が認められた）。

次に、両副詞と共起する高頻度語の出現傾向について、『毎日』『文学』において、両副詞と共起する高頻度語の上位 5 語はそれぞれのジャンルで共通しており、両ジャンルにおいて、「する」「なる」「来る」「できる」の順で共通し、『毎日』では「言う」(5 位)、『文学』では「出る」(5 位)であった。『毎日』『文学』において、4 位までの述語の出現比率を合わせると、『毎日』は「ついに」が 38.0%、「とうとう」が 46.7%であり、『文学』は「ついに」が 38.4%、「とうとう」が 35.1%であった。『毎日』における「とうとう」は 4 位までその述語の出現比率を合わせると 5 割弱であり、その他は 4 割強である。この結果と先行研究における結果を比較してみると、両ジャンルにおいて、両副詞は少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かり、「ついに」「とうとう」は類義の度合いが高い類義語であることが分かった。

また、両副詞の「独自の語」の意味分布の検討により、「ついに」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れ、「とうとう」は「人間活動」部門に多く現れることが分かった。

さらに、両副詞の「独自の語」の意味分布は『毎日』『文学』というジャンルにおいて、その出現傾向が似ていることが明らかになった。また、両副詞の「独自の語」の意味分布で明らかになったことは以下の通りである。

まず、「抽象的關係」部門において、「ついに」の「独自の語」は、『毎日』では人や物事の状態の変化を表しているが、特にあるレベル・基準に達したこと、達していないことなど、想定している基準からの変化を表している。『文学』ではある状況の変化、人や物事の実質的・抽象的な移動を表している。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、『毎日』では人の実質的な移動を表し、『文学』では主体の具体的・抽象的な行動などの働きかけにより、客体の状態がマイナス方向に変化することを表している。

このように、「抽象的關係」部門において、「ついに」「とうとう」はジャンルにより「独自の語」の意味合いがやや異なっていることが分かった。

次に、「人間活動」部門において、「ついに」の「独自の語」は、『毎日』では人の言語行為、感情の変化、身体の動きで感情を表し、また、状況の変化を表している。『文学』では

人の感情、相手の質問に応じる言語行為を表している。人の移動で存在場所の変化を表す点は「抽象的關係」部門と似ていることが明らかになった。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、『毎日』では言語行為を表し、人の体の動きで思考・意志を表している。『文学』では人の感情、思考を表し、主体的な言語行為を行い、相手に影響を及ぼすものが現れた。また、人の状況の変化を表している。「とうとう」は「独自の語」が持つ単語・語彙レベルの意味を表すものがほとんどであり、この点が「ついに」と非常に異なる部分である。

また、「自然現象」部門において、「ついに」の「独自の語」は、『毎日』『文学』では、ある状況と人の状態の変化を表している点で類似していることが分かった。

一方、「とうとう」の「独自の語」は「自然現象」部門には現れなかった。

以上、「ついに」「とうとう」について、『毎日』『文学』を用いた検討により明らかになったことについて述べた。

次章からは「事態が瞬間的に成立する」点で共通し、類義関係にある「急に」「突然」について、これまでと同様の研究方法により検討していく。

## 第8章 BCCWJに見られる「急に」「突然」の相違

第4章から7章までは、「事態が成立するまで長い時間がかかる」意味を持つ類義関係にある「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」の相違について、BCCWJと『毎日』を用いて検討した。本章と第9章では、「事態が瞬間的に成立する」ことを表す類義関係にある「急に」「突然」の相違について検討していく。

### 8.1 はじめに

本章では、「ある事態が瞬間的に成立する」ことを共通点とする類義関係にある副詞「急に」「突然」について、両副詞と共起する述語を中心に出現傾向を検討し、両副詞の相違を明らかにする。

調査データはBCCWJを用い、さまざまなジャンルでの出現傾向から文体の差を明らかにする。また、「書籍」と「ベストセラー」の下位区分の一つである『文学』における「地の文」と「会話文」で出現傾向から文体の差を明らかにする。さらに、両副詞と共起する述語の出現傾向を検討し、また、「独自の語」の意味分布から両副詞の違いを明らかにする。

本章の構成は、第2節では、本章の目的を述べ、第3節では、調査データについて、第4節では、ジャンルごとの出現傾向から文体の差と、『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差について述べる。第5節では、「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向を検討し、また、中頻度語のうち「独自の語」の意味分布から両副詞の違いについて述べる。最後に、第6節では、本章の結論をまとめる。

### 8.2 本章の目的

本章では、類義関係にある「急に」「突然」について、BCCWJを用い、ジャンルによる両副詞の出現傾向から文体の差を、また、『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から両副詞の文体の差を明らかにする。さらに、『文学』における両副詞と共起する述語、特に中頻度語のうち「独自の語」の意味分布から、両副詞の違いを明らかにすることを目的とする。

### 8.3 調査データ

本節では、調査データについて述べる。さまざまなジャンルにおける「急に」「突然」の出現頻度と、「書籍」「ベストセラー」の下位区分の『文学』における出現頻度を示す。

まず、BCCWJにおける異なるジャンルでの出現傾向を通し、両副詞の文体の差を明らかにするため、両副詞の含まれている用例をジャンルごとに抽出した。

検索条件は短単位で行い、「急に」「突然」の入る文の抽出は、「急に」は〈急に〉〈キューニ〉〈きゅうに〉、「突然」は〈突然〉〈とつぜん〉〈トツゼン〉をキーワードにした。ジャンルによる用例の抽出の結果は、次の8.4.1の表8-1に提示する。

- (1) そして、きわめて不幸なことに、その一方で人間の生涯には究極の目的というものはなく、最後にはただ突然の死があるばかりなのですから、こういう生活は耐え難いものになります。(LBi3\_00111『近代の擁護』1994)
- (2) そこで小説では、何らかの化学物質を加えてミュータント (突然変異体) を作り出すという筋立てになっているが、実際にはそう簡単にコトは運ばないようである。(LBm3\_00105『人類サバイバルの条件』1998)
- (3) 車が舗装道路をそれると急に勾配のきついゴロタ道に変わった。(LBd9\_00022『昭和文学全集』1989)
- (4) 馬たちはあたりの地形をよく知っていて、傾斜が急にになると歩調をゆるめた。(LBm9\_00227『終末のプロメテウス』1998)

抽出された用例のうち除外した用例は上記の(1)(2)のように、「突然」が名詞のように使われたものと、(3)(4)のように、「急に」が時間的に成立する事態以外の意味で使われているものは除外した<sup>1</sup>。

両副詞と共起する述語を検討するため、「書籍」と「ベストセラー」の下位区分である『文学』での両副詞の出現頻度を示すと、「急に」が2132例、「突然」が2197例である。

以上、本章で検討対象にする「急に」「突然」の用例の抽出と、『文学』からの両副詞の出現頻度について述べた。

## 8.4 「急に」「突然」の文体と共起する述語

### 8.4.1 ジャンルごとに現れる「急に」「突然」の出現傾向

ここでは、「急に」「突然」の出現傾向から文体の差を明らかにするため、BCCWJのジャンルごとの出現傾向を検討する。

BCCWJのさまざまなジャンルごとの出現傾向をまとめたものが次の表8-1である。

<sup>1</sup> 除外した用例については第3章3.2を参照していただきたい。除外した具体的な用例について、「突然」は「突然変異、突然死、突然生」と慣用的な文などであり、「急に」は「勾配が急になる」のように、傾斜の度合の大きいさまと険しいさまを表しているものや執筆者の生年代が1890年以前の作品、重複の文などである。

表 8-1 「急に」「突然」のジャンル別の出現傾向

サブコーパス	急に		突然	
	頻度	比率	頻度	比率
書籍	3122	64.9%	3579	67.9%
ベストセラー	403	8.4%	377	7.2%
新聞	14	0.3%	58	1.1%
雑誌	135	2.8%	195	3.7%
白書	6	0.1%	8	0.2%
国会会議録	60	1.2%	46	0.9%
教科書	18	0.4%	15	0.3%
知恵袋	594	12.4%	496	9.4%
広報誌	26	0.5%	36	0.7%
韻文	10	0.2%	10	0.2%
法律	0	0.0%	0	0.0%
ブログ	419	8.7%	448	8.5%
合計	4807	100.0%	5268	100.0%

表 8-1 から、ジャンル別に現れる「急に」「突然」の出現比率を比べると、両副詞の出現傾向から、「新聞」において「急に」より「突然」の方が 0.8% 高かった以外、ジャンルにおいて、「急に」と「突然」の間には出現傾向に大きな相違は見られない<sup>2</sup>。

しかし、数値的に差はないものの、出現傾向をジャンルごとに分けてみると、「急に」は「ベストセラー」「国会会議録」「知恵袋」「ブログ」「教科書」にやや多く現れ、「突然」は「書籍」「新聞」「雑誌」「白書」「広報誌」にやや多く現れる。

フォーマルとインフォーマルの観点から、「急に」がやや多く現れたジャンルを見ると、フォーマルさが求められる「国会会議録」と、ある個人が質問をし、それに対し、ある個人が回答を寄せる掲示板である「知恵袋」はある程度のフォーマルさが必要であろう。一方、「ブログ」はフォーマルさがあまり必要ではないジャンルであろう。

以上、「急に」はフォーマルさに自由で、流動的なジャンルであると思われる。一方、「突然」は、「書籍」と「新聞」において、「会話文」と「地の文」があるため、フォーマルさを特定しにくいと思われるが、改まり度の高いジャンルである「雑誌」「白書」にや

<sup>2</sup> 「書籍」では「突然」の方が 3% 多く、「ベストセラー」では「急に」の方が 1.2% 多く、「新聞」では「突然」の方が 0.8% 多く、「雑誌」では「突然」の方が 0.9% 多く、「白書」では「突然」の方が 0.1% 多く、「国会会議録」では「急に」の方が 0.3% 多く、「教科書」では「急に」の方が 0.1% 多く、「知恵袋」では「急に」の方が 3% 多く、「広報誌」では「突然」の方が 0.2% 多く、「ブログ」では「急に」の方が 0.2% 多く現れた。数値的に顕著な差は見られなかった（「韻文」では両副詞とも 0.2%、「法律」では両副詞とも 0.0% で出現比率は類似している）

や多く現れることから、「突然」は「急に」より書き言葉的で改まった文に現れやすく、「急に」は「突然」より話し言葉的な文に現れやすいことが言えよう。

#### 8.4.2 『文学』における「地の文」「会話文」での出現傾向

ここでは、「書籍」と「ベストセラー」の下位区分である『文学』における「急に」「突然」の「地の文」と「会話文」での出現傾向を検討する。

- (5) テル わが子殺しになれといわれますか！ 代官様、あなたには子どもがありません—ごぞんじないのです、父の心の中でゆれるものを。ゲスラー おや、テル、おまえは急にひどく考え深くなったな！ おまえは夢にふけり、ほかの者のやり方とははずれていると聞いている。おまえは変わったことが好きだ—だからわしはいま、おまえのために大胆なくわだてを選び出したのだ。(LBf9\_00043『巖谷小波とドイツ文学』1991)
- (6) 健一「お前がいい出したんだぞ」実「俺が休むと会社パニックだからなあ（と冗談でいう）」良雄「こっちはちょっといくつも予定が」健一「一日ぐらい急に休めなくて生きてるといえるか？」実「お前こそ、奥さんにいいのかよ？」健一「平気さ」良雄「あ、平気でもない声だった」陽子「ほんと—」(LBf9\_00007『ふぞろいの林檎たち』1991)

「会話文」の認定について、「急に」「突然」の用例に現れた上記の(5)(6)のような文を「会話文」としてカウントした。『文学』における「急に」「突然」の「地の文」と「会話文」での出現傾向をまとめると、下記の表 8-2 となる。

表 8-2 「地の文」と「会話文」での出現傾向

	急に		突然	
	頻度	比率	頻度	比率
地の文	1732	81.2%	1952	88.8%
会話文	400	18.8%	245	11.2%
合計	2132	100.0%	2197	100.0%

表 8-2 から、「急に」は「会話文」に 400 例 (18.8%) 現れ、「突然」は「会話文」に 245 例 (11.2%) 現れた。ここで、「地の文」と「会話文」における両副詞の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた (『文学』:  $\chi^2=49.4211$ ,  $p<0.05$ )。『文学』において、両副詞の「地の文」と「会話文」での出現傾向から、「急に」が「突然」より「会話文」に多く現れると言えよう。

### 8.4.3 『文学』における「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向

#### 8.4.3.1 除外した項目

ここでは、「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向について検討する。両副詞と共起する高頻度語の順位を確認する前に、除外した用例は以下の通りである。

- (7) 奈月は、小さな口を突き出し、か細い声で答えた。突然、中堂は眉間にシワを寄せた。落ち着かない様子。「どうかしたの?」「いや...その...急にトイレに...」「なんだ、ウンコかあ。調子狂うよな、まったく」奈月は短く笑った。(LBc9\_00004『タイホされたし度胸なし』1988)
- (8) 椎名 うん。名古屋はどこのお店もそうなんですか。小野 そうです。有名な店だと、「うどん錦」「鯨乃家」「若鯨家」ですね。椎名 俺、カレーうどんって、突然、食べたくなるなあ。一度、そう思っちゃうと、食べたくて食べたくてたまんなくなる(笑)。東海林 道を歩いていて突然にね。椎名 ふいにね。東海林 ふいものだね(笑)。(LBq9\_00209『太っ腹対談』2002)
- (9) 大佐が、車を発進させる。「どうなさったんですか、突然。あいにく、昼食はすませてしまいました」尾形が言うと、提督は沈痛な表情で応じた。(LBr9\_00221『燃える蜃気楼』2003)

上記、(7)のように、「急に。」で終わるものや「急に」と共起する述語が「名詞+助動詞」であるもの、「体言止め」であるものなど、合計 58 例を除外した<sup>3</sup>。

一方、「突然」の場合、(8)のように、文が「突然(に)。」で終わるものや「突然」と共起する述語が「名詞+助動詞」のもの、「体言止め」のもの、共起する述語が省略されているものなど合計 35 例を除外した<sup>4</sup>。除外したもののうち、(9)のように、「突然」の位置が強調などにより倒置されているものは、文が「突然(に)。」で終わる用例に入れ、カウントした。

以上のように、「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向を検討する際、共起する述語が省略されたものや「急に」「突然」で終わるものなどを除外し、用いる。

<sup>3</sup> 「急に」と共起する述語が省略されたものは 53 例、「急に。」で終わるものは 1 例、述語が「名詞+助動詞」であるものは 3 例、「体言止め」であるものは 1 例現れた。

<sup>4</sup> 文が「突然(に)。」で終わるものは 8 例、述語が「名詞+助動詞」であるものは 1 例、「体言止め」であるものが 8 例、述語が省略されているものは 18 例現れた。



### 8.4.3.2 「急に」「突然」と共起する高頻度語

ここでは、「急に」「突然」と共起する述語について検討する。出現頻度の高い順 10 位までまとめたものが下記の表 8-3 である。

表 8-3 「急に」「突然」と共起する高頻度の動詞

急に				突然			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	なる	627	30.2%	1	する	232	10.7%
2	する	152	7.3%	2	なる	163	7.5%
3	言う	59	2.8%	3	言う	103	4.8%
4	変わる	42	2.0%	4	現れる	78	3.6%
5	思い出す	30	1.4%	5	思い出す	33	1.5%
6	変える	28	1.4%	6	上げる	32	1.5%
7	感じる	26	1.3%	7	立ち上がる	30	1.4%
8	覚える	20	1.0%	8	聞こえる	25	1.2%
9	立ち上がる	19	0.9%	8	叫ぶ	25	1.2%
10	出る	17	0.8%	8	出る	25	1.2%

表 8-3 から、出現頻度の高い述語を見ると、「急に」は「なる」(1 位)、「する」(2 位)であり、「突然」は「する」(1 位)、「なる」(2 位)である。「急に」に「なる」の出現が多いことから、状態の変化を表す事態が多く、「突然」に「する」の出現が多いことから、動作を表す動詞が多いと言えそうである。しかし、「急に」は「なる」の次に「する」が多く、また、「突然」は「する」の次に「なる」が多く出現することから、「急に」は状態の変化を表す動詞との共起が多く、「突然」は動作を表す動詞との共起が多いと断言しにくい。両副詞が「する」「なる」と共起しやすいと言えとしても、その形式と意味は異なる可能性がある。そのため、「する」「なる」については、形式の面からの検討が必要であろう。

趙(2012a)は、『毎日』95年から97年をデータとして、ランダムで1000例ずつ抽出し、両副詞と共起する述語と、述語のうちの「する」「なる」を検討し、形式的な面の相違を明らかにしている。「する」「なる」において、「する」「なる」に前接する語を検討し、「急に」と共起する「する」について、「する」に前接する語がある場合、「導入する」などのサ変動詞、「めまいがする」などの感覚を表すもの、「ドキッとする」などの副詞、「荒くする」などの形容詞が現れるとしている。また、前接する語がない場合は、「急にする」形で現れるとしている。一方、「突然」と共起する「する」について、「する」に前接する語はサ変動詞、感覚を表す表現、意志表現、「一人にされる」などの名詞が現れると述べている。

また、「なる」について、「なる」に前接する語は「明るくなる」などのような形容詞、「不安になる」などの形容動詞、「日本人になる」などの名詞、決定を表す表現「～ことになる」、状態の変化を表す「～ようになる」、命令の表現が見られるとしている。また、「なる」に前接する語がない場合、「急になる」形で現れるとしている。さらに、「する」「なる」の形式上注目すべき点は、「急にする」「急になる」であり、「突然」には見られない表現であり、「急になる」は、空間的な変化を表し、「急にする」は急いでいる動きを表しているとしている。

このように、趙 (2012a) は、「する」「なる」について形式的な面から検討し、「急にする」「急になる」以外に両副詞に大きな差がないことを明らかにし、「する」「なる」の意味上の検討から、「急に」「突然」は、状態の変化を表す事態が共通的に多く現れ、「急に」は感情的な変化、「突然」は地位・場所・動きの変化など外面的な変化に多く現れる傾向が見られたことを指摘している。

表 8-3 に見られるように、「急に」のみ現れる共起する動詞は「変わる」「変える」「感じる」「覚える」であり、一方、「突然」のみ現れる共起する動詞は「現れる」「上げる」「聞こえる」「叫ぶ」である。しかし、両副詞それぞれのみ現れる動詞においても、互いに 10 位以降に現れることが確認できた。例えば、「変わる」は「急に」に 42 例 (4 位) 現れ、「突然」に 18 例 (20 位) 現れている。また、「現れる」は「突然」に 78 例 (4 位) 現れ、「急に」に 11 例 (22 位) 現れている。

ところで、「急に」「突然」と共起する高頻度の述語のうち 5 位以内に共通している語は、「なる」「する」「言う」「思い出す」であり、これらの出現比率を合わせると、「急に」が 41.7%、「突然」が 24.5% である。両副詞と共通する共通の述語の出現比率から、「急に」の方が少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かる。

次節からは「急に」「突然」と共起する述語について、中頻度語のうち「独自の語」を用い、その意味分布から両副詞の違いについて検討していく。

## 8.5 「独自の語」からの「急に」「突然」の相違

本節では、「急に」「突然」と共起する述語について、それぞれの「(使用)範囲・度数分布表」から、中頻度語のうち「独自の語」を中心に検討していく。

まず、次の表 8-4 と表 8-5 は、「急に」「突然」の「(使用)範囲・度数分布表」を示したものである。

表 8-4 「急に」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『文学』範囲(補正前)		『文学』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	627~16	0%~50.7%	12		30	1	31	6.7%
	15~9	~61.1%	18	1				
中頻度	8~5	~69.2%	26	1	111	58	169	36.3%
	4~3	~79.2%	40	19				
	2	~87.4%	45	38				
低頻度	1	~100.0%	88	177	88	177	265	57.0%
合計	2074		229	236	229	236	465	100.0%

表 8-5 「突然」の「(使用)範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『文学』範囲(補正前)		『文学』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	232~12	0%~49.8%	30		53	1	54	10.7%
	11~8	~59.9%	23	1				
中頻度	7~5	~70.3%	36	4	110	75	185	36.7%
	4~3	~80.3%	36	28				
	2	~87.8%	38	43				
低頻度	1	~100.0%	66	199	66	199	265	52.6%
合計	2162		229	275	229	275	504	100.0%

表 8-4 と表 8-5 から、「高頻度」「中頻度」「低頻度」の見出し語の比率は「急に」が 6.7%、36.3%、57.0%であり、「突然」が 10.7%、36.9%、52.4%である。ここで、「中頻度」の見出し語は両副詞とも約 37%の比率で数値的に近い数値である。「中頻度」の見出し語のうち固有動詞である「独自の語」は「急に」が 58 語、「突然」が 75 語である。この「独自の語」について、『分類語彙表』を用いて意味分類をし、まとめたものが次の表 8-6 である。

表 8-6 「急に」「突然」の「独自の語」の意味分布

意味分布			急に		突然	
部門	中項目		頻度	比率	頻度	比率
抽象的關係	2.11××	類			1	0.5%
	2.12××	存在	9	6.0%	21	10.4%
	2.13××	様相	5	3.3%	7	3.5%
	2.15××	作用	41	27.2%	77	38.1%
	2.16××	時間	2	1.3%		
	2.17××	空間	2	1.3%	6	3.0%
小計			59	39.1%	112	55.4%
人間活動— 精神及び行為	2.30××	心	30	19.9%	15	7.4%
	2.31××	言語	8	5.3%	15	7.4%
	2.33××	生活	3	2.0%	14	6.9%
	2.34××	行為	3	2.0%		
	2.35××	交わり			9	4.5%
	2.36××	待遇	2	1.3%		
	2.37××	経済			9	4.5%
	2.38××	事業	1	0.7%	3	1.5%
小計			47	31.1%	65	32.2%
自然物及び 自然現象	2.50××	自然	24	15.9%	13	6.4%
	2.51××	物質	12	7.9%	8	4.0%
	2.57××	生命	9	6.0%	4	2.0%
小計			45	29.8%	25	12.4%
総計			151	100.0%	202	100.0%

表 8-6 から、両副詞の「独自の語」の出現比率を「抽象的關係」「人間活動」「自然現象」部門別に比較すると、「急に」の「独自の語」は「自然現象」部門に多く現れ、「突然」の「独自の語」は「抽象的關係」「人間活動」部門に多く現れる。しかしながら、「人間活動」部門における出現比率は「急に」が 31.1%、「突然」が 32.2%であり、数値的に大きな差があると言にくい。

また、これらの差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ ( $\chi^2=18.5844$ 、 $p<0.05$ )、有意性が認められた。

では、各部門における両副詞の「独自の語」はどのような特徴があるのか検討していく。

まず、「抽象的關係」部門において、「急に」「突然」の「独自の語」は、中項目「存在」「様相」「作用」「空間」に共通して現れ、「急に」は中項目「時間」のみ、「突然」は中項目「類」のみ現れる。中項目に現れる分類項目については、以下の通りである。

「急に」の「独自の語」は、中項目「存在」には分類項目「出沒」「発生・復活」「消滅」「除去」が現れ、中項目「様相」には分類項目「弛緩・粗密・繁簡」が現れた。また、中項目「作用」には分類項目「作用・変化」「移動・発着」「走り・飛び・流れなど」「出・出し」「入り・入れ」「上がり・下がり」「接近・接触・隔離」「成形・変形」「切断」「増減・補充」「伸縮」「進歩・衰退」が現れた。さらに、中項目「時間」には分類項目「年配」が現れ、中項目「空間」には「方向・方角」が現れた。

一方、「突然」の「独自の語」は、中項目「類」には分類項目「連絡・所属」が現れ、中項目「存在」には分類項目「出沒」「発生・復活」「消滅」「除去」が現れ、中項目「様相」には分類項目「調和・混乱」「調節」が現れた。また、中項目「作用」には「作用・変化」「開始」「終了・中止・停止」「動揺・回転」「移動・発着」「走り・流れなど」「往復」「出・出し」「包み・覆いなど」「上がり・下がり」「乗り降り・浮き沈み」「分割・分裂・分散」「開閉・封」「接近・接触・隔離」「突き・押し・引き・すれなど」「防止・妨害・回避」「成形・変形」が現れた。さらに、中項目「空間」には分類項目「空間・場所」「方向・方角」が現れた。この分類項目の現れ方から、両副詞の「独自の語」は共通する意味分布が多いことが窺えるが、以下、実例を用いて、相違点について検討する。

- (10) わたしもやっぱり女なんだわ、とシャーロットはつくづく感じた。バネッサの顔はこぼぼって怒りの色が広がり、美しさが失われ、急に老けてみえた。(PB29\_00321 『たそがれの林檎園』2002)
- (11) 五回、十回、二十回と呼出音は虚しく響き続けた。何をやっているんだお前は。自分に言いきかせ、受話器を置こうとした瞬間、電話は突然繋がった。(LBh9\_00071 『どこにもない短編集』1993)
- (12) 最後のトンネルを出るとき、私は伊根子の手が一瞬空中に軽く浮んだのを見たように思った。それは急に、伸ばしている手を引っ込める、そんな恰好の手の動きであった。(LBh9\_00060 『椎の木のはより』1993)
- (13) 「悪いが、やめてくれないか」業を煮やして守渡は言った。「お気に召しませんか」と、井澤。「ああ、葬式みたいだからな。遠い話じゃないけど」「すみません」オラショが止むと、いやに静かになった。「おっと」井澤が急にハンドルを切った。ふる、と車体が揺れる。(LBs9\_00147 『呪文字』2004)
- (14) 中沢将監は堀千助の言葉を得て安心したのか、堅くしていた顔をにわかにはころばせ、林蔵をうながした。二人の話を耳にして、一座の雰囲気が急になごやかにゆるんだ。(LBp9\_00201 『火宅の坂』2001)

- (15) だが仕事が手につかなかった最大の理由は、やはり抄子と思うように逢えなかったからかもしれない。抄子の母が怪我をして以来、逢う回数は急に減ったし、逢っても短い時間にかぎられていた。(OB3X\_00260『うたかた』1990)
- (16) ...もともと心臓が丈夫じゃなかったんでございますのよ。遺伝じゃございませんの。それはもう確かなんですの。精神的な、結局はそういう内面的な原因だったんでございましょうね。昔、急に肥ったことがございましてね、小学校の四年生の頃でしょうか。(OB1X\_00164『ぼくの大好きな青髭』1977)
- (17) ナイト・クラブ正面の出入口は、当日券を買えなかった者や一目でもレズリーや加代を見ようと集まった人々でごった返していた。そこへ突然、二人が姿を現したため、大歓声が沸き起こった。(PB49\_00071『マグネット』2004)
- (18) 二人にとって武芸者の出現は、思いも寄らぬことだったのだ。突然、朽ち木の向こう側に、武芸者の姿が浮かび上がったのである。(LBb9\_00081『剣鬼啾々』1987)
- (19) 親父の狙いは大混乱の突発にあるわけだから、目的は大達成だ。口答えをした者は、突然生じた惨状に肩を落としてしょげ返る。(PB29\_00672『家族力』2002)
- (20) 「僕は言わないぞ！」言葉がハリーの口から飛び出し、墓場中に響き渡った。そして冷水を浴びせられたかのように、突然夢見心地が消え去った—同時に、体中に残っていた「磔の呪い」の痛みがどっと戻ってきた—そして、自分がどこにいるのか、何が自分を待ち構えているのかも…。(OB6X\_00098『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』2002)

「急に」の「独自の語」は「時間／年配」に(10)「老ける」が現れ、人の状態の変化を表しているが、「老ける」という語自体に成立するまでの事態の進行過程が含まれている。一方、「突然」は「類／連絡・所属」に(11)「つながる」が現れ、物事の状態の変化を表し、「つながる」ことは成立までの事態の進行過程の意味合いは含まず、つながるか、つながらないかで事態の成立した時と成立する前のことが断絶している。この「突然」の事態の成立した時と成立する前が断絶していることは、浅野(1982)で指摘している「事態と前の状態との断絶が際立っている」ことと類似していると思われる。

また、「急に」は「存在／出没」に(12)「引っ込める」が現れ、人の動作を表しており、(10)と関連し、事態(動作)が連続して現れることである。つまり、進行過程の意味が含まれている事態である。また、「急に」には「作用／切断」に(13)「切る」が現れ、ハンドルを切るという成立するまで連続して行われる行動であり、進行過程の意味合いが含まれていると思われる。

さらに、「急に」は「様相／弛緩・粗密・繁簡」に(14)「緩む」が現れ、雰囲気という環境や状況の変化を表しており、連続する時間の中に展開していく事態の変化を表している。なお、「急に」は「作用／増減・補充」に(15)「減る」が現れ、回数ということはある段階が存在する事態であり、成立するまで事態が連続している。また、「作用／伸

縮」に(16)「肥る」が現れ、人の状態の変化である。「肥る」も(14)「緩む」と似ており、事態の成立が断絶せず、連続する時間の中に展開していく事態の変化を表している。

一方、「突然」の「独自の語」は、「存在／出没」に(17)「現す」が現れ、状態の変化を表しているが、現わしていない時と現わしている時が断絶している。つまり、事態の成立した時とその前が明確に切れ、断絶している。「作用／乗り降り・浮き沈み」に(18)「浮かび上がる」が現れ、事態の成立した時とその前が断絶している。(17)も(18)も主体の存在場所の変化も表している。また、「存在／発生・復活」に(19)「生じる」が現れ、人の環境や状況の変化を表しているが、惨状が生じたことと生じていないことで断絶している。さらに、「存在／消滅」に(20)「消え去る」が現れ、人の感情の変化であるが、あったものがなくなったことで事態の成立が成立する前と断絶している。

このように、(17)から(20)までは、ある所に人が現れたり、消えたりすること、人を取り巻く周りに何か(悪いこと)が起こったり、なくなったり、人にある感情が生じたりなくなったりすることで(11)のように、事態が成立した時と成立する前が断絶している点で共通している。

(21) 「さればなにもきかぬがよい。ましてやわしがおぬしになにをたずねたかを、人には決してもらさぬことじゃ。もうせば命がないものと思え」「か、かしこまりました」かれは急に肩をすぼめてうなずいた。三良が放つ殺気めいたものにおののいたのである。(PB39\_00204『見えない橋』2003)

(22) 「聞いておきたいこと？」その言葉を聞いて、新自は皮肉っぽい笑みを浮かべた。「何だい、今さらあらたまつて。君とぼくの間柄じゃないか」「そう。聞きたいのは、そのことなのよ」美紀は急に語調を強め、「あたしとあなたの間柄—それは一体どういうものだったの？ あたしが聞きたいのは、そのことなのよ」「君とぼくの関係って言ったって、何を言えればいいんだい？ぼくたちは一時期は互いに好き合い、付き合っていた関係にあったが、今はもう別れてしまった—その経緯は君もよく知っているとおりにゃないか」(LBk9\_00246『ネヌウェンラーの密室』1996)

(23) ロウソクの光で女性記者は輝いていた。暗闇の戦闘 夜の十時すぎ、突然激しい射撃音が始まった。(LBp9\_00127『戦場特派員』2001)

(24) 小走りに住宅の間を走りぬけたその時だった。突然、低い中年の男の声が服部を呼び止めた。(LBt9\_00255『悪魔が舞い降りる夜』2005)

(25) しばらくすると、希味子の顔がずっと近寄って来た。美々は、〈起きます、起きて飲みますわ〉と言うつもりだったが、突然、生暖かいものが彼女の唇を塞いだ。(LBk9\_00247『富士山麓殺人事件』1996)

(26) 正月明けに大雪が降ったことを除けば、穏やかな天気がつづき、平穏な一年がはじまるかにみえた。ところが、ひと夜明ければ二月、という今日になって、突然災いが降りかかった。(PB19\_00150『お鳥見女房』2001)

また、「急に」の「独自の語」は「作用／伸縮」に(21)「すぼめる」が現れ、人の動作であると同時に人の気持ちも表している。「すぼめる」という動作も断絶する事態ではなく、連続している事態である。「作用／進歩・衰退」に(22)「強める」が現れ、人の言語行為であり、連続している事態を表している。

一方、「突然」の「独自の語」は、「作用／開始」に(23)「始まる」が現れ、聴覚的な事態の変化を表し、事態の成立がその前と断絶している用例が見られた。「作用／終了・中止・停止」に(24)「呼び止める」が現れ、人の言語行為を表すと同時に相手に働き掛け、影響を及ぼす言語行為である。また、「作用／開閉・封」に(25)「塞ぐ」が現れ、人の動作を表すと同時に相手の状態に影響を及ぼすことを表している。さらに、「作用／包み・覆いなど」に(26)「降り掛かる」が現れ、人が悪い状況に置かれた状況の変化を表している。

次に、「人間活動」部門において、「急に」「突然」の「独自の語」は、中項目「心」「言語」「生活」「事業」に共通して現れた。「急に」は中項目「行為」「待遇」にのみ現れ、「突然」は中項目「交わり」「経済」にのみ現れた。

中項目に現れる分類項目については、以下の通りである。

「急に」の「独自の語」は、中項目「心」には分類項目「心」「飢渴・酔い・疲労・睡眠など」「恐れ・怒り・悔しさ」「安心・焦燥・満足」「表情・態度」「信念・努力・忍耐」「自信・誇り・恥・反省」「思考・意見・疑い」「決心・解決・決定・迷い」が現れ、中項目「言語」には分類項目「言語活動」「評判」が現れ、また、中項目「生活」には分類項目「立ち居」が現れ、中項目「行為」には分類項目「義務」「行為・活動」が現れた。さらに、中項目「待遇」には分類項目「請求・依頼」が現れ、中項目「事業」には分類項目「扱い・操作・使用」が現れた。

一方、「突然」の「独自の語」は、中項目「心」には分類項目「感動・興奮」「飢渴・酔い・疲労・睡眠など」「注意・認知・了解」「見る」「見せる」が現れ、中項目「言語」には分類項目「言語活動」「伝達・報知」「問答」が現れた。また、中項目「生活」には分類項目「人生・禍福」「処世・出世進退」「衣生活」「いたずら・騒ぎ」「立ち居」「手足の動作」「口・鼻・目の動作」が現れ、中項目「交わり」には分類項目「応接・送迎」「賛美」「攻防」が現れた。さらに、中項目「経済」には分類項目「経済・収支」「授受」が現れ、中項目「事業」には分類項目「運輸」「練り・塗り・撃ち・録音・撮影」が現れた。

(27) そんなふうには話しながら、しげしげと彼をながめていると、もしジェルトリュードに目が見えるとしたなら、そのすらりとよく伸びたしなやかな姿や、皴ひとつない美しい額、あっさりしたまなざし、まだ子供っぽいけれど急に重みを帯びてきたような顔つきなどを、平気で見すごすことはあるまいと思われた。(PB59\_00297 『田園交響楽』2005)



- (28) そういう覚悟がなければ桐野のような男がもっている野性の気魄を前にして立っているだけでも不可能だった。「貴君は、それでよかろ」と、桐野は急に気を抜いた。かえってそれが危険だった。(OB0X\_00010『翔ぶが如く』1975)
- (29) 砂の上のヘリコプターがみるみる小さくなる。危険？ なのに彼は一人でここへ来た。砂嵐？空が奇妙な赤さに染まっている。フェイは急におびえ、バックパックを抱きしめた。(PB29\_00323『砂の迷路』2002)
- (30) 「分かった。誰か取りに来させよう」と組長が葉巻をくわえた所で電話が鳴った。子分が出て話を聞くと、急に慌てて、「...組長...大変です...！」と叫んだ。  
(LBb9\_00117『天空少女拳』1987)
- (31) 冬はきっと寒いことでしょうが、夏は過ごしやすい土地です」と、女性らしい細かいペンの丁寧な文字が並んでいた。「智洋ちゃんは、どうしていますか？」主婦は急に表情を崩した。(LBi9\_00112『穂高屏風岩』1994)
- (32) 借一しきり小便所の方がや/ \と騒がしきと思ふうち焼場の臭ひも鼻に入るやうになり 賑やかな所ほど静かになれば淋しきものにて 音頭をとつた角兵衛から先へ目を覚まして見れば 昨夜の騒ぎは夢の如く 嗚呼くだらぬ事をしたと腕を組めば 千太郎をば無理に連れ来りしは余りに大人気なしと心づき少しも早く帰らんと 急に人々を催し立てれば 皆な後悔の顔色揃ひ 山形屋はどうした まだ起きないか ドレ起こして来やうと 外から声を掛けて座敷を明ければ 千太郎は蒲団の中へ潜り込んで 越後屋さん私は少し腹が痛みますから 貴君方はお先へお帰りなすつて下さい との挨拶に頭を角兵衛が是れは/ \一「鉄心石腸」の略。(PB59\_00340『風刺文学集』2005)
- (33) 五月上旬、爽やかな日々が続いていた頃、急にセツが名古屋の妹のもとへ連れて行ってくれと文子に頼んだ。(PB39\_00313『夕風』2003)
- (34) 「俺、薪能行く。せつかく招待してもらったんだし」流がきっぱりと宣言した。「京也、あきらめろよ、流は一度決めた事、曲げないぜ」カウンターに置いてあったポテトチップをほおぼりながら、事の成り行きを見物していたフェンウェイがとどめをさす。「お前も一緒に行ってくれるよな、フェンウェイ」「えっ、なんで俺が？」突然ふられ、フェンウェイは焦って聞き返した。「俺一人でそんなところ行けるわけないだろ。友達も一緒にどうぞって言われたし」(LBo9\_00096『闇天使』2000)
- (35) 三人組が照子の車を停めて燃料を分けてくれと言った。照子が快く応じたところ、犯人は突然照子に襲いかかった。(LBq9\_00181『殺人の債権』1930)
- (36) 「この男は、JR西日本を餌になったあと、奥さんにも逃げられ、サラ金に二百四十万円の借金があった。ところが、二ヶ月前、突然、その借金をきれいに払い、行方がわからなくなっていたということだ」と、十津川は亀井たちに説明した。  
(LBs9\_00007『裏切りの特急サンダーバード』2004)

- (37) 私は驚きまして—というのは私は本田さんとはもう何年も、六、七年になりますか、音信が途絶えておったところに突然このような手紙を受け取ったからなのですが—すぐに本田さんあてに手紙をしたためました。(PB39\_00738『村上春樹全作品 1990～2000』2003)
- (38) マーゴ・ポスナーに関して言えば、わたしは彼女が妹だと、本当に信じ込んでいたのだ。彼女が突然、気がふれて、やたら買い物をしまくったり、家族を皆殺しにするなどと口走ったとき、わたしは宥めすかして、シカゴへ帰らせた。(OB4X\_00156『遺産』1995)
- (39) リビーの残り香と共に、地球が違った軌道でまわりはじめたように思える。そのときニールは、先ほどリビーががっかりした理由を突然悟った。大切なのは自分の力量を証明することではなく、窮地に陥っている勤勉な部下を助けることなのだ。(PB49\_00270『キスはおあずけ!』2004)

「急に」の「独自の語」は、「行為／義務」に(27)「帯びる」、「心／信念・努力・忍耐」に(28)「抜く」、「心／恐れ・怒り・悔しさ」に(29)「おびえる」、「心／安心・焦燥・満足」に(30)「慌てる」、「心／表情・態度」に(31)「崩す」が現れ、人の感情の変化を表している。

また、「行為／行為・活動」に(32)「もよおす」が現れ、人の言語行為を表すと同時に相手に働きかけることを表している。また、「待遇／請求・依頼」に(33)「頼む」が現れ、(32)と同様に相手の人に働きかける主体である人の言語行為である。このように、「急に」は人の感情を表すものが多く現れており、また、言語行為によって相手に働きかける用例が見られた。

一方、突然の「独自の語」は、「交わり／賛美」に(34)「振る」が現れ、マイナスの意味で相手に影響を及ぼす人の言語行為でありながら、振られた状況も表している。「交わり／攻防」に(35)「襲いかかる」が現れ、相手の人に直接影響を与える人の動作を表している。

また、「経済／経済・収支」に(36)「払う」が現れ、自分にあつた借金が完全になくなったことで状況の変化を表し、「経済／授受」に(37)「受け取る」が現れ、手紙をもらっていない状況と比較すると、成立したこととする前と断絶している。

さらに、「心／感動・興奮」に(38)「触れる」、「心／注意・認知・了解」に(39)「悟る」が現れ、人の思考を表している。

最後に、「自然現象」部門において、「急に」「突然」の「独自の語」は、中項目「自然」「物質」「生命」には共通して現れ、「急に」は、中項目「自然」に分類項目「光」「色」「音」「材質」が現れ、中項目「物質」には分類項目「気象」「風」「雲」「熱」が現れた。中項目「生命」には分類項目「生」「生理」「病気・体調」が現れた。

一方、「突然」は、中項目「自然」には分類項目「音」、中項目「物質」には分類項目「風」「雲」「天気」「火」が現れ、中項目「生命」には分類項目「死」「病気・体調」が現れた。

- (40) 隆啓も南方に出征したので、なんだか他人とは思えない。兵隊は急に声をひそめ、憚るように言った。(LBr9\_00272『浮かれ三亀松』2003)
- (41) 「あっすいません。僕、辞退します」和巳の突然の言葉で、急に事務所内が静まり返った。(PB49\_00363『僕が退職願を出すまで』2004)
- (42) 運転手は伸びをしながら、おっくうそうに立ち上がった。そのとき突然、静まり返ったロビーに警報ベルがけたたましく鳴り響いた。(OB4X\_00163『血族』1991)
- (43) それが延々と、窓外を飛びすさって行く。やがて「おお。守口市に入ったばい。さらば大阪市...ちゅうわきたいね」と突然、怪物の声が轟いた。(LBr9\_00016『突破』2003)
- (44) 微風だが首のあたりが急に冷え、額田王は何となく襟を合わせた。(LBi9\_00045『茜に燃ゆ』1994)
- (45) 「一さあ、山を下りましょう」福井村長は、急に老け込んだように、石井に支えられて、やっと歩き出した。(LBs9\_00064『その女の名は魔女』2004)
- (46) 自分の気持との折り合いのつけ方に精根を使い果たしている間、十七歳で母を突然亡くした娘への配慮は、明らかに後回しとなっていた。(PB49\_00257『月の川を渡る』2004)

「自然現象」部門における両副詞の「独自の語」は、「自然／音」に共通するものが多く現れた。「急に」の「独自の語」は、(40)に「潜める」が現れ、事態の成立が連続している。また、(41)「静まり返る」が現れ、騒ぎ出していた空間が静かになったという聴覚的な事態の変化である。

一方、「突然」の「独自の語」は、(42)「鳴り響く」、(43)「轟く」が現れ、聴覚的な事態の変化である。

「自然／音」に現れる両副詞の「独自の語」は相反的な意味を表していると思われる。それは、「急に」は存在していた音や声が静かになること、つまり、その音量が小さくなることを表しているが、「突然」は存在していなかった音や声が静かな空間に突発的に生じる、つまり、音や声が発生することを表している。

また、「急に」の「独自の語」は、「物質／気象」に(44)「冷える」が現れ、事態の成立に進行過程が含まれている。同様に、「生命／生」に(45)「老け込む」が現れるが、老けていく過程が必ず存在するため、事態に連続する過程が含まれている。

これらの「独自の語」は、上記の「抽象的關係」部門における「急に」の「独自の語」の特徴と類似している。

一方、「突然」の場合も、上記の「抽象的關係」部門と関連し、「生命／死」に(46)「亡くす」が現れ、人の状態の変化を表している。人が亡くなった事態と亡くなる前、つまり、生きていた事態の間が断絶することであり、事態の成立とその前の切れ目が存在する。

以上、「抽象的關係」「自然現象」部門における結果は、趙(2012a, 2012b)で明らかにしている。「急に」は事態の成立する動詞の中、連続する過程の意味が含まれていることが多く、「突然」はこれらの意味合いが含まれていないという結果と共通している。

また、李(2006: p.69)は、認知意味論の観点で「急に」「突然」について検討し、両副詞の相違を以下のように述べている。

「急に」について『ある事柄の発生・成立点の様子(進行過程)』の部分がベースに含まれる。つまり、『話し手がある事柄の発生・成立点の様子(進行過程)に注目し、その進行過程が何らかの基準に比べて大きいととらえる』ことを表す場合に用いられる。」と述べており、「突然」について『ある事柄の発生・成立点そのもの』がベースとなる。つまり、『話し手がある事柄の発生・成立点そのものに注目し、まったく予想外の、前ぶれのない瞬間的なものであるととらえる』ことを表す場合に用いられる。」と述べている。

李(2006)の指摘したように、「急に」は事態の進行過程が「独自の語」の検討でも現れたと思われる。李(2006)は事態の進行過程に“注目する”と解釈しているが、「独自の語」である動詞の持つ語彙的な意味にもともと進行過程の意味が含まれていると解釈も可能であると言えるのではないかと思われる。つまり、上記の(16)「肥る」や(44)「冷える」などは、事態の成立するまでに進行する過程が含まれているためである。

本章における「独自の語」について、「独自の語」自体の単語・語彙レベルと、「独自の語」と係る補語を考える句レベルにおいて、事態の成立に進行過程の意味合いが含まれていることと、李(2006)の事態の進行過程に注目することで重要なのは、「事態の成立まで進行過程がある」ことだと思われる。そのため、「急に」において、李(2006)と本章の結果は、共通している。

ここで強調したいことは、本研究の検討により、「事態が成立する進行過程」という意味合いが具体的な語として示されたことであろう。

また、「突然」について、浅野(1982)は、ある事態の生じ方が瞬間的であり、その事態と前の状態との断絶が際立っていると指摘している。本章の結果も、浅野(1982)の「その事態と前の状態との断絶が際立っている」ことと似ている。上記で指摘したように、(17)「現す」、(19)「生じる」、(20)「消え去る」などは事態の成立が連続せず、成立の時と成立する前が断絶している。「急に」と同様に「突然」についても、「独自の語」の検討によって「事態の成立が断絶し、際立っている」ことが具体的な語として示すことができたと考えられる。

## 8.6 本章のまとめ

本章では、「急に」「突然」の特徴を明らかにするため、BCCWJにおけるジャンルごとに現れる「急に」「突然」の出現傾向から文体の差を明らかにし、また、「書籍」「ベストセラー」の下位区分である『文学』という特定のジャンルにおける「地の文」と「会話文」での出現傾向を通し、文体の差を明らかにした。さらに、『文学』に現れる両副詞と共起する述語、特に中頻度語のうち「独自の語」を『分類語彙表』を用いて意味分類をし、その意味分布の違いから、両副詞の相違を明らかにした。

本章で明らかになったことは以下の通りである。

まず、BCCWJのジャンルごとにおける出現傾向から、「急に」の方が「突然」より話し言葉的な文章とくだけた文章にやや多く現れ、「突然」の方が「急に」より書き言葉的な文章と改まった文章にやや多く現れる副詞であることが明らかになった。

次に、『文学』における両副詞の「地の文」と「会話文」での出現傾向（出現頻度に有意な差が認められた）から、「急に」の方が「突然」より「会話文」に多く現れることが明らかになった。

また、「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向を検討した結果、両副詞と共起する高頻度語からは、やや異なる傾向があったものの、大きな両副詞の相違はあまり現れなかった。両副詞と共起する中頻度の述語のうち「独自の語」を『分類語彙表』を用いて意味分類をした。その結果、意味分布は、「急に」は「自然現象」部門にやや多く、「突然」は「抽象的關係」「人間活動」部門にやや多く現れることが明らかになった。

なお、各部門における両副詞の「独自の語」の特徴について以下のようなことが分かった。まず、「抽象的關係」部門において、「急に」の「独自の語」は、人の状態の変化、動作や行動、状況の変化、人の動作で感情を表し、言語行為を表しているが、全ての事態が成立するまで進行過程が含まれている。

一方、「突然」の「独自の語」は、物事の状態の変化、人の状態の変化、状況の変化、人の感情の変化を表しており、（ある所に人が現れたり、消えたり、人を取り巻く周りに何か悪いことが起こったり、なくなったり、人にある感情が生じたり、なくなったりすることで）事態の成立と成立する前のことが断絶している。

次に、「人間活動」部門において、「急に」の「独自の語」は人の感情の変化を表すもの、また、相手に影響を及ぼす人の言語行為を表すものが現れた。一方、「突然」の「独自の語」は、マイナス的な意味が多く、相手に直接影響を与える人の動作を表す用例が見られた。そして、成立する時と成立する前が断絶しており、人の思考を表すものが現れた。さらに、「自然現象」部門において、両副詞は音という事態が相反的に成立する様子が見られた。「急に」の「独自の語」は存在していた音や声が静かになること、つまり、その音量が小さくなることを表したが、「突然」の「独自の語」は存在していなかった音や声が静かな空間に突発的に生じる、つまり、音や声が発生することを表していることが分かった。

また、「急に」の「独自の語」は事態の成立に進行過程が含まれているが、「突然」の「独自の語」は事態の成立とその前が断絶しているものであり、成立と成立する前の切れ目がはっきり見られる。

以上、BCCWJのジャンルごとの出現傾向と『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差、『文学』における「急に」「突然」と共起する述語、特に「独自の語」を中心に検討した。

次章では、「急に」「突然」について、『毎日』を用いて検討していく。また『毎日』での検討の結果と本章での検討結果を比較し、異なるジャンルにおける両副詞の出現傾向とその特徴について検討していく。

## 第9章 新聞データに見られる「急に」「突然」の相違と、 BCCWJに見られる相違との比較

本章では、『文学』と異なるジャンルである『毎日』を用い、両副詞の相違について検討する。また、第8章での結果と『毎日』における結果を比較し、ジャンルによる「急に」と「突然」の相違について検討していく。

### 9.1 はじめに

第8章では、「事態が瞬間的に成立する」ことを表す類義関係にある「急に」と「突然」の相違について、BCCWJを用い、BCCWJのさまざまなジャンルにおける両副詞の出現傾向から文体の差を明らかにした。また、BCCWJ内の『文学』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにした。さらに、『文学』を用い、両副詞と共起する述語、特に中頻度語のうち「独自の語」について、『分類語彙表』を用いて意味分類をし、その意味分布から両副詞の相違を明らかにした。

本章では、BCCWJ内の『文学』と異なるジャンルである『毎日』を用い、「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差について検討する。また、両副詞と共起する述語の出現傾向と、中頻度語のうち「独自の語」の意味分布から、両副詞の相違について検討していく。

本章の構成は、第2節では、本章の目的について述べ、第3節では、調査データについて述べる。第4節では、両副詞の「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差について述べ、また、両副詞と共起する中頻度の述語のうち「独自の語」の意味分布から、両副詞の相違について述べる。第5節では、第4節までの結果をまとめる。第6節では、『毎日』での結果と第8章でのBCCWJにおける結果を比較し、ジャンルにより両副詞に相違について検討し、その結果を述べる。最後に、第7節では、本章の結果をまとめる。

### 9.2 本章の目的

本章では、類義関係にある「急に」と「突然」について、『毎日』を用い、「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにする。また、両副詞と共起する述語について、また、中頻度語のうち「独自の語」の出現傾向を検討し、「独自の語」の意味分布から、両副詞の違いを明らかにする。さらに、『文学』での結果と『毎日』での結果を比較し、両副詞のジャンルによる違いを明らかにする。

### 9.3 調査データ

本節では、「急に」と「突然」の調査データについて述べる。プログラミング言語 Perl で用例を抽出する際、「急に」は〈急に〉〈きゅうに〉〈キュウニ〉を、「突然」は〈突然〉〈とつぜん〉〈トツゼン〉をキーワードとして抽出した。

抽出された用例は「急に」が754例、「突然」が1118例現れたものの、「急に」は下記の(1)「早急に」と(2)「緊急に」以外に、「性急に」「特急に」「緩急に」「至急に」「準急に」「阪急に」「救急に」「富士急に」など、検討対象と異なる語が多く現れたため、除外した。

- (1) これに対し、民主党の緊急措置法案は、自己負担を月0～2万円にすると明記し、肝炎が悪化して起きる肝硬変、肝がんなどへの医療費助成も早急に検討する、としている。(2008年1月8日)
- (2) 救急搬送の際に受け入れ病院が見つからず患者が死亡する事故が相次いでいる問題を受け、増田寛也総務相は8日の閣議後の記者会見で、07年中の救急搬送の実態調査を緊急に実施する方針を明らかにした。(2008年1月9日)

一方、「突然」は下記の(3)のように、副詞ではなく名詞のように使われたもの、(4)のように、慣用的に使われた用例は除外した。

- (3) 憲法9条解釈の見直しを検討していた安倍晋三前首相の私的懇談会「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」(座長・柳井俊二前駐米大使)は、安倍前首相の突然の退陣で宙に浮いていた報告書を、新テロ対策特別措置法案成立後の1月中旬をめぐりに首相官邸に提出することになった。(2008年1月6日)
- (4) 移動の車中でインタビューした。突然ですが、あなたのふるさとは大阪？ それともテレビ？ 「うーん、どっちもかな」。(2008年1月28日)

以上のように、検討対象と異なる語や重複の用例などを除き、「急に」は245例、「突然」は771例を検討対象とする。

#### 9.4. 「急に」「突然」の文体と共起する述語

本節では、まず「地の文」と「会話文」における「急に」「突然」の出現傾向から文体の差について検討する。また、「急に」と「突然」と共起する述語の出現傾向を検討する。さらに、両副詞と共起する述語、特に中頻度語のうち「独自の語」を用い、その意味分布の違いから、両副詞の相違について検討していく。



#### 9.4.1 「地の文」と「会話文」における出現傾向

ここでは、「地の文」と「会話文」での出現傾向を通し、「急に」と「突然」の文体の差について述べる。本章で「会話文」と認定したものは、以下の通りである<sup>1</sup>。

- (5) 負傷して病院に運ばれた男性（41）の兄（44）は「弟はテントで飲食をしていて、突然襲われた。いったん意識を失ったと聞き、ぞっとした。年に1度の楽しい時間に、こんなことをするなんて」と憤りをあらわにした。（2008年9月14日）
- (6) Q ジャあ急に連絡が来るのかな？（2008年5月21日）

直接引用文である（5）と、（6）のようなものを「会話文」として認定した。両副詞の「地の文」と「会話文」での出現傾向をまとめたものが下記の表 9-1 である。

表 9-1 「地の文」と「会話文」での出現傾向

	急に		突然	
	頻度	比率	頻度	比率
地の文	173	70.6%	720	93.4%
会話文	72	29.4%	51	6.6%
合計	245	100.0%	771	100.0%

表 9-1 から、「会話文」における両副詞の出現傾向は、「急に」が 72 例（29.4%）現れ、「突然」が 51 例（6.6%）現れた。そこで、「地の文」と「会話文」に現れる両副詞の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（ $\chi^2=90.6143$ 、 $p<0.05$ ）。よって、『毎日』において、「急に」の方が「突然」より「会話文」に多く現れると言える。

#### 9.4.2 「急に」「突然」と共起する述語の出現傾向

ここでは、「急に」と「突然」と共起する述語を検討し、出現傾向について述べる。両副詞と共起する述語の検討に当たり、除外した用例は、以下の通りである。

- (7) 1年後に復学。生活が落ち着くと、急に「シノ（篠原さんの愛称）のことばかりが頭に浮かぶようになった」。「同じ電車に乗った僕は生きていて、シノはもういない。なぜだ」。答えは出なかった。（2008年4月15日）
- (8) 自衛隊派遣：恒久法成立目指す 外相表明—政府・与党、動き急に（2008年1月25日）
- (9) 会合の終わり近くにノルウェーが突然、宣言。（2008年10月13日）

<sup>1</sup> 「会話文」の認定については第4章 4.4.2 をご参照いただきたい。

(7) のように、述語が省略されているものや (8) のように、「急に」「突然」で終わったもの、(9) のように、述語が「体言止め」のものは除外した。

以上のようなものを除くと、「急に」は 236 例、「突然」は 710 例となる。これらの用例を対象にし、両副詞と共起する述語について、検討していく<sup>2</sup>。

下記の表 9-2 は、「急に」と「突然」と共起する述語を出現頻度の高い順 10 位までまとめたものである。

表 9-2 「急に」「突然」と共起する高頻度の動詞

「急に」				「突然」			
順位	動詞	頻度	比率	順位	動詞	頻度	比率
1	なる	63	26.7%	1	する	174	24.5%
2	する	30	12.7%	2	なる	44	6.2%
3	増える	9	3.8%	3	現れる	26	3.7%
4	言う	7	3.0%	4	言う	22	3.1%
5	変わる	6	2.5%	5	倒れる	17	2.4%
5	出る	6	2.5%	6	襲う	14	2.0%
7	上げる	4	1.7%	7	失う	10	1.4%
7	来る	4	1.7%	8	奪う	9	1.3%
7	止まる	4	1.7%	8	消える	9	1.3%
7	減る	4	1.7%	10	ある	8	1.1%

表 9-2 から、「急に」と共起する述語について出現頻度順は「なる」(1位)、「する」(2位)、その以降は、「増える」「言う」「変わる」「出る」などの順である。一方、「突然」は「する」(1位)、「なる」(2位)、その以降、「現れる」「言う」「倒れる」「襲う」「失う」などの順である。ここで 5 位以内に両副詞と共起する共通の述語は「する」「なる」「言う」であるが、これらの出現比率を合わせると、「急に」は 42.4%であり、「突然」は 33.8%である。このことから、「急に」と共起する高頻度語の方が「突然」より少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かる。

また、「急に」と共起する述語に「なる」が一番多く出現することから、状態の変化を表す事態が多く、「突然」と共起する述語に「する」が多く出現することから、動作の動きが多いと言えそうである。しかし、第 8 章 8.4.3.2 で述べたように、「急に」は、「なる」の次に「する」が多く、また「突然」は「する」の次に「なる」が多く出現することから、

<sup>2</sup> 除外した用例は、「急に」は「体言止め」が 4 例、述語が省略されたものが 2 例、「急に」で終わるのが 3 例、合計 9 例である。一方、「突然」は「体言止め」が 42 例、「突然」で終わるのが 12 例、述語が省略されたものが 7 例、合計 61 例である。

「急に」は状態の変化を表す動詞との共起、「突然」は動作を表す動詞との共起が多いと断言しにくくなると思われる。

では、「急に」と「突然」と共起する述語のうち両副詞の相違が見られる高頻度語はあるのかについて述べる。

趙 (2012a) は『毎日』95~97年から1000例をランダムで用い、両副詞と共起する述語から両副詞の現れる事態について、両副詞と共起する高頻度語と、「する」「なる」に前接する語を検討している。その検討から、「急に」は「増える」「減る」「上がる」などと共起し、連続する過程の中で成立する事態であることを明らかにし、一方、「突然」は「現れる」「消える」「倒れる」などと共起し、一回に成立する動作や存在の変化を表す事態に現れることを明らかにしている<sup>3</sup>。

(10) 大野教授は「地域の仲間や家族関係、趣味、サークルなど一朝一夕にはできない人間関係を定年前から少しずつ築けば、滑り出しも順調になる」と言う。夫婦でも、ともに過ごす時間が急に増えると、ストレスを感じてしまう。(2008年10月12日)

(11) 若い女性に社交ダンスや作法を面白おかしく教える趣向だが、印象深い場面があった。素人の女性が順番に踊りを披露していくと、突然、父親が現れる。(2008年9月28日)

趙 (2012a) と第8章での検討の結果を照らし合わせ、表9-2を検討すると、「急に」と共起する高頻度語には(10)「増える」や「減る」のような状態動詞が現れ、「突然」と共起する高頻度語には(11)「現れる」や「消える」のような状態動詞が現れることが分かる。「増える」は一回で完結されず、事態の成立まで進行過程の意味合いが含まれているものであり、一方「現れる」は、事態の成立は何もないことから「現れる」という一回で完結されるものであり、事態の成立時と成立する前が断絶している。

このことから、両副詞と共起する高頻度の述語の検討を通し、異なる意味合いを含む述語が両副詞と共起していることが分かり、本論文での研究対象の他の副詞より類義の度合いはやや低いのではないかと思われる。

---

<sup>3</sup> 第8章8.4.3.2でも述べたように、趙 (2012a) は、「急に」と共起する「する」は、「する」に前接する語がある場合、「導入する」などのサ変動詞、「めまいがする」などの感覚を表すもの、「ドキッとする」などの副詞、「荒くする」などの形容詞が現れ、また、前接する語がない場合は、「急にする」形で現れるとしている。一方、「突然」と共起する「する」は、サ変動詞、感覚を表す表現、意志表現、「一人にされる」などの名詞が現れたと述べている。「なる」は、「なる」に前接する語がある場合、その前接の語は、「明るくなる」などのような形容詞、「不安になる」などの形容動詞、「日本人になる」などの名詞、決定を表す表現「～ことになる」、状態の変化を表す「～ようになる」、命令の表現が見られ、また、「なる」に前接する語がない場合、「急になる」形で現れるとしている。「する」「なる」の形式上、注目すべき点は、「急にする」「急になる」であり、「突然」には見られない表現であるが、「急になる」は、空間的な変化を表すが、「急にする」は急いでいる動きを表すときもあると述べている。また、「急に」の方が「突然」より現れる表現範囲は広いと指摘している。

## 9.5 「独自の語」からの「急に」「突然」の相違

本節では、「急に」「突然」の相違を明らかにするために、両副詞と共起する述語、特に中頻度語のうち「独自の語」を取り出し、『分類語彙表』を用いて意味分類をし、意味分布から両副詞の相違を明らかにする。

次の表 9-3 と表 9-4 は、両副詞のそれぞれの「独自の語」を抽出した表である。

表 9-3 「急に」の「(使用) 範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『毎日』範囲(補正前)		『毎日』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	63~6	0%~51.3%	5	1	9	2	11	13.1%
	5~4	~59.7%	4	1				
中頻度	3	~67.4%	4	1	10	6	16	19.0%
	2	~75.8%	6	5				
低頻度	1	~100.0%	23	34	23	34	57	67.9%
合計	236		42	42	42	42	84	100.0%

表 9-4 「突然」の「(使用) 範囲・度数分布表」

頻度層	延べ語数		『毎日』範囲(補正前)		『毎日』範囲(補正後)		異なり語数	
	度数	累積比率	共通動詞	固有動詞	共通動詞	固有動詞	合計	比率
高頻度	174~8	0%~49.2%	7	5	12	10	22	9.9%
	7~5	~57.3%	5	5				
中頻度	4	~64.1%	5	7	18	40	58	26.0%
	3~2	~79.9%	13	33				
低頻度	1	~100.0%	12	131	12	131	143	64.1%
合計	710		42	181	42	181	223	100.0%

上記の表 9-3 と表 9-4 から、両副詞における「高頻度」「中頻度」「低頻度」の見出し語の比率と、伊藤 (2008) が指摘している「頻度 1 の見出し語は語彙量の 50%前後を占めるのが普通である」ことを見ると、「急に」の「低頻度」の見出し語は 67.9%、「突然」は 64.1% でやや高いことが分かる。

「使用度数の算出法」により抽出された中頻度の「独自の語」は「急に」が 6 語、「突然」が 40 語である。（「急に」は参照程度しか現れなかったが、）これらの「独自の語」を『分類語彙表』を用いて意味分類し、意味分布を示すと、次の表 9-5 のようにまとめられる。

表 9-5 「急に」「突然」の「独自の語」の意味分布

意味分布			急に		突然	
部門	中項目		頻度	比率	頻度	比率
抽象的關係	2.11××	類			3	2.8%
	2.12××	存在			11	10.2%
	2.13××	様相			5	4.6%
	2.15××	作用	7	53.8%	50	46.3%
小計			7	53.8%	69	63.9%
人間活動— 精神及び行為	2.30××	心	4	30.8%	7	6.5%
	2.31××	言語			11	10.2%
	2.33××	生活			5	4.6%
	2.34××	行為			6	5.6%
	2.35××	交わり			4	3.7%
	2.37××	経済	2	15.4%		
小計			6	46.2%	33	30.6%
自然物及び 自然現象	2.50××	自然			4	3.7%
	2.57××	生命			2	1.9%
小計			0	0.0%	6	5.6%
総計			13	100.0%	108	100.0%

表 9-5 から、各部門に現れる両副詞の「独自の語」の出現比率を互いに比較すると、「急に」の「独自の語」は「人間活動」部門にやや多く、「突然」の「独自の語」は「抽象的關係」「自然現象」部門にやや多く現れる傾向が見られる。

これらの差が有意な差であるかカイ二乗検定を行ったところ ( $\chi^2=1.7844$ 、 $p=0.4097$   $p>0.05$ )、有意性は認められなかった。

では、各部門において、どのような特徴があるのか中項目と分類項目から検討していく。

まず、「抽象的關係」部門において「急に」の「独自の語」は、中項目「作用」のみに現れ、一方、「突然」の「独自の語」は、「類」「存在」「様相」「作用」に現れ、両副詞は中項目「作用」に共通している。

各中項目の分類項目の詳細は、下記の通りである。

「急に」の「独自の語」は、中項目「作用」には分類項目「変換・交換」「上がり・下がり」「接近・接触・隔離」が現れた。一方、「突然」の「独自の語」は、中項目「類」には分類項目「本来」「因果」が現れ、中項目「存在」には「出没」「消滅」が現れた。中項目「様相」には分類項目「調和・混乱」が現れ、中項目「作用」には分類項目「作用・変化」「開始」「終了・中止・停止」「連続・反復」「動き」「動揺・回転」「往復」「出・出し」「接

近・接触・隔離」「当たり・打ちなど」「突き・押し・引き・すれなど」「切断」「伸縮」が現れた。

- (12) 漢字世代の高齢化が進み、いずれはハングル世代だけの世の中が到来するだろう。そう思っていたが、最近になって急に漢字学習熱が高まってきた。(2008年11月10日)
- (13) 熱血刑事だったからこそ犯罪捜査には口を出せない副署長というポストには歯がゆい思いをしている。やり手ビジネスマンが急に現場を離れ管理職になった悲哀と重なるか。(2008年7月17日)
- (14) Q 断層はどうして急にずれるのかな？(2008年6月27日)
- (15) 突然ずしりと響く言葉を発する村内を、謎めいたさすらいの臨時教師として描いた。(2008年11月28日)
- (16) 片側2車線で幅7・5メートルの国道を30メートルほど走行すると、前方から突然、車列が姿を現した。(2008年3月11日)
- (17) 朔太郎(大沢たかお)の婚約者律子(柴咲コウ)が、結婚直前に突然姿を消した。(2008年12月15日)
- (18) 兵庫県宍粟市山崎町野の市立城東保育所で29日、昼寝していた3歳前後の園児6人が突然体調を崩して病院に運ばれ、一酸化炭素中毒と診断されていたことが分かった。(2008年10月30日)
- (19) 小宮山裁判官は「乗車していた入所者が突然発作を起こして動転したという事情はあるが、結果は重大」と述べた。(2008年7月4日)
- (20) 06年、石綿が原因でがんを発症するなど労働災害認定を受けた人数を事業者ごとに公表してきた厚生労働省が突然、非公表方針に転じ、患者らの間に波紋を広げていた。(2008年9月4日)
- (21) 今から79年前の1929年10月24日。ニューヨーク株式市場が突然、大暴落を始めた。世に言う「暗黒の木曜日」。(2008年10月28日)
- (22) 話を7年前に戻そう。倒れて2カ月、車椅子で海に沈む夕日を見ていた時、突然ひらめいた。「脳の神経細胞が死んだら再生することなんかありえない。(略)もし機能が回復するとしたら、元通りに神経が再生したからではない。それは新たに創(つく)り出されるものだ。(略)私が一步を踏み出すとしたら、それは失われた私の足を借りて、何者かが歩き始めるのだ」(「寡黙なる巨人」集英社より)。(2008年4月11日)

「抽象的關係」部門において、「急に」の「独自の語」の特徴は、「作用／上がり・下がり」に(12)「高まる」が現れ、事態である漢字学習熱が高まってきたことであるが、人の意欲、つまり、人の感情の変化を表しながら、成立するまで進行過程の意味合いが含

まれている。また、「接近・接触・隔離」に(13)「離れる」が現れ、離れることも進行過程の意味合いが含まれていると同時に、人の移動や存在場所の変化を表している。さらに、「作用／変換・交換」に(14)「ずれる」が現れ、断層がずれることであるが、断層の状態、つまり、物事の状態の変化を表しながら、事態の成立までの進行過程の意味合いが含まれている。

一方、「突然」の「独自の語」は、「類／本来」に(15)「発する」が現れ、人の言語行為を表し、事態の成立と成立前が断絶されている。「存在／出没」に(16)「現す」が現れ、人の移動や存在場所の変化を表すと同時に事態が成立する時と成立前が断絶していることを表す。「存在／消滅」に(17)「消す」が現れ、(16)と同様に事態の成立とその前の状況が断絶していることを表している。そして、「様相／調和・混乱」に(18)「崩す」、「存在／出没」に(19)「起こす」が現れ、人の状態の変化を表し、突発的に事態が成立することで成立する前と断絶している。さらに、「作用／作用・変化」に(20)「転じる」が現れ、ある状況の変化を表している。「作用／作用・変化」に(21)「始める」が現れ、ある状況が始まったという、状況の変化を表している。また、「作用／動揺・回転」に(22)「ひらめく」が現れ、人の思考の変化を表している。このように、(15)から(22)まで、事態の成立とその前が断絶している用例が多かった。

次に、「人間活動」部門において、両副詞の「独自の語」は、「急に」は中項目「心」「経済」に現れ、「突然」は中項目「心」「言語」「生活」「行為」「交わり」に現れた。中項目「心」には両副詞が共通に現れた。各中項目における分類項目は、下記の通りである。

「急に」の「独自の語」は、中項目「心」には分類項目「感覚」「欲望・期待・失望」が現れ、中項目「経済」には分類項目「売買」が現れた。

一方、「突然」は、中項目「心」には分類項目「飢渴・酔い・疲労・睡眠など」「恐れ・怒り・悔しさ」「欲望・期待・失望」が現れ、中項目「言語」には分類項目「言語活動」「伝達・報知」が現れた。また、中項目「生活」には分類項目「手足の動作」が現れ、中項目「行為」には分類項目「才能」「行為・活動」が現れた。さらに、中項目「交わり」には分類項目「応接・送迎」が現れた。

(23) スタート直後から予定通りのペースに乗り25キロ地点では2位集団に2分余りの大差をつけた。しかし徐々に歩幅が小さくなり、30キロを過ぎて「急に目や足に違和感を覚えた」という。(2008年1月28日)

(24) この日の予定には入っていなかったが「午後になって首相が急に思い立った」(周辺)という。(2008年3月21日)

(25) 家電量販店のビックカメラ池袋本店(東京都豊島区)では、5月から「ワンセグテレビ」専用コーナーを設けた。担当者は「今年に入って急に売れ始めた。女性の人気も高まっている」と話す。(2008年7月13日)

- (26) パーキンソン病治療薬「ビ・シフロール」の副作用で突然眠ってしまい、自動車事故を起こす例が相次いでいるとして、厚生労働省は製造元の「日本ベーリンガーインゲルハイム」（東京都品川区）に注意喚起の安全性情報を医療機関に出すよう指示した。（2008年3月28日）
- (27) 東京都練馬区西大泉の建築事務所経営、杉村亨さん（72）方で杉村さんが刺されて見つかった事件で、殺人容疑で逮捕された長男の無職、大（まさる）容疑者（42）が警視庁石神井署の調べに「一緒に酒を飲んでいたら（杉村さんが）突然怒り出し、殴りかかってきたので殺した」と供述していることが分かった。（2008年8月19日）
- (28) 横田容疑者は割引クーポン券が期限切れで使えず、定価で購入。その後、店内で大きな物音がしたため、店長代理が店を出ようとした横田容疑者を呼び止めたところ、突然「うるさい」と叫び、暴行を加えたという。
- (29) さて、事件発生から3日後の9日夕。ちょうど中尉が亡命先の米国へ向かうため、東京水上署から羽田空港へ移送されるころ、中国の北京放送は突然、毛沢東主席の死去を伝えた。82歳だった。（2008年9月18日）
- (30) 横浜市内のある中学では年約30件、生徒同士の暴力でケガに至る事案が起きる。「うわさで悪口を言われたと思ひ込み、出会った瞬間、突然殴る。言い合いをして、つかみ合って……という過程がなくなった」。副校長は嘆く。（2008年11月21日）
- (31) 25年前、富山県民公園を天皇陛下とともに訪れていた皇后さまは、集まっていた幼稚園園児たちに促されて、突然手を引かれて走り出す。（2008年10月13日）

「人間活動」部門における「独自の語」の特徴は、「急に」は「心／感覚」に(23)「覚える」が現れ、人の感情を表している。「心／欲望・期待・失望」に(24)「思い立つ」が現れ、人の思考を表す。また、「経済／売買」に(25)「売れる」が現れ、ある状況の変化を表している。

一方、「突然」は「心／飢渴・酔い・疲労・睡眠など」に(26)「眠る」が現れ、人の状態の変化を表し、「心／恐れ・怒り・悔しさ」に(27)「怒る」が現れ、人の感情の変化を表している。また、「言語／言語活動」に(28)「叫ぶ」、「言語／伝達・報知」に(29)「伝える」が現れ、人の言語行為を表している。さらに、「生活／手足の動作」に(30)「殴る」が現れ、人の動作を表すと同時に、相手の人にその動作の影響を及ぼすことを表す。「行為／行為・活動」に(31)「引く」が現れ、人の動作を表している。

最後に、「自然現象」部門における両副詞の「独自の語」は、「急に」には現れず、「突然」は、中項目「自然」「生命」が現れた。中項目「自然」には分類項目「音」が現れ、中項目「生命」には分類項目「死」が現れた。



(32) 「うわー、なんやこら」。突然、男性の大声が響いた。「なんかあったんか」と個室の扉を開けた途端、真っ黒い煙が押し寄せ、気分が悪くなった。(2008年10月11日)

(33) 佐藤監督は昨年9月、49歳で突然世を去ったが、映画を通じて、その思いは生き続ける。(2008年10月8日)

「突然」は、「自然／音」に(32)「響く」が現れ、聴覚的な事態の変化、状況の変化を表すと同時に、人の言語行為を表している。また、「生命／死」に(33)「去る」が現れ、死ぬという人の状態の変化を表している。また、死んだ状態と死んでいない状態、その境界線が明確に分かれている。このことから上記の「抽象的關係」部門で指摘した「突然」の「独自の語」の特徴と類似している。

## 9.6 『毎日』における「急に」「突然」の相違

第5節まで、「急に」「突然」の相違について、『毎日』を用い、「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差と、両副詞と共起する述語の「独自の語」の意味分布を検討した。その結果、明らかになったことは、以下の通りである。

まず、両副詞の文体の差を明らかにするため、「地の文」と「会話文」での出現傾向を検討した。「会話文」での出現比率から「急に」がより話し言葉的であり、「突然」がより書き言葉的であることが明らかになった(「地の文」と「会話文」における両副詞の出現頻度に有意な差が認められた)。

次に、「急に」「突然」と共起する高頻度語は、「急に」は「なる」(1位)、「する」(2位)であり、その以降、「増える」「言う」「変わる」「出る」「上げる」「来る」「止まる」「減る」の順で現れた。一方、「突然」は「する」(1位)、「なる」(2位)であり、その以降、「現れる」「言う」「倒れる」「襲う」「失う」「奪う」「消える」「ある」の順で現れた。これらのうち、両副詞と共起する共通の述語「なる」「する」「言う」の出現比率を合計すると、「急に」は42.4%、「突然」は33.8%であった。この比率から、「突然」より「急に」の方が少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かった。

また、高頻度語から、「急に」は事態が成立するまでその進行過程の意味合いが含まれる述語が現れ、「突然」は成立する事態の一回性が強調され、事態の成立時と成立する前が断絶していることを表す述語が現れることが分かった。

さらに、両副詞に「(使用) 範囲・度数分布表」から、両副詞の「低頻度」の見出し語の出現比率が両副詞ともにやや高いことが分かった。また、両副詞と共起する中頻度語のうち、「独自の語」を意味分類した結果、「急に」は「人間活動」部門にやや多く現れ、「突然」は「抽象的關係」「自然現象」部門にやや多く現れた(有意差は認められなかった)。

次に、各部門における両副詞の「独自の語」は、まず、「抽象的關係」部門において、「急に」は「変換・交換」「上がり・下がり」「接近・接触・隔離」のように事態が変わっ

たり、上がったり、下がったり、接近したりする際に現れるが、その事態の成立に進行過程の意味合いが含まれている。

一方、「突然」は、ある事態が現れたり、いなくなったり、消滅したり、切断したり、伸縮したり、終了したり、中止したりする時に現れるが、これらは事態が成立する時と成立前が断絶していることを表している。

次に、「人間活動」部門において、「急に」は感覚や欲望、期待に現れ、「突然」は人の感情の変化、言語行為、人の動作や行動（相手に影響を及ぼす）を表す際に現れる。

「人間活動」部門においては「突然」の方が広い意味範囲で使われていることが分かった。

最後に、「自然現象」部門では、「突然」は聴覚的事態の変化、状況の変化、人の言語行為を表し、事態が成立する時と成立前が断絶しているが、「急に」のそのような用例は現れなかった。

以上、第5節まで明らかになったことをまとめた。次節からは、『毎日』での結果と『文学』での結果を比較し、ジャンルによる両副詞の相違について述べていく。

## 9.7 『毎日』における結果と、BCCWJ内の『文学』における結果の比較

本節は、第5節まで検討した『毎日』における「急に」「突然」の相違と、第8章のBCCWJ内の『文学』における両副詞の相違を比較し、ジャンルによる両副詞の違いについて述べる（参照データとして『毎日』97を用いる<sup>4</sup>）。

### 9.7.1 ジャンルによる「急に」「突然」の文体の相違

まず、ジャンルによる「急に」「突然」の出現頻度について比較する。次の表9-6は各ジャンルにおける両副詞の出現頻度である。

表 9-6 「急に」「突然」の出現頻度

ジャンル	急に	突然
『毎日』97	417	1347
BCCWJ内の「新聞」	14	58
『毎日』	245	771
『文学』	2132	2197

<sup>4</sup> 本章9.4.2で述べたように、趙（2012a）は、『毎日』95年～97年のデータを用い、ランダムで1000例抽出し、「急に」「突然」と共起する述語について、高頻度語を中心に検討し、両副詞のよく現れる事態を明らかにしている。趙（2012b）は、BCCWJ内の『書籍』を用い、ランダムで1000例抽出し、両副詞と共起する述語について、「基本語」と「特徴語」に分け、「特徴語」を中心に検討を行った。「基本語」と「特徴語」の区分は『雑誌90種』の出現頻度順1000位を基準にして行った。

表 9-6 から、『毎日』『文学』という異なるジャンルにおいて、「急に」より「突然」の方が、出現頻度が多いことが分かる。しかし、『毎日』においては両副詞の出現頻度の差があるように見られるものの、『文学』においては両副詞の出現頻度の差があまりないように見られる。

そこで、『毎日』と『文学』における両副詞の出現頻度の差が有意な差であるかカイ二乗検定を行った。その結果、有意差が認められた ( $\chi^2=210.5214$ ,  $p<0.05$ )。『毎日』『文学』で「突然」が「急に」より多く出現すると言える(参照データである『毎日』97 と BCCWJ 内の「新聞」においても「突然」の方が、出現頻度が多い)。

伊藤 (2004) は、新聞データについて「日本語の文書としては、かなり特殊部分に入り、事実だけを伝える傾向が強いので、センテンスの骨格となる名詞と動詞が多いが、その一方、形容詞や副詞のような修飾成分は少ない」と述べている。修飾成分である副詞が少なく、事実だけを伝える傾向が強い新聞記事の文章を考えると、「急に」より「突然」の方がある事実だけを伝える際により相応しいと思われる。それは、ある事件や事故、情報の伝達に使われそうな表現(「～が現れた」「～が消えた」「～が起きた」「～が出た」など)が「突然」に多く現れる傾向があるためではないかと思われる。

次に、ジャンルによる「地の文」と「会話文」における「急に」「突然」の出現傾向を比較する。『毎日』と『文学』別に「地の文」と「会話文」における両副詞での出現傾向を次の表 9-7 に示す。

表 9-7 ジャンルによる「地の文」と「会話文」での出現傾向

	『毎日』		『文学』		『毎日』95~97 <sup>5</sup>	
	急に	突然	急に	突然	急に	突然
地の文	173 (70.6%)	720 (93.4%)	1732 (81.2%)	1952 (88.8%)	761 (76.1%)	885 (88.5%)
会話文	72 (29.4%)	51 (6.6%)	400 (18.8%)	245 (11.2%)	239 (2.4%)	115 (1.2%)
合計	245 (100.0%)	771 (100.0%)	2132 (100.0%)	2197 (100.0%)	1000 (100.0%)	1000 (100.0%)

表 9-7 から、『毎日』と『文学』において、両副詞の「会話文」における出現比率は「突然」より「急に」の方が多くことが分かる。また、「会話文」における各副詞の出現比率はジャンルごとに差があるものの、ジャンルにおいて、「急に」の方が「会話文」に多く現れるという両副詞の出現傾向には違いはないことが分かる。両副詞の「地の文」と「会話文」

<sup>5</sup> 趙 (2012b) は、『毎日』95~97年と BCCWJ 内の『書籍』を比較するため、両ジャンルから 1,000 ずつ用例抽出し、検討している。そのため、表 9-7 の頻度は合計 1000 である。

における出現頻度の差が有意な差であるのかカイ二乗検定を行ったところ<sup>6</sup>、ジャンルごとに「地の文」と「会話文」に現れる両副詞の出現頻度の差は有意差が認められた（『毎日』： $\chi^2=90.6143$ 、 $p<0.05$ 、『文学』： $\chi^2=49.4211$ 、 $p<0.05$ ）<sup>7</sup>。両ジャンルにおいて「急に」の方が「会話文」に多く現れると言える。

また、「急に」が『文学』における「会話文」より、『毎日』における「会話文」に多く現れたのは、第5章 5.7.1 で述べたように、直接引用文の増加が原因ではないかと思われる。

さらに、宮内（2012）は、BCCWJの文体的な特徴について、BCCWJ内の「新聞」は「書き言葉的」であり、「文学」は「フォーマルでない話し言葉的」であるとしている。鯨井（2012）は、BCCWJ内の「新聞」が「書籍」より改まり度が高いとしている。

このことから、両副詞が持っている、「急に」の話し言葉的な性質と「突然」の書き言葉的な性質がより著しく現れ、『毎日』における「会話文」では「急に」が多く使われているのではないかと思われる。つまり、「会話文」における「急に」「突然」の出現傾向は、両副詞の書き言葉的と話し言葉的という文体により、その出現傾向に違いが出たと考えられる。

次に、宮内（2012）、鯨井（2012）、鄭・他（2009）の先行研究<sup>8</sup>におけるBCCWJの文体により、BCCWJのさまざまなジャンルにおける両副詞の出現傾向から「急に」は話し言葉的な文に現れやすく、「突然」は書き言葉的で改まった文に現れやすいことが明らかになった。

### 9.7.2 ジャンルによる「急に」「突然」と共起する高頻度語の相違

ここでは、『毎日』と『文学』における「急に」「突然」と共起する高頻度の述語について述べる。

次の表 9-8 は、ジャンル別に両副詞と共起する高頻度語のうち出現頻度の高い順 5 位までをまとめたものである。

<sup>6</sup> 第8章 8.4.2 と本章 9.4.1 で検定した結果を再掲した。

<sup>7</sup> 趙（2012b）の『毎日』95-97 と『書籍』について、「急に」「突然」の「地の文」と「会話文」における出現頻度に有意な差であるのか、カイ二乗検定を行ったところ、有意差が認められた（ $\chi^2=131.0621$ 、 $p<0.05$ ）。

<sup>8</sup> 鄭・他（2009）について第5章 5.7.1 と第7章 7.7.1 でも取り上げた。

表 9-8 ジャンルごとにおける両副詞と共起する高頻度語

順位	『毎日』		『文学』		『毎日』95~97		『書籍』 <sup>9</sup>	
	急に	突然	急に	突然	急に	突然	急に	突然
1	なる 63 (26.7%)	する 174 (24.5%)	なる 627 (30.2%)	する 232 (10.7%)	なる 288	する 255	なる 262	する 144
2	する 30 (12.7%)	なる 44 (6.2%)	する 152 (7.3%)	なる 163 (7.5%)	する 114	なる 85	する 97	なる 71
3	増える 9 (3.8%)	現れる 26 (3.7%)	言う 59 (2.8%)	言う 103 (4.8%)	増える 27	現れる 27	変わる 26	現れる 41
4	言う 7 (3.0%)	言う 22 (3.1%)	変わる 42 (2.0%)	現れる 78 (3.6%)	言う 22	倒れる 24	言う 23	言う 39
5	変わる・出る 6 (2.5%)	倒れる 17 (2.4%)	思い出す 30 (1.4%)	思い出す 33 (1.5%)	出る 20	言う 23	出る 15	やってくる 19

表 9-8 から、『毎日』における「急に」と共起する高頻度の述語は「なる」「する」「増える」「言う」「変わる・出る」の順であり、「突然」と共起する高頻度の述語は「する」「なる」「現れる」「言う」「倒れる」の順である。『毎日』において、両副詞と共起する共通の高頻度語「なる」「する」「言う」の出現比率を合わせると、「急に」が 42.4%、「突然」が 33.8%である。

一方、『文学』において、「急に」と共起する高頻度の述語は「なる」「する」「言う」「変わる」「思い出す」の順で現れ、「突然」と共起する高頻度の述語は「する」「なる」「言う」「現れる」「思い出す」の順で現れた。『文学』における両副詞と共起する共通の高頻度語は「なる」「する」「言う」「思い出す」であるが、これらの出現比率を合わせると、「急に」が 41.7%、「突然」が 24.5%である。両副詞と共起する共通の高頻度の述語は、『毎日』においては 3 つであり、『文学』においては 4 つであるが、両ジャンルにおいて「急に」の出現比率がやや高いことから、「急に」は「突然」より少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かる。

ところで、趙 (2012a) は『毎日』95~97 年から 1000 例をランダムで用い、両副詞と共起する述語から両副詞の現れる事態について、両副詞と共起する高頻度語と、「する」「なる」に前接する語を検討している<sup>10</sup>。その検討から、「急に」は「増える」「減る」「上がる」と共起し、連続する過程の中で成立する事態であることを明らかにし、一方、「突然」は「現れる」「消える」「倒れる」と共起し、一回に成立する動作や存在の変化を表す事態に現れることを明らかにしている。

<sup>9</sup> 『書籍』は、趙 (2012b : p.88) の表 3 から引用した。

<sup>10</sup> 第 8 章 8.5 と本章 9.4.2 でも述べた内容である。

表 9-8 に見られるように、両副詞と共起する高頻度語のうち、『毎日』において、「急に」には「増える」が見られ、「突然」には「現れる」「倒れる」が見られることから、本章と趙（2012a）の高頻度に関する結果は似ている傾向が分かった。

### 9.7.3 ジャンルによる「急に」「突然」の「独自の語」の相違

#### 9.7.3.1 ジャンルによる「独自の語」の出現傾向

ここでは、『毎日』と『文学』における「急に」「突然」の「独自の語」の出現傾向について比較する。

まず、『毎日』における「急に」「突然」の「(使用)範囲・度数分布表」と、『文学』における「急に」「突然」の「(使用)範囲・度数分布表」での各頻度層の見出し語の出現比率について見る。

表 9-9 「(使用)範囲・度数分布表」の見出し語の出現比率<sup>11</sup>

	副詞	高頻度	中頻度	低頻度	合計
『毎日』	急に	13.1%	19.0%	67.9%	100.0%
	突然	9.9%	26.0%	64.1%	100.0%
『文学』	急に	6.7%	36.3%	57.0%	100.0%
	突然	10.7%	36.7%	52.6%	100.0%

表 9-9 から『毎日』における「低頻度」の見出し語の出現比率は「急に」が 67.9%、「突然」が 64.1%であり、『文学』における「低頻度」の見出し語の出現比率は「急に」が 57.0%、「突然」が 52.6%である。これらの数値は、伊藤（2008）が言及した「頻度 1 の見出し語の出現比率は 50%前後が普通である」ことから、「急に」の方が「突然」より多様な頻度 1 の語と共起していること、また、『毎日』の方が『文学』より「低頻度」の見出し語の比率がやや高いことが分かる。

次に、『毎日』と『文学』における両副詞の「独自の語」を『分類語彙表』の各部門に分けて集計した結果が次の表 9-10 と表 9-11 である。

<sup>11</sup> 表 9-9 は、『毎日』は第 8 章 9.5 の表 9-3、表 9-4 と、『文学』は第 8 章 8.5 の表 8-4、表 8-5 から作成した。

表 9-10 「急に」の「独自の語」の出現頻度

ジャンル	『分類語彙表』における部門			合計
	抽象的關係	人間活動	自然現象	
『毎日』	7	6	0	13
『文学』	59	47	45	151
合計	66	53	45	164

表 9-11 「突然」の「独自の語」の出現頻度

ジャンル	『分類語彙表』における部門			合計
	抽象的關係	人間活動	自然現象	
『毎日』	69	33	6	108
『文学』	112	65	25	202
合計	181	98	31	310

表 9-10 のジャンルによる「急に」の「独自の語」の分布について、カイ二乗検定を用いて検定したところ ( $\chi^2=5.35$ 、 $p=0.068$   $p>0.05$ )、有意差は認められなかった。また、表 9-11 のジャンルによる「突然」の「独自の語」の分布についても、カイ二乗検定を用いて検定したところ ( $\chi^2=4.1918$ 、 $p=0.123$   $p>0.05$ )、有意差は認められなかった。

また、ジャンルごとに、「急に」「突然」の「独自の語」はどのような出現比率と意味分布をするか比較・検討する。

ジャンル別に現れる両副詞の「独自の語」の意味分布について、『分類語彙表』の各部門の出現比率をまとめたものが次の表 9-12 である。

表 9-12 ジャンル別の「独自の語」の出現比率

ジャンル	副詞	抽象的關係	人間活動	自然現象	合計
『毎日』	急に	53.8%	46.2%	0.0%	100.0%
	突然	63.9%	30.6%	5.6%	100.0%
『文学』	急に	39.1%	31.1%	29.8%	100.0%
	突然	55.4%	32.2%	12.4%	100.0%

表 9-12 から、『毎日』において、両副詞の部門別の出現比率を比較すると、「急に」の「独自の語」は「人間活動」部門に多く現れ、「突然」の「独自の語」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れる。一方、『文学』では、両副詞の部門別の出現比率について、「急に」の「独自の語」は「自然現象」部門に多く現れ、「突然」の「独自の語」は「抽象的關係」「人間活動」部門に多く現れることが分かる。

さらに、次の表 9-13 は、表 9-12 のジャンル別に現れる両副詞の出現比率を比較し、出現比率の高い部門に「○」を付けたものである。

表 9-13 ジャンル別の「独自の語」の出現傾向

ジャンル	副詞	抽象的關係	人間活動	自然現象
『毎日』	急に		○	
	突然	○		○
『文学』	急に			○
	突然	○	○	

表 9-13 から、「○」のついた「独自の語」の出現傾向はジャンル別に異なる傾向が現れる。本論文の研究対象である他の類義関係にある副詞（「やっと」「ようやく」と「ついに」「とうとう」）の「独自の語」の意味分布はある一定の傾向が見られたが、「急に」「突然」には一定の傾向は見られない。

### 9.7.3.2 ジャンルによる「独自の語」の意味分布

ここでは、ジャンルによる「急に」「突然」の「独自の語」の相違について見る。

まず、「急に」は「抽象的關係」部門において、『毎日』では人の感情の変化、人の移動や存在場所の変化、物事の状態の変化を表している。これらには事態の成立までの進行過程の意味合いが含まれている。『文学』では全体的に事態が成立までの進行過程が含まれており、連続する時間の中に展開していく事態を表すことが多かった。また、人の状態の変化、人の気持ちや感情の変化、人の言語行為、環境や状況の変化を表している。このことから、「急に」は「抽象的關係」部門において、幅広い意味範囲に現れ、人と物事の状態の変化が多く現れた。また、その変化は連続する時間の中で展開していく進行過程が著しく見られることが分かる。

また、「人間活動」部門において、『毎日』では感覚や欲望、期待に現れ、『文学』では人の感情を表すものが多かった。また、相手に影響を及ぼす人の言語行為を表す用例が見られた。

さらに、「自然現象」部門において、『毎日』では「独自の語」が現れず、『文学』では人の言語行為、人の状態の変化、聴覚的な事態の変化、状況の変化を表しており、これらは事態に連続する過程が含まれている。

次に、「突然」は、まず「抽象的關係」部門において、『毎日』では人の言語行為、人の移動や存在場所の変化、人の状態の変化、ある状況の変化、人の思考の変化を表しており、また、事態が成立する時と成立前が断絶している用例が多かった。



『文学』では全体的に事態の成立した時と成立する前に断絶がある用例が多く見られ、物事の状態の変化、人の存在場所の変化、人の環境や状況の変化、人の気持ちや感情の変化を表すことが分かった。

また、「人間活動」部門において、『毎日』では人の状態の変化、人の感情の変化、言語行為、人の動作（相手に影響を及ぼす）を表している。『文学』では人の言語行為（相手に影響を及ぼす働きを持つ）、人の動作や人の状況の変化、人の思考を表している。

さらに、「自然現象」部門において、『毎日』では聴覚的事態の変化、状況の変化、人の言語行為を表し、また、事態が成立する時と成立前が断絶している用例が見られた。

『文学』では聴覚的事態の変化、状況の変化、人の状態の変化を表しており、事態の成立の時と成立する前に断絶が見られた。

以上のように、「急に」「突然」の「独自の語」は、ジャンルごとにその意味分布の特徴から大きな異なりは見られなかった<sup>12</sup>。

## 9.8 本章のまとめ

本節では、『毎日』『文学』を用い、「急に」「突然」の相違について、BCCWJの各ジャンクにおける出現傾向と「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を検討し、「独自の語」の意味分布を検討した。その結果について以下に述べる。

まず、「急に」「突然」のBCCWJにおけるさまざまなジャンルにおける出現傾向から、「急に」は話し言葉的な文に現れやすく、「突然」は書き言葉的で改まった文に現れやすいことが分かった。

また、『毎日』『文学』において「地の文」と「会話文」に現れる両副詞の出現頻度に有意な差が認められ、『毎日』『文学』において「急に」の方が「突然」より「会話文」に多く現れた。

次に、両副詞と共起する高頻度の述語は『毎日』『文学』において、「急に」は「なる」（1位）、「する」（2位）、「突然」は「する」（1位）、「なる」（2位）で共通していることが分かった。しかしながら、3位以降はやや異なり、『毎日』では「急に」は「増える」「言う」「変わる・出る」の順で現れ、「突然」は「現れる」「言う」「倒れる」の順で現れた。『文学』では両副詞に「言う」（3位）が共通に現れ、その後「急に」は「変わる」「思い出す」の順で、「突然」は「現れる」「思い出す」の順で現れた。

---

<sup>12</sup> 趙（2012b）は『書籍』を用い、「急に」「突然」と共起する述語を「基本語」と「特徴語」に分けている。「特徴語」は、『国立国語研究所言語処理データ集7 現代雑誌九十種の用語用字 全語彙・表記』を用い、両副詞と共起する動詞の中から、頻度順（度数）1,000位に入る語（「基本語」）を除いた「基本語」に入らない動詞のことである。両副詞に共通に現れる「特徴語」について、「起きる」「襲う」「やってくる」以外に、出現頻度にあまり差は見られないと述べており、両副詞それぞれの「特徴語」について、「急に」は、基本の意味に現れやすく、「突然」は、基本の意味から拡張されたより抽象的なものに現れやすいと述べている。

『毎日』では両副詞と共起する共通の述語「なる」「する」「言う」の出現比率を合わせると、「急に」が42.4%、「突然」が33.8%であった。

一方、『文学』における「なる」「する」「できる」「言う」の出現比率を合わせると、「急に」が41.7%、「突然」が24.5%である。このことから、「急に」の方が「突然」より少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かった。また、『毎日』における「急に」と共起する「増える」から、事態が連続して成立していることが分かり、『毎日』『文学』における「突然」と共起する「現れる」「倒れる」から、事態の成立とその前の事態が断絶していることが分かった。

また、『毎日』において、両副詞の部門別の出現比率を比較すると、「急に」の「独自の語」は「人間活動」部門に多く現れ、「突然」の「独自の語」は、「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れた。

一方、『文学』では、両副詞の部門別の出現比率は、「急に」の「独自の語」は「自然現象」部門に多く、「突然」の「独自の語」は「抽象的關係」「人間活動」部門に多く現れることが分かった。ジャンルにより両副詞の出現傾向が異なっていることが明らかになった。

さらに、両副詞の「独自の語」の意味分布について、ジャンルごとに明らかになったことは、以下の通りである。

「抽象的關係」部門から述べると、「急に」の「独自の語」は、『毎日』では人の感情・存在場所・物事の状態の変化を表しているが、事態の成立までの進行過程の意味合いが含まれている。『文学』でも人の状態・感情・言語行為・状況の変化を表しているが、『毎日』と類似して全体的に事態が連続する時間の中で展開していく進行過程の意味が含まれていることが分かった。『文学』の方に現れる事態は多かったものの、両ジャンルに共通して現れる事態が多く、成立するまでに連続する進行過程の意味が含まれている点も共通していることが明らかになった。

一方、「突然」の「独自の語」は、ジャンルによる違いは見られず、『毎日』『文学』において人の言語行為、人の存在場所・人の状態・ある状況・人の思考の変化など幅広い意味に使われており、全ての事態は成立とその前が断絶している点で共通していることが明らかになった。

次に、「人間活動」部門において、「急に」の「独自の語」は、『毎日』では人の感覚、感情を表しており、『文学』では人の感情、相手に影響を与える人の言語行為を表している。

一方、「突然」の「独自の語」は、『毎日』では人の感情の変化、言語行為、相手に影響を与える人の動作を表し、『文学』では相手に影響を与える人の言語行為、人の動作や行動、人の状況の変化、人の思考を表している。

「人間活動」部門において、「急に」「突然」の「独自の語」はジャンルによる違いはなく、「突然」の「独自の語」が、広い意味範囲に使われていることが明らかになった。

また、「自然現象」部門において、「急に」の「独自の語」は、『文学』では人の言語行為、人の状態の変化、聴覚的な事態の変化、状況の変化を表しており、事態に連続する過程が含まれている。『毎日』では「独自の語」は現れなかった。

一方、「突然」の「独自の語」は、『毎日』では聴覚的な事態の変化、状況の変化、人の言語行為を表し、事態が成立する時と成立前が断絶していることが分かった。「自然現象」部門において、事態の成立が連続する進行過程にあるという「急に」の「独自の語」の特徴と、事態の成立とその前が断絶している「突然」の「独自の語」の特徴は「抽象的關係」部門にも現れ、両部門が類似していることが分かった。

また、聴覚的な事態の変化において、両副詞は共通して現れているものの、「急に」は存在していた音や声の音量が小さくなることを表わしているが、「突然」は存在していなかった声や音が突発的に生じることを表わしている点で相反的な意味が現れていることが明らかになった。

森田（1989）は、「突然」の意味用法について「行為・作用・現象などが前触れなしに急に起こるさまに用いる。『予知なしに行う』の意識はない。自然現象・無意識行為・意識的な行為、いずれも可能で、ある瞬間に成立する動作・作用・現象に使う。『急に』のような、時間的幅の中で進行するあわただしい変化を表わさない」と述べているが、「自然現象・無意識行為・意識的な行為、いずれも可能」という指摘は「突然」に限らず、「急に」も似ていることが明らかになった。

## 第10章 結章

本章では、第4章から第9章までの研究結果をまとめ、注目したい結果、類義語の研究への応用、今後の課題について述べる。

### 10.1 本論文のまとめ

前章まで、類義関係にある「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」、「急に」「突然」について、BCCWJ内のさまざまなジャンルにおける出現傾向と、BCCWJ内の『文学』と、『毎日』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から、文体の相違を明らかにした。

また、本論文では、中頻度語に着目したという点で従来とは異なる新たな研究方法を用い、類義関係にある副詞の相違について検討した。まず、類義関係にある副詞について、副詞と共起する述語を「高頻度」「中頻度」「低頻度」と区分した。次に、「中頻度」の述語のうち、それぞれの副詞のみに現れる語を「独自の語」と命名し、その「独自の語」について、『分類語彙表』を用い、意味分類をした上で意味分析を行って副詞の相違を明らかにした。

以下に、本論文で明らかになったことを類義関係にある副詞ごとにまとめる。

#### 10.1.1 「やっと」「ようやく」について

第4章と第5章では、「やっと」「ようやく」の相違について、BCCWJのジャンルにおける出現傾向を検討し、両副詞の現れ方について記述した。また、ジャンル別の出現傾向と、BCCWJ内の『文学』と『毎日』における「地の文」と「会話文」での出現傾向から文体の差を明らかにした。さらに、両副詞と共起する「独自の語」の意味分布を検討し、両副詞の相違を第4章と第5章で述べた。第4章では、BCCWJ内の『文学』を中心に、第5章の前半では、『毎日』を中心に記述した。第5章の後半では、『毎日』における両副詞についての検討の結果と第4章の『文学』における両副詞についての結果を比較し、ジャンルによる両副詞の相違について述べた。

第4章と第5章で明らかになったことは、以下の通りである。

まず、BCCWJにおけるさまざまなジャンルでの出現傾向から（両副詞の文体について）、「やっと」はより話し言葉的でくだけた文章に現れることが明らかになり、「ようやく」は改まった書き言葉的な文章に多く現れることが明らかになった。

また、「地の文」と「会話文」における出現傾向について、『毎日』『文学』における両副詞の出現頻度には有意差が認められた。しかしながら、出現傾向は『毎日』『文学』という異なるジャンルにおいて、「やっと」が「ようやく」より「会話文」に多く現れることが明らかになった。また、「ようやく」の場合、『文学』における「会話文」での出現傾向と『毎日』における「会話文」での出現比率を見ると、『毎日』における「会話文」での比率が高

くなっている。これは新聞の特質と「ようやく」が改まった文に多く現れる文体の差による結果だと思われる。

さらに、『毎日』『文学』における両副詞の出現頻度は「やっと」より「ようやく」の方が多く現れたものの、有意な差は認められなかった。

次に、両副詞と共起する高頻度語の出現傾向について述べる。『毎日』『文学』において、高頻度語に「する」「なる」「できる」「分かる」が共通して現れた。これらの述語の出現比率を合わせると、『毎日』では「やっと」が31.6%、「ようやく」が33.4%であり、『文学』では「やっと」が26.6%、「ようやく」が22.9%であり、ジャンルにより出現比率の合計はやや異なっているものの、両副詞の出現傾向は似ていることが明らかになった。この結果により、特定の少ない語彙が高い頻度で用いられているのは『文学』より『毎日』の方で顕著であることが分かった。

また、両副詞と共起する高頻度語から、「やっと」は事態の成立を強調する最終段階を表す「結局」「～の末に」という表現と共起しやすいことが明らかになった。

さらに、益岡・田窪（1992）は、「やっと」「ようやく」を「アスペクトの副詞」と称した。これらはアスペクト形式との共起が多いと予想されたが、「独自の語」の現れる文から、「やっと」と（有標の）アスペクト形式との共起は見られず、「ようやく」だけが「～し始める」という（有標の）アスペクト形式との共起が確認できた。したがって、「やっと」より「ようやく」の方が事態の成立において、時間的局面的のうち開始を表す表現と共起する傾向があると言える。

なお、両副詞の「独自の語」のそれぞれについて、『語彙分類表』を用いて意味分布を調べたところ、副詞ごとによく現れる部門があることが明らかになった。「やっと」は「人間活動」部門により多く現れ、「ようやく」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れた。この傾向はジャンルによる違いは見られず、『毎日』『文学』の両ジャンルに同様な傾向が見られた。「独自の語」の意味分布について、以下でジャンルごとに述べる。

「抽象的關係」部門において、「やっと」の「独自の語」が両ジャンルに共通して現れる特徴は、連続する事態が成立し、その進行過程の意味が含まれているということであった。『文学』では事態の成立までの大変さと厳しさが感じられるものが現れた。また、人の移動や感情、感覚が外側に広がる様子が窺えるものが現れ、空間的に遠くなっていくことを表わしているものが多かった<sup>1</sup>。

一方、「ようやく」の「独自の語」は『毎日』『文学』共に、事態が遠い所から近い所や一つの場所に集まってくる表現があった<sup>2</sup>。

「抽象的關係」部門において、「やっと」「ようやく」は人の感情を空間的に捉えて述べている点では共通しているがその方向性、捉え方に違いがあることが明らかになった。

<sup>1</sup> 例えば、(第4章4.5)(14)「やっと、全身に安堵が広がった」などがある。

<sup>2</sup> 例えば、(第4章4.5)(18)「ようやく、実感となって迫ってきた」などがある。

次に、「人間活動」部門において、「やっ」との「独自の語」は、『毎日』では人の感情や思考、人の行為による成果を表しており、『文学』では主体が意志を持ち制御できない人の状態の変化、人の行為により相手の状態に影響を及ぼすものが現れた<sup>3</sup>。『文学』では主体の行為にとどまらず、相手にまでその行為の影響を与える表現が現れた点で『毎日』における人の行為とやや異なっている。

一方、「ようやく」の「独自の語」は、『毎日』では人の感情・思考・人の行為による状況の変化を表すものが現れ、『文学』では主体が意志を持ち制御できる人の感情や思考を表し、人の発話行為により相手に影響を及ぼすことを表わしている<sup>4</sup>。

「やっ」とは非言語行為で相手に影響を与えるが、「ようやく」は言語行為で相手に影響を与える点で異なり、両副詞はジャンルごとに異なる傾向であることも明らかになった。

また、「自然現象」部門において、「やっ」との「独自の語」は、『文学』では可視的な人の状態の変化であるが、『毎日』ではこのような例は現れなかった。ジャンルによる違いはあるが、「抽象的關係」部門と似ており、事態が空間的に拡張していく用例が多かった。

一方、「ようやく」の「独自の語」は「自然現象」部門において、『毎日』では人や物事の状態の変化を表し、『文学』では自然現象と人の感覚を表しているものが現れた。「ようやく」の「自然現象」においてはジャンルごとに「独自の語」の意味分布が異なっていることが明らかになった。

### 10.1.2 「ついに」「とうとう」について

第6章と第7章では、「ついに」「とうとう」の相違について、上記の「やっ」と「ようやく」と同様の項目について検討を行い、第6章ではBCCWJ内の『文学』を用い、第7章の前半では『毎日』を用い、その結果を述べた。第7章の後半では、『毎日』『文学』という異なるジャンルによる相違を述べた。第6章と第7章で明らかになったことは、以下の通りである。

まず、BCCWJにおけるさまざまなジャンルでの出現傾向から、「ついに」が書き言葉的な文章に多く現れ、「とうとう」が話し言葉的な文章に多く現れることが明らかになった。

また、『毎日』『文学』の両ジャンルにおいて、「地の文」と「会話文」に現れる両副詞の出現（有意差が認められた）から、「ついに」より「とうとう」の方が「会話文」に多く現れることが分かった。

さらに、『毎日』『文学』の両ジャンルにおいて両副詞の出現頻度は「ついに」が多く現れた（両副詞の出現頻度に有意な差が認められた）。

次に、両副詞と共起する高頻度語の出現傾向について、『毎日』『文学』では両副詞と共起する高頻度語は上位5語がジャンルごとに共通していることが分かった。それぞれのジャンルでは、「する」「なる」「来る」「できる」の順で共通しており、その後、『毎日』では

<sup>3</sup> 例えば、(第4章 4.5) (27)「やっ」と、捕まった」、(28)「やっ」と助かった」などがある。

<sup>4</sup> 例えば、(第4章 4.5) (29)「ようやく命じた」などがある。

「言う」(5位)、『文学』では「出る」(5位)であった。『毎日』『文学』において、4位までの述語の出現比率を合計すると、『毎日』で「ついに」が38.0%、「とうとう」が46.7%であり、『文学』で「ついに」が38.4%、「とうとう」が35.1%であった。『毎日』における「とうとう」は4位までの述語の出現比率の合計が5割弱であり、その他は4割強である。この結果と先行研究における結果を比較してみると、両ジャンルにおいて、両副詞は少ない語彙が高い頻度で用いられていることが分かり、「ついに」「とうとう」は類義の度合いが高い類義語であると思われる<sup>5</sup>。

また、両副詞の「独自の語」の意味分布の検討により、「ついに」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れ、「とうとう」は「人間活動」部門に多く現れることが分かった。これらの出現傾向は、『毎日』『文学』という異なるジャンルにおいても類似していることが明らかになった。また、両副詞の「独自の語」の意味分布で明らかになったことは以下の通りである。

まず、「抽象的關係」部門において、「ついに」の「独自の語」は、『毎日』では人や物事の状態の変化を表しているが、特にあるレベル・基準に達したこと、達していないことなど、想定している基準からの変化を表している。『文学』ではある状況の変化、人や物事の実質的・抽象的な移動を表している。また、人の身体的な動きで感情の変化を表しているものなども現れた<sup>6</sup>。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、『毎日』では人の実質的な移動を表し、『文学』では主体の具体的・抽象的な行動などの働きかけにより、客体の状態がマイナス方向に変化することを表している<sup>7</sup>。

このように、「抽象的關係」部門において、「ついに」「とうとう」はジャンルにより「独自の語」の意味分布に違いがあることが明らかになった。

次に、「人間活動」部門において、「ついに」の「独自の語」は、『毎日』では人の言語行為・感情の変化、身体の動きで感情を表し、また、状況の変化を表している。『文学』では人の感情や相手の質問に応じる言語行為を表している<sup>8</sup>。人の移動で存在場所の変化を表す点は「抽象的關係」部門と似ていることが明らかになった。

一方、「とうとう」の「独自の語」は、『毎日』では言語行為を表し、人の体の動きで思考・意志を表す例が見られた。『文学』では人の感情、思考を表し、主体的な言語行為を行い、相手に影響を及ぼすものが現れた<sup>10</sup>。また、人の状況の変化を表している例も見られた

---

<sup>5</sup> 「ついに」「とうとう」が(第6章6.4.3.2)(16)「～人魂売りが塔の中に入って、とうとうついに出てこなかった」のように、共に現れるものが見られた。連続して現れるということは類義の度合いが高いため可能な現れ方ではないかと思われる。

<sup>6</sup> 例えば、(第6章6.5)(24)「ついに肩を落とした」などがある。

<sup>7</sup> 例えば、(第7章7.5)(26)「とうとう海に着きました」などがある。

<sup>8</sup> 例えば、(第6章6.5)(27)「とうとう全員鬼の形をとどめぬほどつぶされてしまった」などがある。

<sup>9</sup> 例えば、(第6章6.5)(31)「僕はついに応じなかった」などがある。

<sup>10</sup> 例えば、(第6章6.5)(35)「とうとう呼び出した」などがある。

<sup>11</sup>。また、「自然現象」部門において、「ついに」の「独自の語」は、『毎日』『文学』ではある状況と人の状態の変化を表している点で共通している<sup>12</sup>。

一方、「とうとう」の「独自の語」は「自然現象」部門には現れなかった。

### 10.1.3 「急に」「突然」について

第8章と第9章では、「急に」「突然」の相違について、「やっと」「ようやく」、「ついに」「とうとう」における検討項目と同様のものに対し、検討を行った。第8章ではBCCWJ内の『文学』を用い、第9章の前半では『毎日』を用いて検討した。第9章の後半では両ジャンルにおける両副詞の相違について比較して述べた。明らかになったことは以下の通りである。

まず、「急に」「突然」のBCCWJにおけるさまざまなジャンルにおける出現傾向から、「急に」は話し言葉的な文に現れやすく、「突然」は書き言葉的で改まった文に現れやすいことが分かった。

また、「地の文」と「会話文」における出現比率は、両ジャンルにおいて、「突然」より「急に」の方が多かった（両ジャンルに現れる両副詞の出現に有意差が認められた）。「急に」が「会話文」に多く現れる出現傾向は、ジャンルによる相違がないことが明らかになった。

さらに、両副詞の『毎日』『文学』における出現頻度は、『急に』より『突然』の方が多かった（ジャンル別に現れる両副詞の出現頻度に有意差が認められた）。

次に、『毎日』『文学』において、両副詞と共起する高頻度の述語は「急に」は「なる」（1位）、「する」（2位）が現れており、「突然」も「する」（1位）、「なる」（2位）が現れ、共通していることが分かった。しかしながら、3位以降はやや異なり、『毎日』では「急に」は「増える」「言う」「変わる・出る」の順で現れ、「突然」は「現れる」「言う」「倒れる」の順で現れた。一方、『文学』では両副詞に「言う」（3位）が共通して現れ、その後、「急に」は「変わる」「思い出す」の順で、「突然」は「現れる」「思い出す」の順で現れた。『毎日』において、両副詞と共起する共通の述語「なる」「する」「言う」の出現比率を合わせると、「急に」が42.4%、「突然」が33.8%であった。一方、『文学』において共通して共起する「なる」「する」「できる」「言う」の出現比率を合わせると、「急に」が41.7%、「突然」が24.5%である。このことから、「急に」の方が「突然」より少ない語彙が高頻度で用いられていることが分かった。また、『毎日』において、「急に」と共起する高頻度語「増える」から、事態が連続して成立していることが分かり、『毎日』『文学』において、「突然」と共起する高頻度語「現れる」「倒れる」から、事態の成立とその前の事態が断絶していることが分かった。

<sup>11</sup> 例えば、(第6章 6.5) (36)「とうとう天皇さままでおつきあい下さいました」などがある。

<sup>12</sup> 例えば、(第6章 6.5) (37)「ついに燃え盛る陽光の炎に包まれた」、(38)「ついに命を落としました」、(第7章 7.5) (35)「ついに息を引き取った」などがある。



また、「独自の語」について『分類語彙表』を用いて検討した結果、『毎日』では「急に」の「独自の語」は「人間活動」部門に多く、「突然」の「独自の語」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れた。一方、『文学』では両副詞の部門別の出現比率は、「急に」の「独自の語」は「自然現象」部門に多く、「突然」の「独自の語」は「抽象的關係」「人間活動」部門に多く現れることが分かった。このことから、ジャンルにより両副詞の「独自の語」の意味分布の傾向が異なっていることが明らかになった。

さらに、両副詞の「独自の語」の意味分布について、ジャンルごとに明らかになったことは以下の通りである。

「抽象的關係」部門から述べると、「急に」の「独自の語」は、『毎日』では人の感情・存在場所・物事の状態の変化を表しているが、事態の成立までの進行過程の意味合いが含まれている。『文学』では人の状態・感情・言語行為・状況の変化を表している。両ジャンルにおいて『文学』の方に多く現れたが、両ジャンルに共通して事態が連続する時間の中で展開していく進行過程の意味が含まれていることが分かった<sup>13</sup>。

一方、「突然」の「独自の語」は、ジャンルによる違いはあまり見られず、『毎日』『文学』において、人の言語行為、人の存在場所・人の状態・ある状況・人の思考の変化など幅広い意味に使われており、全ての事態は成立とその前が断絶している点で共通していることが明らかになった<sup>14</sup>。

次に、「人間活動」部門において、「急に」の「独自の語」は、『毎日』では人の感覚や感情を表しており、『文学』では人の感情や相手に影響を与える人の言語行為を表している。

一方、「突然」の「独自の語」は、『毎日』では人の感情の変化、言語行為、相手に影響を与える人の動作を表し、『文学』では相手に影響を与える人の言語行為、人の動作、人の状況の変化、人の思考を表している。

このように、「急に」「突然」の「独自の語」はジャンルによる違いはあまり見られず、「突然」の「独自の語」が、広い意味範囲に使われていることが明らかになった。「人間活動」部門において、両副詞の「独自の語」の意味分布は共通していることが分かった。

また、「自然現象」部門において、「急に」の「独自の語」は、『文学』では人の言語行為、人の状態の変化、聴覚的な事態の変化、状況の変化を表しており、事態に連続する過程が含まれているが、『毎日』では「独自の語」は現れなかった。

一方、「突然」の「独自の語」は、『毎日』では聴覚的な事態の変化、状況の変化、人の言語行為を表しており、『文学』では聴覚的な事態の変化を表している。両ジャンルに事態が成立する時と成立前が断絶していることで共通していることが分かった。

---

<sup>13</sup> 例えば、(第8章 8.5) (10)「急に老けてみえた」、(15)「逢う回数は急に減った」、(16)「急に肥った」などがある。

<sup>14</sup> 例えば、(第8章 8.5) (17)「突然～姿を現した」、(18)「突然～武芸者の姿が浮かび上がった」、(19)「突然惨状が生じた」、(20)「突然夢見心地が消え去った」などがある。

「自然現象」部門において、事態の成立が連続する進行過程にあるという「急に」の「独自の語」と、事態の成立とその前が断絶している「突然」の「独自の語」の意味合いは、「抽象的關係」部門にも見られたことから、「自然現象」「抽象的關係」の両部門の意味分布の特徴は類似していることが分かった。

また、聴覚的な事態の変化において、両副詞は共通して現れているものの、「急に」は存在していた音や声の音量が小さくなることを表しているが、「突然」は存在していなかった声や音が突発的に生じることを表している点で相反する意味が現れていることが明らかになった<sup>15</sup>。

さらに、森田（1989）では「突然」の意味用法について「行為・作用・現象などが前触れなしに急に起こるさまに用いる。『予知なしに行う』の意識はない。自然現象・無意識行為・意識的な行為、いずれも可能で、ある瞬間に成立する動作・作用・現象に使う。『急に』のような、時間的幅の中で進行するあわたしい変化を表わさない」と述べているが、「自然現象・無意識行為・意識的な行為、いずれも可能」という指摘は、「突然」に限らず、「急に」も似ていることが明らかになった。

以上、本論文で明らかになったことについて述べた。下記の表 10-1 は、それぞれの副詞の「独自の語」の意味分布の特徴は、『毎日』『文学』の両ジャンルに共通点が見られたのか、相違点が見られたのかを表にまとめたものである。「共」は両ジャンルに共通点が見られたものに、「相」は両ジャンルに相違点が見られたものに記入した（（相）は「独自の語」が一つのジャンルのみ現れた）。

表 10-1 両ジャンルにおける各副詞の「独自の語」の意味分布の特徴

	抽象的關係	人間活動	自然現象
やっと	共	相	(相)
ようやく	共	共	相
ついに	相	共	共
とうとう	相	共	(相)
急に	共	共	(相)
突然	共	共	共

表 10-1 から、各副詞は副詞ごとにジャンルにより、意味分布の特徴も異なっていることが分かった。

次は、本論文において注目したい内容について改めて述べる。

<sup>15</sup> 例えば、(第 8 章 8.5) (40)「兵隊は急に声をひそめる」、(41)「急に事務所内が静まり返った」、(42)「突然～警報ベルがけたたましく鳴り響いた」、(43)「突然、怪物の音が轟いた」などがある。

## 10.2 「独自の語」の出現傾向について

「やっど」「ようやく」「ついに」「とうとう」の「独自の語」について『分類語彙表』を用いて意味分類をした結果、各部門における意味分布の傾向は、副詞の文体の差と関係があることが分かった。

「やっど」「ようやく」「ついに」「とうとう」のうち、「会話文」により多く現れ、また、話し言葉的な文に多く現れる副詞は、その「独自の語」が「人間活動」部門に多く現れ、逆に「会話文」にあまり用いられず、また、書き言葉的な文に多く現れる副詞は、その「独自の語」が「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れた。具体的には、「ようやく」「ついに」の「独自の語」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れ、「やっど」「とうとう」の「独自の語」は「人間活動」部門に多く現れることである。

これらを表にまとめると、次の表 10-2 となる。

表 10-2 「やっど」類と「急に」「突然」の「独自の語」の出現傾向

	ジャンル	抽象的關係	人間活動	自然現象
やっど	『毎日』		◎	
	『文学』		◎	
ようやく	『毎日』	●		●
	『文学』	●		●
ついに	『毎日』	●		●
	『文学』	●		●
とうとう	『毎日』		◎	
	『文学』		◎	
急に	『毎日』		◎	
	『文学』			○
突然	『毎日』	●		●
	『文学』	●	○	

表 10-2 は、「会話文」により多く現れる「やっど」「とうとう」は「人間活動」部門に多く現れることを◎で表示し、「ようやく」「ついに」は「抽象的關係」「自然現象」部門に多く現れることを●で表示した。

表 10-2 から、「やっど」「ようやく」「ついに」「とうとう」の「独自の語」の意味分布に関するこれらの傾向は、「急に」「突然」の「独自の語」の意味分布の傾向とは類似していないことが分かる。「急に」は『文学』において「自然現象」部門に多く現れ、「突然」も『文学』において「人間活動」部門に多く現れ、「自然現象」部門にあまり用いられず、「やっど」類と異なる傾向が見られる。「独自の語」の意味分布において、「やっど」「ようやく」

「ついに」「とうとう」はジャンルによる出現傾向に違いはないが、「急に」「突然」はジャンルによる違いがあると言える。

以上のように、「やっ」と「ようやく」「ついに」「とうとう」は、「会話文」に多く現れ、また、より話し言葉的な文体に多く現れる副詞の「独自の語」は『分類語彙表』において、「人間活動」に多く現れる傾向があることが明らかになった。

では、このような傾向は何を意味するのかについて考えてみる。『分類語彙表』において、「人間活動」部門の下位区分である中項目を改めて確認すると、「心」「言語」「芸術」「生活」「行為」「交わり」「待遇」「経済」「事業」となる。一方、「抽象的關係」部門の下位区分である中項目も確認すると、「真偽」「類」「存在」「様相」「力」「作用」「時間」「空間」「量」となる。また、「自然現象」部門の下位区分である中項目には、「自然」「物質」「天地」「身体」「生命」となる。

ここで考えられることは、類義関係にある副詞において、人の身近なことについて述べる際には、よりくだけた話し言葉的な語を選び、より身近な物事ではなく自然や抽象的なことについて述べる際には、より書き言葉的な語を選び、使う傾向があるのではないかということである。

「急に」「突然」の「独自の語」については、両副詞と類義関係にある「不意に」「いきなり」などの語を検討し、これらの「独自の語」の意味分布の傾向と比較し、改めて検討することが必要であろうが、この点については今後の課題にしたい。

### 10.3 「(使用) 範囲・度数分布表」における各頻度層の出現比率について

類義関係にある副詞の「(使用) 範囲・度数分布表」における各頻度層の出現比率にも、ある傾向が見られた。それは、下記の表 10-3 に見られるように、「とうとう」の「中頻度」の見出し語の少なさと「低頻度」の見出し語の多さである。

表 10-3 各副詞の「(使用) 範囲・度数分布表」における頻度層の出現比率

	ジャンル	高頻度	中頻度	低頻度
やっと	『毎日』	13.5%	24.8%	61.7%
	『文学』	8.1%	37.3%	54.6%
ようやく	『毎日』	12.6%	27.9%	59.5%
	『文学』	8.0%	35.8%	56.1%
ついに	『毎日』	8.7%	35.5%	55.8%
	『文学』	10.2%	26.4%	63.4%
とうとう	『毎日』	8.4%	16.8%	74.8%
	『文学』	15.6%	13.2%	71.2%
急に	『毎日』	13.1%	19.0%	67.9%
	『文学』	6.7%	36.3%	57.0%
突然	『毎日』	9.9%	26.0%	64.1%
	『文学』	10.7%	36.7%	52.6%

本論で取り上げた伊藤（2008：pp.120-121）の記述では「どのような語彙表も『高頻度』の見出し語は少なく、低頻度の見出し語が多い』という法則性をもっている。とりわけ、頻度 1 の見出し語は語彙量の 50%前後を占めるのが普通である」と述べているが、(表 10-3 に見られる)「とうとう」の「低頻度」の見出し語の少なさが非常に目立つ。「とうとう」以外に、「急に」の『毎日』において、「低頻度」の見出し語は 67.9%、「ついに」の『文学』において、「低頻度」の見出し語は 63.4%であり、伊藤（2008）の指摘より高いものの、「とうとう」の「低頻度」の見出し語の比率には及ばない。

では、「とうとう」の「低頻度」の見出し語の多さは何を意味しているのだろうか。ここでも言えることは、「とうとう」は頻度 1 の語で多様な語と共起していることである。頻度 1 の語の中には臨時 1 語が含まれている可能性もあるが、「とうとう」は他の副詞より、特殊な意味で使われている頻度 1 語と多く共起していることは言えるだろう。

また、表 10-3 に見られるように、「高頻度」の見出し語の出現比率から、ある副詞はジャンルが異なれば出現比率も異なる。しかし、下記の表 10-4 から、類義関係にある副詞と同一ジャンルにおいては、その「高頻度」の見出し語の出現比率は近いことがある。

表 10-4 ジャンルごとにおける副詞の各頻度層の出現比率

	ジャンル	高頻度	中頻度	低頻度
『毎日』	やっと	13.5%	24.8%	61.7%
	ようやく	12.6%	27.9%	59.5%
『文学』	やっと	8.1%	37.3%	54.6%
	ようやく	8.0%	35.8%	56.1%
『毎日』	ついに	8.7%	35.5%	55.8%
	とうとう	8.4%	16.8%	74.8%
『文学』	ついに	10.2%	26.4%	63.4%
	とうとう	15.6%	13.2%	71.2%
『毎日』	急に	13.1%	19.0%	67.9%
	突然	9.9%	26.0%	64.1%
『文学』	急に	6.7%	36.3%	57.0%
	突然	10.7%	36.7%	52.6%

『毎日』『文学』における「急に」「突然」と、『文学』における「ついに」「とうとう」は高頻度の見出し語の出現比率にやや異なる傾向が見られるが、『毎日』『文学』における「やっと」「ようやく」、『毎日』における「ついに」「とうとう」はそれぞれのジャンルで「高頻度」の見出し語の出現比率が近い値であることが分かる。

従来の研究では「高頻度」の見出し語を中心に検討され、しかも一つのジャンルにおける調査であることを考えると、同一ジャンルで類義関係にある副詞を取り上げた場合、その出現比率の分布から類義の度合いが高くなることは当然な結果のように思われる。

表 10-3 と表 10-4 から、類義関係にある副詞については異なるジャンルを用い、頻度層を検討することにより、(傾向ではあるが、) 副詞はジャンルごとに「高頻度」の見出し語の出現比率が異なり、さらに、同一ジャンルにおいて類義関係にある副詞とは近い出現比率であることが分かる。

#### 10.4 類義語の研究への応用

本論文では、類義関係にある副詞を中心に、『毎日』『文学』というジャンルによる出現傾向を中心に検討し、その違いについて述べた。ここでは、本論文の結果をもとに、類義語の研究に必要な検討項目と方法について述べる。

まず、類義語の研究において、類義関係にある語の相違を論じる際、文体の相違を明らかにすることが必要であろう。本論文では、さまざまなジャンルにおける出現傾向と、一つのジャンルにおける「地の文」と「会話文」での出現傾向から、文体の差を明らかにすることができた。文体の差は一つのジャンルにとどまらず、異なるジャンルにおける出現

傾向を検討することが重要であると思われる。従来言われてきた研究者の内省による文体の差や（バランスがとれていない、均衡コーパスではないもの）コーパスの検討による文体の差と、本論文の検討の結果は、類似している点もあるものの、本論文では、数値的に先行研究における結果を裏付けることができた。つまり、文体の差を数値で客観的に提示することができたと思われる。

次に、本論文では、類義関係にある副詞について、副詞と共起する中頻度語のうち、「独自の語」を検討した。本論文の研究方法は類義関係にある情態副詞（時間副詞）のみではなく、他の副詞にも適用できると思われる。例えば、程度副詞や陳述副詞について、同様の方法で検討ができると思われる。今回は、『分類語彙表』を用い、類義関係にある副詞と共起する述語を対象とし、意味分布という意味の面に焦点を当てたが、形式の面においても検討ができると思われる。

また、類義語は本論文での検討対象である副詞以外に、形容詞や動詞にも存在する。これらの類義関係にある形容詞、動詞も本論文と同様の方法で検討することができよう。例えば、動詞の場合、動詞に係る語、つまり、補語について、「独自の語」を抽出し検討することができ、形容詞の場合、形容詞を修飾する修飾語や形容詞が修飾する被修飾語などに適応することができると思われる。これら動詞や形容詞の計量的な検討も従来は高頻度語が主な対象となっているが、中頻度語の「独自の語」を検討することにより、従来より明確で中核的な特徴を取り出すことができると思われる。

## 10.5 今後の課題

本論文を通して、概して、類義関係にある副詞の相違は、ジャンルにより出現傾向が異なり、『分類語彙表』を用いて意味分類した結果、検討対象の副詞は、「抽象的關係」「人間活動」「自然現象」という部門において、それぞれよく現れる部門があり、類義の度合いが高い語は、その部門の現れ方に、ある一定の傾向があることが明らかになった。しかし、本論文では、捉えきれていない以下のような課題が残っている。

まず、本研究では、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」という「事態の成立するまで長時間かかる」意味を持つ類義語は一緒に取り上げ、検討できたものの、「事態が瞬間的に成立する」ことを意味にしている「急に」「突然」と類義関係にある語は取り上げることはできなかった。

「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」は、それぞれの「独自の語」を『分類語彙表』を用いて意味分類した時、その出現傾向は『毎日』『文学』というジャンルによる違いはなく、一定の傾向が見られた。しかし、「急に」「突然」は、『毎日』においては「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」と同様の傾向が見られたものの、『文学』においては異なる傾向が見られた。両ジャンルにおける異なる出現傾向について、より詳細に検討するためには、類義関係にある他の語、例えば、「いきなり」「だしぬけに」「とっさに」などを検討対象にする必要があると思われる。つまり、他の語を検討せずには、「やっと」「よう

やく」「ついに」「とうとう」のように、『分類語彙表』を用いた意味分類の結果、一定の傾向が見られる可能性がないとは言い切れないためである。本論文では「急に」「突然」のみになってしまったが、今後、上記の類義関係にある語を対象に検討していきたい。

次に、本論文では、類義関係にある副詞の「独自の語」を『分類語彙表』を用いて意味分類をし、意味分布から、類義関係にある副詞の相違を明らかにしたが、意味分類の基準である『分類語彙表』の問題がある。この点について、第3章 3.3.2 で述べたように、分類に合わないものや『分類語彙表』に「独自の語」と当てはまる動詞がないことである。また、例えば、(1)「広がる」、(2)「引き出す」を『分類語彙表』を用いて意味分類をすると、「抽象的關係」部門に入る例である。しかし、「独自の語」と係る補語や文脈の意味から、人の感情や感覚と解釈することができ、「人間活動」部門に入ることも可能であろう。

- (1) イヴはがばっとベッドに起き上がったが、しばらくは頭がぐるぐる回ってしまった。  
それでも、自分のベッドにいることに気づくと、やっと全身に安堵が広がった。  
(PB49\_00157『復讐は聖母の前で』2004、第4章(14)の再掲)
- (2) 横からオンズロウ信号兵曹が口を入れた。「いますぐ、自分がウナギのゼリー寄せ、用意しますよ、副長」みんな声をたてて笑った。すると、オンズロウも、あの海で死んだ母子を発見したときに噴きだした悲しみと絶望感からようやく引きだされたのだらう。(LB19\_00103『落日の香港』1997、第4章(19)の再掲)

以上のように、人の内面的なことを表していると思われるものでも、「独自の語」の意味分類から、「人間活動」部門ではなく「抽象的關係」部門に入る例がある。本論文では、人の感情や感覚など内面的なことだと思われても『分類語彙表』の意味分類に従い、「抽象的關係」部門に入れた。今後、「独自の語」の検討において、「独自の語」と係る補語によって分類基準が違ってくるものについて、新たな解釈の基準を設け、検討していきたい。

また、本論文における「独自の語」の相違について、用例からの意味を考えながら見てきたが、用例を検討する前に、『分類語彙表』における分類項目から、抽象的な概念を取り出し、分かりやすく記述する方法を考えていきたい。特に、認知意味論における概念や考え方を取り入れ、「独自の語」の意味について記述してみたい。

山本(2007)は、「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」について、認知意味論の観点から検討している。第3章で述べたように、山本(2007)は『山本五十六(上)(下)』を調査データとして用い、「ついに」が17例、「とうとう」が16例を検討対象の用例とした。用例の少なさと、「会話文」の認定において「会話文内」と「会話文に参与」という項目が挙げられているものの、その定義が曖昧であることなど検討の余地がある。しかしながら、注目すべきことは、事態の実現について「起点・経路・到達点スキーマ」を用い、「ついに」



「とうとう」は、「同一のスキーマを反映しつつ、焦点化される部分の異なりがちがいによってその差異が生じさせている (p.14)」と述べ、以下のような図に示している点である。

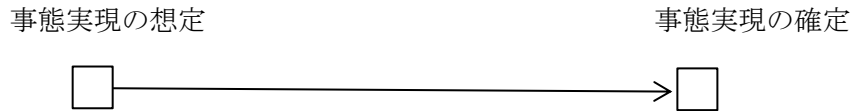


図 10-1 「ついに」「とうとう」のスキーマ (図 8 引用)

また、「ついに」について、下記の (3) を挙げ、『煙草を取り出す』事態実現の想定時点を起点、『煙草を取り出す』事態実現の確定時点を到達点、その間のメンタルパスおよび時間経過を経路とする、起点・経路・到達点スキーマがはたらいっている」とし、次の図 10-2 を上げ、「動作から動作へとビリヤードのボールのようにエネルギーが伝達されていく (p.17)」としており、「とうとう」は事態にエネルギー伝達を要求しないと述べている。

- (3) 学生は山門のほりりでまだためらっていた。ついに彼は、柱の一つに身を凭せて、ポケットから、先ほど買った煙草をとりだした。(一部抜粋)

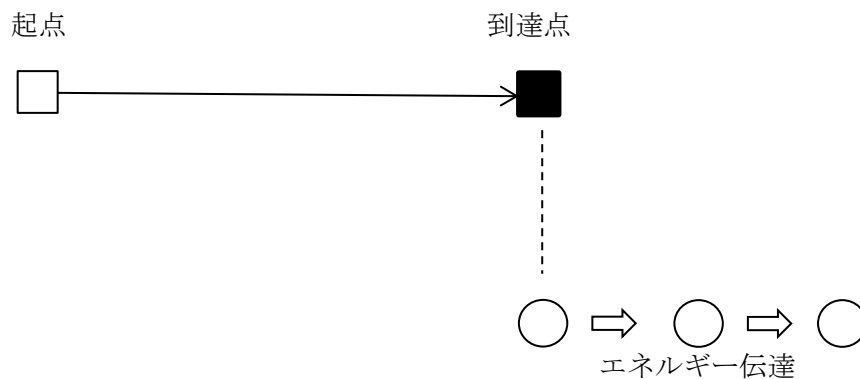


図 10-2 「ついに」のスキーマ (図 9 の引用)

靱山 (2002) は、「やっと」「ようやく」について、両副詞の相違について、以下の例を挙げ、述べている。

- (4) a あ、やっとバスが来た。  
 b? あ、ようやくバスが来た。
- (5) [マラソンで] a?先頭集団がやっと三十五キロ地点にさしかかってきました。  
 b 先頭集団がようやく三十五キロ地点にさしかかってきました。  
 (靱山 2002 : p.153)

「やっと」と「ようやく」はともに、すでに共通点として指摘したく長い時間がかかってある事態が実現する>ということをもとに、このベースとして持っていると考えられます。つまり、このベースとは、「(ある事態が実現までに要する) 長い時間の経過を伴うプロセス」と「(そのプロセスを経た結果としての) 事態の実現」を含むということです。(中略)「やっと」と「ようやく」の違いはプロファイルの違いとして捉えることができると思われます。つまり、「やっと」は(4) aのような事態の実現の瞬間に注目した文に生じることから、上記のベースのうちの「事態の実現 (の瞬間) の方をプロファイルとして持つ」のに対して、「ようやく」は(5) bのような事態の実現に至る長い時間の経過を伴うプロセスに焦点を当てた文に生じることから、上記のベースのうちの「(ある事態が実現までに要する) 長い時間の経過を伴うプロセス」の方をプロファイルとして持つと考えられます<sup>16</sup>。(梶山 2002 :p.154)

梶山 (2002) では、「やっと」「ようやく」の異なる点は、「やっと」は「事態の実現の瞬間」をプロファイルとし、「ようやく」は「長い時間の経過を伴うプロセス」の方をプロファイルとしている。

以上、梶山 (2002) の説明と上記の山本 (2007) が採用したイメージスキーマを取り入れると、「やっと」「ようやく」は次のように、図に示すことができるのではないかと思います。



図 10-3 「やっと」「ようやく」のベース



図 10-4 「やっと」のイメージスキーマ (プロファイルは太線)

<sup>16</sup> 梶山 (2002) は、『ベース (あるいはスコープ)』とは、語の意味の記述に必須の認知領域の一部分であり、『プロファイル』とは、ベースのなかで、語 (意味) が直接指し示す部分のこと (p.153)」であると述べている (用例の番号は本論文の順序に従い、それによって直接引用文にある用例の番号も変えた)。



図 10-5 「ようやく」のイメージスキーマ

本論文の対象語である類義関係にある副詞も以上のようにイメージスキーマを表すことによって、説明することができるのではないかとと思われる。認知意味論の観点の取り入れは今後、慎重に考えるべきであろうが、「独自の語」の検討についてさまざまな観点で検討していきたい。特に類義関係にある副詞を、イメージスキーマを用いて提示し、日本語教育の現場に適用できるように研究していきたい。

最後に、研究対象語である副詞について歴史的な観点で検討することができなかつたため、今後『太陽コーパス』などを用い、副詞の出現傾向について検討していきたい。また、文体の差に焦点を合わせ、『国会会議録検索システム』を用いて 1947 年から現在までの副詞の使用実態について検討していきたい。

<参考文献>

- 浅川哲也 (2012) 「口語文における「口語」とは何か—日本語文体史と口語文法との関係—」  
『新國學復刊』4号 國學院大學院友學術振興會
- 浅野百合子 (1982) 「イキナリ・ダシヌケニ・トツゼン・フイニ」『ことばの意味3 辞書に  
書いていないこと』平凡社
- 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語入門』スリーエーネットワーク
- 池田英喜 (2000) 「ツイニ・トウトウ」小考『留学生センター紀要』第2号 新潟大学留  
学生センター
- 池田悠子 (2004) 「類義語」『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』アスク
- 石井正彦 (1993) 「臨時一語と文章の凝縮」『国語学』173集 国語学会  
—— (1996) 「使用頻度“1”の語と文章—高校『物理』教科書を例に—」『国立国語研  
究所研究報告集17』国立国語研究所  
—— (2001) 「臨時一語と文章」『日本語学』VOL.20 明治書院  
—— (2002) 「単語の使用頻度と文章—高校『物理』教科書の使用頻度“2”の語を例  
に—」『語から文章へ』遠藤好英 (編) 「語から文章へ」編集委員会
- 石川 潔 (2006) 『副詞「ついに・とうとう・ようやく・やっと」の意味と用法』桜美林大  
学 2005年度 修士学位論文
- 李 澤熊 (2006) 「時間の早さを表す副詞の意味分析」『名古屋大学日本語・日本文化論集』  
No.14 名古屋大学留学生センター
- 市川 孝 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 伊藤雅光 (2002) 『計量言語学入門』大修館書店  
—— (2003) 「コーパスと統計」『日本語学』4月臨時増刊号 VOL.22 明治書院  
—— (2008) 「語彙の量的構造史モデル」『日本語の研究』3巻5号 日本語学会  
—— (2009) 「計量語彙論から見た語彙史」『シリーズ日本語史2 語彙史』岩波書店
- 遠藤裕子 (2005) 「語と語の関係」『新版日本語教育事典』大修館書店
- 大里泰弘 (1986) 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『九大言語学研究室報告』7号  
九州大学言語学研究室
- 桶井澄子 (1988) 「程度副詞「とても」の研究—陳述副詞から程度副詞への用法の変化を中  
心に—」『上越教育大学国語研究』2号 上越教育大学
- 柄沢 衛 (1977) 「「全然」の用法とその変遷—明治二、三十年代の四迷の作品を中心とし  
て—」『解釈』23巻3号 解釈学会
- 金 英児 (2006) 「時の副詞「やっと」・「ようやく」の意味・用法」『国文論藻』No.5 京都  
女子大学
- 鯨井綾希 (2012) 「同一名詞の反復から見たジャンル間の文体差とその要因—コーパスを用  
いた定量的分析を通して—」『言語科学論集』第16号 東北大学大学院文学研究科言  
語科学専攻

- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて」 国立国語研究所『研究報告集』3 秀英出版
- (1985a) 「日本語の文の時間表現」『言語生活』通号 403 筑摩書店
- (1985b) 「副詞」『言語生活』通号 406 筑摩書店
- 工藤真由美 (1999) 「否定と呼応する副詞をめぐる—実態調査から」『大阪大学文学部紀要』39号 大阪大学文学部
- (2000) 「アスペクト・テンス」『別冊國文学現代日本語必携』NO.53 学燈社
- 後藤 斉 (2003) 「言語理論と言語資料—コーパスとコーパス以外のデータ—」『日本語学』4月臨時増刊号 VOL.22 明治書院
- 栗原 優 (2007) 「新聞記事に見られる「書き言葉」と「話し言葉(口語)」の混同についての一考察」『駿河台大学文化情報学部紀要』14(1)
- 小矢野哲夫 (1982) 「副詞の意味記述について—方法と実際—」『日本語・日本文化』11号 大阪外国語大学留学生別科
- 国広哲弥 (1982) 「タチマチ・スグニ・キュウニ」『ことばの意味3辞書に書いていないこと』平凡社
- (2002) 「類義語・対義語の構造」『現代日本語講座 第4巻 語彙』明治書院
- 国立国語研究所 25 (1964) 『現代雑誌90種の用語用字』秀英出版
- 国立国語研究所(編) (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』(株)大日本図書
- 佐治圭三 (1998) 「類似表現研究の一例—「急に」「突然」「いきなり」など」『無差』5号 京都外国語大学日本語学科
- 杉本 武 (2010) 「第10章 コーパスを使った文法研究」『日本語教育研究への招待』くろしお出版
- 砂川有里子 (2010) 「第6章 コーパスを活用した日本語教育研究—日本語学習辞書編集にむけて—」『日本語教育研究への招待』くろしお出版
- スルダノウィッチ・イレーナ (2013) 「コロケーションとシンタクス—形容詞と名詞のコロケーションを対象に—」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所
- 田中章夫 (1978) 『国語語彙論』明治書院
- 田野村忠温 (1995) 「パソコン利用の現状と課題」『日本語学』7月臨時増刊号 第14巻 第8号 明治書院
- (2000) 「意味分析と電子資料—副詞「よほど」の分析を例に」『日本語：意味と文法の風景：国広哲弥教授古稀記念論文集』ひつじ書房. pp.211~224
- (2012) 「日本語コーパスと複文の研究—BCCWJの特性と利用の方法—」『シンポジウム複文構文の意味の研究 発表論文集』国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」
- 江 雯薫 (2008) 「時間副詞に関する一考察—「とつぜん」と「ふいに」を中心に—」『岡大

- 国文論稿』36号 岡山大学文学部言語国語国文学会
- (2009a) 「時間副詞に関する一考察—「やっ」と「ようやく」を中心に—」『比較文化研究』No.88 日本比較文化学会
- (2009b) 「時間副詞に関する一考察—「ついに」と「とうとう」を中心に—」『東吳日語教育學報』32 東吳大學日本語文學系
- 趙 恩英 (2009) 「類義語「ついに」「とうとう」の相違について—新聞記事における使用頻度から—」『日本語研究』第29号 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- (2010) 「毎日新聞データからみた複文における「ついに」「とうとう」の差について—共起表現を中心に—」『日本語研究』第30号 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- (2012a) 「類義語「急に」と「突然」に関する一考察—新聞コーパスを用いて—」『日本文化學報』第52輯 韓國日本文化學會
- (2012b) 「類義語「急に」「突然」の違いについて—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と新聞コーパスを資料として—」『日本文化學報』第54輯 韓國日本文化學會
- (2013) 「類義語「やっ」と「ようやく」の文体と共起する述語について—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「文学」を用いて—」『日本語研究』第33号 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会
- 鄭恵先・小池真理・船橋瑞貴 (2009) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られる「～てならない」「～てたまらない」「～てしかたない」「～てしょうがない」の使い分け—日本語学習者に対する指導への応用—」『北海道大学留学生センター紀要』第13号
- 陳 志文 (2012) 『現代日本語の計量文体論』くろしお出版
- 辻 幸夫 (2013) 『新編 認知言語学 キーワード辞典』研究社
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語編』岩波書店
- 中右 実 (1980) 「文副詞の比較」『日英語比較講座 2巻 文法』大修館書店
- 長嶋善郎 (1982) 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味 3 辞書に書いてないこと』国広哲弥 (編) 平凡社
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法 3』くろしお出版
- 野田春美 (2000) 「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量国語学』22号巻5号
- (2009) 「f.副詞」『計量国語学事典』(編)計量国語学会 朝倉書店
- 畠 郁 (1991) 「副詞論の系譜」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』国立国語研究所
- 前川喜久雄 (2009) 「コーパスとは何か」『国語学 解釈と鑑賞』第74巻1号 至文堂
- 前川喜久雄・山崎 誠 (2009) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』」『国語学 解釈と鑑

- 賞』第74巻1号 至文堂
- 前田昭彦 (2001) 「類義表現の意味論的分析—「そば」「近く」」『長崎大学留学生センター紀要』VOL.9 長崎大学留学生センター
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 松田謙二郎 (2004) 「言語資料としての国会会議録検索システム」『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin』神戸松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会
- 松本祐治 (2003) 「現代語のコーパスの種類とそれぞれの特徴」『日本語学』4月臨時増刊号VOL.22 明治書院
- 丸山岳彦 (2011) 「大規模コーパスの利用とメタデータの役割」『第1回コーパス日本語ワークショップ予稿集』国立国語研究所言語資源研究系・パス開発センター
- (2013) 「第5章 日本語コーパスの発展」『講座日本語コーパス 1. コーパス入門』朝倉書店
- 光信仁美 (2005) 「語の共起関係」『新版日本語教育事典』社団法人日本語教育学会(編) 大修館書店
- 宮内佐夜香 (2012) 「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連について—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として」『国立国語研究所論集』第3号 国立国語研究所
- 宮島達夫・仁田義雄 (1995) 『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
- 初山洋介 (2002) 『シリーズ・日本語のしくみを探る 認知意味論のしくみ』研究社
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤 浩 (2000) 『モダリティ』岩波書店
- 芳賀 綏 (1954) 「“陳述”とは何もの？」『國語國語』23巻4号 京都大学文学部国語学国文学研究室 編
- (1978) 『現代日本語の文法』教育出版
- 橋本進吉 (1948) 『國語學概論』岩波書店
- (1959) 『國語法體系論』岩波書店
- 濱田 敦 (1984) 「「やうやう」から「やっと」へ一語の意味の変化の一例として—」『日本語の史的的研究』臨川書店
- 林 四郎 (1960) 『基本文型の研究』明治図書
- (1971) 「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究Ⅲ』(国立国語研究所報告39) 秀英出版
- 山下達雄 (1998) 「日本語形態素解析システム茶釜」『情報処理学会研究会報告』98-NL-125
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法學概論』寶文館
- 山本雅子 (2007) 「副詞表現の認知的意味機能「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」」『言語と文化』No.16 (通43) 愛知大学語学教育研究室
- 横山詔一 (2011) 「コーパス本文批評と統計的検定の考え方」『講座ITと日本語研究5コーパスの作成と活用』荻野綱男・田野村忠温(編) 明治書院
- 李 建華 (2000) 「副詞「ついに」「とうとう」「やっと」「ようやく」の異同について」『茨城キ

リスト教大学紀要』No.34 茨城キリスト教大学

劉 笑明・吉田則夫 (2006) 「情意表現における副詞の働きについて」『岡山大学教育学部  
研究集録』第 131 号 岡山大学教育学部

ルチラ パリハワダナ (2005a) 「副詞「やっ」とを通して見た出来事の実現」『金沢大学留  
学生センター紀要』第 8 号 金沢大学留学センター

————— (2005b) 「長時間経過の末の予見の実現を表す副詞「やっ」と「ようや  
く」「ついに」「とうとう」について」『金沢大学留学生センター紀要』第 8 号 金沢大学  
留学生センター

渡辺 実 (1957) 「品詞論の諸問題—副用語・付属語—」『日本文法講座 1』明治書院

————— (1971) 『国語構文論』塙書房

渡辺文生 (2007) 「ブログの言葉遣い」『日本語学』VOL.26 明治書院

<参考辞典>

グループ・ジャマシイ (編) (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版

小学館国語辞典編集部 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』小学館

社団法人日本語教育学会 (編) (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店

柴田 武・山田 進 (編) (2002) 『類語大辞典』講談社

高見澤孟 (監修) (2004) 『新・はじめての日本語教育基本用語辞典』アスク

時枝誠記・吉田精一 (編) (1986) 『角川 国語大辞典 三版』角川書店

飛田良文・浅田秀子 (編) (1984) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版

松村 明・三省堂編修所 (1989) 『大辞林』三省堂

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

山口明穂・秋本守英(編) (2001) 『日本語文法大辞典』明治書院



## 謝辞

まず、本論文の提出日まで私を守ってくださった父なる神様に感謝を捧げます。

本論文の作成にあたり、多くの方々にご指導とお力添えを頂きました。全ての方のお名前を挙げることはできませんが、この場をお借りして感謝申し上げたいと思います。

主査の長谷川守寿先生には、7年間大変お世話になりました。研究をはじめ、どんな質問にも優しく応えてくださいました。研究方法に悩み続けていた時、ご助言とご指導を頂きました。心より感謝申し上げます。先生のご指導により博士論文の提出までたどりつくことができました。本当にありがとうございました。

副査の西郡仁朗先生からは、国際交流室においてナビゲーターとして、また、国際センターにおける「韓国語による日本語ワークショップ」で働くことができる機会をいただき、大変貴重な経験を致しました。今後の人生において代えがたい経験だったと思っております。心より感謝申し上げます。

同様に、副査の浅川哲也先生からは、ゼミを通し、多くのことを学ぶことができ、研究の面で大変貴重なご指摘やアドバイスをいただきました。また、学会の発表の際の注意事項など研究の内容を含め、研究者に必要なことを教えていただくことができました。心より感謝申し上げます。本論文の作成にあたり、能力不足により歴史的な検討をすることができませんでしたが、今後ぜひ研究していきたいと思っております。

また、国際交流室においてナビゲーターを務めた際、さまざまなことについて相談にのってくださり、特に共同研究の機会を通して質的な研究の経験ができるようおはからいくださいました小柳志津先生にも心より感謝申し上げます。

さらに、moodleの授業でe-learningなどについて勉強の機会を与えてくださった神田明延先生にも心から感謝申し上げます。いつも温かく接してくださったことは忘れることができません。本当にありがとうございました。

最後に、8月から10月まで論文作成に集中することができるよう、研究室使用の便宜その他さまざまな面で便宜を図ってくださったダニエル・ロング先生にも心より感謝申し上げます。

本論文の作成中、生活面や精神面などご援助とご助言を絶えずくださった崔文姫先生（および中村嗣郎先生）にも心より感謝申し上げます。崔文姫先生の励ましの言葉により挫けずここまで来ることができたと思います。私の健康のこともいつもご心配していただいたこと、いつまでも忘れることができません。本当にありがとうございました。

また、信仰の面を含め、生活全面にわたって大変お世話になり、共に博士論文を提出することができるように励まし合った一橋大学大学院社会研究科の金知榮さんにも心から感謝申し上げます。金知榮さんとは毎週主日会うたびに研究のことなどについて率直に語る事ができる良い同士でした。本当にありがとうございました。

さらに、お会いする時、いつも励ましのお言葉とアドバイスをくださった東京学芸大学大学院の加藤清方先生にも心から感謝申し上げます。また、首都大学東京大学院博士課程の仲間や同じゼミのゼミ生および大学院生に、研究の面などで大変お世話になりました。本当にありがとうございました。特に、8月から10月まで同じ研究室で一緒に論文を書きながら、論文作成中の悩みなど、話し合ってくれた今村圭介さんにも心から感謝申し上げます。

また、いつも励ましのお言葉をくださった劉志偉先生や本論文の完成のために祈りつづけてくださった東京教会の青年部兄弟・姉妹達、首都大学東京の韓国留学生会のお祈り会のメンバー（田龍一さん・金聖龍さん等）に感謝申し上げます。そして、いつも暖かいご応援や様々な面でサポートしてくださった浅野薫さん、裴恩善さん、Bisa 外語学院長の柴垣尚宏さん、李スンヒョンさんにも心から感謝申し上げます。

最後に、韓国からいつも応援してくれた LG 電子責任研究員である徐富完さん、友人であるチョン・ユンジョンさんにも心から感謝申し上げます。また、論文の日本語を添削してくださった首都大学東京のアカデミックライティングの支援の方々にも感謝申し上げます。さらに、留學生活の最初から現在まで勉強を励まし、温かく見守ってくれた家族に感謝し、本論文を結ぶことと致します。